

---

# BIO HAZARD Irregular PURSUIT OF DEATH

ダークボーイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

B I O   H A Z A R D i r r e g u l a r   P U R S U I T   O  
F   D E A T H

### 【Nコード】

N 3 2 0 0 A

### 【作者名】

ダークボーイ

### 【あらすじ】

（ 注意本作はSWORDREQUIEMの正式続編です。SWORDREQUIEMを読まれてからの方がより一層楽しめるかと思っています。）ラクーンシティを襲ったバイオハザードから五年。成長したレンは、五年前の真実を知るべく、一人調査を開始する。それは、新たな激戦への幕開けだった……………

## 第一章 『神剣再び！新たなる戦いへの序曲！』

ここ数年間何者にも脅かされる事無く積もり続けたホコリに足跡を記しながら、一人の男が寂れた廃工場の中を歩いていた。

ホコリが積もっているとはいえ、コンクリートで固められているはずの床に、不思議と彼の履いている厚底のコンバットブーツはまったく足音を響かせていない。

そのまま廃工場のほぼ中心に歩を進めた彼は、そこで足を止め周囲を見渡した。

彼は黄色人種特有の墨色の髪に、それと同色の小袖袴を着込み、手には更紗の布で包まれた細長い包みを持っていた。

鋭さと、冷静さを兼ね備えた瞳を持った彼を、この土地の住人達が見かけたら十中八九こう呼んだだろう。

”サムライ”と。

その彼の前に、分厚いコートを着込んだ大きな影が現れた。

「あんたが、情報提供者か？」

英語での彼の問い掛けに、影は答えず片腕を持ち上げた。

途端、そこから何かが猛烈な勢いで飛び出し、彼を襲った。

それが何かを一瞬にして見切った彼は、無言で少しだけ体を横にずらした。

「手長か」

日本の妖怪の名を彼が短く言った時には、その軌道を完全に見切られた伸びる腕は彼のすぐ傍を通り過ぎる。

その時すでに、彼は更紗の包みの口を解いていた。  
伸び切った腕が戻ろうとする時、彼は包みの中の物を掴み、素早く抜いた。

影が奇怪な悲鳴を上げる。縮んできた腕は半ばから両断されていた。

「人ではないようだな」

彼の呟きと、彼が抜いた白刃によって両断され、宙を待っていた腕が血をホコリの上に撒き散らしながら床へと落ちるのはほぼ同時だった。

「ならば容赦はしない」

彼は一瞬にして影との間合いを詰めると、手にした愛刀、源清麿みなもとのきよまろを袈裟懸けに振り下ろした。

振り下ろされた刃は、影の着ていたコートを切り裂き、その中に仕込まれた防弾用のチェーンを露出させる。

「あれと同じか」

彼は呟きながら、手首を返して刃を逆にすると、先程とまったく同じ軌道を逆に斬り上げた。

弾丸をも阻むはずの防弾用のチェーンが、先程の斬撃によって傷付けられた場所と寸分の狂いも無い同じ軌道の斬撃によって、その下の肉体ごと斬り裂かれる。

周囲に鮮血を撒き散らしながら、影は断末魔の悲鳴を上げて床へと倒れ込んだ。

彼は刃に付いた血を振るい落としながら、視線を横へと向けた。

「助ける気があるならもつと早く出て来たらどうだ」

刀を鞘へと収めながらの彼の言葉に、うず高く詰まれた廃材の影から銃を構えた一人の男が出て来た。

「あんたが本当の情報提供者か？」

「ああ、そうだ」

男は答えながら、構えていたデザートイーグル50AEをゆつくりと降ろした。

「何でこんな真似をした？」

「お前が知りたがっている事は危険過ぎる。それを分からせるつもりだった。だが…」

「だが？」

男は彼の姿を上から下まで見て軽いため息をついた。

「まさかサムライが来るとは思いもしなかった」

「オレはサムライじゃない」

相手の否定に、男が少し虚を突かれた表情になる。

「日本の闇を司る陰陽寮五流派の一つ、御神渡流おみわたリ陰陽師の一人、水沢 練。それがオレだ」

「オンミヨウ？」

聞き慣れない言葉に首を傾げている男に、レンは更なる説明を加える。

「この国で言う所のエクソシストだ。そして、オレは五年前のラクーンシティの脱出者でもある」

「！」

後半を聞いた男の顔に驚愕が生まれる。それを見ながらレンはさらに加えた。

「教えてくれるんだろうな。五年前の真実を」

「……いいだろう……」

レンが廃工場の外に止めておいたレンタカーに乗り込み、しばらく無言で走った所で、男はようやく口を開いた。

「事の起こりは五年前、ラクーンシティの郊外にある屋敷から始まった。そこは多国籍製薬会社であるアンブレラ社の秘密研究所だった。そこではT ウイルスと呼ばれる物の研究が行われていた」

「T ウイルス？」

男は頷きながら続けた。

「そのT ウイルスは、感染したあらゆる生物に急激的な進化、成長を促す。ところが、この進化に耐え切れない生物はゾンビ化するという副作用も持っている」

「それじゃあ!？」

「まあ待て。その研究所で起きたバイオハザードによって所員のほとんどがゾンビ化するという事態になったのを、ラクーンシティ警察の特殊部隊S T A R Sの活躍によって事件は収まったはずだった所がだ、その事に危惧を抱いたアンブレラ社は、ラクーンシティの他の研究所で研究されていたT ウイルスの改良版、G ウイルスを強引に開発者であるウィリアム・バーキンから奪取しようと試み

た。その際に負傷したウィリアムは有ろう事が自らにG ウイルスを投与、怪物となつて襲撃者を襲った。その時に、襲撃者が持っていたT ウイルスが下水道に流出し、あの大惨劇の元となった」

「そうだったのか……」

「レンは目を閉じてあの時を思い出した。おそらく、下水道で戦ったあの怪物が、その大元となった人物だったのである事を今更ながら認識した。」

「オレはあの時、軍の不可解な行動を目にした。それは何だったんだ？」

「T ウイルスは元々生物兵器開発用のベクターウイルスだ。軍はそのノウハウを欲しがっているが、アンブレラは頑として渡さない。その為にあの時、軍の特殊部隊がサンプルの回収を行っていた。だが、アンブレラの奇襲によつて壊滅したらしい」

「それは知っている。オレはその壊滅した部隊と一緒にだったんだからな」

「何!？」

今度は男が驚いた。レンはハンドルを握りながら、その時の疑問をぶつけた。

「それじゃあ、あの襲つてきた大男の怪物はアンブレラの生物兵器か……」

「おそらくそれはタイラントと呼ばれるタイプだ。BOWと呼ばれる生物兵器の中でも一二を争う戦闘力を持つ。集団で投下されたら軍隊でも一たまりも無かつただろう」

「確かに、手痛く痛めつけられたからな」

そのまま、二人共しばらく無言のまま車を走らせた。

「最後に聞きたい。今、そのＴ ウイルスはどうなっている？」

「それを聞けば、お前は後戻り出来なくなる。さっきの怪物はＴ ウイルスを探る者を消す為にアンブレラから送られた物だ。これ以上危険を犯す必要は無いんじゃないのか？」

「オレの国の言葉に義を見てせざるは勇無きなり、という言葉がある」

「？」

突然の日本のことわざに、男が首を傾げる。

「人道に劣る行為をしている者を見過ごしては男じゃない、って意味だ。この五年間、オレはあの時の借りを返す為に死に物狂いで修行した。そして、その借りを返す為にオレはアメリカに戻ってきた」

レンの必死の目に、男はしばらく考えてから、閉ざされていた口を開いた。

「実はここ五年間、ラクーンシティ同様のＴ ウイルスによるバイオハザードがアメリカ、ヨーロッパを中心に大小合わせて１０件以上起きている」

「何！？」

驚きのあまり、レンは思わずブレーキを踏んだ。急制動を受けて停止した車内で、男は後を続けた。

「それに乗じて、世界中の軍隊、企業の諜報組織がＴ ウイルスを奪い合っている。だが、ただ一つだけ、Ｔ ウイルス撲滅の為に動いている組織がある」



「それは？」

「STARSの生き残りが、世界中から賛同者を集めて密かに動いている。もし、その気があるのなら紹介してやってもいいが」

「あんたもそのSTARSの一人なのか？」

「いや、オレにはある事情が在ってな。生憎と奪う方の組織にいる、とだけしか言えない」

「………そうか、ならそのSTARSのメンバーに会わせてくれ」

「後悔しないか？ 今ならまだ聞かなかった事に出来るかもしれないぜ」

「言っただけだ。借りを返しに来たと」

そう断言するレンの横顔を見た男の瞳に、強い闘志が込められた目が映っていた。

ある閉ざされた室内に、数人の人影が在った。

彼らは、大型のスクリーンに映されたある映像を凝視していた。

そこには、何処から撮ったのかレンを襲った怪物が、一刀の元に斬り捨てられる映像が映し出されていた。

「どう見るかね」

影の一つが言った。

「まさかSTARSへ協力する者への見せしめのはずが、逆に返り討ちに会うとはな………」

別の影が意見を述べる。

「これは未確認情報だが、五年前ラクーンシティに降下させたタイ

ラントの一体を倒したサムライボーイがいると聞いた事がある。おそらく彼の事だろう」

また違う影が述べた。

「しかも、彼はCIAのレオン・S・ケネディと接触した。このままではSTARSとの合流は時間の問題だろう」

「危険だ。あまりにも危険過ぎる。これ以上STARSの戦力を増やしては秘密裏に対処する事が不可能になる」

「消去すべきだ。ことごとく我々の邪魔をしてきたレオン・S・ケネディ諸共」

「もし彼らがSTARSと合流するのならば、おそらく空路を使ってヨーロッパに飛ぶだろう」

「ちょうどいい。”イカロス”の実験を兼ねて彼らを襲撃させよう」

「邪魔者を消し、実戦データも取れる。悪い話ではない」

「決まりだな……………」

影達は暗闇の中でほくそ笑んだ。

## 第二章 『急襲！成層圏からの刺客！』

『ナンザス航空、203便ヒースロー行きはまもなく離陸いたします。お乗りのお客様はシートベルトをお掛け下さい。繰り返します…』

イギリスにいる親戚に会いに行く為に、初めて飛行機に乗った少女は、はしゃいでいたのを両親にとがめられておとなしく席に座ろうとした。

が、その目の前を変った格好の人物が通った事でまた彼女は騒ぎ出した。

「パパ、サムライがいるよ」

「ほお、何処にだい、キャシー」

父親が娘の方を見ると、通路の向かい側の席にキモノを着たサムライと言って差し支えない若い男が腰を下ろす所だった。

その手に、細長い包みを持っているのを見た父親の顔が訝しげな表情になった。

だが、娘はそれに構わずそのサムライに話し掛けた。

「ねえ、サムライさん」

「……オレの事か？」

「だと思っぞ」

隣に座っている男が苦笑しているのを横目に、サムライ レンは少女の方を向いた。

「何か用かい？ お嬢ちゃん」

「やっぱりサムライさんは日本から来たの？」

「ああ、そうだよ」

「何しにイギリスに行くの？」

「悪い人達をやっつけに行くんだよ」

「それじゃあ、その二ホントウ本物なんだ」

「一応、な」

「あの、失礼ですがご職業は……」

二人のやり取りを聞いていた父親が多少青い顔をしてレンに聞いてくる。

レンは父親にだけ聞こえるように身を乗り出して耳打ちした。

「本職は骨董商でしてね。この日本刀は商品ですよ」

「ああ、そうですか」

それを聞いた父親が安堵しながら席に付いた。

少女はそれにお構いなくレンにあれこれ聞こうとしたが、離陸のアナウンスが入った事で父親に強引に席に固定された。

「その格好どうにかならないのか？」

「一応戦闘服なんだがな」

隣に座っている男に、レンが襟を摘みながら小さなため息をついた。

空港に着いてから、飛行機に乗るまで、そして今と一体何回身分を問われたか考えたくも無かったが、目立つという事だけは確かだった。

「それにしても、いきなりイギリスに行く事になるとはな」

「STARSのメンバーはあちこちに散らばってるが、メインはイ

ギリスにいる。一応連絡は入れておいたが、仲間として認められるかどうかは別だぞ」

「その時はその時だ」

レンは完全に離陸したのを確認してから、リクライニングを倒して目を閉じた。

「あ、鳥さんがいるよ」

飛行機が飛び立ってから、2時間が経過した所で、通路の向かいの少女の言葉でレンは目が覚めた。

「キャシー、こんな高さに鳥はいないよ」

「でもいるよ」

「どれどれ」

少女の言葉に、両親が窓の外を見て、二人共顔をしかめた。

「何だあれは？」

それを聞いた男が、彼らを押しのけて窓を覗き込んだ。

「まさか、あれは！」

「どうした？」

男の只ならぬ声に、レンも男の隣から窓の外を見た。

そこには、確かにこちらへと近付いてくる鳥のような影があった。

「まずい、ネメシス I型だ！完成していたのか！」

「敵か！？」

「ハチドリのDNAをベースにした高速飛行型のBOWだ。知能もある厄介なタイプだ！」

男は叫びながら操縦席へと向かった。

「困ります、お客様！ここから先は関係者以外は…」

「CIAのレオン・S・ケネディだ！機長に緊急の用事だ！」

男 レオンの突き出したIDカードにスチュワーデスの顔色が変わる。

スチュワーデスを押しのけるように、レオンは操縦席へと入った。

「誰だあんた！今忙しいんだ！」

「CIAだ！オレの持っている機密情報を狙っている者達によってこの機は狙われている。至急近くの空港に避難してくれ！」

「無茶言うな！大西洋の真上だぞ！」

「エマージェンシー！こちらナンザス航空203便！ただ今国籍不明機に狙われている！機内にいるCIAのエージェントとやらが関係しているらしい！何でよりにもよってオレの操縦してる時に！」

「文句は後で聞く！高度か速度を上げられないか？」

「無茶言うな！どっちも限界だ！」

「じゃあ振り切れ！」

「戦闘機じゃないんだぞ！」

激昂している機長の脇から、レオンはレーダーを覗き込んだ。そこには、小さな光点が急接近してくるのが映し出されていた。

「来るぞ！」

「きゃああああっ！」

機内は、近付いてくるネメシス I 型、通称イカロスに気付いた乗客でパニックになっていた。

「落ち着いて下さい！ 落ち着いて！」

イカロスをどうにか振り切ろうと左右に揺れる機体の中、自分自身も取り乱してるスチュワーデスが叫ぶのを見ながら、唯一レンは落ち着いて自分の刀を取り、通路の中央に立つ。

「我、六黒水気を持ちて…」

陰陽術の呪文を唱えようとした所で、ふと今それが理由で封じられているのを思い出し、呪文を中断すると刀を腰だめに構えた。

（どう来る？ 燃料か？ それとも直接こちらを狙ってくるか？）

イカロスが飛行機の直上を取ろうとするのを避けようと機体が大きく右に傾いた瞬間、衝撃が機体を襲い、一つの窓を突き破って何かが機内に飛び込んできた。

「そう来たか！」

レンは機内に飛び込んできた物に向けて、鞘ごと刀を振るってその軌道を変える。

軌道を変えられたそれは、レンの脇を抜けて背後の座席に軽く突き刺さると、機外へと戻っていった。

「くっ！」

密閉が破られた機内から、気圧差で急激的に空気が失われていく。

自らも吸い込まれそうになる中、レンはとっさにそばの座席から客が持ち込んだらしいクッションを取ると、叩きつけるように割れた窓へと投げた。

続けて、他の座席からミネラルウォーターのボトルを取って口を開けてクッションにぶちまけ、最後に自分の荷物から取り出した救急スプレーを放り投げてクッションの間近まで近付いた所で抜刀、スプレー缶を真つ二つに斬り裂いた。

斬り裂かれたスプレー缶から飛び出したガスが一瞬にしてクッションごとミネラルウォーターを冷却、凍りつかせ穴を完全に塞いだ。

「これでよし、と」

「あ、あんた一体何者だ？」

乗客の一人が啞然としながらレンに声を掛けた。

見ると、乗客の全員が呆然とレンを見ていた。

「オレは陰陽師、モンスター専門のハンターだ。心配するな、あいつはオレが倒す」

それだけを言いながら、レンは操縦席に向かった。

「サムライさん、頑張って！」



少女一人だけが、その背中に声援を送った。

「空気の流出は何だかしらんが収まった！　だがもう一度来たらオシマイだ！」

「アメリカの領空に戻れ！　軍に緊急出動を要請するんだ！」  
「向こうが早いに決まってるだろ！」

レオンは奥歯が砕けそうな程強く歯軋りした。

この絶対的状況に、何一つ有効な手が思いつかない。下手すれば自分達の為にこの機の乗客全員が巻き添えになりかねない。

（考える！　何か手を！）

「逃げられないのか！」

操縦席に飛び込んできたレンに、レオンは無言で首を横に振った。

「それじゃあ、速度と高度をギリギリまで落とせ」

「何をする気だ！　それじゃあ落としてくれと催促しているようなもんだぞ！」

「逃げられないなら、迎撃するまでだ」

その答えに操縦室にいたレンを除く全員がギョツとした顔になる。

「何でだ！　こいつに機銃なんて付いてないぞ！」

「だから、人手でだよ」

レンは懷からサムライエッジを取り出してセーフティを解除した。

「無茶だ！　だが手は他にない……」

レオンも覚悟を決めてデザートイーグルを懷から取り出す。

「無理を言つな！　気圧差で機外に放り出されるぞ！」

「命綱でも付けとくさ」

銃口を叩きながら二人は搭乗口へと向かった。

「乗員を全員後ろに移して完全に扉を閉ませ！　何か体を固定出来るのを持って来い！」

「早くしてくれ！　死にたくないんだったらな！」

二人の拳動に多少不信を抱きながらも乗客は避難し、スチュワードが荷物固定用のロープを手渡す。

「開けるぞ！」

搭乗口が開け放たれるのと同時に、機内の空気が外へと吸い出される。空気と一緒に機内の物も宙を舞う中、こちらへと向かってくる影を二人は見つけると、銃口を正確にポイント、立て続けにトリガーを引いた。

しかし連続して発射された弾丸は、気圧差や風圧によってそのほとんどが狙いを逸れ、僅かに一発が相手をかするだけに終わる。

「ダメか！？」

「いや、回避に移ってる。当たれば効くはずだ」  
「当たればな！」

レオンは体を固定している命綱を意識しながら、体を外へと乗り出した。

途端、凄まじい風圧が彼の体を襲い、慌てて中へと引つ込む。

「せめて外で狙えれば……」

「オレが行く」

「無茶だ！ この風圧じゃ外に出ると同時に吹き飛ばされる！ 吹き飛ばされなくても相手の餌食になるだけだ！」

「オレの曾じいさんは戦闘機に乗りながらB 29を叩き斬ったと聞いている。やって出来ない事はないと思う」

「レシプロ機とジェット機じゃ相対速度が違い過ぎる！ 止める！」

最後まで聞かず、レンは機外へと足を踏み出した。

少しでも気を抜けば吹き飛ばされそうな風圧に耐えながら、翼の上を少しずつ進む。

「予想以上だな。やっぱり曾じいさんの冗談だったか？」

眩きながらもレンはサムライエッジと刀を構えながら、周囲を見渡す。

ちょうど、回避を追えた敵がまたこちらへと向かってくる所だった。

間近で見たそれは、1m以上はある巨大な鳥の姿をしていた。

顔には斜めに手術痕が有り、そこに何かを埋め込まれたのか顔の半面が奇妙に盛り上がっていた。

翼には小さなジェットエンジンの様な物が取り付けられ、翼の後

ろに小さな飛行機雲を生み出していた。

「生体改造の上にサイボーグ化か。手間が掛かってるな」

レンはイカロスに向けて銃口を向けると、慎重に狙いを定めてトリガーを引いた。

発射された弾丸は、機体の後方から迫って来ていたイカロスの体に加速してめり込む。

イカロスは鳥の物とは思えない奇怪な悲鳴を上げながら僅かに体をよるめかせた。

「やったか？」

レンの予測は、イカロスがすぐに態勢を立て直した事によって裏切られる。

目標をレンへと変えたイカロスは、猛然とレンへと近付き、その鋭く尖ったクチバシを開いた。

そこから、猛烈な勢いで飛び出した長い舌がレンを狙う。

レンは刀を振り上げてその舌を切り落とそうとするが、刃からは肉とは思えない硬質の感触が帰ってきた。

「あいつの武器はあの舌か」

レンはそのまま自分の真上を通り過ぎたイカロスを目で追おうとするが、そのすぐ後に襲ってきたソニックブームでたたらを踏んだ。

「くっ！」

翼から振り落とされそうになるのを、何とか堪えて体勢を立て直

す。

しかし、その時には旋廻を終えたイカロスが、今度は体当たりをするべく目前まで迫っていた。

「しまっ…！」

レンがそちらへと向けて刀を振るおうとするが、明かに相手の動きはそれよりも速かった。

レンがダメージを覚悟した時、突然イカロスの体が横へとずれ、そのままレンの脇を通り過ぎた。それを追って、流れ出した血が虚空に筋を作る。

レンは、開け放つてある搭乗口を見た。そこには、銃口から薄く煙が立っているデザートイーグルを構えたレオンの姿があった。

「いい腕してるな」

声は風音で聞こえないはずだが、レンが浮かべた微笑にレオンも微笑で答えるのが見えた。

血を撒き散らしながらも、まだ旋廻をしてこちらへと向かってくるイカロスに、レンは油断無く構えながら備えた。

「来い……………」

襲ってくるイカロスをレンは寸前まで引きつけると、突然横へと跳びながら刀を振るい、トリガーを引いた。

狙い通りに刃は翼を斬り裂き、弾丸は小型のジェットエンジンに命中した。

だが、体勢が崩れた事によってレンの体は翼の上から離れる。

「レン！」

レオンの叫びも虚しく、レンの体は虚空へと踊る。

「まだだ！」

レンは虚空へと身を躍らせながらも、体勢を入れ替え、命綱が一杯に伸びた所で、風圧を利用して機体の外壁に真横に着地した。

それを狙って、翼からは血を、ジェットエンジンからは煙を撒き散らしながらイカロスがレンへと向かって急接近し、再び舌を突き出してきた。

「甘い！」

レンはその突き出された舌の上を滑らせながら刀を振るい、交差する瞬間にイカロスの頭を両断した。

「光背一刀流、《ようすいきようざん陽水鏡斬》」

力を失ったイカロスの体が地面落ちていく様を後ろに見ながら、レンは命綱を掴んだ。

ふと、足元にある窓から乗客達が驚愕の表情を浮かべてこちらを見ているのに気付いた。

その中に一つだけ、はしゃいでいる少女の顔を見つけると、そちらに向けて笑みを浮かべて、命綱を手繰り始めた。

『ニュースをお届けします。本日10:25発ナンザス航空ヒースロー行きが、原因不明の不調により、空港に引き返すという騒ぎがありました。原因は今だ分かっておりませんが、乗客、乗員に怪我は無い模様です。政府は航空会社と緊急に対策班を組んで原因の究

明に当たるとのコメントを発表しております。繰り返します、本日…」

「ねえパパ、何でニュースで本当の事言わないの？」

「あゝ、それはね…」

空港のテレビを見ていた少女の素朴な問いに、父親は返答に窮した。

自分でも何が在ったのかと聞かれても、どう答えればいいのか分からない状況を、娘にどう説明してやるべきかを父親は必死に考えた。

「なんでテレビでサムライさんに助けられたって言わないの？ ねえなんで？」

「いや、だからね、それは…」

「きっと正義の味方だから正体を隠さなきゃならないのよ」

「そう、きっとそうだよ」

見かねた母親の助け舟を、父親が肯定する。

「ふーん、そうなんだ。やっぱりサムライさんは正義の味方なんだ」

少女はそれで納得したのか、しきりに感心していた。

一方その頃、当の正義の味方は空港から少し離れた街中にいた。

「結局アメリカに逆戻りしちゃったか」

「ああ、だが事態は悪化している」

目立たないように普通の服に着替えたレンと、レオンは肩を並べて街を歩いていた。

「にしても、あんたやっぱりCIAだったのか」

「ああ、CIAのレオン・S・ケネディ、あんたと同じラクーンシティの脱出者だ。オレはG ウイルスの事を知ってしまった所為で機密保持の為にCIAに入らざるを得なかった。だが…」

「だが？」

「今オレは休暇でマンハッタンに居る事になっている」

「正反对だな」

「もうバテている頃だ。それだけじゃない。アンタもおそらくアンブレラ、CIA両方のブラックリストのトップに載ったはずだ」

「人道の正義と国家の正義は噛み合わない、か。お国柄かね」

レンは苦笑しながらため息をついた。

レオンは、先程から深刻な表情で何かを考えていた。

「済まないが、イギリスには一人で行ってくれ。急用が出来た」

「おい、オレはSTARSのメンバーの顔も知らないんだぞ」

「オレの名前を出せば通じるはずだ。悪いが急ぐんだ」

走り出そうとしたレオンの腕を、レンが押さえた。

「何をそんなに焦っている？ ひょっとしてあんたがCIAに入つた理由は他にも在るんじゃないのか？」

レンの的を射た言葉に、レオンはしばし迷ってからゆっくりと話し始めた。



「……G ウイルスの事を知っているのはオレだけじゃない。もう二人居た。一人は今STARSに居るが、もう一人はCIAの監視下にあるんだ。オレはその子の、シェリーの安全と引き換えにCIAに入る事を要求された……」

「今そのシェリーは何処に？」

「軍の戦災孤児施設だ。場所は分かっている早くしないと彼女が危ない」

「行こう。アンタには助けられた。今度はオレが助ける番だ」

「しかし……」

「最初に言っただ。借りは必ず返すと」

レオンはしばらく悩んだ。

が、レンの真摯な表情を見て決意を決めた。

「分かった。行こう、シェリーを救いに」

### 第三章 『激戦！シェリー救出大作戦！』

「……以上の点に置いて、この状況下での生物の生存が立証されます。何か質問は？」

クラスの中で誰も手を上げないのを確認してから、シェリーはレポートの発表を終える。

ちょうどその時に授業終了のチャイムが鳴り、クラスメートは荷物をまとめて帰り支度を始めた。

「シェリー、ちょっといいかしら？」

シェリーも荷物をまとめ、廊下に出た所で担任の中年女性教師に呼び止められた。

「なんですか先生？」

「この間の件、考えておいたかしら？」

「ああ、国立への特待編入の件ですね？出来ればもう少し考える時間を頂きたいんですけど……」

「そう、分かったわ。でもなるべく早く返答をもらえそううれしいんだけど」

「すみません」

女性教師に一礼して、シェリーはその場を離れる。

この五年間で伸ばした髪がポニーテールとなって揺れているのを見れば、女教師は見ていたが、その姿が廊下の角に消えると、素早く物陰に隠れて特殊な電波変換パターンの組み込まれた携帯電話を取り出し、登録されている番号へと掛けた。

「こちらシーカー2、シェリー・バーキンが目標と接触した様子は未だ見られない。監視を続行する」

『了解した。いいな、相手は対BOW用のスペシャリストであるレオン・S・ケネディだけじゃない。黒いキモノを着たサムライと一緒との話だ。乗客の証言通り、回収されたネメシス I型は彼の手によって一撃で斬り殺されている』

「一撃？ネメシスタイプを？」

『ああ、恐ろしいまでの使い手だ。嚴重に注意しろ。何としてもシェリー・バーキンと接触させるな』

「了解……」

「彼女か？」

レンは覗いていた双眼鏡の視界の中に、レオンの言っていた特長と一致する少女を見つける。

「間違い無い。彼女がシェリーだ。髪伸ばしたんだな……」

同じように双眼鏡を覗いていたレオンが肯定する。

「それにしても、よりによって作戦司令部の基地の中とはな……」

覗いていた双眼鏡を下ろしながらレンが溜息をつく。その眼下には嚴重な警戒が敷かれた米軍作戦司令部のあるオフアット軍基地の姿が在った。

「オマケにざっと見だけでも監視が3人は付いてるな」

「どうにかして監視を掻い潜るしかないか……」

「取り合えず、夜を待つとするか……………」

「で、こんな所に何の用なんだ？」

「ちょっとしたツテを頼ってみる」

ネットカフェに来たレンを不思議そうにレオンは見たが、当人は空いている席に座ると平然と飲み物を頼んでいた。

「何をする気だ？」

「ちよつとな」

レンに習って自分も飲み物を頼んだレオンが、店員が離れるのを見計らってレンへと話し掛ける。

レンはそれに適当な返事を返しながら、パソコンを起動、覚えていたアドレスを打ち込んだ。

「…………オカルト系サイトに来てどうするつもりだ？」

「これからだ」

レンは更にそこにパスワードを入れてサイト内部に入ると、チャットに入室した。

誰もチャットに入っていないのを確認してから、レンは発言した。

来訪者>我、真理を求めし者なり

すると、誰もいないはずのチャットに返答が表れる。

> 汝、信ずる真理は何ぞ？

レンはそれに答える。

来訪者> 我信ずるは五つの源にて構成されし真理なり

> 汝、仕えし者は？

来訪者> 我仕えしは日ノ本にて闇を見張りし姫君なり

> 汝、名を告げよ

来訪者> 我が名はミズサワ レン。水鏡の剣にて闇を斬り裂きし者なり

最後の質問に答えると同時に画面が暗転、そこには薄暗い部屋でまるでゲームの魔法使いのようなロープ姿の人影が映し出された。

『久しいな、術者ミズサワ』

「お久しぶりです、導師ルーフェ」

パソコンのスピーカーから肉声と寸分の違いも無い音質の低い男性の声が響く。

レンはそれにマイクも使わず返答した。

『して、何ようか？そなたには借りが在る故にこの国への入国は大量に見ていたはずだが？』

「分かっております。組織に属する術者は自国からみだりに出てはならない、との定まりに従って私も自らの術を封印しております故に」

『……何か問題でも？』

「オフアット軍基地にいる、シェリー・バーキンという少女に付い

ている監視を極短時間で構いません、外してもらえないでしょうか？」

レンの真剣な言葉に、画面の男性はしばし沈黙した。

『……また無茶を言う物だな。我々は必要以上に国家に干渉してはならない事を知らぬ訳ではあるまい』

「不可能でしょうか？」

画面内部の薄暗さと頭から被っているロープの為に、画面の中の人物の表情は見えなかったが、その声は呆れた雰囲気が幾分混じっていた。

『……いいだろう。今晚22：00から15分だけ監視が外れるように取り計らおう。これでそなたへの借りは無しだ』

「感謝致します、導師」

『くれぐれも無理はするでないぞ。他組織の者とはいえ、そなた程の術者失うのは惜しいからな』

「承知しております」

そこでまた画面は暗転、最初のオカルト系サイトのページが映し出された。

「何だったんだ、今のは？」

「フリーメーソンの幹部だよ。今の人は」

レンが届いた飲み物に口を着けながら平然と言った。

「フリーメーソンだって！？あの宗教系政治結社の！？CIAですら関与出来ないのにお前どうやって！？」

意外な名前にレオンが驚愕するが、レンは平然とした顔で飲み物を啜るとようやく口を開いた。

「闇の事情って奴さ」

レオンは呆気にとられたまま、しばし呆然としていた。

同日 夜半

腕時計が短いアラーム音を鳴らし、予定の時間が来た事を告げる。

「行くか」

「ああ……」

二人は基地の側で写真を取っていたミリタリーマニア達の中に紛れ、時間と同時に行動を開始した。

「それじゃあオレ達は行つて来る」

「おう、気を付けろよ！」

「とっ捕まつて記憶操作されんなよ」

彼らの事をこの基地で行われている秘密実験を探りに来た陰謀マニアだと思っているミリタリーマニア達が、冷やかしくも取れるような別れの挨拶を彼らの背中に向けた。

それを背に、二人はその場から潜入ポイントへと向かった。

闇夜で目立たなくする為に再び墨色の小袖袴に着替えたレンは、

ミリタリーマニア達に教えてもらった巡回のもつとも少ないポイントの手前のフェンスの前で立ち止まる。

「さてと、どう侵入する？上には赤外線センサーまで付いてるが…」

「…」  
「ちょっと下がってろ」

レンはフェンスから少し離れると、腰の刀に手を掛け、ゆっくりと腰だめの構えになりながら息を整える。

四度目の息を吸い込むと同時に、レンは抜刀した。

抜き放たれた白刃が、円を描くような軌道で闇を斬り裂き、再び鞘へと納まる。

刀が鞘へと納まると同時に、綺麗に円状に斬り抜かれたフェンスが倒れようとするのをレンが掴んで止める。

「やるもんだな」

「在日米軍の基地に潜入する時に従兄が使った手を真似したんだ」

「……………一体日本で何をしていたんだ？」

感心から一転して疑惑の表情を浮かべているレオンを尻目に、レンが斬り抜かれたフェンスを潜り、レオンもその後に続くと、斬り抜いたフェンスをはめて予め買っておいた瞬間接着剤で目立たないように継ぎ目を張り合わせた。

「時間は？」

「ちょうど22：00になった所だ」

「急ごう、あと15分だ」



「あんたら、ちょっと聞きたいんだが」

夜間発着シーンを収めたネガを現像する為に自分のキャンピングカーに向かったミリタリーマニアの一人に、ある男が話し掛けてきた。

「この男を見掛けなかったか？」

そういつて男は一枚の写真を指差した。

そこには、その目の前の男と金髪の女性、そしてさっき別れたばかりの自称、陰謀マニアの一人が映っていた。

「……知らねえなあ」

「第一、その日本人に何の用だよ」

「オレはこいつが日本人だなんて一言も言っていないぞ」

「あ……………」

うつかり口を滑らせたマニアの一人が、周囲に集まっていた仲間達に罵られながら小突き回される。

その様子を見た男は、彼がここに居る事を確信した。

「今の内にここから離れていた方がいいぞ。多分とんでもない事が起きるだろうからな」

「何でそんな事が分かる？」

「そいつがオレの親友だからさ」

そう言つて男は首を傾げているマニア達に背を向けた。

「ここだな」

「間違い無い」

レンとレオンの二人は、ミリタリーマニア達から教えてもらった情報を元に、時には隠れ、時にはやり過ごしながら警備の網を掻い潜って昼間の内に調べておいたシェリーの住んでいる住居の外壁へと辿り着いた。

「時間は？」

「残り5分」

「ギリギリだな」

レンは周囲に人がいないのを確認しながら、窓枠から中を覗き込む。

生憎とそこからは中の住人を見つける事は出来なかった。

「まさか出掛けてるって事は無いだろうな？」

「人見知りする子だからそれは無いと思うが……」

レンは窓へと近付くと、その中央に瞬間接着剤を塗り付け、そこに接着剤の容器を立てて接着した。

「何を？」

「ちよつとな……」

レンは窓から数歩下がり、ゆっくりと刀を抜いた。

そして、窓枠へと向けて目にも止まらぬ動きで正確に4回、刀を振るう。

刀を鞘に納めながら、レンは接着剤の容器を掴み、ゆっくりと引っ張った。

枠を少しだけ残した状態で斬り抜かれたガラスが、それに続いて  
ゆっくりと外れていった。

「こうすればセキュリティは働かない」

「食い詰めたら泥棒になれるな」

「あくまで余技なんだがな」

変な所を感じしているレオンを差し置いて、レンはゆっくりと斬  
り抜いたガラスを地面に置いた。

そして、なるべく物音を立てないように窓から住居の中へと侵入  
した。

「さてと、ここにいないとすると……」

「気配はするからこの建物内にいるのは確かだが……」

一人暮らしにしては広い住居の中を、レオンとレンはそれぞれ別  
々のドアを開けた。

そこで、レンとタオル一枚だけを体に巻いたシャワー直後のシェ  
リーの目が合った。

「あ……………」

「き、キャアアアアア！！」

一瞬の沈黙の後、シェリーの悲鳴が周囲一帯に響き渡る。

「まて、オレは……」

「変た……」

慌ててレンがシェリーの口を塞ぐ。

その手を剥がそうとシェリーがもがこうとするが、声を聞きつけ

てこちらに来たレオンの姿を見つけるともがくのを止めた。

「シェリー、こいつは味方だ。痴漢でも変態でもない」

「へ、へホン！（レ、レオン！）」

「説明は後だ！すぐに脱出するぞ！」

「ちょ、ちよつと待って！」

シェリーが慌てて脱衣場へと戻る。

レンとレオンそれぞれ玄関と窓枠の影へとへばりついた。

「まずいな、今は確実に響いたぞ」

「異変を感じて、通報を受けたMPが来るのにどれく…」

そこで、玄関のチャイムが鳴った。

ビクリと二人が硬直する。

「悲鳴が聞こえたが、何か合ったのか？」

「ゴ、ゴキブリです！ゴキブリが出たんです！」

シェリーが着替えながら答えるが、向こうの返答は予想外の物だった。

「この基地に軍事機密を狙っている者が侵入を試みているとの情報が入っていてな、済まないが入らせてもらっぞ！」

（まずい！！）

レンとレオンが同時に自分の武器に手を伸ばした時だった。

「窓が破られているぞ！」

（他にもいたのか！）

レンはとつさに窓からこちらを覗いている兵士の鼻の下の急所へと向けて、正確に刀の柄を突き出した。

「ひぐう……」

意味不明の悲鳴を上げながらその兵士は昏倒したが、すぐさま別の兵士達が近寄ると一斉に銃口を向けた。

「くっ！」

レンは窓際に置いてあったソファーを蹴り上げ、窓を塞ぐと窓の脇に身を隠した。

途端に、猛烈な銃撃がソファーへと炸裂する。

しばらく続いた銃撃が一段落すると同時に、レンは最早原型を留めていないソファーを突き飛ばしながら、素早くサムライエッジを抜く。

外からこちらを見ている兵士達と目が合った瞬間、レンは立て続けにトリガーを引いた。

放たれた弾丸は、兵士達が再びトリガーを引くよりも速く、その腕や肩を貫いていた。

「動くな……」

「そっちな」

玄関を破って侵入してきた兵士の鼻先にレオンがデザートイーグルを突き付ける。

「オレ達は彼女を迎えにきたただけだ。他に用は無い」

「貴様そんな言い訳が……」

兵士の言葉は、鼻先に更に押し付けられた銃口で中断させられる。

レオンはそのまま一步步を進め、兵士はそれに応じて一歩後ろに下がった。

レオンが再び前に進み、兵士は下がる。

何度かそれを繰り返し、兵士の体が外に出た所でレオンは兵士の体を外に待機していた別の兵士へと突き飛ばした。

そのままつれ合って倒れた兵士達へと向けて、レオンは予備用のH&K・VP70を懐のシオルダーホルスターから素早く抜いて未だもがいている兵士達の手足にかすらせるように発砲した。

「逃げるぞ！」

「待つて！」

着替え終わったシェリーが脱衣場から飛び出すと、クローゼットから背中に天使の描かれた赤地のベストを着ながら外へと急いだ。

兵士達が乗ってきたらしいジープにレオンが乗り込み、シェリーがそれに続こうとした時、突然先程突き飛ばされた兵士が何を勘違いしたかシェリーへと掴みかかった。

「くそっ！」

最後に出てきたレンが兵士に峰打ちを食らわせようとしたが、それよりも早くシェリーの右フックが兵士の顔面へと炸裂した。

「えっ………？」

「ゴメンナサイ！」

続けて左のアップercutが兵士の顎を打ち上げ、体勢が崩れた

所で駄目押しの右回し蹴りが炸裂、兵士の体は数m程吹っ飛ばされた。

「……………シェリー？」

「マーシャルアーツ習ったの。結構強いのよ」

「結構ってレベルじゃないような……………」

ガッツポーズを取るシェリーに呆気にとられながら、レンが完全に失神している兵士を横目で見ろ。

取り合えず車へと乗り込みながら、レンはレオンにそつと耳打ちをした。

「本当に彼女がシェリーか？何か話と大分違うような気がするんだが……………」

「五年前はもつとおとなしい子だったんだが……………」

「来たよ！」

背後からこちらに猛スピードで向かってくるヘッドライトの群れを見たレオンが慌ててアクセルを踏み込んだ。

『エマージェンシー！エマージェンシー！基地内に侵入者有り！侵入者は男性二人組で居住区から少女一人を人質に取って現在逃走中！繰り返す！……………』

「人質って？」

「シェリーの事だろ」

「人を勝手に凶悪犯にしゃがって……………」

基地内は今や騒然としていた。

エマージェンシーコールと号令、怒号が基地のあちこちから聞こえ、スポットライトが夜闇を切り裂いていた。

「覚悟はしていたが、予想以上の大事になったな……………」

「レオンがアポも無しに突然来るからいけないのよ!」

「取ってる暇が無くてな」

「来たぞ!」

前方から迫ってくる複数のヘッドライトを見たレンがジープの座席に有ったM4A1アサルトライフルを手に取ると、セーフティレバーをフルオートにセット、前から来るジープのタイヤを狙ってトリガーを引いた。

連続して発射された弾丸によってタイヤを撃ち抜かれたジープが次々と横転、レオンがその間を巧みなハンドルテクニックで通り抜けた。

「頼むから人死には出るなよ……………」

レンが横転したジープを見ながら呟く。

「こっちも来た!」

後ろからもヘッドライトが近付いてくるのに気付いたシェリーが、足元の箱からスタングレネードを見つけると、ピンを抜いて後ろへと投げた。

「えいつ!」

数秒後、爆発したスタングレネードが閃光と轟音を周囲に撒き散らす。



後ろから迫っていたジープはそれをまともに食らってしまい、次々とスピン、クラッシュした。

「事故ったな、あれは……………」

「前方不注意ね、きつと」

平然と言うシェリーに何か薄ら寒い物を感じながらレオンが建物の角を曲がった時、突然側の地面が轟音と共に吹き飛んだ。

「な、何！？」

「まさか！」

「冗談だろ……………」

角を曲がった先には、一台の戦車がこちらへと薄く煙の立っている砲身を向けていた。

『停車せよ！さもなくば発砲する！』

「もう撃ってるだろうが！」

レオンが毒づきながらジープを横滑りさせて戦車の射程から逃れようとするが、砲塔は的確にその後を追って旋回した。

「逃げれない、か。やるしかないか……………」

「どうやって！？ロケットランチャーでも持つてるの？」

シェリーからの質問に、レンは少し難しい表情をしながら答える。

「向こうはこっちに有効的な攻撃方法がないと思い込んでいる。それを逆に利用する」

「どうやってだよ？」

レンは答えず、シェリーの方を見た。

「シェリー、スタングレネードまだ有るか？」

「？一応まだあるけど……」

「レオン、車をギリギリ相手に近付けて交差させてくれ」

「撃ってくれって言うようなもんだぞ！」

「警告をしたって事はよっぽどの事をしない限り撃ってはこないはずだ！チャンスは一度きり！スタングレネードの爆発のすぐ後に交差させてくれ！行くぞ！」

有無を言わさぬ強い口調で言うと、レンは不安定な座席上でバランスを取りながら立ち上がる。

呼吸を整えながら刀を抜き、それを胸の高さで真横に構えるとその峰に左手を添える。

「5！」

シェリーがピンを抜いたスタングレネードを思いっきり前へと投げた。

「4……」

レオンがハンドルを微調整しながら、猛スピードで戦車へと近づく。

「3」

レンが戦車の砲身に狙いを定めてそれを見据えた。

「2！」

シェリーが目と耳を塞ぎながらシートの影に隠れる。

「1」

誰かが唾を飲み込む音が聞こえた次の瞬間、閃光が辺りを覆った。

レンは即座に目を閉じ、開いた瞬間には砲身がすぐ目の前に有った。

「はあああああ！！！」

レンは刀を水平に振るい、切っ先が砲身に突き刺さると同時に左の拳を刀の峰へと叩き付けた。

ジープはそのまま戦車の脇を通り過ぎ、スタングレネードのダメージから回復した砲手がすぐさま砲塔を旋回させて狙いを定めた。

『警告無視と見なし、発砲する』

轟音と共に砲弾が発射されるが、それと同時に砲身から真横に炎の列が吹き出し、砲弾はさほど飛ばずに力を失って地面へと落ちた。

「な、何だあ！？」

慌てて砲手がハッチを開けて砲身をライトで照らす。

そこには、先端から根元近くまで綺麗に切れ目の入った砲身の姿が有った。

「冗談だろ……………オイ……………」

「光背一刀流、《残陽刻》ざんやうこく」

レンは刀を鞘に納めながら座席に着いた。

「一体何をしたんだ？」

バックミラーで後ろで起こった事の一部始終を見たレオンが首を傾げる。

「斬ったんだよ、砲身を」

平然と言うレンにシェリーが絶句する。

「……………まるでアニメみたい……………」

「ビルまでは斬れないがな」

レンはそう言いながら微笑した。

「フェンスが見えたぞ！」

「来た時と同じ手を使おう！少しは時間が稼げる！」

レオンはジープをドリフトさせながらフェンスの側へと停め、真先にレンが降りるとフェンスを来た時よりも大きく斬り抜いた。

「走れ！向こうに車が停めてある！」

「ちよっと待って！」

シェリーがジープに積んであったスタングレネードを幾つかポケットに捻じ込んで、先を行くレンの後に続き、レオンがその背後に続いた。

「急げ！すぐに追っ手が来るぞ！」

三人はあらん限りのスピードで走る。

基地からそれなりに距離が離れた所で、停めておいた車が見えてきた。

「もう少し……」

ところが、彼らの背後から空を切り裂きながら何かが通り過ぎ、車へと命中、爆発四散させる。

「ミサイル！？」

「まさか……」

三人が振り向いた先には、一機の戦闘ヘリがこちらへとサーチライトを向けた所だった。

「戦闘ヘリまで持ち出したのか！？」

「しかもあれはAHシリーズの最新型だぞ！」

戦闘ヘリはホバリングしながら、ゆっくりとこちらへと近づいて来た。

『君達に逃げ場は無い。それともまだ抵抗するかね？』  
「イエスだ！！」

レンが懷からサムライエッジを抜いて立て続けにトリガーを引いた。

だが、分厚い風防ガラスは発射された9ミリパラペラム弾を簡単に弾いた。

「馬鹿か、あいつは？」

「諦めが悪いだけだろ」

戦闘ヘリのガンナーの漏らした呟きに、パイロットが苦笑交じりに答える。

警告の為にガトリングガンの狙いを微妙にずらし、トリガーを引こうとした所で突然画面が暗くなった。

「何だ！？故障か！？」

「違う！ライトをやられた！さっきの銃撃はもう一人から目を逸らす為だったんだ！」

「ガッデム！」

ガンナーはスターライトスコープの画像をスコープディスプレイ全面へと切り替えた。

「やっぱり暗視装置付きか！」

レンが舌打ちしながらサムライエッジを懷に仕舞い、刀を正眼に構えた。

「ええいつ！」

シェリーが持ってきたスタングレネードをヘリへと投げ付ける。すぐ後に閃光が戦闘ヘリを襲ったが、平然と彼らを追い回す。

「効かないの！？何で！？」

「最新型の閃光遮断装置付きだ！そんなの効くか！」  
「そういう事は先に教える！」

レンは正眼に構えた刀をゆっくりと脇へと降ろしながら考えた。

（せめてもう少し近付いてくれれば……………）

その時、レンはガトリングガンの隣にある大きな銃口に気が付いた。

その銃口が微妙に動き、レンへとポイントするとそこからロケット弾が発射された。

「ぐっ！」

「レン！」

すぐ側の地面に命中したロケット弾の爆風でレンは吹き飛ばされたが、何とか受身を取って地面に転がる。

「大丈夫！？」

「生きてるよ……………」

レンは何とか小さく呟きながら立ち上がるが、途端に体に激痛が走る。

（外傷は……無い。ショック性が……）

レンは自分の体に走る激痛を堪えながら刀を構える。

痛みは直に引くだろうが、それまで相手が待ってくれる事は有り得ない。

「ガトリングガンとロケットランチャーの並列装備だと？何をコンセプトにしてるんだか……」

戦闘ヘリがその機首をレンから外した時だった。

戦闘ヘリのテールローターに一瞬赤い光点が点り、次の瞬間テールローターが小さな爆発を起こした。

「何だ………？」

蛇行を始めた戦闘ヘリに三人が疑問を抱いた時、突然横手から走ってきた一台の4WD車が側へと停まった。

「乗れ！」

「お前ひよつとして……」

車からの声に聞き覚えのあるレンが問い質すよりも早く、ふらつきながらも戦闘ヘリがこちらへと向き直ろうとするのが見えた。

慌ててレンが車に乗り込み、他の二人もそれに続いた所で車はホイールスピンをしながら猛ダッシュを始めた。

「何やってんだよ、レン」

「それはこっちのセリフだ、スミス」



ハンドルを握っていた男 スミスが苦笑しながら助手席のレンを見た。

「何でお前がここにいるんだ？」

「何、ミリイやユメちゃんから頼まれてな、お前が何かしでかすつもりらしいから手伝ってくれって。それでお前らしい痕跡を追っていたらここに辿りついたって寸法さ」

「黙ってるって言うといたはずなんだがな……」

「誰だ？」

「五年前オレと一緒にラクーンシティを脱出した友人だ。信用出来る」

二人の会話をいぶかしんだレオンの問いに、レンは断言した。

「来た！」

後部座席に座っていたシェリーの悲鳴と同時に、戦闘ヘリから発射されたロケット弾が車の前方に着弾、大きなクレーターを穿った。

「何の！」

スミスは急ハンドルを切り、そのクレーターをギリギリで迂回する。

「わあああああ！！！」

横Gでレオンの体が押し付けられたシェリーが更に悲鳴を上げるが、構っている暇は無かった。

「まずいな、このままじゃ逃げ切れないぞ」

「迎撃するか？」

スミスがハンドルを握りながら左手でデザートイーグルよりも一回り大きい巨大なオートマチック拳銃をホルスターから取り出した。

「何だそりゃ！？」

「ガンスミス ジョー・ケンド、オリジナルハンドメイド454カスールオートマチック”ゾンビバスター”。口径は454カスール、弾頭は水銀炸裂弾頭の化け物だ」

「さっきテールローターを撃ち抜いたのはそいつか……………」

バレル下部にタクティカルライトとレーザーサイトまでもが組み込まれた非常識なまでに巨大な拳銃にレンとレオンは絶句した。

「出来れば人死には出たくないんだがな……………」

「そいつでもう一度テールローターを撃ち抜けないか？」

再度発射されたロケット弾が側で爆発、車体が大きく揺れた。

「難しいな。さっきは奇襲でなんとかあったが、こつも暗いと……」

「これ照明代わりにならない？」

シェリーがポケットからスタングレネードを1個取り出して見せた。

「一瞬だけだろ？そいつは」

「自信が無いのか？」

レオンの挑発的な物言いにスミスがぴくりと反応する。

「あんたは？」

「趣味だけでこいつを使ってる訳じゃない」

レオンがデザートイーグルを構えながら、言い切る。

「決まっ たな」

レンがサムライエッジを抜く。男三人がそれぞれの銃を持って目配せした。

「行くぞ！」

スミスがドリフトさせながら急激的に車をUターンさせた。

「5！」

シェリーがスタングレネードのピンを抜いてヘリと反対側の方向に投げる。

「4！」

スミスがハンドルを握りながらセーフティを外す。

「3……」

レンがウィンドウを開けながらサムライエッジを戦闘ヘリの方へと向けた。

「2」

レオンが周囲をかすめるガトリングガンの銃撃に舌打ちしながらデザートイーグルのセーフティを外した。

『1!』

男三人の声が同時に同じ数字を唱え、車が戦闘ヘリに並んだ瞬間、閃光が一瞬だけ戦闘ヘリを照らし出した。

3つの銃口が、その一瞬を逃さず同時に同じ場所へと弾丸を吐き出した。

三種類の弾丸が狙い変わらず、テールローターの中心へと命中する。

そして、完全にその機能を廃棄したテールローターが止まり、戦闘ヘリはゆっくりと高度を下げながら墜落した。

慌ててコクピットからパイロットとガンナーが飛び出し、その直後にヘリは火に包まれた。

「さよ～なら～、お世話になりました」

シェリーが後部座席から手を振るが、それを見たヘリのパイロット達が大声で何かを（恐らくは罵詈雑言の嵐）喚き立てる。

そのまま四人を乗せた車は猛スピードでその場を後にした。

「さてと、これでこの国にいらなくなっただな」

レンがマガジンを抜いて残弾をチェックしながらぼやく。

「これからどうするんだ？」

「まずシェリーを何処か安全な所へ匿いたい」

「それなら日本にいるオレの従兄を頼るといい。きつと力に…」  
「待って！」

シェリーの声が会話を中断させた。

「レオン！クレアの所に行くんでしょ！私も連れてって！」

「駄目だ。危険過ぎる」

「でも！」

「悪い事は言わないから大人しくしていた方が身の為だぜ、嬢ちゃん」

「私知ってるの！ラクーンシティをあんな風にしたのが私のパパだつて事！」

『何！？』

驚いたスミスがハンドルを切り損ね、車体が一瞬蛇行するが、なんとか体勢を立て直す。

「……………シェリー、どこでそれを……………」

「アンブレラのサイトを調べてたらパパの研究データを見つけたの。パスワードはパパとママの使っていたのを入れてみたらあっさり入れたわ。それで知ったの、Ｔ ウイルスの事やパパが作ったＧ ウイルスの事、そしてラクーンシティが何であんな事になったのかも……………」

「そうか……………」

車内を重い沈黙が降りる。

「……………それは本当か？」

その沈黙を、スミスの硬い声が破る。

「間違い無い。オレは彼女の母親から直接聞いたんだ」  
「そうか……………」

音がする程強く、スミスがハンドルを握り締める。

「スミス……………」

レンが掛けるべき言葉を出そうとするが、スミスの硬い表情を見て口をつぐんだ。

「…………ごめんなさい……………」  
「あんたが謝る必要はねえよ」

シェリーの呟きを、スミスが固い口調のまま否定した。

「でも……………」  
「謝らなくていいって言ってるだろ！第一、五年前ついたらアンタ何歳だ！？親の失敗を子供に取ってもらう程オレはバカじゃねえ！」

「スミス」  
「悪い、言い過ぎた……………」

レンに窘められ、スミスは荒げていた口調を戻した。  
そのまましばらく沈黙が続いた所で、再びスミスが口を開いた。

「なあレン、お前これからどうするつもりだ？」  
「STARSがイギリスで事件の全容を追っているらしい。それに合流するつもりだ」  
「オレも行く」

「危険だぞ」

「危険がなんだっていうんだ！その丁だかだか言うウイルスが原因だってんならそれを根絶してやる！親父の敵討ちだ！」

スミスの真剣な表情に、レンはそれ以上何かを言うべき必要が無い事を察した。

「レオン、STARSに二人追加だがいいか？」

「いや、オレも加えて三人だ」

「四人よ」

四人はお互いに視線を交わし、無言で頷いた。

「行こう、イギリスへ」

『おう！』

次の日 オファット空軍基地内部の一室

「だから、何も知らねえって言ってるだろうが！あの二人とはちょっと話をしただけで何も聞いてねえよ。それとも何か？あいつらが言ってたみてえにここでX ファイルみてえな妙な実験が行われてるってのか？」

昨夜から続いているこの尋問に、彼はとっくの昔にうんざりしていた。

昨夜あの自称陰謀マニアの二人がいなくなった後、突然基地内が騒がしくなり、目の前でいきなり本物の戦車や戦闘ヘリが動き出した為に、夢中でシャッターを押していたら兵士達にとっ捕まり、基

地内に連行されてネガを没収された拳銃に延々とこの有様だった。

「いいか？もう一度聞く……」

そこで、尋問部屋に一人の兵士が入ってきて何事かを尋問をしていた兵士に耳打ちした。

「そうか。おい、お前もう帰っていいぞ。くれぐれもこの事は他言しないようにな」

「馬鹿野郎！こんな事されて誰が大人しくするか！今日からオレは国家陰謀説の支持者になってやる！ローンガンメンばりに有る事無い事言い触らしまくってやるからな！」

同時刻 オファット空軍基地 第二会議室

「以上が、昨夜起きた事の全容です」

会議室に集まった将校達が説明された内容にほぼ同じ疑問を抱いていた。

「もう一度聞こう。本当に彼らは重火器を所持していなかったのかね？」

将校の一人の質問に、説明していた兵士は首を縦に振った。

「間違いありません。負傷した兵士達の証言や、破壊された戦車とヘリを詳しい分析からも彼らは拳銃及び強奪した銃器以外の物は一切使用していない事が裏付けられています」



「そんな馬鹿な事があるか。戦車が銃弾程度で破壊出来る訳があるまい」

別の将校が反論するが、説明していた兵士は苦い表情になった。

「それなのですが、戦車に搭乗していた者達の証言によれば、どうやら犯人の一人が所持していた二ホントウで破壊されたらしいのです……」

「それこそ信じられん。いつからこの基地はジャパニメーションの世界になったのだ!？」

別の将校が反論するが、信じられないのはその場にいる全員が同じだった。

「とにかく、だ。シェリー・バーキン是唯一のG ワクチン保有者だ。何としても他国の手に渡るのは防がねばならん」

「ただ今諜報部とCIAが共同で全力を持って犯人達の行方を追っております」

「発見出来ても戦車を斬れるような奴を相手に何が出来るかだな……」

将校の一人が皮肉気に言う。

「一体彼らは何処にいるのだ?」

#### 第四章 『STARS 壊滅指令！ネス湖畔の死闘！』

「もう少し右！右だす！ようしそこ！そのままゆっくり降ろすだす！」

ニューヨーク第二埠頭に停泊している一隻の貨物船に、一つのコンテナが積み込まれていた。

「荷物はこれで全部だすな！みんな出航準備を……」

「船長！お客さんですよ！」

「客？」

出航準備をしていた船長は、舌打ちしながらも客に会った。

「FBI？お上が何の用だす？」

「我々は誘拐事件の犯人を追っている。この写真の男達に見覚えは無いか？」

FBIの捜査官を名乗る男は、懷から二人の男性の写真を取り出した。

「さあ、知らんだすな。第一、何でオラの船に誘拐犯が来るんだす？」

「誘拐された少女はIQ220の天才でな、彼女の研究データをイギリスに持ち込むのが犯人の狙いらしいのだ。今FBIが総力を持ってイギリス行きの空路と海路を当たっている」

「産業スパイって奴だすか？物騒だすな、少なくともこの船には乗ってないだすよ」

「積荷に密航している可能性は？」

FBIを名乗る男が山と詰まれたコンテナを指差すが、船長はそれに笑って答えた。

「残念ですが、中身は全部機械の部品ですよ。中に人が入れる程の隙間は無いですから無理です。それにコンテナには全部鍵が掛かっているですし、鍵はオラしか持ってないです」

「あのコンテナは？他のと少し違うようだが……」

男が今積み込まれたばかりのコンテナを指差す。

「ああ、あれですか。追加で持つてく事になった工業機械ですよ。なんでも特殊な製造法に使う奴らしいです」

「あれに密航の可能性は？」

「生憎とあれには倍の鍵が付いているですし、中身がギチギチに詰まっけていても入れた代物じゃないですよ」

「だが……」

そこで、男と似たような雰囲気を持った男が表れ、二人で小声で何かを話し始めた。

「もう出航していいですか？あれの積み込みのせいで予定が遅れてすぐにでも出航したいんですが」

男は、そのコンテナを軽く叩く。反響音がほとんど響かない事から、中に密航の可能性は無しと判断した。

「分かった、行っているぞ！」

「ありがとです。野郎共、出航です！」

同時刻 問題のコンテナの中

「な、上手く行っただろ」

「そりゃ、こんな状態で入っているとは思わないだろうからな」

「これは密航というより密輸だな」

「狭い……」

擬装用に入れられた機械の狭い土台部分に、四人は密着に近い状態で入っていた。

「とにかく、アメリカの領海から出てしまえばこっちの物だからな。それまでの辛抱だ」

「本当に信用出来るのか？あの妙な方言の船長」

「ああ、あの人はオレのガンコレクション友達でな、伯父さんに特注した特製カスタムガン一丁やるって言ったら全面協力してくれるってよ」

「類友か……」

「……」

微妙に動いて自分の居場所を何とか確保しつつ、四人は小声で話し合っていた。

「向こうに着いても、オレやシェリーはいいが、あんた達がSTARSに信用してもらえるかどうかが問題だな」

「確かに怪しいからな、その格好」

「悪かったな。その時は一人でもやってやる」

「……」

ふと、レオンはさっきまで文句を言っていたシェリーが妙に静かな事に気付いた。

「シェリー、さっきからおとなしいがどうかしたか？」

「……………い……………」

「何だつて？」

「気持ち悪い……………」

「……………ひょっとして、彼女船酔いするのか？」

無言で男三人が顔を見合わせた。

そして、ゆつくりと青ざめた顔をシェリーへと向ける。

「……………う！」

『おわあああああ！！』

それより2週間後、イギリス・グラスゴー港

「世話になったな、船長」

「おう、気をつけるだよ」

少し顔の青い少女と、少し疲れた表情の男性を含めた男女四人組が埠頭に降り立った。

「オレはもう二度と船には乗らん……………」

「ゴメンナサイ……………」

明らかに憔悴しているスミスにシェリーが平謝りしていた。

「別に恨んだり、根に持ったりしないから、頼むから忘れさせてくれ……」

「まあ、お前が一番近かったからな。頭からってのは運が悪かったとしか……」

「だから忘れさせろって言ってるだろうが！」

「本当にゴメン……」

「とにかく、移動手段を考えよう。STARSの本拠地は何処にあるんだ？」

「ここより更に北、ネス湖のほとりにあるって話だ」

「なんかのシャレか？それは」

「さあな」

港の片隅から、一人の男が彼らを見ている事に四人は気が付かなかった。

男は、四人を確認すると素早く物陰に入り、通信機を取り出した。

「こちらツイツイミトル、連絡のあった四人を発見した。指示を乞う……」

2時間後 移動の車内にて

「失敗作？」

「ああ、オレはそう考えてる」

レオンの話に、皆耳を傾けていた、

「CIAのエージェントとして幾つかバイオハザードの起きた現場

を見てきたが、そのほとんどが些細な事故や人為的ミスが原因だった。だが、原発の事故なんかと比べてみてもあんまりにも被害が大き過ぎる。それに、BOWの開発にはあまりにも手間暇が掛かり過ぎる。とてもT ウイルスは兵器として使えた代物じゃあない」「それはあくまで戦場での大量使用を前提とした場合でしょ」

シェリーが反論した。

「そうじゃなくて、あくまで限定使用を前提とした拠点戦闘なんかの場合ではBOWは驚異的な効果を発揮出来ると思うの。近年の戦争は物量による全面戦争ではなく、拠点戦闘を中心にした物になってきているから、それをコンセプトにしているんじゃないかしら」「様は、そこいらに離して勝手に人間襲って食ってるだけの話じゃないのか？」

今一話を理解出来ないスミスが横槍を入れる。

「かも知れんな。もつともオレはあんな怪物達を使って勝って喜ぶ連中の方の気が知れんがな」

交代でハンドルを握っていたレンがそれを肯定する。

「だが、もしBOWの大量完全制御が出来たらどうする？」

同時刻 フランス・ビスケー湾沖アンブレラ秘密研究所

「こいつらが今回の部下か……」

出発準備をしている輸送機の中で、重武装に身を固めた男が呟いた。

「ああ、ハーメルン・システムの初の実戦使用だ。上手く行けばSARSの連中を壊滅させられるかも知れんぞ」

男の側で奇妙な機械の調整を行っていた科学者が話し掛ける。

男はそれを適当に聞きながら、目の前に並ぶ無数の特殊金属製の檻と、そこから外を見ている獰猛な双眸を見ていた。

「この程度でやられる程あいつらはヤワじゃない」

「随分と向こうの肩を持つな。それともやっぱり自分の手じゃないと信用出来ないのか？死神さんよ」

男 ¥ ”死神” ハンクはその言葉に無言で応じた。

夕刻 スコットランド州・ネス湖畔

「ここか？」

車から降り立ったレンは、目の前にある大きい事は大きいが、やたらと古びている倉庫を見上げた。

「オレはてつきりもつと立派な秘密基地でも在るのかと思ってたが……………」

「パワーレンジャーじゃないんだから……………」

同じように倉庫を見上げていたスミスの呟きに、シェリーがもつ



ともな反論を述べる。

レオンが錆付いたドアの前に立つと、一定のパターンを持ったノックをした。

「誰だ？」

「連絡しておいたコンサートの件で来たんだが」

「ああ、聞いている。ジャズバンドだったな」

「ロックと言っておいたはずだが」

「ジャズじゃないのか？」

「いやロックだ」

どうやらそれが合言葉だったらしく、錆付いたドアが内側から開けられる。

四人がその中に入ると同時に、複数の銃口が突きつけられた。

「手厚い歓迎だな……………」

「全くだ」

レンとスミスが無言で両手を上げる。

倉庫の中は見た目と違って強固な補強が施され、あちこちにバリケードを兼ねているらしい大きな木箱が置かれていた。

そして、その木箱の向こう側からと、周囲を取り囲んだ男女から十以上の銃口が油断無く四人を取り囲んでいた。

ふと、周囲を取り囲んでいる男女の中に、見覚えがある顔がある事にシェリーは気付いた。

「クレア？」

「シェリー？シェリーなの！？」

「やっぱりクレアだ！」

シェリーが正面に立っていたポニーテールの女性 クレアに抱き着いた。

「会いたかったクレア！」

「大きくなっただね、見違えちゃった」

「もう17だもん。クレアが無事でホントよかった」

「……………なあ、あの二人ってひょっとしてレ……」

再開を喜ぶ二人の様子を邪推したスミスが妙な事を口走る前に、レンの手刀がスミスの側頭部にめり込む。

「おぐあっ！」

側頭部を押さえ込んでスミスがその場にしゃがみ込み、ゆっくりとレンの方に恨みがましそうな顔を向けた。

「いきなり何をする……………」

「つまらん事考えるからだ」

勤めて無表情に言うレンとのやり取りに、銃を向けていた誰かが微かに噴きだす。

途端、周囲の人間が一斉に笑い始めた。

一頻り皆が笑い終えた後、奥から一人の筋肉質の壮漢な顔つきの男が彼らの前へと進み出た。

「どうやらスパイではなさそうだな。オレはクリス・レッドフィールド。STARSのリーダーだ」

「ミスサワ レン、五年前のラクーンシティの脱出者で陰陽師だ」

「スミス・ケンド。同じくラクーンシティの脱出者で一応SWAT隊員だ」

「レオンから話は聞いているが、奥で詳しく事を聞こうか」

通された奥の部屋には幾つもの木箱が並び、レンが何気に口の開いていた木箱を覗き見るとそこには大量の銃火器や弾薬が入っていた。

「戦争でも起こす気か？」

「起こすんじゃない。しているんだ」

クリスの強い口調に、レンは無言で納得した。

「取り合えず座ってくれ」

「くつろげそうにはねえけどな」

スミスが興味深そうに木箱の中を覗きながら、そこいら辺にあったイスに座る。

レンは木箱に腰掛けながら、脇に愛刀を納めた包みを立て掛けた。

「まず断言しておくが、あんた達をまだ完全に信用した訳じゃない」

「だろうな」

むしろ予想していたかのように、レンは冷静にクリスの言葉を受け止める。

「本当にお前達がラクーンシティの脱出者だという証拠は在るか？」

「オレの方はケンド銃砲店の一人息子だつて言えばバリーさんが分かるはずだが……」

「生憎とバリーは今フランスに行っている」

「じゃあ無理か……」

「オレはこれ位しかないが……」

レンがサムライエッジをクリスへと手渡す。

「……こいつはケンド銃砲店に発注しておいていた物の一つだ。何処でこれを？」

「街を脱出する時、スミスの父親から譲り受けた物だ。生憎とオレがラクーンシティに居たのはたった半年だけでな、他に証明出来る物は無い」

「それともう一つ」

クリスの目が真剣な物に変わった事に、レンは気づいた。

「あんたは二ホンから来たという話だったな」

「ああ、そうだが」

「銃の所持が禁止されているはずの国の人間が持っていた銃がなぜ使い込まれている？」

クリスの鋭い視線がレンへと向けられるが、レンは平然とそれを受け止めた。

「確かに日本では民間人が銃を持つ必要は無い。だが、裏では違う。オレはその闇のトラブルを処理する陰陽師を生業にしているな、その銃はこの五年間愛用させてもらった」

「……そうか」

クリスはそれだけを言うと、サムライエッジをレンへと返す。

ふと、レンの耳に微かな音が聞こえた気がした。

普通の人間ならば空耳で済ますような微かな音を、鍛え抜かれた感覚がそれが何かを知らせる。

「一つ聞くんが、STARSに航空戦力は在るか？」

「？ハリアーが一機と、ヘリが二機あるが」

「じゃあ、別口か！」

レンがサムライエッジを部屋の窓へと向けて素早く構える。

次の瞬間、窓を突き破って入ってきた何かへと向けて立て続けにトリガーを引いた。

レンに襲い掛かろうとする寸前で、それは頭を撃ち抜かれて断末魔の悲鳴を上げながら床へと倒れた。

「なんだこいつ！？」

それは、爬虫類を思わせる奇怪な肌をし、体に埋もれるような顔と鋭いかぎ爪の生えた腕を持った奇怪な生物だった。

「ハンターだと！？どうしてここに……」

言葉の途中で、ドアの向こうからガラスの割れる音と、複数の悲鳴、そして銃声が響いてくる。

「敵襲か！」

レンが立て掛けて置いた刀を手にとってドアを乱暴に開ける。

そこには、無数のハンターと必死に応戦しているSTARSのメンバー達の姿があった。

「はあっ！」

レンはまだ武器を手にしていない人物に襲い掛かろうとしていたハンターに向けて、抜刀した。

「やあっ！」

ジャンプしながらかぎ爪を振り被ったハンターが、シェリーのバク転しながらの変形回し蹴り、通称サマーソルトキックをともに食らってバランスを崩し地面へと落ちた所を周囲からの集中砲火を浴びて絶命する。

「ふっ！」

別のハンターが低めの軌道で振るった腕を掴み、そのまま相手の背後へと回り込みながら地面に押し倒し、後頭部に拳を叩き込む。人間ならば運が悪ければ死亡してもおかしくない攻撃だが、ハンター相手では一時的に動きを止める位しか出来ないが、その隙にクレアがトドメの弾丸を撃ち込む。

「シェリー、随分と強くなったのね」

「頑張ったもん」

驚いているクレアにシェリーがガッツポーズを取って見せる。が、その時背後から近寄ってくるハンターがいた。

「後ろ！」

「え……」

シェリーが振り向いた時には、すでにかぎ爪が振り下ろされる寸前だった。

だが、それよりも一瞬速くハンターの口から突然刃が突き出した。

驚くシェリーの目の前で、刃は真横へと移動し、頸椎を半ばから両断されたハンターが倒れた向こうには右手に愛刀の源清麿を、左手にサムライエッジを構えたレンの姿が在った。

「戦闘中に気を抜くな！一瞬の油断が死に繋がるぞ！」

「は、はいっ！」

レンの怒声にシェリーが恐縮する。

「実戦は初めてか？」

「は、はい……………」

近寄ってくるハンターに弾丸を撃ち込みつつのレンの問いに、シェリーが小さく答えた。

「一度構えたら安全が確認出来るまで絶対に構えを解くな！」

「はい！」

シェリーが答えながら構え直す。

「相手に致命傷を与えられないのなら決して必要以上前に出るな！サポートに徹して孤立を避ける！」

「はい！」

シェリーが向かってきたハンターをコンビネーションパンチで動

きを止め、クレアの方に蹴り飛ばした。

それにクレアとレンが連続して弾丸を撃ち込んだ。

そこで弾丸が尽きたレンはサムライエッジのスライドレバーを押してスライドを戻し、空のマガジンを抜いてそれを口に咥え、懐から予備のマガジンを探る。

その時、正面から狙ったかのようにハンターが迫るが、レンは八双に構えた刀を斜めに斬り上げながらスピアのマガジンをサムライエッジに叩き込み、口でチェンバーをスライドさせて初弾を装弾させた。

「銃を扱う人間の最大の弱点は弾丸が尽きた時だ！敵の時はそれを逃さず、味方の時は絶対のガードを敷け！」

「はい！」

同じくマガジンを交換しようとしていたクレアの側にシェリーは駆け寄った。

背後からジャンプして襲ってきたハンターにレンは振り向きもせず刀を肩越しに突き出し、それがハンターを貫くと同時にそのまま上段に振り下ろしてハンターを縦に両断した。

「混戦に限らず、戦闘時には360度全てに注意しろ！こいつらは特に変則的な戦い方をする！」

「はい！」

シェリーが斜め後ろにいたハンターに大振りの回し蹴りで牽制する。

「一番大事なのは冷静さを保つ事だ！僅かな勝機を絶対に逃がすな！」

「はい！」



「この野郎！」

スミスがジャンプして迫ってきたハンターのかぎ爪を転がりながら避け、次の瞬間には転がったままの状態でゾンビバスターをハンターにポイント、トリガーを引いた。

着弾した炸裂弾頭がハンターの体に文字通りの風穴を開けるが、大口径ならではの強力な反動が構えていた左腕を襲い、スミスは驚異的な膂力でそれを押さえ込む。

素早く起き上がりながら片膝をついて次の敵を探す。

SWAT仕込みのコンバットシューティングスタイルを体が半ば反射的に行っていた。

取り付けられたレーザーサイトがハンターの頭部に光点を付けると同時にトリガーが引かれる。

次の瞬間には迫ってきていたハンター二匹の頭部が吹き飛んだ。

「やるじゃないか」

隣でM4A1アサルトライフルを撃っていた男が口笛を吹きながらスミスを賞賛する。

「あんたもな」

フルオートで放たれている弾丸がハンターに的確に集弾されているのを見たスミスが、笑みを浮かべながら空になったマガジンを取り出す。

「それにその銃もいいな」

「特注だよ。普通の奴じゃ撃つと同時に手首がイカれる」

「それじゃあお前が死んだらもう事にするさ」

「言ってる、え」と……」

「カルロスだ」

「覚えとくよ、ここであんたが死ななかつたらな！」

マガジン交換を済ませると同時に違う標的へと向けてスミスはトリガーを引いた。

「負傷者や弾切れを起こした奴は下がらせる！必要以上敵を近寄らせるな！」

クリスが叫びながら巨大なリボルバー拳銃を思わせるMM1グレネードランチャーを連射する。

着弾したグレネード弾がハンターを数匹まとめて吹き飛ばすが、その向こうから新手が押し寄せてくる。

（何匹いるんだ！？それにどうやってこれだけのハンターを制御しているんだ？）

疑問は押し寄せる敵影によって中断せざるをえなくなる。

再びMM1を連射しながらクリスは周囲を見た。

奇襲だった為に負傷者はかなりの数になっている。

ハンターの特徴は皆が知っていた為に致命的な攻撃を受けた者は少ないが、少しでも油断をすれば確実に首を切り落とされるだろう。

負傷者達に近寄ってくるハンターは近接戦闘を行えるレンとシェリーがなんとか食い止めているが、二人とも疲労してきているのが

目に見えてきていた。

（今は、生き残る事だ！）

クリスはMM1から空薬莖を落とし、手早くグレネード弾を装弾し始めた。

「はあっ！」

袈裟斬りに振り下ろされた刃がハンターの体を斬り裂くが、浅かったらしくハンターは少しよろめいてから再び襲いかかってくる。

（まずい……………）

そのハンターに弾丸を撃ち込みながら、レンは徐々に刀の手ごたえが重くなってきたのに気付いていた。

元々、日本刀は一般的に考えられている程持久性は無い。

人を十人斬ればその負担で普通の刀は切れなくなると言われるが、これだけの激戦で未だその切れ味を持続させているのは業物の刀と、レンの技量がなせる技だった。

しかしそれも限界が来たのか、レンの愛刀・源清磨は確実にその切れ味が鈍ってきている。

このままでは使い物にならなくなるのも時間の問題だった。

しかし、彼の背後には負傷者達がいる為、下がる事は許されない。

（この戦いの間だけでいい。持ってくれ！）

レンは意識して柄を強く握り締めた。

音を立ててデザートイーグルのスライドが後退したまま止まる。

「ちっ！」

レオンは舌打ちしながらスペアマガジンを探すが、装弾されているのは一つも無かった。

バリケードにしていた木箱の陰に隠れながら、ポケットから弾丸を取り出してマガジンに装填を始める。

最後の一発を込めようとした時、ふいに頭上を飛び越えたハンターがこちらへと向き直った。

「しまっ……」

慌ててマガジンを入れようとするが、どう見ても間に合わない。レオンが負傷を覚悟した瞬間、横手から飛んできた弾丸がハンターの頭部を吹き飛ばした。

「大丈夫か！？」

スミスが叫びながら近寄ってくる。

「悪い！助かった！」

「礼はいいから今度はこっちが頼む！」

レオンの隣に座り込んだスミスが自分のマガジンに装填を始める。

「まかせろ！」

レオンは装弾の済んだデザートイーグルを構えた。

「はあっ、はあっ……………」

シェリーは自分の呼吸が異常に重い物に感じられた。

ハンターの数はいよいよ減ってきていたが、未だ余裕を持てる状況ではない。

「シェリー、無茶しちゃ駄目よ」

「大丈夫……」

負傷した腕に包帯を巻いているクレアに、無理に笑顔を見せる。

（五年前クレアは私を守ってくれた。今度は私がクレアを守るんだ！）

意識して強く拳を握りこんだ時、不意に額を流れる汗が目に入っ  
た。

反射的に目を閉じた瞬間、正面にいたハンターが大きくジャンプ  
した。

シェリーが目を開いた時には、鈍く光るかぎ爪が首筋に触れる瞬  
間だった。

その時、突然シェリーの体が横へと弾き飛ばされる。

よるめきながらもなんとか体勢を立て直したシェリーの目に、突  
き飛ばした当人であるレンが代わりにハンターのかぎ爪を受けた所  
が飛び込んできた。

「レンー!!」

「油断はするなと言っておいたはずだ」

ハンターのかぎ爪は頭部を庇っていたレンの腕を切り裂いたはずだったが、切り裂かれた袖の断面から服の裏地に縫い込まれた防弾用ケプラー材とその下に着けていたチタン製プロテクター、そして対ショック用のボディスーツが露になっていた。

「あと、一度食らった手は二度と食わないように対策を講じておけ」

「……はい………」

予想以上に重武装だったレンに呆気に取られながら、シェリーは構え直してレンの隣に立った。

(この人の側なら、安心して戦える………)

シェリーは何故かそんな気がしていた。

「やあっ!」

「はっ!」

シェリーの直蹴りを食らったハンターがよろめいた所を、レンが真後ろから唐竹に斬り裂く。

「そこだ!」

クリスが放ったグレネード弾が固まっていたハンターをまとめて吹き飛ばした。

「てめえで最後だ！」

残っていたハンターにスミスが連続して弾丸を撃ちこみ、完全に絶命させた。

「もういねえな？」

カルロスが大きく息を吐きながら構えていたM4A1を降ろした。

「どうやらそのようだ」

レオンがデザートイーグルをホルスターに戻した。

「死傷者を報告しろ」

「エランとフォンが最初に殺られた以外は死者はいないみたい。あのサムライのお陰よ」

「オレはサムライじゃ……」

クレアの言葉に、刀を鞘に納めながらレンが反論しようとした時、レンの背中に冷たい感覚が走った。

それが何者かの殺気だと感じた瞬間、レンは行動した。

「伏せる！」

レンが叫びながら側にいたシェリーを地面に押し倒す。ちょうどレンが立っていた位置を、一発の弾丸が過ぎ去った。

「何っ!？」

「狙撃だど!？」

皆も慌てて伏せたり物陰に隠れたりしながら様子を伺う。

「やっぱりか……………」

「どういう事だよ!？」

物陰に隠れたレンの呟きに、スミスが怒鳴り返す。

「妙だと思っていた。これだけの数がいながら一匹も逃げ出す奴がいなかった。いくら群れで動く生物でも必要以上の危険を感じれば逃げるはずだ」

「確かに……………」

押し倒された拍子に鼻をすりむいたらしいシエリーが鼻を押さえながらレンの考えを肯定した。

「考えられる事はこいつらは何らかの方法で制御されていた。そして、その指揮官がいる……………」

「しかもとんでもない凄腕がな……………」

飛んできた弾丸の方向から大体の狙撃位置を判断したレオンがデザートイーグルを向けようとするが、その鼻先をかすめた弾丸に再び木箱の陰に引っ込まざるをえなくなった。

「外したか……………」



念の為に用意しておいたPSG 1ライフルを構えながら、ハンクは呟いた。

「やはり獣は信用出来ない」

一番信用出来るのは実戦で培われた経験と勘だ、と思いながらハンクは赤外線探知スコープを覗き込んだ。

「そうつとだぞ、そうつと……………」  
「分かってるよ」

スミスとカルロスがゆつくりと木箱の陰に隠れながらそれを押し、前進を試みるが、その箱に次々と弾丸が撃ち込まれ、その内の一発が木箱を貫通しスミスの左腕をかすめて床に弾痕を穿った。

「おい、大丈夫か!？」

「ああ、これくらいなんともない」

スミスは平然と左手を握り緊めたり開いたりを繰り返す。  
それを見たカルロスが訝しげな顔をするが、今度は彼の後頭部のすぐ後ろを弾丸が通過した為慌てて思考を中断して地に伏せた。

「壁と障害物越しでこれか!？という腕前してやがるんだ!」

「お前より上つて事は確かだ!」

「なんだって!」

口論を始めた二人が立ち上がり掛けた時、また弾丸が撃ち込まれて二人は再び地に伏せた。

「まずいな……………」

クリスはその様子を見ながら、焦りを感じていた。  
こちらにはすぐに治療を施さなければいけない重傷者が大量にいるが、向こうの射撃の正確さはそれを許さない。

（どうする？どうすればいい？）

必死に考えを巡らせるが、いいアイデアは浮かばなかった。

「応援は呼べないか？」

向こう側の木箱の陰に隠れているレンからの問いに、クリスは首を横に振った。

「駄目だ。地元警察に話は付けてあるが、呼んで来るまでに20分以上は懸かる」

「そうか……………」

レンはしばし考えた後、一つの考えをまとめた。

「オレに考えがある。9パラのホットロード（炸薬増量弾）は無いか？」

「有る事は有るが、何をする気だ？」

「多分、オレにしか出来ない事だ」

クリスは首を傾げながら、ポケットから強化弾の入った弾丸ケースを取り出し、床を滑らしてレンへと手渡した。

レンはそこから弾を一発だけ取り出すと、マガジンにセットしてチェンバーへと装弾させた。

すると、レンは突然立ち上がって木箱の陰から前へと歩き出した。

「おい！危ないぞ！」

「戻れ！危険だ！」

忠告を無視してレンは歩を進め、立ち止まると右脇に刀を、左脇にサムライエッジを置いてその場に正座し、両手を膝の上に置いて目を閉じた。

「戻れサムライ！ハラキリでもするつもりか！」

「違うな」

スミスが強い口調で断言した。

「あいつは最後の最後まで絶対に諦めないタイプだ。きっと何かいい考えがあるはずだ」

ハンクは当惑した。

今彼の覗いているスコープには恐ろしいまでに無防備な人影が映っている。

赤外線分布から見るとボディーマーの類を着込んでいるのが分かるが、頭を狙えば済む事だ。

（罨か？）

ハンクは自問したが、ここから目標まで50m以上は離れている。

この状態からの罨などは絶対に考えられなかった。

しばし迷った後、ハンクはその人影の額に狙いを定め、トリガーに指を掛けた。

視界を閉ざした事により、レンは周囲の気配をより感じ取れるようになった。

そして、まるで突き刺さるような鋭い殺気が自分に向けられている事を意識する。

その殺気は段々と高くなり、それが頂点に達すると同時にレンは目を見開いて右脇に置いた刀を逆手で引き抜き、刀の腹を額の中央にかざす。

ちょうどその場所に、甲高い音を立ててライフル弾が刀身へと突き刺さる。

そして、レンは左手でサムライエッジを構えると、殺気が放たれていた場所に向けてトリガーを引いた。

静まり返っていた倉庫の中に一発の発砲音が響き、それに続いて着弾したポイントから折れた刀身が、突き刺さっていたライフル弾と共に床へと落ちる音が響いた。

誰もがしばし何が起きたか理解出来なかったが、やがて状況を理解したレオンがデザートイーグル片手に外へと走り出し、スミスがその後に続いた。

「何をしたの？」

「狙撃をガードして反撃した。それだけだ」

シェリーの問いにレンはいとも簡単そうに答えた。

「どうやってだよ？」

カルロスが頭を捻る。

「障害物越しに狙ってきたって事は恐らく赤外線スコープを使っていた。それならばオレがボディーマーを着ている事が分かるからあの状態ならば間違いなく確実に仕留められる額を狙ってくる。あとは殺気から撃つ瞬間を読んでガードし、殺気の発されていたポイントへと向けて反撃した」

僅かな刃を残して柄だけになった刀を名残惜しそうに見ながらのレンの説明に、その場にいた全員が顔を見合わせた。

「神業、という奴だな」

「そんなに大した事じゃない」

そう言うレンの足元で、転がっていたハンターの死体が僅かに動いた事に気付いた者はいなかった。

レオンは倉庫から飛び出すと、弾丸の飛んできた方向へと向けて全力で走った。

すでに薄暗くなっている空の下、視界に腕を押さえてうずくまっている人影を発見するとそれに近付き、銃口を突きつける。

「やっぱりお前か、”死神”ハンク！」

「知っている奴か？」

遅れてきたスミスも同じように銃口を向けながら、レオンに問い質した。

「こいつはアンブレラのA級エージェントだ！こいつのおかげで一体何度出し抜かれたか！」

「レオン・S・ケネディか……………CIAを出奔したという話は本当だったか」

「黙れ！貴様には聞きたい事が山程ある！」

レオンが余熱の残るデザートイーグルの銃口をハンクのこめかみに押し付ける。

が、ハンクはしばし無言を保ち、そして低い声で笑い始めた。

「何が可笑しい！？」

「これが何か分かるか？」

ハンクは手の中で握っていた、ランプの明滅しているスイッチを二人に見せた。

「戻った方がいいぞ。仲間が大事ならばな」

「貴様何を…」

その時、倉庫の方から銃声が響いた。

「なんだ！？」

思わずレオンとスミスがそちらの方を向いた瞬間、二人の間を何かが通り過ぎた。

その通り過ぎた物　ピンを抜かれたスタングレネードが地面を落ちると同時に眩いばかりの閃光が周囲を覆った。

「しまった！！」

「くそっ！！」

二人が目を閉じ、再び開いた時にはすでにハンクの姿は無かった。

「逃げられたか……………」

「戻ろう！何か起きてる！」

二人は今来た道を再び走り始めた。

最初にそれに気付いたのは誰かは判然としなかった。

だが、すぐに誰もが異常に気が付いた。

頭部を半ばから吹き飛ばれたハンターの死体が、ケイレンしたかと思うとゆっくりと起き上がった。

「何っ！？」

側にいたレンがとつさにサムライエッジを向けると立て続けにトリガーを引く。

4発目で弾切れを起こしスライドがストップするが、弾丸が撃ち込まれたにも関わらず起き上がったハンターの死体は何の反応も示さなかった。

そして、それとは別の胴体に大きな穴が開いているハンターや、体中に弾痕が刻まれているハンターが一体、また一体と起き上がっていた。

「まさかゾンビ化！？」

「いや、調整の施されたBOWはゾンビ化しないはずだ！」

「それじゃあ……」

「きゃああああー!!」

誰かの悲鳴が皆の思考を中断させる。

そこでは起き上がったハンターが仲間の死体に食らいついていた。

他のハンター達も起き上がらない死体に食らいつき、それを凄まじい勢いで食る。

貪っていく内に徐々にそのハンターの体は膨れ上がり、やがてそれを食い尽すと、今度はお互いに食らいついた。

「ひいっ!」

引きつった悲鳴が上がるが、多くの者は銃を向けるのも忘れ、ただその異様な光景を黙って見ているしか出来なかった。

そして、お互いに食らい付き合ったハンター達はいつしか一つのシルエットへと融合していく。

完全に一つとなったそれは、また違う固体同士に食らいつき、また融合していく。

「何事…」

倉庫に飛び込んできたレオンとスミスがその光景を目撃して絶句する。

「まさか、これはG ウイルス!?!」

「なんだって!?!」

「間違い無い!この急劇的な変化はG ウイルスだ!こいつら体内にG ウイルスを埋め込まれていたんだ!」

「あの野郎か!」



スミスが外を睨むが、G ウイルスの発動スイッチを押した人間はすでに逃亡している。

その時には、それは完全に一つになろうとしていた。

「う、撃てえ！」

クリスの号令と共に一斉に銃火がそれに集中する。

だが、全長5mは在ろうかという巨大な体へと変化していくそれに生半可な攻撃は通用せず、完全に一つとなったそれは大きな咆哮を上げた。

まるで昆虫のような複数の足の生えた細長い下半身に、元のハンターの物に近いぬめるような肌を持った上半身が生え、肩からは四本の巨腕と脇腹に無数の副腕の生えたその怪物は周囲を見回す。

一瞬にして巨腕の一つが振り回され、直撃を食らった一人が壁まで吹き飛ばされ、叩きつけられる。

「なっ……………」

その光景を見た者達が絶句し、恐怖の眼差しでその怪物を見上げた。

「怯むな！」

クリスが大声を上げながらMM1グレネードを乱射する。

しかし、その爆炎の中から伸びた巨腕がクリスを掴み上げた。

「兄さん！！！」

クレアの悲鳴が倉庫内に木霊する。

クリスは必死にもがくが、怪物の驚異的な握力から逃れる事は出

来なかった。

だが、突然怪物が絶叫を上げてクリスを放り出す。  
その目には、深々とコンバットナイフが突き刺さっていた。

「こつちだ！化け物！」

とつさに落ちていたコンバットナイフを投じたレンが、同じく落ちていた幅広のマチエトナイフを構え、挑発しながら怪物の脇を通り過ぎ、足の一本を斬り裂きながら外へと走り去る。

怪物が咆哮を上げつつその後を追って壁を破壊しながら外へと躍り出す。

「カッコつけるなよな！」

スミスが怪物の破壊した穴から怪物を追って飛び出し、STAR  
Sメンバー達が続々と後に続いた。

（どうすればいい？）

レンは走りながら考えた。

すぐ後ろを怪物が予想以上のスピードで追ってくるのが振り向かなくても感じ取れた。

右手に握っている藪などを切り払うのを前提とした全長30cm  
はある幅広のマチエトナイフは彼の腕を持ってすればそれなりの  
武器と成り得るが、相手の巨大さからすれば大したダメージも与え  
られないのは目に見えていた。

（せめて術が使えれば……………）

レンは対ショック用アンダースーツの下、ちょうど胸の中央に貼り付けられた術符を意識した。

その術符こそ、陰陽師であるはずの彼をただの剣士にしている封印の要だった。

渡米との引き換えの術の封印、それこそが陰陽寮が出した条件だった。

が、その事を悔いたのはほんの数瞬。  
即座に思考は状況分析へと移行する。

彼のすぐ側まで近付いた怪物の振り下ろした巨腕を冷静に避けつつ、通り過ぎざま手にしたマチェットナイフで腕を斬り裂く。

（どうすれば、勝てる？）

彼の思考に、敗北は含まれていなかった。

「どけっ！」

カルロスが倉庫の奥から引つ張り出してきたAT4ロケットランチャーを怪物の背中へと向けて発射した。

噴煙を上げながら飛んだロケット弾が怪物の背中へと命中し、その肉体を大きくえぐる。

「やったか!？」

「駄目だ!あの程度じゃ……………」

レオンの指摘通り、怪物はしばらくまいったかと思えば背中に新たに筋肉組織が盛り上がり、更に逞しい体へと変化した。

「うげっ……………」

「冗談きついで……………」

それを見た皆が絶句するが、気を取り直して思い思いに銃口を向けた。

「G ウイルスに感染した生命体は外的刺激や必要に応じて体組織が変化する！中途半端な攻撃は返ってあいつを成長させるだけだ！」

「それって不死身じゃねえか！」

カルロスが舌打ちしながらM4A1を構える。

「なんか弱点無いか！？火に弱いとか寒さに弱いとか足の小指が弱いとか！」

レオンに問いつつ、スミスがゾンビバスターに組み込まれたタクティカルライトで怪物を照らしながら連射する。

怪物の巨腕の有効範囲から離れた他のSTARSメンバー達も必死になって銃火を集中させるが、致命的なダメージを与えられていないのは見て取れた。

「明確な弱点なんて無い！有効的なのは跡形も無く吹っ飛ばす事だけだ！」

「出来るか、あんな化け物！空爆でもしなきゃ無理だ！」

「ちよつと待て……………」

空になったM4A1のマガジンを交換しようとしたカルロスがふと手を止めた。

「G ウイルスに効くワクチンか何かを撃ち込めば、何とかなるんじゃないのか？」

「残念だが、G ウイルスはサンプル自体少なくてCIAにすらワクチンは…」

そこで、レオンの視界に持てるだけの武器を持ってこちらに向かつてくるシェリーの姿が飛び込んできた。

「……在った……」

「どこに!？」

レオンは無言でシェリーを指差す。

「シェリーは五年前G ウイルスに感染して、ワクチンで一命を取り留めている。彼女の血にはワクチンが含まれているはず……」

「その話は本当か？」

いつの間にかこちらへと来ていたレンが問い返す。

その手に握られているマチェットナイフは怪物の返り血で真っ赤に染まっていた。

「どうりで妙に身体能力が高いと思ったらそいつの影響か……」

「それじゃあシェリーの血をどうにかしてあいつに撃ち込めば……」

「ちょっと待って!」

話を聞いたシェリーが慌てて訂正する。

「いくら私の血にワクチンが含まれていても、有効的に効かせるに全身に行き渡る量を注射するか、心臓に直接注射しないと駄目!」

「……………あいつの心臓って何処だ？」

「さあ、解剖でもしてみないと……………」

そこで一同の目がレンへと集中した。

「ヘイ、サムライ。あんたあれを開きに出来ないか？」

「出来ない事はないが、こいつでは無理だ。せめて刀が在れば……

……」

「ニホントウ？それなら在るぞ」

カルロスがシェリーの持ってきた物の中から一つの木箱を取り出してレンへと手渡した。

その箱の表面には何故か《DANGER!》だの《危険!》だのと書かれたステッカーと一緒に無数の御札が余す所無く張られていた。

「まさかこれは……………」

レンはその木箱の表面をマチェットナイフのグリップで叩き壊し、中から箱と同じように無数の御札が張られた一振りの日本刀を取り出した。

そして、鯉口に張られた御札を破りながらゆっくりと鞘から抜き放った。

そこには、月明かりを受けて艶かしく光る刀身が在った。

「間違い無い！こいつはオレが封印したはずの二代村正だ！なんでこいつがイギリスに？」

「ニホンの骨董武器商が送ってくれた武器の中にあっただが？」

「父さんか……………また勝手に……………」

レンは少し意気をくじかれながらも、村正を鞘に納めて腰へと差した。

「オレがなんとかあいつを解剖してみる。その間にワクチンの用意を！」

「任せて！」

シェリーが持ってきた物の中から何か適当な物を探し始める。

「じゃあオレ達はそれまでの時間稼ぎだな」

カルロスがシェリーの持ってきた武器の中からロケットランチャーを見つけ出し構える。

「確かに」

スミスが同じくシェリーが引きずるように持ってきた巨大なバレットM82A1アンチマテリアル（対装甲目標用）ライフルを軽々と左手で持ち上げて構えた。

「時間が経てば経つ程あいつは強力になっていく。猶予はあまり無いぞ」

レオンがデザートイーグルを構える。

「行くぞ！」

レンが怪物へと向けて走り出すと同時に全員が行動を開始した。

「食らいやがれ！」

スミスがM82A1を連射する。

戦闘ヘリや軽装甲車の破壊を目的として作られたの12・7ミリ弾が怪物の体を次々と穿った。

怪物がそれに気を取られてこちらを向いた時に、その顔面に50AE弾が、胴体にロケット弾が命中する。

「はああっ！」

レンが怪物の足の一本へと向けて抜刀する。

抜刀された刃は妖刀の代名詞に相応しいまでの切れ味で、レンの手にさしたる抵抗も感じさせず足の一本を斬り落とした。

怪物が大きな咆哮を周囲に轟かした。

「有った！」

シェリーは持ってきた物の中から麻酔弾を見つけ出すとどうにかいじってその中身を抜いた。

次に救急用の医療キットから麻酔用の注射器を取り出すと、自分の腕の静脈に刺し、慎重に採血する。

それを中身を空けた薬瓶に入れると、蓋を閉め、周囲を見回した。

採血された血液はそれだけではすぐに変質する上に血清としては使えない為、血液凝固防止剤を入れるか、遠心分離機に掛けなくてはならない。

シェリーは乗ってきた車が向こうで横転しているのを見つけるとそれに駆け寄り、タイヤに薬瓶を医療用テープで嚴重に貼り付ける。



車の中に入り込み、イグニッションを何度も作動させ、ようやくエンジンが掛かった所でギアを入れ、手で思いっきりアクセルを押し込んだ。

（早く……早く……早く……）

シェリーは焦りながらもアクセルを強く押し込む。

猛スピードで空回りを始めたタイヤの上で血液が振り回され、分離していく。

「そろそろ……」

シェリーはアクセルを離し、ブレーキを押し込むと車外に出てタイヤへと近寄った。

見事に分離した血液の入った薬瓶をタイヤから剥がすと、それを中身の抜いた麻醉弾に注ぎ込んで密閉した。

「出来た！」

「それを撃ち込めばいいのか？」

声のした方向にシェリーが振り向くと、そこにはクレアに肩を貸してもらっているクリスの姿が在った。

「はい、でも心臓に直接撃ち込まないと……」  
「いいだろう」

クリスはワクチン弾を受け取ると、それをクレアの持っていたM4A1にセットして構えた。

「レン！お願い！」

シェリーの声を聞いたレンが怪物の前方へと回り込む。

そこに無数の触手へと変化した副腕が襲い掛かるが、それを斬り裂きながら懐へと飛び込み、刃を突き刺した。

「はあああああ！」

気合と共に、刃を大きく上へと斬り上げる。

鮮血が吹き出し、傷口が大きく開くが、その中に心臓らしき物は見えなかった。

「やっぱり上か？」

レンが自分の身長のはるか上にある怪物の胸に当たる部分を見上げた。

その時、下を見た怪物と目が合った。

レンの姿を見つけた怪物は怒り狂いながら巨腕を下へと振り下ろす。

レンはそれを巧みに避けると、振るった刃で手首を半ばまで斬り裂き、横合いから襲ってきた別の巨腕をかわしながらその腕に刃を深々と突き刺した。

怪物が一際大きな咆哮を上げながら腕を振り上げる。

レンはそのまま柄を強く握り締め、腕と共に宙へと舞い上がった。

やがて振り回された腕が怪物の頭上へと来ると、足を架けて一気に刃を引き抜き、宙へと舞いながら大上段に構える。

それに気付いた怪物がレンを押し潰そうと両手を構えたが、その手の指が次々と吹き飛ばされた。

「させるかあつ！」

スミスがM82A1で指を正確に狙い撃ちした結果だった。  
怪物が絶叫の咆哮と共に怯む。  
その隙が好機となった。

「光背一刀流、《雷光斬》！」

レンが怪物の頭上から落下しながら一気に白刃を振り下ろす。  
刃は怪物の胴体を首元から一気に縦に斬り裂き、内圧で開いた傷口は膨大な血しぶきと共に内部の蠢く臓物を露にした。  
その中に定期的なリズムを刻む巨大な心臓を見つけたクリスがそれに狙いを定めた。

「終わりだ」

言葉と共に発射された弾丸が、怪物の心臓に小さな穴を穿つ。

「どうだ？」

地上に降り立ったレンが怪物を見上げた。  
怪物は数瞬動きを止めたように見えたが、すぐに動き始める。

「駄目か？」

レンが更なる攻撃を加えようとした時、怪物の腕の一つが根元から千切れた。

怪物が絶叫を上げながら別の腕を振るおうとするが、それは肘と肩の両方から千切れ、動こうとした足の幾つかも自重を支えられずに根元から千切れた。

「やったわ！G ウイルスの効果が消えて体を維持できなくなったのよ！」

シェリーが喝采を上げる。

そうしている間にも怪物の体の崩壊が進み、最後に一際大きな断末魔を残してその体は完全に崩れ去った。

「やったぞ！」

「キャッホー！」

皆が歓声を上げる。

レンは血を振り落としながら刀を鞘に納め、クリス達の側へと近寄った。

「やったな」

「いや、まだだ」

「え？」

レンの返答にシェリーが首を傾げる。

「オレ達のSTARS入隊の許可をまだもらっていない」

「そっぴやそうだったな」

こちらへと近付いてきていたスミスが今更ながらそれを思い出した。

「文句無し。全員合格だ」

クリスが右手を差し出し、レンはそれを強く握り返した。

「これからも頼む。仲間として」  
「こちらこそ」

「…………やるじゃないか」

上空衛星の映像から戦いの一部始終を見ていた男が低く呟いた。

「悠長な事を言っている場合じゃない。あのサムライがSTARSの一員ともなれば我々の大きな障害となるぞ。対処出来るのか？」  
「さてね」

側にいた男からの質問に、男は笑みを浮かべながら架けていたサングラスを持ち上げた。

#### 第四・五章『特訓！戦士への道！』

ネス湖湖畔の古びた倉庫、その地下に作られた施設の中で、無数の音が響いていた。

防音設備が完璧に整えられたその施設　S T A R Sの秘密射撃場に、種々様々な銃声が轟く。

50 A E弾の重い音、9パラの乾いた音、454カスールの砲声とも取れそうな爆音、それらがしばし響いていたが、やがて同じようなタイミングで銃声は止んだ。

レールに付けられたサークルターゲットが手前へと動き、それぞれの射撃技能を露にする。

「やるな、イーグル50 A Eでワンホール決められる奴がいるとは思わなかった」

「そちらこそ。カタナだけじゃないな」

射撃レンジの右端、レオンとレンがそれぞれのターゲットを見比べる。

レオンのそれは破壊力重視の50 A E弾の弾痕とは思えぬ程精巧で、間近で見ない限りは一発のみに見える程一点に集弾されていた。

その隣のレンのターゲットは、レオン程ではないが的確に中心部に集中し、直径2 c mの円にちょうど収まる形になって繋がっていた。

「20 mじゃこんな物だな。5 mならピンヘッド（釘の頭を的に命中させる高等射撃技能）いけるんだが」

「また腕上げたのか？よく両立できるなあ」

レンの隣、スミスのターゲットは命中率云々以前に、破壊力の有りすぎる454カスール弾に装甲破壊などに用いられる水銀炸裂弾頭という強力すぎる組み合わせでの中心部がキレイに吹き飛んでいた。

「……あまりそれをここで撃つなよ。射撃場その物が崩壊しかねん」

「そうか、一応次の銃も持ってきてたんだが……」

「それを屋内で撃つ気か？」

レンとレオンがスミスの背後に置かれた人の背丈程はあるバーレツトM82A1を冷めた目で見る。

このクラスともなると、その破壊力の凄まじさに撃たせてもらえる射撃場すら少ない代物を屋内に持ち込むスミスに、二人は無言で非難の視線を向ける。

彼らの背後、襲撃の報を聞いて今朝方フランスから戻ってきたばかりのジルが三者三様の射撃を見て微笑を浮かべた。

「ま、射撃に関してはあなた方は文句無しね。ここにくるまで射撃訓練すらした事無いって人もいるけど」

「たとえば、このようにか？」

スミスは自分の隣のターゲットを指差す。

そこには、他の三つとは明らかに違う弾痕の刻まれたターゲットが有った。

「え」と

「……ひどいな」

「確かに」

「ある意味天才的だぞ、ここまで当たらないのは」

スミスの隣で撃っていたシェリーのターゲットは、文字通りただ紙に当たっているだけで、集弾はおろか、弾痕は完全にバラバラで中心部には一発も当たっていなかった。

他の三つに比べてあまりにひどすぎる腕前に、撃ったシェリー自身も二の句が告げられないでいた。

「格闘訓練はともかく、射撃訓練はしてなかったのか？」

「その、何度かやったんだけど、致命的にセンスが無いからやめろって言われて……」

「ちよつと手を見せてみる」

乾いた笑いを浮かべるシェリーの手を、レンがしげしげと見つめ、指先や腹を少しつついてみる。

「なるほどな、これじゃあ当たりにくいだろう」

「確かにね」

「何が？」

「こつこつ事」

ジルが自分の手をシェリーの手に重ねる。

手のサイズは明らかに一回り違うが、それ以上にシェリーの指はジルより短かった。

「指が短いんだよ、しかしそれで握力はやけに強いから、グリップの握りが安定しない。もっと小さい口径の銃なら大丈夫だろうが、38や22じゃあいつら相手に豆ぶつけてるようなもんだ」

「かといって、また素手で戦わせるつもりか？それじゃ危険過ぎる」

「無理に戦わせる必要もないんじゃないか？適材適所って言っし」



「イヤ！私も戦う！！」  
「でもね……………」

頑として戦闘参加の意思を示すシェリーに、その場にいる全員が顔を見合わせる。

しばし悩んだ後、レンが口を開いた。

「確か、午後から格闘訓練だったな？」

「そうだけど？」

「その時にちよつと確かめてみたい事がある。全てはその後だ」

「何させるつもりだか……………」

そして午後

倉庫の中央、荷物が片付けられた空間に、STARSのメンバー達が円を描くように集まっていた。

格闘訓練とは銘打たれているが、実質は弾丸が切れた時や銃を無くした時のための訓練で、全員が手に弾の入ってない銃や刃引きしたナイフを持っている。

「…………一人得してる人いませんか？」

「だよなあ……………」

「そう見えるわね」

全員の視線が、一人木刀 正確には中に鉄心を仕込んで真剣と同じ重さにしてある木太刀きたちと呼ばれる物を手にしているレンに集中していた。

「大丈夫だ、ちゃんとハンデは付ける」

レンはそう言うと言ったはずだ。さあ、どこからでも何人がかりでも構って目隠しにした。

「……………おい」

「ハンデだと言ったはずだ。さあ、どこからでも何人がかりでも構わん」

人垣の円から外れ、レンは円の中央へと進み出て悠然と構える。プロテクターも付けず、あまりの大胆すぎる行動に、誰もがどうするべきかためらうが、やがて手に大ぶりのコンバットナイフを持った男が進み出る。

「本当にいいのか？怪我してもしらないぜ？」

「構わん。奇襲でもなんでも好きなようにしてくれ」

「それ、じゃ！」

男はレンへと向けて突撃をかけるが、寸前で横へと跳び、レンの木太刀を持ってない左の死角からナイフを突き出した。

「チエック……………！？」

男のナイフがレンの首筋に届く前に、突如として出現した木太刀が、男の咽喉の一寸手前に突きつけられていた。

「い、いつ？」

「次！」

振り向きもしないまま木太刀を降ろしたレンが、呆然としている男を尻目に声を上げる。

「へえ……」  
「面白いわね」

木製の銃剣を付けたM4A1を手にしたカルロスと、小ぶりだが鋭いダガーナイフを手にしたジルがそれぞれレンへと相対する。

「じゃあ、こういうのは!？」

カルロスとジルの二人が、横に並んだまま同時に走り出す。  
レンはその場を動かず、一気に手前まで間合いを詰めた二人は同時に自分の得物を突き出した。

しかし、レンは無造作に前へと一歩進み、木製の刃とダガーの刃は微かにレンの衣服をかすめてそのまま目標を失って突き抜けた。

「馬鹿な!？」

「え!？」

「あれをかわした!」

「ウソ!？」

必殺の攻撃がいとも無造作にかわされた事に見ていた全員が度肝を抜かれる。

繰り出した二人も信じられないと言った顔のままレンの横を通り抜け、素早く振り返った。

「草攻剣(そうこうけん)新撰組が使った集団戦法の一つ、二人の同時攻撃を多重に繰り出す物)か、だが最低でも二段構えで使った方がいい」

「サムライ、ホントは見えてるだろ？」

「いや」

「じゃあ、これで！」

カルロスが無造作にM4A1をレンへと向かって投げ付ける。後頭部へと向かって飛んでくるそれをレンは振り返ると同時に木太刀で叩き落す。かに見えた瞬間、木太刀は絡みつくような動きでM4A1を受け止め絡み取り、完全にベクトルを変化させられてそのまま真下、隙と見て突撃していたジルの目前へと落とされる。

「うっ！」

思わずジルの動きが鈍った隙を逃さず、レンの左手がジルの手首を掴む。

そのままレンはジルの手首を引きつつ、それを微妙に捻る。

するとジルの体が突如として反転し、背中から床へと叩き付けられた。

「え？」

「一本だな」

何が起きたか理解出来ないジルの首筋に木太刀を突きつけたレンは、突然その場にしゃがみ込み、レンの髪を風圧で揺らめかせながら先程までレンの頭部があった場所をカルロスの蹴りが通り過ぎていく。

「アイキドー、って奴か。初めて見たぜ」

「正式には光背流拳闘術だ。現在の継承者が随分と余計な技混ぜてたが」

「じゃあ、こいつはどうだ！」

カルロスの足が旋回し、強力な回し蹴りがレンのボディを狙う。

レンはバックステップでそれをかわすが、立て続けに放たれたカルロスの回し蹴りが上段、中段、下段とランダムに変化し、かすめた上段蹴りがレンの目隠しを弾き飛ばした。

「やるな」

「まあな！」

駄目押しとばかりに再度レンの頭部を目掛けてカルロスは上段回し蹴りを放つが、レンはその場に留まると無造作に片手を上げ、それを受け止めた。

「これくらいの威力なら、致命傷には遠いな」

「だからって、素手で止めるなよ……………」

カウンターで突き出された木太刀の切っ先が心臓の真上で停止してるのを見たカルロスが、呆れたように首を横に振りながら上げた足を下ろす。

「っ…」

「隙あり！」

「おらぁ！」

「ふんっ！」

レンが二の句を告げるより早く、今度は三人が円から飛び出し、レンの背後から一斉に襲い掛かる。

レンは振り返りつつ、左手を丸めて作った”鞘”に木太刀を納め、そして”拔刀”した。

交差は一瞬。

そして、後には手から得物を弾き飛ばされた三人と、木太刀を振るって帯に指すレン、そして床へと落下する三種の得物だけが残っ

た。

「こんな物か」

「す、すげえ!!」

「六人抜きなんて、クリス以来だぞ!？」

「やるな、サムライ!」

見ていたメンバー全員が、口々にレンに喝采を送る。

レンはそれを気にも止めず、シェリーへと視線を向けた。

「シェリー」

「は、はい!」

「同じ人数、抜いてみる」

「え?」

「実戦参加の最低条件だ」

「……やります!」

「オイオイ、いいのかレン?」

やる気満々のシェリーが練習用のプロテクターを付けつつ進み出るのを見たスミスがレンを咎めるような視線を送るが、レンはギャラリーの円まで戻ると、シェリーの方へと向き直ってあぐらをかいて座り込む。

「おいおい、誰が相手するんだ?」

「さすがに、あの子相手じゃ」

「じゃ、私が」

さすがに相手するのをためらうメンバーの中から、プロテクターを付けながらクレアが前へと進み出る。

「試させてもらっわよ」

「OK、クレア」

両手にトンファーを構えたクレアに、シェリーは両手高く持ち上げるマーシャルアーツの構えを取る。

「レディ、ゴー！」

「はあっ！」

レンの号令と共に、クレアが突撃して右のトンファーを旋回させて上から振り下ろす。

「なんの！」

クレアの腕を弾いてその攻撃を外させたシェリーは、お返しとばかりに右の上段蹴りを繰り出すが、クレアは左のトンファーでそれをあっさりと受け止める。

「まだまだ！」

左右の素早いコンビネーションパンチは、前で合わせられたトンファーに防がれ、たいしたダメージは与えられない。

「そこっ！」

「あっっ！」

反撃に転じたクレアのトンファーがシェリーの脇腹に直撃する。

「ギプアップ？」

「まだあ！」

プロテクターの上からだったため、ダメージは左程ではないが、レンの圧倒的な闘い方とは比べるべくも無い自分の戦い方に焦りを感じつつ、シェリーが低い姿勢でタックルをしかける。

「そんなんじゃ…！？」

クレアの足が跳ね上がってシェリーの体を強引に上げようとしたが、シェリーはその足を強引に抱きかかえる。

「せえの！」

「え？」

クレアの片足をシェリーは強引過ぎる力技で持ち上げ、そのままバックドロップの容量でぶん投げる。

クレアの口が疑問符を告げる形で固まったまま、その体は宙を舞って床へと叩き付けられる

「！大丈夫クレア！？」

「あいたたた………」

やり過ぎたかもしれない事に気付いたシェリーが慌ててクレアに向き直るが、クレアはプロテクターごしとはいえ直撃した頭を振るつつ体を起こす。

「強くなったのね、負けたわ」

「まず一人か」

レンの一言に、クレアが少し顔をしかめるが、シェリーは即座に構えた。



「次！」

「ようし、じゃあオレが」

スミスが肩を回しつつ前へと進む。

「お手柔らかに頼むぜ」

「真剣勝負！」

シェリーが間合いを詰めて鋭いローキックをスミスの足に叩き込む。

「つつ！」

「まだまだ！」

続けて反対にもシェリーはローキックを叩き込むが、スミスは強引に前へと進み出て力任せのショートラリアットをシェリーの腹に入れる。

「つつ！」

予想以上の怪力に、シェリーの体が吹き飛ばされるが、距離が短すぎたために威力はほとんど無く、体勢は何とか保つ。

「隙あり」

「あっ！？」

体勢を立て直した僅かな間に距離を詰めたスミスが、シェリーの肩と腕を掴むと、その場で力任せに回し始める。

「オラッ！……あつやば……」

そのまま回転を付けて上へと放り投げた所で、スミスが力加減を間違えた事に気付いて慌てて上を見る。

「キャッ！」

「なんだあの技！」

「大雪山おろしか……いつの間に」

「シェリー！」

天井近くまで投げられたシェリーの体が、重力に従って落下を始める。

「ちょ、こつちか！？」

さすがにやりすぎたと思った慌ててスミスが下で受け止めようとするが、その時シェリーの動きが変化している事に気付いた。

「あれ？」

「フンッ！」

「ぶごっ！？」

お返しとばかりに、落下の勢いを載せたシェリーのかかと落としがスミスの顔面に突き刺さる。

「ふごげも……」

意味不明の声を漏らして鼻血を噴き出しつつ、スミスがその場に倒れる。

「これで二人。次」

鼻血を流したまま目を回してるスミスが部屋の隅へと運ばれていくのを見もせず、シェリーは身構えた。

20分後

「はあっ！」

「おぐっ!？」

懷に飛び込んだのシェリーのジャンピングアッパーが、相手を高く突き上げる。

「モロに決まったぞ……………」

「ケビン、生きてるか？」

「これで五人」

「あと、一人……………」

額から大量の汗を滴らせ、肩で大きく息をしながらシェリーが多少よろけながらも再び構える。

「おい、もういいんじゃないか……………」

「未熟な技しか持たない人間を戦わせれば、当人のみだけでなく、共に闘う者にも危険をもたらす。戦力の妥協をするつもりは無い」  
「……………そうかよ」

さすがに見かねたスミス（鼻に大きなバンソウコ付き）の言葉を、レンはきっぱりと否定する。

「で、最後は誰が出る？」

「オレがやろう」

「レオン……」

今まで黙って見ていたレオンが一步前へと出る。

「レオン、プロテクターを」

「いない」

クレアが渡そうとしたプロテクターをレオンは拒絶すると、シェリーへと相對する。

「レオン……」

「来い、シェリー」

「……うん！」

大きく息を一つ吸い込むと、シェリーは一気にレオンへの距離を詰める。

その場から避けようとしないうレオンの胸に、シェリーのミドルキックが炸裂した。

「！？」

「確かにトレーニングは大分積んでいるな」

何時のまにか、肘から曲げて軽く握った拳を肩の高さまで大きく広げる構えを取ったレオンは、まともに食らった蹴りに微動だにせず、驚いているシェリーにレオンは冷徹な視線を向ける。

「だけど、この程度じゃBOWは殺せない」

「！かはっ……」

隙を見せたシェリーのボディに、レオンの下突きが突き刺さる。  
シェリーの体が、そのまま数m程後ろへと吹っ飛び、倒れた。

「ちょ……………」

「い、幾らなんでもやりすぎだろ!？」

「シェリー!」

「来ないで!」

レオンの手加減がまったく感じられない攻撃に皆がどよめき、慌てて駆け寄ろうとするクレアを制して、シェリーは自力で立ち上がる。

「実戦空手か、やりこんでいるな」

「必要に応じてって奴だ。かなりオリジナルが混じっている」

「オイ! 怪我でもさせたかどうかするつもりだ!？」

「実戦では役に立たない、それだけだ」

レオンの言葉に、全員が唾を飲み込む。

「はっ、はあ、はあ……………」

多少呼吸困難に陥りながらも、シェリーがなんとか構え直す。

その様を見ていたレオンは、指先をやや曲げた右手を垂直に立て、軽く握りこんだ左手を腰に引く空手の構えを取った。

「行くぞシェリー!」

レオンが叫びつつ一気に間合いを詰めると、強力な正拳突きをシェリーのみぞおち目掛けて繰り出す。

「つつ……！」

シェリーは胸の前で両手をクロスさせてそれを防ぐが、予想以上の威力に両腕に電流のような衝撃が走る。

しかし、そこに続けての横蹴りが突き刺さり、シェリーの体が後ろへと吹き飛ぶ。

「くっ！」

踏ん張ってなんとか転倒を避けたシェリーに、レオンは休まず襲い掛かる。

「はっ！」

指先をやや曲げる正式の空手チョップが、シェリーの肩に叩き付けられる。

「つつつ……！」

激痛にややたじろぎながらも、シェリーはレオンの腕を掴み、そこから捻りを加えて相手の体ごと旋回させてレオンの体を投げる。

しかし、投げられる瞬間に脱力して力を分散させたレオンは、床へと軟着陸すると即座に体勢を立て直し、逆にシェリーの腕を掴むと肩越しに背負って豪快に投げ飛ばした。

「イツポンゼオイ!?」

「いや、実戦流の谷落とした。中身はおんなじだな」

「シェリー、大丈夫!?」

「う………」

背中からモロに叩き付けられたシェリーが、よろよろと立ち上がる。

その足元はおぼつかなく、周囲の人間もさすがに制止を囁き始めるが、シェリーは再度構えた。

「レン、止めさせるよ……どう見たって勝ち目無さそうだぞ」

「中途半端に止めさせたらケジメがつかない。勝つか、負けるか、ハッキリさせておいた方がいい」

「けどよ……」

「他人に決められる勝敗なんて実戦には無い。勝って生きるか、負けて死ぬかだ。その覚悟が無ければ、彼女を認める訳にはいかない」

「その通りだ」

スミスとレンの会話を聞いていたレオンが、レンの言葉を肯定する。

「シェリー、オレはこの五年数え切れなくなる程のBOWと戦い続けてきた。その経験が言っているんだ、その程度じゃ闘えないと」

「まだ、負けてない……」

「じゃあ、これで最後だ！」

トドメとばかりに、レオンの体が旋回する。

体の旋回の勢いを乗せて放つ、フルコンタクト（直接打撃）系空手の必殺技、胴回し蹴りが戦斧がごとき勢いでシェリーの肩口を狙う。

「う、わあああああ！！」

ダウン、確實の攻撃が当たる前に、シェリーが強引へと前へと出る。

ポイントはずれたが、それでもレオンの膝近くが肩に命中する中、シェリーの両腕がレオンの体を羽交い絞めにする。

「わああああああ！！！」

「ちよつと！？」

「こつち来た〜！」

何を考えているのか、シェリーはレオンの体を捕まえたまま前進を続け、その軌道上にいる者達は慌てて左右へと避ける。

「ああああ！！！」

「何を……ぐっ！！！」

そのまま、シェリーはレオンの体を壁へと叩きつける。

「この程度じゃ……！！？」

予想外の攻撃にダメージを食らいつつ、レオンがシェリーに肘を叩きつけようとした瞬間、レオンの動きが止まった。

「……………レオン？」

クレアが声をかけるが、レオンは微動だにしない。

シェリーが手を放して離れると、レオンの体がゆっくりと崩れ落ちる。

「な、レオンが負けた！？」

「あの不死身の男が！？」



何が起きたか分からずも、シェリーが勝った事だけは分かったS  
TARSメンバーがどよめく中、レンだけが呆れた顔でシェリーを  
見ていた。

「おい、彼女何やったんだ？」

「イカサマだな、一番有効的な……………」

レンが呆れた顔のままシェリーへと近寄ると、その頭に手を置く。

「…………どこで覚えた？」

「隣に住んでいたレイン少尉に、しつこい男を黙らせる一番いい手  
だつて……………」

「まあ、BOWはまず狙つてこないし、大抵の格闘技じゃ禁じ手だ  
からな」

「何がだ？」

「金的蹴りだ」

『え……………』

レンの一言に、全員の視線が倒れて動かないレオンに集中する。

「だ、大丈夫か!？」

「誰か氷嚢持つてこい!」

「ベッドに運べ!早く!」

男性陣が中心となって慌ててレオンの手当てに入る中、レンはシ  
エリーの足がまだおぼつかない状態なのを確認すると、小さくため  
息を吐いた。

「その状態ならまず大事にはなっていないだろう」

「あの、それで……………」

「多少イカサマはあったが、それも実戦の手の一つだ。ギリギリ合格といった所だ」

「あ、ありがとうございます！」

緊張した顔から一気に破顔しつつ、シェリーがレンに頭を下げる。

そんなシェリーに一瞥をくれると、レンは何事が話し合っているジルとクレアの元へと向かう。

「あ、サムライいい所に」

「今の闘い方、どう思う？」

「まだまだだな。だが、まったく見込みが無い訳じゃない」

「そりゃ、あんた程戦える人間なんて滅多にいないでしょうけど…

…」

「悪いが、あいつをしばらくオレに預けてくれ。もう少し使えるようにしておく」

「……………出来るの？」

「そう簡単に死なないくらいにはしておくさ。次が来る前にな」

「お願い！」

クレアがレンに深々と頭を下げる。

「さて、間に合えばいいんだがな……………」

## 第五章 『反撃！アンブレラ秘密研究所急襲捜査！』

「どうかしましたか？」

「あ、いや……………」

移動のヘリの中で、同乗している者達を不信の目で見ていたパリ市警のフィリップ警部は、通訳をしている金髪の少女に話し掛けられて口籠もった。

（本当にこいつらは警官なのか？）

口に出さず何度も思った事を警部は再度自問する。

アメリカから製薬会社アンブレラの違法実験の調査に来たというSTARSという特殊部隊だと言っていたが、それにしては彼らの装備は余りにも重装過ぎる。

ショットガンやサブマシンガン位ならば警察のSWATならば使っている装備だと納得出来る。

だが、今日の前にいる彼らはそれだけでなくアサルトライフルやグレネードランチャー、果てはロケットランチャーやアンチマテリアルライフルといった戦争用としか思えない物まで持っている者まだった。

「本当に武装許可を得ているのかね？」

「何度もFBIに確認してもらっているはずですが？」

通訳をしているこの少女にしても、手足に異常にこついプロテクターを装着している。

しかも彼女はどう見ても警官というには若過ぎる気がしてならなかった。

（オマケに……………）

警部はこの機内で一番違和感の有る人物に目を向けた。

一番端に座っているその人物は黒いキモノを着込み、腰に刀を差して、目を閉じてピクリとも動こうとしない。

耳に付けている通信用のインカムや腰のガンベルトに吊るされた無数のマガジン、そして履いているコンバットブーツを除けばそれは警部が昔見た二ホンの有名な映画監督の作品に出てくるサムライその物だった。

「…………… 妙だな……………」

微かに目を開け、見えてきた海上の建物に向けた彼の日本語の呟きが理解出来たのは極僅かだった。

五日前、イギリスSTARS本拠地

「フランス？」

「そうだ」

昨日帰ってきたばかりのバリーの言葉に、愛銃を整備していたスミスの手が止まった。

「この間の連中がそこから来たってのか？」

ここ数日でスミスとすっかり意気投合したカルロスが問い返す。

「間違いない。フランスのビスケー湾沖にアンブレラの研究所が有

る。表向きは海洋生命体の研究所になってるが、明らかにそれだけでは必要無い程大量の研究資材が搬送されている。間違いなくここはBOWの生産工場だ」

「じゃあそこを調査すれば……………」

「ああ、アンブレラの違法実験の一部が解明される。すでにフランス警視庁には話を付けている最中だ」

「早くしないと証拠を消される可能性が在るな……………」

レオンが苦い表情で呟いた。

一週間前のハンター達の奇襲により、STARSは死者3名、重傷者5名を出し、大幅に戦力はダウンしていた。

「特にクリスが入院したのが痛いな」

「全身打撲だけだから半月もすれば退院出来るらしいが、どっちにしろ戦力不足は否めないな……………」

その場にいる者達に重い沈黙が降りる。

「そういえば、新入りは四人だと聞いたが、あとの二人は？」

「レンとシェリーだったら裏で特訓中だぞ」

「特訓？」

「はあっ！」

シェリーの放ったハイキックが、レンの手にした鉄パイプにあっさりを受け止められた。

諦めずシェリーはコンビネーションパンチのラッシュを放つが、その全てが鉄パイプに虚しく弾かれ、最後の一発で腕を絡め取られて大きく体勢を崩す。

がら空きになった背中に、柄当ての要領でレンが鉄パイプの根元

を叩き込み、シェリーは地面へと倒れ込んだ。

「手数に頼るな、実戦でポイントを取ってくれる審判はいない。コンビネーションはあくまで有効打に繋ぐ為の物だ」

「はい！」

「これで30戦30敗目……」

クレアのカウントにもめげず、息を切らせながらシェリーは大きな声で返答しながら立ち上がる。

「もう一度御願います！」

「いいだろう」

息が切れる所か、汗一滴かいていないレンが正眼に鉄パイプを構え、シェリーも両手を高く上げるマーシャルアーツ独自の構えを取った。

レンの斬撃を用心してやや背を低めに構えたシェリーに向けて、レンは突然鉄パイプを投げつける。

「えっ！？」

慌ててその鉄パイプをシェリーが叩き落した時には、間合いを詰めたレンがシェリーの片腕を掴んでいた。

「甘い」

次の瞬間にはシェリーの視界が反転し、背中からしたたかに地面に叩き付けられた。

「見た目だけで相手の攻撃方法を判断するな。意外な攻撃をしてく

る事もある」

「はい……………」

レンに投げられた上に首筋に手刀を突き付けられているシェリーが啞然としながら返答するが、即座に起き上がって再び構えた。

「31戦31敗……………」

「もう一度!」

「来い」

レンも鉄パイプを拾って今度は切っ先を下に向ける八双の型に構える。

「やってるな」

「実力差があり過ぎるけど……………」

倉庫の裏手に回ってきたバリーに、側で特訓の様子を見ていたクレアが呆れた様に言った。

シェリーの攻撃はバリーの目から見ても中々の物だったが、レンは何とその場から一步も動かずにその全てを受け止め、受け流していた。

「彼らがこの間入った新入りか」

「格闘少女の方が前言ったシェリーで、マーシャルアーツも出来るけど、それ以上に頭の方が使えるみたい。私達が集めたBOW及びアンブレラの全データを一回通して見ただけで丸暗記したわ。サムライの方がレン。本人はオンミョウジだと言ってるけど、この間の奇襲でハンター10匹以上を一人で倒してるの。格闘訓練でも平然と六人抜き、もう強いなんてレベルじゃないわね」

クレアが説明している間にもシェリーの右ハイキックが上へと跳ね上げられ、隙のできた左の太股にレンの横薙ぎの一撃がキレイに入った。

「いったあーっい！」

シェリーが悲鳴を上げながら打たれた太股を抱えて地面を転げ回る。

「実戦では痛みを必要以外は無視しろ、隙が出来る。あと幾らパワーが有ってもウェイトが無い限りは一撃必殺性は少ないから攻撃の確実性を重視しろ」

「はひ……………」

涙目で太股に息を吹き掛けながらシェリーが答える。

「だがウェイトが軽くても掛け具合によってはこういう芸当が出来る」

レンが倉庫裏に置いてあったドラム缶の側に近寄り、鉄パイプの先端をそれにくっ付けた。

「よく見ておけ」

レンは息を大きく吸い込むと、気合と共に一気に鉄パイプを突き出した。

鈍い音と同時に、鉄パイプの先端が15cm程ドラム缶に突き刺さる。

それを見た全員が驚きの表情を浮かべた。



「光背一刀流《光破断》（こうはだん）。日本武術では寸打、中国拳法では発勁と呼ばれる技と同じだ。踏み込みと同時に全身の筋力を集中すればこういった芸当が可能になる。格闘技の方が威力は大きいはずだ」

「頑張ってみます……………」

それだけ言って絶句しているシェリーを見ながら、レンは倉庫の中へと入ろうとする。

「随分と厳しいな」

「彼女はこれから必要になってくる人材だ。つまらん事で死なす訳にはいかない」

バリーにそう言いながら、レンは倉庫の中へと姿を消した。

「…………… 妙だな……………」

「どうかしたか？」

隣に座っていたスミスが何気にレンの視線を追って見えてきた海上研究所の方を見た。

「瘴気が漂っている」

「シヨウキ？」

レンとの付き合いいとレンの妹との文通で多少日本語が理解出来るスミスが聞き慣れない単語に首を傾げる。

「この感じ…………… 似ている…………… 五年前と」

「何!？」

「ヘリポートに誰がいるぞ!」

スミスの声と操縦桿を握っていたカルロスの声が同時に機内に響く。

「何かあったのか?動きがおかしいぞ」

何気に持参した双眼鏡を覗いた警部の顔が凍りつく。  
そこには、明らかに腐敗し崩れかかっている顔が映っていた。

「な、何だあれは!？」

「ゾンビがいるぞ!」

「まさかバイオハザード!?ここでも!？」

人影の正体に気づいた機内が騒然となる。

「どうする!?!着陸するか!？」

「今回の捜査はあくまでアンブレラの人体実験の証拠を掴むのが目的だ!危険だがやるしかない!」

バリーの声に、英語を理解出来ないパリ市警の面々を除いた全員の表情が真剣な物に変わる。

「取り合えずあいつを何とかしないと……………」

「オレがやる」

ヘリポートにいたゾンビへと向けてデザートイーグルを構えたレオンを押し退け、レンがヘリのハッチを開けるとそこから飛び降りた。

「はああああっ！」

5 m位の高度から一気に間合いを詰めつつ、レンは降下の勢いを乗せて抜刀、着地の瞬間と同時にゾンビは脳天から唐竹に両断されていた。

レンが刀を納めようとした時、物陰から別のゾンビが一体、また一体と出て来た。

「まだいるのか！」

レンが納めかけた刀を再び構える。

ふと、こちらに向かってくるゾンビ達の姿に、小雨の降る薄暗い街並みが一瞬レンの目に重なって見えた。

「五年前とは違う」

そう呟いてレンは表情を引き締め、駆け出した。

一番手前にいたゾンビの首を一撃で真横に両断しながらその横を走り去る。

斜め前方にいたゾンビへと向けて斜めに跳ぶ光背一刀流独自のフットワークで間合いを詰め、そこにいたゾンビの鼻に刃を突き刺し、そのまま真上へと斬り上げる。

ゆっくりとゾンビが倒れていくのを見向きもせず、懷からサムライエッジを抜くと一番遠い場所にいるゾンビの額に正確にポイント、連続してトリガーを引く。

連続して発射されたホットロード（増量炸薬薬莖）の9ミリ強化弾がゾンビの額に複数の弾痕を穿ち、後頭部から脳髓を撒き散らす。

その時にはレンはすでに先程斬ったゾンビの影に重なって迫って

いたゾンビを頭部から唐竹に斬り裂いていた。

そして、最後の一体となったゾンビが足早にレンへと近寄るが、レンのその倍の速度で近寄ると、下段からゾンビの胴体を斜めに斬り裂き、通り過ぎ様真横からゾンビの頭部にトドメの弾丸を撃ち込んだ。

レンが刀を鞘に納める音と、その背後で最後のゾンビが倒れる音は同時だった。

障害の無くなったヘリポートにゆっくりと2台のヘリが着陸する。

「なかなか出来るじゃ……」

声を掛けながらバリーが降りようとした所を、脇から警部が飛び降りてレンに近寄ると早口で何かをまくし立てる。

「……………何て言ってるんだ？」

「負傷者をいきなり斬り殺すなんて何を考えているんだ、だって」

目的地在フランスだと分かった時点で通信講座を使って三日でフランス語をマスターしたシェリーが通訳する。

「あんたの目にはこれが生きている人間に見えるのか？」

レンの言葉をシェリーが忠実に通訳する。

「じゃあ何か？これが本物のゾンビだとも言うのか？だって」

「これがアンブレラの実験している生物兵器の影響なんです」

片言だがフランス語が話せるレベッカが説明するが、警部は容易には信用しなかった。

その時、ヘリポートの周囲を調べていたパリ市警の警官の一人が声を挙げた。

「おい、大丈夫か！」

フランス語の為理解出来た人間は少なかったが、その声を聞いたほぼ全員がそちらを向いた。

そこには、その警官に近付こうとしている一体のゾンビの姿があった。

「おい、治療の準備……」

「馬鹿！離れろ！」

慌てたレンが思わず日本語で叫びながらサムライエッジを向けるが、ちょうど警官の影になって狙いを定める事が出来なかった。

「な！おい、なにを！」

警官が肩を掴まれ、首筋に噛み付かれる瞬間、三つの銃声が轟き、同じ数の銃弾がゾンビの頭部、肩部、胸部を吹き飛ばした。

「これで分かっただろう」

バリーが構えていたS & W M 6 2 9 C マグナムを降ろす。

「こいつらがオレ達の敵だ」

レオンがデザートイーグルをホルスターに戻す。

「ヘビーな事になりそうだな」

スミスがゾンビバスターを手にしたまま口笛など吹いておどける。

「ほ、本庁に連絡！対テロ部隊を呼べ！」  
「り、了解！」

ようやく事態が飲み込めてきたらしいパリ市警の面々が慌てふためく。

「何だって？」

「対テロ部隊を呼ぶって」

「止めておいた方がいい。被害が増えるだけだ」

シェリーとレベツカが持ってきたデータを見せてBOWについて説明するが、警部は応援を呼ぶの一点張りだった。

「一応データを渡しておけ。もっとも役に立つかどうかは分からない」

バリーがそちらを見ながらSTARS全員を集合させる。

「今回の目的はアンブレラの違法実験の証拠を掴む事だ！作戦通り4チームに分かれてAからCは分散してデータの収集、Dはこの場を確保！パリ市警の方々もそうしてもらおう！見ての通りバイオハザードが発生しているから十分に気を付けろ！」

『了解！！』

STARS全員の復唱が重なる。

「最後に一つ！絶対に生還する事、以上だ。作戦開始！」

三人一組となったチームがそれぞれ別々の出入り口から研究所内部へと進入していった。

『こちらAチーム、レオン。研究所内部に進入成功。作戦通り研究室を目指す』

『こちらBチーム、ジル。進入と同時にゾンビ3体と遭遇！交戦に入る！』

『こちらCチーム、レン。予定していた整備用出入り口は鍵が架かっている。鍵を破壊して内部に侵入する』

交信のすぐ後に複数の銃声が響く。

「これでOKと」

スミスが銃声の内の一つの発信源であるバーレットM82A1を背中へと背負い直す。

軽装甲破壊用の12・7ミリ弾が分厚いドアのノブを一撃で風穴に変えていた。

「鍵がいらねえな、こいつは」

「場所によるぞ。下手な所じゃ出来ないからな」

歓心しているカルロスを尻目に、レンは風穴から中に敵影が無い事を確認してから用心深くドアを開けた。

「こちらCチーム、進入に成功。敵影は無し、予定通り動力室へ向かう」

先頭を村正を腰に服の下にショルダーホルスターにサムライエッジを装備しているレン、次にアタッチメントにM203グレネードランチャーを付けたM4A1アサルトライフルを持って背中にAT4ロケットランチャーを幾つか吊るし、サスペンダーに無数の手榴弾を付けているカルロス、殿しんがりにスライドポンプにフォアグリップの付いた独特の形状をしたマーベリックM88ブルパップショットガンを手に、腰のホルスターにゾンビバスター、背中にM82A1を背負うというまるでB級アクション映画のコマンドー並の重武装をしたスミスが着いた。

「にしても、何でこのチームだけ男ばっかなんだ？」  
「戦力の均等分布だろ」

歩きながらのカルロスのボヤキにレンが冷静に反論する。

「どうせなら戦意向上の為に女性を均等分布してほしいぜ。ジルとかクレアとか……………」

「シェリーじゃ駄目か？」

「20歳未満はオレの守備範囲外だ」

「そうか？オレは年下の方が好みだが」

「ほほう、家の妹の16の誕生日に指輪なぞプレゼントして我が家で大混乱に陥れたのはどのどいつだ？」

「いや、あれは別に他意は無かったんだが……………」

「オレが止めなきゃ父さんがありったけの武器持ってお前を殺しに行くところだったぞ」

『Cチーム、私語が多いぞ』

指揮を取っているバリーの通告に、カルロスが首をすくめた。



「はいはい、真面目にやります………って来やがった！」

ちょうど通路が分岐している地点で、複数のゾンビが立っているのが目に入った。

「こっちはオレがやる！そっちの方は頼む！」

「おうよ！」

「任せろ！」

レンが走り出すのと同時に、カルロスとスミスが手持ちの銃のセーフティを外す。

「Cチーム、通路分岐点にてゾンビと遭遇！正確な個体数は不明、これより交戦する！」

通信の終わりと同時に、レンの気合と二つの銃声が通路に響く。繰り出された刃は生ける屍を斬り裂き、吐き出された弾丸は屍を肉塊へと変えた。

「交戦終了、死体は服装から整備員か何かと思われる」

『IDカードか何かを持っているかもしれん。一応探して見てくれ』

「これを？」

スミスが頭部が吹き飛んだゾンビの死体をさも嫌そうに指差す。

「仕方ねえだろ」

カルロスがM4A1のバレルを使って直接触らないようにしながら死体のポケットを探る。

「有ったぞ、一枚」

「こっちに二枚あるが？」

「あとこっちのは弾当たって使い物にならねえ」

「スミス、お前撃ち過ぎだ」

「うるせえ」

『それが何処まで通用するか分からんが、一応持っておけ』  
「了解、と」

三人が胸にIDカードを付ける。

カルロスが現在地確認の為に情報交換用に渡されたモバイルを起動させ、予め入手しておいた見取り図と照らし合わせた。

「ここって一本道じゃなかったか？」

「間違いねえ、こっちの通路は登録されていない」

「隠し通路か何かだったみたいだな」

レンがゾンビが立っていた辺りの壁に偽装されているスロットを見つけて呟いた。

「こちらCチーム、隠し通路を発見。どうする？」

『探索は後回しだ。予定通り動力室に回ってくれ』

「了解、動力室に向かう」

「こちらAチーム、研究室前に到着。電子ロックを今シェリーが解除している」

「本当に出来るの？」

「任せて！」

問い掛けるクレアに自身満々に答えながら、シェリーは持つてきたノートパソコンのキーボードを叩いた。

電子ロックに無数の数字が入力され、パスワードに該当する物が次々と選別されていく。

やがて短い電子音と共に、ロックがオープンする。

「ほら、ひらい…」

シェリーが自動ドアをくぐろうとした時、極至近距離にいたゾンビと目が会った。

「き、きゃあああああ！」

シェリーが悲鳴を挙げながら強力な右フックをゾンビの顔面に叩き込む。

拳が当たると同時に、ナックルに仕込まれた強力なスタンガンが大電圧を解放、ゾンビの頭部を青白い電流が流れる。

「このう！」

ナックル越しに伝わってきた腐肉のひしゃげる嫌な感触に顔をしかめながら、シェリーが左のハイキックをゾンビの側頭部にめり込ませる。

ハイキックの威力にゾンビの腐れかかった頭部は耐え切れず、千切れた頭部が壁に当たって砕け散る。

「大丈夫シェリー！？」

「うん、なんとか……………」

頭部を失って倒れたゾンビの向こうに、非常灯のみの薄暗い研究

室に浮かぶ無数の紅い双眸が有る事にシェリーとクレアは同時に気付いた。

「レオン！明り！」

「駄目だ！動力が来ていない！」

クレアが持つてきたビームライトを照らしながらM79グレネードランチャーを構える。

光の先には、10体近くのゾンビがひしめいていた。

「こちらAチーム！研究室内部にて10体近いゾンビと遭遇！不利の為動力回復まで撤退する！」

レオンがインカムに叫びながらデザートイーグルを乱射する。

光源に乏しい為、その半数はゾンビではなく周囲の机や壁に当たった。

「逃げるぞ！」

「了解！」

シェリーとクレアが慌てて研究室の外に飛び出し、レオンが最後にデザートイーグルを撃ちながらドアを閉めた。

オートロックだったらしく、ドアは閉まると同時にロックされた事を示す電子音が鳴った。

「び、びつくりした……………」

シェリーが腰砕けになりながらうめく。

「帰って誰かと変わる？」

クレアの問いに、シェリーは首を横に振った。

「嫌！クレアと一緒に戦うって決めたもん」

シェリーが立ち上がりながら断言する。

「じゃ、一緒に頑張ろうか」

それを見たクレアが微笑みながら優しくシェリーの肩を叩いた。

「Cチーム、動力の回復はどれくらい掛かる？」

「今から動力室に入る所だ。ちよっと待て、って何だ！？」

突然通信が断絶する。

「どうしたCチーム！」

「何か居やがるぞ！」

スミスの声と同時に銃声が響く。

「Cチーム！大丈夫か！現状を報告しろ！」

「レン、答えて！レン！」

思わず、シェリーが自分の通信機に叫んだ。

「今のは？」

頭部をかすめた攻撃によってインカムを落としたレンが、注意深

く刀に手を掛けながら周囲を窺った。

「レン！大丈夫か！」

「問題ない」

室内が薄暗い為に武器をゾンビバスターに変えたスミスに答えながら、レンは気配を探る。

「恐らく今のはキメラだ。ゴキブリみたいな奴でどこにも引付くぞ！」

カルロスがスミスと背中合わせになりながら叫ぶ。

「どうする？撤退するか？」

「ここを動かさなきゃどうにもならん」

「やるしかないか……………」

三人は緊張した表情で周囲を探る。

僅かに非常灯が照らし出しているだけの室内に、何かが這い回る音が響いていた。

「そこだ！」

レンがサムライエッジを抜いて天井の方に向けて発砲する。

悲鳴と共に、何かが落ちてきた所にカルロスがグレネード弾を撃ち込み、一撃でその体は四散した。

「こっちにも！」

ゾンビバスターのタクティカルライトの照らした範囲にいるのを

見つけたスミスが即座にトリガーを引き、一撃でキメラを仕留めた。

「もう一匹！」

正面から素早い動きで這い寄って来たキメラをレンが居合で斜めに両断した。

「これで全部か」

レンが周囲に気配の無い事を確認しながら刀を鞘に納めた。

「スイツチ何処だ？」

「それじゃないのか？」

スミスがタクティカルライトで周囲を照らしながら室内灯のスイッチらしい物を見つけ出す。

カルロスがそれを押し、室内が一気に明るくなった。

そこには、すでに生命活動を停止しているキメラの死体が三つ転がっていた。

「よくもまあんな暗い所でこいつらの居場所が、ってレン！頭！」

「ああこれか、かすり傷だ」

側頭部から一筋の血を流しながら、レンは平然と答える。

袖口で血を拭いながら、レンは落つこととしたインカムを拾った。

「こちらCチーム、動力室制圧完了。ちょっとばかり負傷した」

『レン！大丈夫なの！？』

「ちょっと皮が切れたただけだ。心配する程じゃない」

心配そうなシェリーの声に、レンが平然と答える。

「これより動力を回復させる」

「オレがやるからお前は手当てしておけ！」

カルロスが動力の制御盤へと向かいながら怒鳴る。

「また五年前みたく焼くか？」

スミスがからかいながらレンの傷の手当てを始める。

「止めとこう。場所が場所だ」

レンが苦笑した後、ラクーンシティ原産のハーブで作られた傷薬の独特の芳香に顔をしかめる。

「確かに皮だけだな。あの暗さでかわしたのか？」

「ああ、一瞬遅れたけどな。まだオレも未熟だな」

「普通の奴だったら一撃で首切られてるよ」

カルロスが呆れながら動力のスイッチを入れる。

低い唸り音と共に発電機が起動し、電力が各所へと供給され始めた。

「こちらCチーム、動力の復帰に成功。建物内の探索に移る」

通信した後、カルロスが動いている発電機を見ながら首を傾げた。



「変だな……………」

「何がだ？」

「研究所にしちゃ発電機が小さ過ぎる」

「他にも有るってのか？」

「あるいは……………」

『こちらBチーム！管制室にて本当の地図を入手。データを転送するわ』

「おっと」

カルロスがモバイルのスイッチを入れる。そこに転送されてきた地図を三人で覗き込んだ。

「見ろ！ここは第一動力室つてあるぞ」

「さっきの通路の先に第二が有る」

「決まりだな」

三人は無言で頷きあつた。

「こちらCチーム。転送されたデータによりもう一つの動力室の存在を確認。これよりそちらに向かう。なお、第二動力室の状態いかによつては作動していない設備も有ると思われる。注意されたし」

『了解』

「行くぞ」

研究室の扉の前で、レオンがデザートイーグルを構えて突入に備える。

「待つて」

シェリーが慌てて足のプロテクターのセーフティを解除した。

「OKよ」

「それじゃあ……………」

繋いでおいたノートパソコンのリターンキーをシェリーが押すと同時に身構えた。

登録されておいたパスワードが入力され、ドアが開くと同時に、クレアが室内にグレネード弾を撃ち込む。

爆発が収まると、レオンが素早く突入して照明のスイッチを押した。

室内には先程のグレネード弾で倒れたゾンビを除いてもまだ5体程のゾンビが立っていた。

「いつけえええ！」

掛け声と共に室内に突入したシェリーが右のハイキックを手近のゾンビに繰り出す。

命中と同時に、プロテクター内部に仕込まれた仕込み銃が発動、ライフル弾を改造した長さ5cm程のスパイクを発射、ゾンビの頭部に深々と突き刺さった。

「次！」

倒れるゾンビから別のゾンビに狙いを変え、シェリーは一気に距離を詰めると左のストレートを顔面に叩き込む。

半ば顔がひしゃげたゾンビに続け様に頭部にコンビネーションパ

ンチを食らわせ、やがて肉が焦げる匂いを立ててゾンビは動かなくなった。

その時にはグレネードランチャーからMP5A5サブマシンガンに持ち替えたクレアが最後のゾンビを蜂の巣にして倒した所だった。

「制圧完了と」

クレアがグレネードの空薬莖を床に投げ捨て、次弾を装填する。  
その間にシェリーはパソコンの電源を入れ、レオンは手近の資料を探り始めた。

「パスワードが同じならばいいんだけど……………」

シェリーがパソコンのディスプレイの起動画面を見ながら呟くが、ふとその表情が固まる。

「どうしたの…」

クレアが脇から覗き込んで訝しげな顔になる。  
そこには、アニメ絵の少女が壁紙として大映しになっている画面が有った。

「……………すごい趣味……………」

「言えてる……………」

完全に呆れながらもシェリーが両親の使っていたパスワードを打ち込むが、すぐにエラー表示が出た。

「駄目、パスワードが違うみたい」

「レオン、どっかに書いてない？」  
「ちよつと待ってくれ」

レオンがCIAにいた時に若干覚えたフランス語を総動員させてデスクの上に有った手帳を解読していく。

「これか？6月23日 隣の席のルーインの奴が自分用のパソコンを完全に趣味にしゃがった。オマケにパスワードまでそれで使われている奴らしい。まったく呆れたオタクだ。これでROWプロジェクトの主研究者の一人というのが信じられない。上から急かされているから第一検体の調整を急がなくては。この馬鹿と一緒に、だ。」

「ROW？」

レオンが朗読した部分にシェリーが首を傾げる。

「聞いた事の無い単語ね。フランス語？」  
「嫌、恐らくは新種のBOWの事だと思うが、それ以上は書いていない」

レオンが手帳を置いて他の資料を物色し始める。

「で、結局これのパスワードは？」  
「さあ、他のにもパスワードらしき物は無いな……………」

周囲の被弾等で破損している物ばかりのパソコンにメモ一つ付いていないのを見たレオンが小さく舌打ちする。

「ヒントはこれか……………」

クレアが画面を凝視する。そこには画面と同じ少女のSD化した常駐マスコットが歩き回っていた。

「こちらAチーム、研究室の確保に成功するもパスワード不明によりデータ引き出しが不能。これよりヒントを送る為各自思考を頼む」

レオンがモバイルをパソコンに繋いで壁紙をファイル化、転送を開始する。

数秒後、インカムから全員分のため息が返ってきた。

『悪い、オレアニメなんて見ねえ』

『私も』

『あ、私デイズニーだったら好きですけど』

『スミス辺り知らねえか？お前好みそうだが』

『何かオレの事勘違いしてないか？10代前半は守備範囲外』

『……………パスワードは恐らくリリースだ……………』

『リリース？RE・LEASEかな？』

レンの自信無さ気に言ったパスワードを打ち込むと、パスワードが認証されシステムへのコンタクトが可能になった。

「当たり前よ！」

『何で知ってたんだ？』

『いや、高校の学園祭でこいつの仮装をしてきた野郎がいてな。なんだそれって聞いたら二時間ばかり延々と……………』

『分かったからそれ以上言っな』

その光景を想像してしまった何人かが脳裏からあわててそれを打ち払う。

「引き続きデータの検索に移るわ。何か分かったら至急転送するか  
ら」

『頼んだぞ』

「さっきとセキュリティが偉い違いだな」

「まったく」

レンが目の中の分厚い透明な仕切りドアの前で入手していたID  
カードをチェッカーに照らす。

短い電子音の後にドアが開き、後ろの二人も同じようにしてドア  
を潜る。

「何だまたかよ」

すぐ目の前にも同じようなドアが有るのを見たスミスが悪態を着  
いた時、突然背後のドアがロックされる。

「ん？」

それに気付いたスミスが振り返ろうとした瞬間、突然閉鎖された  
通路に警報が鳴り響く。

『IDとボディフレームが一致しません。侵入者とみなし、排除い  
たします』

「何だとう！」

「しまった！フレームスキャナか！」

レンが先程潜ったドアの妙に分厚い外枠を睨んだ。

その時には、天井近くのスリットから無色で気体状の何かが閉鎖された通路へと流し込まれていた。

「毒ガス!？」

「やべえ!!」

皆が慌てて渡されていた簡易ガスマスクを着けようとする。

ふと、レンはその流し込まれた何かがまったく呼吸器系に被害をもたらしていない事に気付いた。

「この野郎!」

「よせっ!!」

カルロスが仕切りを破ろうと銃口を向けたのをレンは慌てて止めた。

「何をする!!」

「こいつは高濃度酸素だ!撃ったら暴発するぞ!」

「あにいい!!」

同じようにM82A1を向けようとしていたスミスが慌ててトリガーから指を離す。

「酸素なんか流して何するつもりだ?」

「馬鹿!高濃度酸素はれっきとした毒ガスだ!酸素中毒を起こせば身動き出来なくなる事だっ!」

言葉は前後それぞれの両脇の壁が開く音で中断される。そこからハンターが一匹づつ、計四匹が歩み出て来た。

「本命はこいつらか！」

レンが叫びながら抜刀してこちらを振り向く前に一匹を両断する。こちらに気付いたもう一匹が振るってきた力ギ爪を刃を使って受け流し、そのまま刃を滑らせるようにして相手の首を斬り裂いた。

「おい！こつちも頼む！」

レンが振り向くと、そこには銃を棍棒代わりにして必死にハンターと戦っているカルロスとスミスの姿が在った。

「まかせ……」

言葉の途中でレンは目眩を感じてたたらを踏む。頭を軽く振って視界を戻そうとするが、目眩だけでなく虚脱感すら襲ってくる。

（酸素中毒か………）

レンは精神力で強引に前を見据え、刀を突き出す。刃は狙いを僅かにそれ、ハンターの脇腹を貫いた。

「おおおおおお！」

気合で力の入らなくなってきた体を無理に動かしながら足を踏みしめ、刀を真横に振るい、ハンターの体を斬り裂く。

その軌道上に、ハンターの脊髄が有った。急所をやられたハンターが床へと倒れる。

レンは最後の一匹に向けて構えようとした時、何かがその脇をす



「こいスピードで通り過ぎていった。」

「なめるなよ、怪物風情が……」

スミスが強力過ぎる左ストレートでハンターを殴り飛ばしていた。

殴られたハンターはそのまま壁まで吹っ飛び、壁に血の花を咲かせて床へと崩れ落ちる。

「どういう腕力してんだよ……」

カルロスが呆れながら壁に背をもたれさせる。

「ちよつとした仕掛けがあるんだよ……」

スミスが頭を仕切りに振りながら答える。

その場にいる全員に酸素中毒の症状が出てきていた。

「取り合えず、ここから出よう」

レンがふらつく足取りで仕切りへと近寄ると、右手を引いて、刺突の構えを取る。

息を心持ち軽めに吸い込み、肺に溜め込むと力強く足を前へと踏み込みながら体重の乗った強力な刺突を繰り出した。

が、その刃は半ばまで透明な仕切りに突き刺さりながらも、刀身の三分の一は仕切りの中に有り、仕切りはヒビが入っただけで碎けはしなかった。

「防弾……いや、対爆用アクリルか!？」

「くそっ！念がいつてやがる……」

カルロスが悪態をついた時、ふとその耳に機械の作動音が聞こえた。

何気にその音の方を見ると、天井からノズルのような何かが出てきていた。

「何だあれ!？」

「やばい!この状態で唯一使える火器が一つだけある!」

「何だよそれ!？」

「火炎放射だ!」

レンが怒鳴りながら仕切りに足を掛け、一気に刀を引き抜くと同じ構えを取る。

ノズルからは微かにバキュームのような音が聞こえてきていた。

「どけっ!」

レンを押し退けてスミスが先程レンが開けたヒビに左の拳を叩きつける。

生身からの攻撃とは思えない轟音と共にアクリルに大きなヒビが入った。

「もう一丁!」

続けて拳を叩き込む。ヒビは更に大きくなり、砕けたアクリルの破片が通路に乾いた音を立てて飛び散る。

「これで、どうだ!」

スミスが大きく振りかぶって拳を叩きつける。

鈍い音と共に、アクリルは大きく砕け散った。

「急げ！」

三人は閉鎖された通路から急いで脱出する。  
その時、ノズルから強力な炎が吹き出した。

「やば……」

「はあああああっ！」

吹き出してきた炎へと向けて、レンが大上段から一気に刀を振り下ろす。

炎は彼の手前で二つに両断され、通路の壁際を流れていった。

「ウソだろ……………」

「すぐに戻るぞ！急いで逃げろ！」

振り返ったレンの背後を炎が追いかけてくる。

死に物狂いで三人は走って通路の分かれ目に飛び込み、そのすぐ後を炎が突き抜けていった。

「た、助かった……………」

「くそ、陰險なトラップ仕掛けやがって……………」

「こちらCチーム、通路上にトラップに遭遇。なんとか切り抜けるのには成功、通路を封鎖して高濃度酸素を流した後、ハンターを放った拳句にローストする仕組みの模様。同様のトラップがある可能性があるので各自注意されたし」

『了解。全員生きてるか？』

「なんとか……………」

三人が荒い呼吸をしながら通路に座り込む。

「第二動力室まであとどれ位だ？」

「もう少しだ」

大きく息を吸ってからスミスが立ち上がる。

「それじゃあ、捜査続行といきますか」

「おう」

薄暗い部屋の中で、無数のディスプレイの一つに少し焦げた通路を進むレン達の姿が大型ディスプレイへと転送される。

低い起動音と共に、メインコンピューターが一つの判断を下した。

『侵入者CグループはA 3トラップをクリア、その能力をカテゴリA以上と断定。当研究所への被害予想は甚大。至急”ヘラ”を蘇生起動、侵入者全てを抹殺すべし』

その命令を受けた研究室のカプセルの一つに、蘇生プログラム受理のランプが点った。

## 第六章 『戦慄！襲い来る殺戮の女神！』

「うつうつ、うつ……………」

嗚咽とも苦悶ともつかない声が薄暗い通路に響いていた。

重い足取りでその声を漏らしていた影はゆっくりと歩いていく。

ふと、その影の先に同じような思い足取りで歩くゾンビが通路の角から姿を現した。

「う、うがああああ！！！」

その姿を認めると同時に、影は先程とは打って変わった素早さでゾンビに一気に近寄ると、その首を驚掴みにする。

「ぐがあああ！」

影はゾンビの頭部を力任せに壁へと叩きつける。

一撃でゾンビの頭はひしゃげるが、影は構わずゾンビを大きく振り回して反対の壁に叩きつけた。

ショックに耐えられずゾンビの体から破裂するように血と臓物が飛び出す。

影はそれでもなおゾンビを振り回し、壁に、天井に、床に叩きつけた。

やがて、周囲一帯にゾンビの破片が飛び散り、もはや完全に原型を留めなくなったゾンビからようやく影は手を離れた。

「うつうつ、うがうつ……………」

影は、また重い足取りで次なる獲物を探し始めた。

「変ね……………」

「どうしたの？」

シェリーはキーボードを叩きながら次々と映し出されていくデータを見て首を傾げた。

「肝心の研究データが見当たらない」

「え？」

クレアがディスプレイを覗き込むが、データの映し出されていくスピードの余りの速さに理解する事は出来なかった。

「今出ているのがイルカの生態研究についてだし、その前のはシャチの習性について、早い話が普通の動物学のデータしかないの」

「隠しファイルになってるとか？」

「それも無いわ。調べてみたけど怪しいデータは…」

そこでシェリーの言葉が止まる。流れてきたあるデータを慌てて停止させた。

「何これ？出荷データ？」

「8月27日に20、9月8日に25？研究所なのに？」

「ちよつと待つて！12日前、あの日に45つてある！ひょつとしてBOWの出荷データ！？」

「ええっ！？」

「間違いないな」

脇からディスプレイを覗き込んだレオンが断言した。

「取引先が巧妙に隠蔽されてるが、どれも軍隊を示す隠語になっている。何処もCIAがBOW実戦配備の可能性在りとしてマークしておいた国ばかりだ」

レオンが手早く内容を確認していきながら確信する。

「コピーしておいてくれ。証拠の一つだ」

「OK」

シェリーが手早くデータを手近のMOディスクへとコピーすると、それを胸のポケットへと仕舞い込んだ。

「問題は肝心のBOW開発のデータが何処にあるかね」

「さっき送られてきた地図に、海面下の階層にとんでもなく巨大な実験室のデータがあるな。多分ここだろう」

「じゃあ、そっちに向かいましょ」

クレアの提案に二人も同意し、彼らはその場を後にした。

向かう先に、待ち構えている者がいる事なぞ彼らには知る由も無かった。

『こちらBチーム、電源が確保出来ない為先に進めない。Cチームまだ第二動力室に着かないか？』

「気楽に言っな！」

スミスが怒鳴り返しながらマーベリックを連射する。

その両隣にいるカルロスとレンも同じく通路の先から迫ってくる敵へと向けて立て続けにトリガーを引いていた。

「こちらCチーム！新種と思われるBOWとただ今交戦中！電源確保にはまだ時間が掛かる」

レンは返信しながらマガジンを手早く交換した。

「なんなんだ、あいつは！」

カルロスが飛び跳ねながら近寄ってくる敵の一匹に集弾して仕留める。

彼らの目の前には、見た事も無いBOWの集団が押し寄せてきていた。

全長は50cm前後だが、寸詰まりの胴体からは短い鋭い爪の生えた足と、鋭利な刃と化した退化した翼が生えている。

鋭いクチバシから管楽器のような泣き声をあげながら、ある者は高々とジャンプしながらクチバシを突き立てようとし、ある者は腹で滑りながら翼で斬りつけようとしてくる。

「このっ！」

天井近くまで跳ね上がったそれに向けてスミスがトリガーを引く。

発射された散弾は一撃で相手を肉片へと変えるが、即座に別の敵が近寄ってくる。

手早くフォアグリップをスライドさせてトリガーを引くが、撃鉄が空の薬室を叩く音が虚しく響いた。

「ちっ！」

弾切れを起こしたマーベリックを脇へと退けて、スミスは舌打ち



しながらゾンビバスターを抜いた。

滑りながら至近距離まで迫ってきていた敵へと向けてレンはとっさに刀を逆手に持ち替えて床ごとそれを貫く。

甲高い断末魔をあげるそれから刃を引き抜くと、逆手のまま間近で跳ね上がった別の敵を一撃で斬り裂き、左手のサムライエッジはそれとは違う敵をポイントして弾丸を吐き出す。

敵影は、まだ無数にいた。

「何匹いるんだ！」

カルロスはフルオートにセットされたM4A1を乱射する。  
瞬く間に30連マガジンを撃ち尽くし、マガジンを抜いてセットしようとした所で装弾されたマガジンが無い事に気付いた。

「この野郎……！」

カルロスはサスペンダーから両手で持てるだけの手榴弾を外すと口で一気にプルを引き抜き、敵の群れの中心へと放り投げた。

「馬鹿、こんな所で……」

驚いたスミスが文句を言いながら回れ右をして走り出す。

カルロスも反転して走り出し、一番最初に反応していたレンはすでに曲がり角に身を潜ませようとする所だった。

短い間を置き、通路の中を複数の爆発音が轟き、周囲を揺るがせる。

爆風が吹き抜け、吹き飛ばされた壁と肉片が入り混じって周囲に撒き散らかされた。

爆発の余韻が消え去った後、おもむろに曲がり角からカルロスが

頭を出して様子を窺った。

「やったか？」

「やったか？じゃあないだろ！こんな遮蔽物のないところで手榴弾なんて使うな！」

スミスが怒鳴りながら同じように頭を覗かせる。

視界の先には、焼け焦げ、爆発で大きく抉られた通路と、無数に散らばっている肉片が有るだけだった。

かろうじて爆風で吹き飛ばされただけだったらしい一匹が起き上がろうとした所をスミスがとどめを刺す。

「で、結局こいつはなんなんだ？」

「薄々予想は着くが……………」

「こちらCチーム。敵の殲滅を終了、再び第二動力室に向かう。新型のBOWは全長50cm前後、鳥類と思われる。集団で行動し、ジャンプしながらのクチバシと滑りながらの翼に注意されたい」

「鳥類？」

スミスが先程とどめを刺した敵の死体を見て首を傾げる。

「こんな鳥なんていたか？」

「いるだろ。もつとも南半球にだかな」

「やっぱりそう思うか？」

マガジンに弾丸を装填していたレンがカルロスの意見を肯定する。

「賭けたっていい。この先には氷山を模したプールが有るぞ」

「はあ？」

スミスが首を傾げながら通路の先を覗きに行く。  
それ程行かない内に、開きっ放しになっているドアの向こうに確かに冰山を模した大きなプールがあった。

「……………つて事はこいつはひょっとして……………」

「こちらCチーム。新種のBOWはどうやらペンギンの変異体と思われる。外見的特長から以後”コボルト”と命名。間違っても水族館のを思い浮かべないように」

レンが淡々とインカムに告げるのをスミスは無然とした表情で見ながら、ポケットから散弾を取り出して装填を始めた。

「何が悲しくてフランスまで来てペンギンに襲われなきゃならんだ？」

「オレが知るか。それにこいつはまだマシな方だぞ。オレはノミだのガだのに襲われた事が有るからな」

カルロスが空になったマガジンにライフル弾を装填していきながら言い返す。

「じゃなにか？次はイルカかラッコかオットセイか？こうなりや何でも来いだ」

「無駄口言つてないで先に進むぞ。目的地はもうすぐだ」  
「おうよ」

スミスが初弾をチェンバーに送りながら力強く答えた。

「それでだ。来たのはいいが……………」

スミスが開かないドアの前で眉根を寄せた。

「IDがアクセス不能になってるとはな」

全員分のIDカードを通してみたレンがため息混じりにカードを床に投げ捨てた。

「さっきので完全に侵入者扱いにされたか。随分と嚴重なセキュリティシステムしてやる」

カルロスが両手を上げながら首を横に振った。

「こちらCチーム、第二動力室のドアが開かない。これからなんとか破ってみるが動力確保はもう少しかかりそうだ」

『了解した。誰かカギ開け出来る奴をやるつか？』

「いや、何とかやってみる」

「ぶち破るか？」

「動力室だぞ。何を動力にしてるか知らないが、引火したらどうする」

「う……………」

スミスが背中から降ろしかけたM82A1を再び背中に戻す。

「じゃあどうすんだよ？」

「こじ開けるか、分解するかしかないか？」

レンがドアに手を付いて調べ始めるが、ふとその顔が訝しげな物に変わる。

「妙だな……………」

「どうした？」

「誰かここを破ろうとした形跡が有る」

「あ？」

スミスがレンの指差した所を見ると、そこには何かで引つ掻いたような一直線の傷跡が走っていた。

「ID無くした奴が無理矢理入ろうとしたんじゃないか？」

「それなら再発行するだろ。第一、そんな事すりゃ一発でセキユリテイに引つかかるぞ」

カルロスがレンに変わって間近で傷跡を調べ始める。

「間違いないな。的確に配線部分を狙っている。かなり慣れた奴の仕業だぞ」

「……………ずっと気になっていた。何でここでバイオハザードが起きているのか。おそらくだが…」

『ここを襲撃した奴がいる』

レンの言葉を、インカムからのレオンの言葉が続けた。

『何か見つけたのか？』

バリーからの通信にレオンは緊張を孕んだ声で答える。

『今海面下部分に入った所なんだが、射殺されたハンターの死体を発見した。腐敗の具合からみて死後4、5日って所だ』

『……………って割にはグロいんだけど……………』

『BOWは何でか早く腐敗が進むし、それにゾンビにかじられてる

みたいね』

『こちらBチーム、こっちでも戦闘の痕跡を発見したわ。かなりの重装備の連中だったみたい。20ミリの薬莢があちこちに転がってる』

「20ミリ!? 機銃でも持ち込んだか!？」

『おそらく携帯型のガトリングでも持ってきたんだろう。間違い無く対BOW用装備と見ていいだろう』

全員の顔に緊張が走る。

しばし誰もが無言で考えを巡らせるが、誰かの声はその緊張を破った。

『じゃあ、なんでここは吹っ飛んでないんだ?』

「?どういう事だ?」

レンの問いに、バリーが答えた。

『アンブレラの研究所には全てバイオハザードが起きた際に対処出来るよう自爆装置が設置されている。セキュリティに異常でもない限りは有事の際には起動するはずだ』

『だけどここは残っている』

レオンの緊迫した声が後に続く。

『……………畏?』

『かもしれん』

ジルの何気無い一言が、一同に電撃のように伝わる。  
誰もが、お互いに顔を見合わせ固唾を飲んだ。

『だが、たとえばスカだと分かっているとしても時には引かなくちゃならん。それが警官の仕事だ』

「やってられないな」

『じゃあ止めるか？』

「ご冗談を。それにここまで来て引き返したらそれこそ馬鹿だ」

カルロスのジョークとも本気とも取れる言葉に、何人かの苦笑が帰ってくる。

「中途半端で終わらせるよりは、最後まで馬鹿見た方がマシだ」  
『奇遇だな。オレも同じ事を考えた』

レンとレオンの言葉に、ある者は笑みを浮かべ、ある者は大きく頷いた。

『各チーム、トラップに充分気を付けて捜査を進めてくれ。無茶はするなよ』

「ここに来たって時点ですでに充分無茶してる気がするけどな、つと」

カルロスが持っていたコンバットナイフでドアの上端のカバーを外し、中を覗き込んで顔をしかめた。

「間違いねえ、誰か同じ方法で開けた後、馬鹿丁寧に繋ぎ直して閉めてある。トラップかもな」

「だが、行くしかない」

レンがサムライエッジのセーフティを外す。

「そうだな」

カルロスが繋がれていた配線をためらいも無く切った。

「……………開かないぞ」

「ロックを無効化させたただけだ。後は手動でどうぞ」

「そうですかい」

スミスがノブも取っ手も無いドアに何とか指を掛けて力任せに引いた。

ゆっくりと開くドアの向こうに、レンとカルロスが緊張しながら銃を構える。

ドアが半ばまで開いた所でレンが体を滑り込ませるように中に入って様子をうかがう。

「何かあるか？」

「妙だな……………気配はするが、何もいない」

「は？」

カルロスとスミスも室内に入ったが、非常灯の薄暗い明りだけの室内には動力炉らしき二つの影以外には罨も敵も見当たらなかった。

「考え過ぎだったか？」

「かもな。そうと分かればとっと動かそうや。どっち動かせばいいんだ？」

「おかしいな。地図には動力炉は一つ……」

その時、スミスの背後にある影が動いたのがカルロスの目に入ってきた。



「おい……………スミス、ゆっくりとこっちに来い……………」  
「どうした？」

スミスが何気無く後ろを振り向くと、影が動いたのがスミスにも見えた。

「まさか！」

レンが手早く室内灯のスイッチを入れる。

照らし出された室内には、5 mはある巨大な動力炉と、それとほぼ同じ大きさの赤黒い粘液質の肌をした物体が並んでいた。

「何だこいつは！」

スミスがそれに銃口を向けてトリガーを引こうとするが、それよりも早くその物体の上端から伸びてきた触手が彼の足を掴んだ。

「んなろう！」

スミスはそのまま自分を引きずろうとする触手に狙いを変えようとトリガーを引いた。

散弾が一撃で触手を引き千切り、残った部分はその物体の上端に戻る。

そして、今度はそこから無数の触手が伸びてきた。

「まさか、イソギンチャクかこいつ！」

「でか過ぎるぞ！襲撃した連中がここを閉めたのはこいつが原因か！？」

カルロスが射線上に動力炉が並ばないように横へと動きながらM

4A1をフルオートで連射する。

が、相手が大き過ぎる為にダメージはほとんど与えられない。

「デカイのを使え！生半可なのじゃ効かねえ！」

スミスが背中からM82A1を抜くと続け様に発砲、巨大イソギンチャクの胴体に次々と風穴を開ける。

しかし、軟体生命体ゆえの強靱な生命力の前では致命傷にはほど遠かった。

「イソギンチャクの弱点って知ってるか！？」

「知らん！」

レンが伸びてくる触手を次々と斬り落とすが、触手は更に無数に伸びてくる。

「軟体系は嫌いなんだよ！」

カルロスがグレネード弾を巨大イソギンチャクの上方に撃ち込む。

グレネード弾の爆風がまとめて触手を吹き飛ばすが、弾力に富んだ胴体は少しえぐれただけだった。

「どういう体してやがるんだ！？」

「ちよつとやそつとじゃ効かないのは確かだ！」

レンが叫びながら触手が途切れた合間に距離を詰めると、スミスの開けた弾痕の一つに刃を突き立てる。

「おおおおおー！」

気合と共に刃に拳を叩きつけ、半ば力任せに胴体を斬り裂いていく。

「狙え！」

『OK!』

レンの意図を理解した二人が開いた傷口に次々と徹甲弾とグレネード弾を叩き込む。

傷口は徐々に広がっていき、やがてその内部を晒していく。

「うげ……………」

傷口から見えてきた胴体内部に、消化途中のゾンビが入っているのを見たカルロスがうめきながら次弾をセットしようとした所で、手持ちのグレネードが尽きた事に気付いて舌打ちした。

「やばい。グレネード弾がもお無え！」

「こっちもこれで最後だ！」

スミスが最後のマガジンをM82A1にセットする。

「節約しろ！この先何が居るか分からないんだぞ！」

レンが再び刃を振るおうとした時、妙に刀が重い事に気付く。見ると、刀身にはネットリとした粘液がまとわりつき、どう見ても斬れそうにはなかった。

「しまった……………」

レンが刀を上下に振って粘液を落とそうと試みるが、粘着いた粘液はどうしても落ちない。

「切り札を使うしかないか？」

カルロスが腰のロケットランチャーに手を伸ばすが、すぐ側に動力炉がある為に使う訳にはいかなかった。

「やばいな、どうする？」

「ここを制圧しなけりゃ話にならないだろ」

再び伸びてきた触手をマーベリックに持ち替えたスミスが散弾で吹き飛ばしながらの問いに、レンは懷から取り出した半紙で刀身を乱雑に拭きながら苦い表情で答える。

「ロケットランチャー使えば動力炉まで吹っ飛んじまうかもしれないし、かといって小口径弾じゃ効かねえ。ホントにどうするよ？」

効かないと分かりつつも、カルロスがフルオートのままトリガーを引き続ける。

弾丸で千切られ、白刃で斬り裂かれても触手は無数に伸びてき、三人はゆっくりと追い詰められつつあった。

『Cチーム！不利なら一度撤退しろ！無理はするな！』

「って言ってるぜ？」

「どちらにしろ、ここを動かさない事には先には進めん。何とかするしかない」

「なんとかって言われてもな！」

スミスが装弾されている最後の弾丸を触手の固まっている部分に

撃ち込み、左手でゾンビバスターを抜くと右手でなんとか散弾を込めようと試みる。

その横ではレンが完全に粘液を拭いきれていない刀を振るって触手を斬り落としていたが、その切れ味は目に見えて落ちていた。

「くそっ！せめてあいつの中から発破でも出来れば！」

「そうか！その手があった！」

カルロスの悪態に、スミスが頷いた。

「おい、発破つつてもあいつの中に直接……」

「もらっぞ！」

説明も聞かず、スミスがカルロスから手榴弾を幾つかもぎ取ると巨大イソギンチャクへと向けて走り出す。

「お前まさか！？」

「そのまさかだよ！」

伸びてくる触手を掻い潜りつつ、スミスは口でピンを引き抜くと、開いている傷口から手榴弾を握っている左腕を内部へと突っ込んだ。

「馬鹿！そんな事したら！」

「伏せろ！」

内部の消化液と思われる粘液に触れた左腕から皮膚が焼ける白煙をあげながらスミスが腕を引き抜き床へと倒れこむ。

慌ててレンとカルロスも床へと倒れ込んだ直後、巨大イソギンチャクの内部で手榴弾が爆発し、傷口と上部から爆炎と内臓、消化途

中の食餌が嘔き出した。

「くっ！」

「うあちっ！」

飛んできた酸性の粘液をレンは袖で防ぎ、頭に付いた粘液をカルロスは慌てて払い除けた。

「へっ。ざまあ見やがれ……………」

「スミスお前なんて事を！」

上体を起こして内部がキレイに吹き飛んだ相手の方を見て笑っていたスミスの左腕をカルロスが掴む。

だが、その手は焼け爛れた皮膚を腕から引き剥がす結果になった。

「な！？」

皮膚がこそげ落ちたスミスの左腕を見たカルロスが絶句する。  
焼け爛れた皮膚の下から出てきたのは、焼けた筋肉ではなく、鈍い光沢を持つ金属製の肌だった。

「スミス！お前それ……………」

「こいつがオレの怪力の秘密さ」

皮膚の下から出てきた完全な機械式義腕を見せつけるようにスミスが動かしてみせる。

「五年前にタイラントに左肩をぐしゃぐしゃにされてな。軍から口止め料代わりにこいつを付けて貰った」

「サイボーグだったのか？」  
「左腕だけだよ」

カルロスの素朴な問いにスミスが苦虫を噛み潰したような表情になる。

「あまり無茶はさせるなよ。故障したらどうする」  
「前に高温焼却炉に突っ込んだけど平気だったぞ」  
「ターミネーターか、てめえは……………」

カルロスが苦い顔をしながら動力炉を起動させるべくコントロールパネルに向かう。  
レンは懷から取り出した半紙で今度は丁寧に刀身を拭きながら通信を入れた。

「こちらCチーム、第二動力室の制圧に成功。これより電源を供給……………」  
「出来ねえ……………」  
「あん？」

スミスが間の抜けた声を出してカルロスの方をみた。  
カルロスが渋い表情をしながらゆっくりと頭を後ろへと向ける。

「駆動キーが抜けてる上に、パーツも幾つか抜けてる。これじゃあ動かし様がねえ」

「やっぱりか。おそらく電源確保に来るように仕向けてあのイソギンチャクに襲わせる手はずの罠だったんだろ。でなけりゃこんな所にあんな怪物が居るわけないからな」

「あんなに苦労してそれかよ……………」

スミスががつくりと肩を落とす。

「どうにか電源を送れないか？」

「一応予備電源は回せるが、一部だけしか動かせないぜ」

「仕方がない。予備電源を起動させて無いパーツを探しに行くか」

「RPGやつてるんじゃないぞ……………」

スミスが大きく息を吐きながら立ち上がると、減った分の弾丸を装填してセーフティを掛ける。

「こちらCチーム、これより予備電源を起動、電源の通う場所を送るからそちらから捜査してくれ」

『了解した。あと、たった今G I G Nの出動が決まったそうだ』

「G I G N………… フランスの対テロ部隊か。よく許可が下りたな」

『さっきまで警部が無線でかなりがなり立ててたからな。みんなにも聞かせたかったぞ』

『誰も聞きたくないわよ。こちらBチーム、これより研究員居住棟に向かう』

『Aチーム、資料室に向かう』

「Cチーム、動力炉修理の為に倉庫に向かう」

「何だかこのチームだけ地味だな……………」

「言つな」

軽い電子音を立てて開いたエレベーター内部に、二つの銃口が突き付けられる。

そこに何も居ない事を確認すると、誰ともなくため息が漏れた。

「エレベーターに乗るのも一苦勞する……………」

「仕方ないさ。前にゾンビが箱詰めになってて全部倒したはいいけ



ど、結局使えなかった事もある位だ」

「想像させないで……………」

Aチームの三人がそろそろと中へと入ると、レオンが目的の階のボタンを押す。

「予備電源で動くのはここだけか」

「西側の方が距離的には近いんだけど、動かないんじゃないかないわね」

レオンの操作しているモバイルをクレアが横から覗き込む。

目的地を示す光点までの道程をチェックし終える頃、エレベーターの降下速度が落ち、やがて到着を示す電子音が鳴る。

「お出迎えがあるかしらね」

「出来れば遠慮したいけど……………」

レオンがデザートイーグルを構え、クレアがM79グレネードランチャーを片手に、MP5A5のセーフティを外し、シェリーが身構える。

ドアが30cmも開かない内に何かがいきなりエレベーター内部へと飛び込んできた。

「な!?!」

「危ない!」

飛び込んできた何かをシェリーが横から殴りつける。

高圧電流のスパークを上げながらそれは壁に叩きつけられ、床へと崩れ落ちた所にレオンがとどめの弾丸を撃ち込んだ。

「何コレ!？」

「こいつがコボルトか!」

死骸からドアの向こうの通路へと目を向けた三人の視界に、通路にたむろする十数匹のコボルトが一斉に向けた瞳が飛び込んできた。

「来るぞ!」

レオンが叫ぶと同時に、50AE弾が飛び跳ねたコボルトの一体を貫く。

クレアが群れの中心にグレネード弾を撃ち込むと同時にMP5A5をセレクトターをフルオートにセットして、9ミリ弾をばら撒き弾幕を張る。

目前まで飛び跳ねてきたコボルトはシェリーのパンチで殴り飛ばされた所を弾丸が貫き、足元を滑ってきた別の敵を足ですくい上げるように蹴り上げると、反対側の鋭い蹴りと同時に撃ち込まれたスパイクが一撃で相手を絶命させる。

「そいつで最後!」

弾切れを起こしたマガジンを手早く交換したクレアが着地しようとしていた最後の一匹に集弾、瞬く間に蜂の巣にされた死体と変える。

「こちらAチーム、地下二階に到着と同時にコボルト十数匹と交戦、殲滅に成功。これより目的地に向かう」

「ちよつと待って」

使った分の弾丸を装填している二人の前で、シェリーは損傷の少

ないコボルトの死体を見つけるとポケットからMDレコーダーを取り出してスイッチを入れると観察を始めた。

「被検体は新種のBOW、発見者によりコボルトと命名。外見及び骨格的特長からペンギンをベースにした物と推定される。外見的特長は鋭利に硬質化した…」

特徴をMDに記録させながら、仔細に至るまで観察、場合によっては持参したデジタルカメラに映し、サンプル細胞を取るその姿はレオンとクレアの知っている気弱な少女ではなく、一人の研究者の物だった。

「……………成長したのね……………」

「……………そうだな」

「何か言った？」

こちらを向いたシエリーに、クレアは優しく微笑む。

「随分と立派になったな。って思ってたところ」

「これでも学会にレポート出した事だって有るんだから」

シエリーは無邪気に微笑み返しながら、ノートパソコンを起動させてデータをまとめていく。

「こちらAチームシエリー。コボルトの詳細データをまとめたから転送します」

レオンの持っていたモバイルをノートパソコンに繋げてデータを転送させていく。

『へえ、随分と詳しくまとめてますね』

通信からレベツカの歡心する声が返ってくる。

『前に一度BOWのデータベースを作る時に全員にレポート提出してもらったら、訳の分からない物を出してきた人が何人か…』

『悪かったな!』

「あは、あはははは、どうもそういうの苦手で……………」

カルロスの怒声とクレアの乾いた笑いの後ろに、何人かの押し殺した笑いが重なる。

「……………ひょっとしてあのデータベースに有ったよく分からない挿絵って……………」

「Aチーム、これより目的地に向かいます」

その場を逃れるように、クレアはそれだけ言って足早に歩き始めた。

「何よ……………これは……………」

曲がり角を進んだその先に在った物に、全員がしばし絶句した。

通路中の壁や床や天井に、血と肉片としか呼べなくなった死体が散乱していた。

「爆弾でも使ったのかしら?」

「いや、爆発の痕跡が無い。おそらく叩きつけられた物だと思うが……………」

レオンが周囲を注意深く探り始める。  
シェリーも込み上げてくる嘔吐感に耐えながら、付近を調べ始めた。

「叩きつけられた高さから言って、多分肩の高さは150cmも無いみたい」

「妙だな？てつきりタイラントタイプだと思っていたが、だとしたら背が小さ過ぎる……」

「タイラントだったらここまでしないんじゃない？ゾンビ相手だったら一撃で撲殺するか、爪で切り裂くかのはずだし……」

「新型？」

「かもしれん」

レオンが緊張した面持ちで背中に背負っていたM66ロケットランチャーを展開させていく。

「こちらAチーム、通路にて完全にジャンクにされているゾンビの死体を発見。タイラントタイプもしくは新型のBOWの疑いあり。これより最大戦力を持って進む」

『注意しろよ。場合によっては逃げても構わん』

返信するバリーの声も緊張していた。

「鉢合わせしない事を祈るばかりね」

クレアがM79グレネードランチャーに対生物用の硫酸弾をセツトする。

「ここしばらく教会には行ってなかったけどね」

シェリーがスタンナツクルのバッテリーを新しい物へと取り替えた。

三人とも慎重に、その場から先へと進み始める。足取りはやけに遅く、そして周囲の音がやたらと大きく聞こえるような感覚に捕らわれながらも、先へと進む。

通路から出てきた影に思わずクレアがトリガーを引き、命中したのがただのゾンビだと知って思わず胸を撫で下ろす。

「緊張するのは分かるが、あまり無駄弾を使わないようにな」  
「だって…」

クレアが弁明じみた事を言おうとした時、何処からか断末魔の悲鳴が聞こえた。

「何、今の!？」  
「向こうからだったな」

三人は顔を見合わせると、自らの武器を強く握り締めながらそちらへと向かう。

保管室のプレートが掛かった部屋の前で、全員が一時足を止めると、ドアの両脇にへばり付き、無言でアイコンタクトを取ると一気にドアを開けた。

部屋の奥の方から、何かを咀嚼する音が聞こえる。

そちらの方へと武器を構えながら、レオンが室内灯のスイッチを入れた。

明りが点いた事に気付いたそれが、ゆっくりと立ち上がるとこちらを向いた。

「え!？」  
「まさかこいつは!」

ふりむいたそれに、クレアの意外そうな声と、レオンの驚愕が重なった。

それは女性の姿をしていたが、体毛は一切無く、そして胸が膨らんでいるが、乳首も無く性器の類も見当たらない。

敢えて言うなら筋肉質の女性のマネキンの様な体とは裏腹に、頭からは長い髪が生え、目は紅い双眸を宿し、口には牙を思わせるような鋭い歯を血に染めていた。

こちらを向いたその足元に、さっきまで咀嚼していたハンターの死体が転がっている事に気付いたシェリーの顔色が変わった。

「逃げる！こいつは雌型タイラント、”ヘラ”だ！」

レオンが叫びながらM66ロケットランチャーを発射する。

だが、ヘラは咆哮しながら至近距離から放たれたロケット弾をかわして異常なまでの敏捷さで一氣にレオンへと近寄るとその襟首を掴んで壁へと叩きつける。

「くはっ……………」

呼吸に詰まったレオンを更に叩きつけようとした所に、クレアが硫酸弾を肩へと撃ち込む。

「レオンを離して！」

クレアが叫びながら次弾を装填しようとした時、ヘラは無造作にレオンを離すと今度はクレアへと走り寄る。

慌ててMP5A5のトリガーを引こうとしたクレアに瞬く間にヘラは近寄り、平手のまま横殴りにクレアの胴体をはたき付けた。

たった一撃でクレアの体は宙を舞い、そのまま壁際の薬品棚に叩

きつけられた。

「クレア！」

シェリーが思わず叫ぶ。

「……………シェリー……………逃げて……………」

クレアはそのまま床へと崩れ落ち、片手でなんとか上体を起こしながらMP5A5を構えようとする。

叫び声の方を向こうとしたヘラの体が一瞬ビクツと跳ね上がる。その腹部に一発の弾痕が刻まれていた。

「……………逃げるんだ、シェリー……………こいつはタイラントシリーズの中でもっとも凶悪……………」

口の端から一筋の血を流しながらレオンがデザートイーグルを構えていた。

『大丈夫かAチーム！今救援を！』

『こちらBチーム！Aチーム救援に向かう！』

「来るな！まともに戦ったら勝ち目はな……………」

レオンがインカムに怒鳴り返しながら再びトリガーを引こうとした時、一瞬にして近寄ったヘラがレオンの頭部を上からはたき付ける。

「がはっ！」

血の混じった反吐を吐きながらレオンが床に叩きつけられ、僅か



にケイレンしたかと思うと動かなくなった。

「レオン！いやあああああ！」

シェリーが悲鳴を上げながらその場に硬直する。

そちらの方に向いたヘラの胴体に、いきなり無数の弾丸が撃ち込まれた。

「逃げるのよ……シェリー……早く……」

クレアが壁に寄りかかりながらMP5A5のトリガーを引いていた。

しかし、すぐに弾丸は尽き、マガジンを変えるよりも早く襲い掛かったヘラに首筋を掴み上げられた。

「駄目ええええ！」

シェリーが叫びながら、体ごと旋回させ十二分に体重の乗った回し蹴りをヘラの肩口に叩き込んだ。

蹴りと同時に撃ち込まれたスパイクが肩に突き刺さる。

掴んでいたクレアを思わず離れたヘラに向けて、シェリーは上段、中段、下段に矢継ぎ早に変化させる左右の連続蹴りをお見舞いする。

次々と撃ち込まれていくスパイクがヘラの体を穿ち、流れ出す鮮血がその体を染めていくがヘラは気にも止めないが如くシェリーの方に向き直った。

ヘラと目が合った瞬間、ちょうど両足のスパイクが弾切れを起す。

シェリーは一度距離を取ろうとバックステップで後ろに下がったが、ヘラは即座に間合いを詰めてくる。

（掛かった！）

相手の目論見通りの動きにシェリーが僅かに微笑みながらヘラが突き出してきた腕を右手で掴み、体を相手の外側へと移動させながら腕を引きつつ左足で相手の足を払う。

バランスを崩したヘラが転倒すると同時に、シェリーは右手を離して真上にジャンプし、相手の首筋に全体重を乗せた靴底で思いつきり踏みつけた。

（決まった！）

マーシャルアーツを教えてくれた人物から必殺技として教えられた技が完全に決まった事にシェリーはほくそ笑んだ。

一度模擬戦で手加減して使って相手をICU送りにしてしまった程の技を本気で使った。これで効かない訳が無い。と思ったシェリーの思考は平然と起き上がったヘラによって中断した。

「効かない！？」

驚愕するシェリーに向けて横殴りに来たヘラの腕を慌てて側転で避ける。

（幾らパワーが有ってもウェイトが無い限りは一撃必殺性は少ない）

レンの言っていた事がシェリーの脳裏に浮かぶ。

それを確実に実感しながら、シェリーは足の仕込み銃に強敵用の時限信管内臓型のボムスパイクを装填する。

（コンビネーションはあくまで有効打に繋ぐ為の物だ）

ヘラに向けてラッシュを掛けようとした時にその言葉がシェリーの頭をかすめた。

攻撃をラッシュから受け流しに変更し、シェリーはヘラの突き出してきた腕を左の裏拳で逸らし、右のストレートをボディに叩き込んで一瞬動きが止まった所にミドルキックを食らわし、即座に離れた。

ヘラがシェリーを憎し気に睨み返してきた時、胴体に撃ち込まれたボムスパイクが爆発し、肉片を撒き散らす。

（効いてる！）

相手がよろけたのを見たシェリーが再び攻撃を開始しようとした時、相手が大きく息を吸い込むのが見えた。

（見た目だけで相手の攻撃方法を判断するな。意外な攻撃をしている事もある）

シェリーはとっさに横に跳ぶ。

先程までシェリーがいた空間を、ヘラが吹き出した霧状の何かを通り過ぎ、それにふれた床がゆっくりと融解していった。

（強酸！？胃液！）

シェリーの頬を冷や汗が伝う。

一瞬避けるのが遅ければ確実に致命傷になっていた。

ヘラが低くうめきながらシェリーを睨みつける。

シェリーも負けじと睨み返し、僅かな、しかし長く感じられる時間二人は対峙する。

その間はヘラのあげた咆哮によって破られる。

再び襲い掛かってきたヘラに冷静を心掛けながらシェリーは応戦する。

振り下ろされた右腕を横に動いてかわし、空いた顔面に左フックを叩き込む。

フックと同時に炸裂した電撃に相手がたじろいだ瞬間を逃さず、シェリーは渾身の右ハイキックをヘラの側頭部に炸裂させた。

（やった！）

キックと同時にボムスパイクが撃ち出される反動を感じたシェリーが勝利を確信する。

それが一瞬の油断に繋がった。

ヘラが左手でシェリーの足を掴むと、シェリーが反応する前に思いつき振り回し、壁へと叩きつけた。

「かはっ……………」

シェリーの全身を激痛が走り抜け、息が詰まる。

再びシェリーを叩きつけようとしたヘラの側頭部でボムスパイクが爆発、その手からシェリーの足がすっぽ抜ける。

「倒した……………」

シェリーが立ち上がろうとした時、掴まれていた足首に激痛が走る。

（くじいた？でも、もう大…）

シェリーの目前で、顔の半分を吹き飛ばされたヘラが悠然とその

場に立っているの見た瞬間、シェリーの思考に圧倒的な恐怖が襲った。

「嘘……頭部が欠損しているのに生きているなんて……」

思考は相手の攻撃で中断する。

慌ててかわした拍子に、足首に再び激痛が走る。

（実戦では痛みを必要以外は無視しろ、隙が出来る）

（無理！そんなの！）

シェリーの目じりに涙が浮かぶ。が、敵はお構いなしに攻撃してくる。

（この足じゃキックは使えない………）

シェリーは痛みをなんとか我慢しながら構える。

（でもパンチじゃ効かない………）

拳を必要以上に強く握り締めながらシェリーは奥歯を強く噛み締める。

（でも私が戦わなきゃクレアとレオンが死んじゃう！）

涙が溢れてくるのを感じながら、シェリーは勇気を振り絞り、目の前の強敵を見た。

（よく見ておけ）

ふとその時、レンが訓練の最後に見せてくれた技を思い出した。

（踏み込みと同時に全身の筋力を集中すればこういった芸当が可能になる。格闘技の方が威力は大きいはずだ）

レンが言っていた事を思い浮かべながら、シェリーは足をずらし、体重を平均的に掛けていく。

（あれしかない！）

シェリーは両腕を下ろしながら、プロテクターのスタンガンのコンデンサースイッチを入れる。

低い音と共に、充電が開始されていく。

それを聞きながら、シェリーが両腕を腰の高さまで下げ、腰だめに両拳を構える。

（チャンスは一度きり。失敗すれば、私も、クレアも、レオンもみんな死んじゃう……）

こちらに飛び掛るタイミングを見計らっているヘラを見据えながら、シェリーは呼吸を整える。

（力を貸して、レン！）

自分の知りうる限りの最強の人物を頭に浮かべながら、シェリーは全身に力を込めた。

充電の完了した事を告げる電子音と、ヘラが飛び掛ってくるのは完全に同時だった。

相手との距離がパンチの間合いに入ると同時に、シェリーは両足に力を込める。

G ウイルスの影響で強化されている筋肉が、一瞬にして驚異的なパワーを生み出し、それに体重を乗せた力が上へと伝達されていく。

肩口まで来たその力を、最小限度の動きで拳へと伝えていく。驚異的なまでの力を秘めて突き出された両拳がヘラの腹部に突き刺さり、それと同時に大電圧が相手の体内へと開放されていた。

「Aチーム！生きてる！？」

ジルが部屋の中に飛び込みながら銃を構える。  
そこには、対峙したまま静止しているシェリーとヘラの姿があった。

「シェリー！どいて！」

ジルが声を掛けた次の瞬間、ヘラの口から膨大な量の血が溢れ出した。

「……………え？」

救援に来たBチームの目の前で、なおも血を吐き出しつつ、力の失われたヘラの体が崩れ落ち、床へと倒れ伏した。

それに続いて、シェリーが力を失って床に座り込む。

「シェリー！無事なの！？」

「え、えへへへ……………」

力無く笑いながら、シェリーが背後を向いた。  
そこには、安堵と喜びの表情が有った。

「レオンは生きてるぞ!」

「クレアも無事だ!」

Bチームに肩を借りながら、クレアが立ち上がり、レオンが目を覚ます。

「シェリー、君一人で?」

「うん!」

レオンの問いに、シェリーが満面の笑みで答える。

「やったね、シェリー」

「うん!」

親指を上にするサインを出しているクレアにシェリーがVサインで答える。

「立てる?」

「ちよつとくじいてて……」

ジルに肩を借りながら、シェリーが立ち上がる。

「こちらAチーム。全員負傷しながらも、シェリーが単身でヘラの撃破に成功。以降の調査を不能とみて撤退許可を願う」

『了解、AチームはBチームの護衛の元拠点まで撤退してくれ。よくやったぞ、シェリー!』

『すげえな!』

『やるじゃない』

『マーベラス!』



皆からの賛辞の中、シェリーはただ一人だけの声だけが聞こえてきた。

『よくやった』

レンのたった一言の声が、何故かシェリーの耳に残っていた。

「私もSTARSの一員だもん」

シェリーは満面の笑みで小さくガッツポーズを取った。

誰もいなくなった部屋の中で、死体と化していたヘラの指が微かに動いた。

やがて、その体が急激的に変化していく事に気付く者は誰一人としていなかった。

## 第七章 『絶体絶命！？忍び寄る深海の殺戮者！』

硬質な音を響かせる無数の足音が通路に響く。

それに続くように複数の銃声が通路に響くが、足音は意にも介さないように歩を進めていった。

「駄目だ！効かねえ！」

「仕方ねえ！切り札を…」

銃声を放っていた者達の言葉は、足音の持ち主が突き出した巨大なハサミによって中断させられる。

「おわつと！」

「はっ！」

ハサミが閉じられる前にその場にいた者達は飛び退き、ちょうど中央に立っていた者が飛び退き様に繰り出した刃がハサミを付け根から斬り落とす。

宙を舞ったハサミが床に突き刺さる音に、別の足音が重なる。

「こつちからも来やがった！」

「こなくそ！」

両脇にいた二人がそれぞれ背中から切り札に取っておいたバーレットM82A1アンチマテリアルライフルとAT4ロケットランチャーを構えた。

『食らいやがれっ！』

期せずして同じ言葉を叫びながら、二つのトリガーが同時に引かれる。

放たれた12・7ミリ弾はライフル弾をも弾いた殻を突き破り、ロケット弾は殻ごと相手を木っ端微塵に吹き飛ばした。

周囲一帯に吹き荒ぶ爆風が晴れた後、そこには殻に空いた弾痕から体液を垂れ流しながらひっくり返って足をケイレンさせている敵と、いくつかのパーツに別れて散らばっている敵の姿があった。

「ざまあ見やがれ……………」

「思い知ったか……………」

荒くなっている呼吸を整えながら、カルロスが空になったロケットランチャーをその場に投げ捨て、スミスは背にM82A1を背負い直した。

「こちらCチーム、倉庫前通路にて全長2m程のカニ2体と遭遇、交戦しこれを撃破。ライフル弾程度では殻に弾かれるので同様の敵固体と遭遇した際は十分に注意されたし」

『了解した。弾はまだ足りてるか？』

バリーからの返信にその場にいる全員がポーチやポケットをまさぐって残弾をチェックする。

「オレは12番ゲージが残り40発前後、カスール弾はまだ十分、12・7ミリ弾が9発」

「こっちはライフル弾が100発位に、グレネード弾が0、ロケットランチャーが二つ」

「オレが9ミリ弾があと90、無いな。大物が立て続けに来られたまらずいな」

「そこいらで入手出来なかったら動力炉動かした後で一遍戻る、っ

てのはどうだ？」

『それがいいだろう。Aチームの連中が負傷で戻ってきたから、お前らも無茶するな。あと30分もすればGIGNが到着する。いいか、くれぐれも気をつける』

「了解」

「ふんぬ、ふぬおおお……」

第二動力室と同じ方法でロックを無効化したドアをスミスが力任せにこじ開ける。

中に敵がいらないのを確認してから、三人は目的の物を物色し始めた。

「いいか、まずプラグにコード、ドライバーにレンチに……」

「そんな一遍に言うな！分からなくなる」

「コードってこれでいいか？」

「もう少し細いのがいいが、まあ使えない事はないだろ」

「工具箱有ったぞ」

「中身確かめといてくれ。ちゃんと入ってるだろうな？」

「入ってる入ってる。プラグなんかも有るぞ」

「おい、ちよつと来てくれ」

「なんだ？」

奥の方を探していたレンの声に、カルロスとスミスがその場に向かう。

そして、そこに転がっている物に気付いて顔色を変えた。

「うげっ！」

「なんでこんな所にハンターの死体が転がってんだ？」

そこには、死後数日が経過していると思われるハンターの死体が、ドアに挟まれるように倒れていた。

「そっち側に弾痕が刻まれている。誰かと交戦したみたいだな」

レンが向こう側の壁を見た後、ハンターが挟まっているドアのプレートを見た。

そこには『WEAPON ROOM（武器庫）』と表示されていた。

「ちょうどいい。弾丸を補給していくか」

「そうだな」と

スミスがエラーを起こしているドアを強引にこじ開ける。

ちょうどその正面に、首を半ばまで切り裂かれた白衣を着た男が壁に背をもたれるようにして死んでいるのが視界に飛び込んできた。

「相討ち、だったみたいだな……………」

「ああ……………」

その手に握られたままの銃を抜き取ると、レンは恐怖に見開いたままになっていた死体の目をそっと閉ざした。

「自分らの作ってたモンに殺されてりや世話ねえな」

「因果応報だろ。少なくともこいつは死ぬ寸前に散々後悔しただろうがな」

ふと、レンは死体の懷に一つのファイルが入っているのに気付く

と、それを手に取ってめくって見る。

「これは？」

「何だ？機密書類か？」

脇から覗いて見たスミスがレンと一緒に眉根を寄せた。

「読めねえ……………」

「フランス語みたいだな。タイトルはROWデータ？」

ファイルを次々とめくっていくが、そこには専門用語と化学式、そしてやたらと長い数字が書かれており、知識の無い二人にはまったく分からない代物だった。

「機密書類なのは確かだが、学者でもなければ理解は不可能のようだな」

「あとでシェリーにでも見せりゃ分かるだろ。取り合えず取っとけ」

レンは懷にファイルと、それと対になっているらしいMOディスクを仕舞い込んだ。

「おい！すげえぞ、こいつは！」

カルロスが武器庫の奥の方を覗き込んで歓声を上げる。

そこには研究所内部とは思えない程の様々な銃火器が並んでいた。

「こいつあ確かにすげえ……………SWATの武器庫にだってこんなにねえぞ」

スミスが興味深そうに並んでいる銃火器を眺め回す。

「対BOW用に色々揃えてたみたいだな。水中銃とかが多い」

「APS水中用アサルトライフルか。初めて見たな」

「何だ？この棒？」

「馬鹿！そいつはショットシエル、サメ用の弾丸が仕組まれたモリだ！振り回すな！」

「お！対BOW用ガス弾が有るぞ」

「さすがに12・7ミリやカスールは無いか……………」

それぞれが自分の武器に合った弾丸を補充し、念の為にレンガショットシエルを四本ガンベルトの後ろに挿し、スミスが水中銃を、カルロスがAPS水中用ライフルを持った。

「……………何か重装備越して間抜けに見えるな、これって……………」

「言うな。これから何が起こるか分からんからな。持っておくに越した事は無いだろう」

「出来れば水中戦なんてごめんこうむりたいけどな」

「Cチーム、これより第二動力室に向かう」

ヘリの乗降口に腰掛けたシェリーが、ひざの上に置いたノートパソコンに次々とデータを入力していく。

一通り入力し終わると、集めてきたファイルを一枚あたりにほんの数秒目を通してただでめくっていきながら、その全てを頭で整理すると再びキーボードを叩く。

「シェリー、怪我は大丈夫？無茶してない？」

ヘリ内部で横になっていたクレアが心配そうに聞いてくるが、シエリーは振り向いて笑顔を見せる。

「大丈夫、それにレン達はまだ戦っているんだもん。私は私に出来る事でサポートしていくの」

またキーボードを叩きだしたシエリーの背中を見ながら、後ろの座席に座っていたレオンが頭に巻かれた包帯に手を当てながら小声で呟く。

「無茶の出来る年頃だな」

「中年みたいな事言うのね」

クレアが苦笑しながら呟き返した。

「場数を踏むと冷徹な判断が出来るようになってくる。いや、そういう判断しか出来なくなってくるの間違いか」

判断が鈍るのを嫌って鎮痛剤を服用しなかった為に襲ってくる痛みに顔をしかめながらレオンが呟くのに、クレアがくすりと笑った。

「それだけじゃないと思うけど?」

「そうか?」

「微妙な年頃なのよ」

「?」

レオンが疑問符を頭に浮かべると、遠くからこちらに近付いて来るヘリのローター音が聞こえてきた。



「G I G Nのご到着か。B O W相手にどこまで戦力になるかな」

着陸したヘリから次々と降りてくる特殊部隊を窓から見たレオンが”冷徹な判断”を下す。

ふと、その中に白衣を着た明らかに場違いな人物が混じっているのに気付いた。

その人物がレベッカと何かを話すと、まっすぐレオン達のいるヘリへと向かってくるのが見えた。

「こつちに怪我人がいるって聞いたんだけど」

その人物 メガネを掛けた金髪の若い女性の流麗な英語の問いかけに、シェリーが顔を上げてそちらの方を向いた。

「私は軽傷だけど、中の二人が重傷みたいなんです」

「分かったわ」

シェリーの脇から機内に入った女性がクレアとレオンを交互に見ると、まずレオンの方へと近寄ると医療用具の入ったバッグを開ける。

「あんた医者か？」

「正確にはまだ医学生。大丈夫、怪我の手当ては慣れてるから。で、何にどうされたの？」

まるで何が起こったかが分かっているのかの様な質問に、レオンは首を傾げながらも診察を受けた。

「これで、OKと」

カルロスが最後のナットを閉める。

「ようし、スイッチ入れるぞ」

スミスが起動スイッチを入れると、低いうなり音と共に動力炉が起動し、動力が研究所の各所に伝達されていく。

「こちらCチーム、動力の復活に成功。今後の指示を乞う」

『今G I G NがBチームの先導で研究所内部に突入した。合流するか？』

「いや、チーム戦闘に長けた連中にオレみたいな異質な戦闘方法の奴が混じったら混乱するだけだ。こちらは単独で行動するのがベストだと思うが」

『了解した。それでは先に地下研究棟に向かってくれ。強敵がいたら無理はするな』

「了解」

「研究棟は西エレベーターからだな」

カルロスがモバイルでマップをチェックしてルートを割り出す。

「それじゃあ、行くとしますか」

スミスが手に持ったマーベリックで軽く肩を叩きながら笑みを浮かべた。

エレベーターが開くと同時に放たれた弾丸が、こちらを向こうとしていたゾンビ達を瞬く間に肉塊へと変える。

「こちらCチーム、地下研究棟に到着と同時にゾンビ4体と遭遇、交戦してこれを殲滅。これより第一研究室に向かう」

『こちらBチーム、ただ今地下二階までをG I G Nが制圧。途中G I G N隊員一名がハンターに襲われ重傷。付き添い二名と共にベースまで撤退した模様。これより地下三階の第二制御室に向かう』

『Cチーム、研究室には何がいるか分からんから充分に注意しろ』  
「了解」

減った分の弾丸をマガジンに込め終わると、それを銃に戻しながらレンが復唱する。

「えーと、第一研究室はこっちか」

マップをチェックしたカルロスが右手の通路を見る。

何故かやたらと長い通路の端の方に確かにドアの様な物が見えた。

「研究室って割には随分と馬鹿でかいな。一体どんな実験やってやがるんだ？」

「多分見たくも無い様な物がずらっと並んでやがるんだろうよ」

脇からモバイルを覗き込んでいたスミスの問いに、カルロスはさもイヤそうな顔をする。

「ここがBOWの生産工場なら、多分あるのは生産ラインだろうな。どういふのかは想像したくないが……」

「想像しなくてもすぐに見れるだろうよ。出来れば見たくもねえがな」

そこで、ふと先頭を歩いていったレンが足を止める。

「どうした？」

「……僅かにだが、この先の床の具合が変わっている。トラップかもしれない」

「そうか？」

スミスが何の変哲もなさそうな床を見て首を捻る。

「気の回し過ぎじゃあないのか？」

同様に首を捻っているカルロスの目の前で、レンはパウチから一発の弾丸を取り出すと、それを前へと弾いた。

弾かれた弾丸は緩やかな放物線を描き、床へと甲高い音を立てて落ちる。

途端、レン達のほんの50cm程手前の横の壁から細いが頑丈そうな棒が次々と飛び出し、反対側の壁へと交互に突き刺さっていく。

やがて、第一研究室のドアのすぐ手前で棒が出てくるのは止まった。

『うげっ……………』

「多分侵入者用じゃなくて、BOWが逃亡した時用のトラップだな、これは」

絶句している二人の前で、レンが冷静にトラップを分析する。

「で、問題はどっやってここを通るかだ」

「匍匐前進して行くか？」

「対BOW用のトラップだってんなら、二重三重に仕掛けられてる

って可能性も在るぜ」

「それじゃあレンに出てくるのを次々と斬ってもらったのは？」

「お前オレを何かと勘違いしてないか？一人なら出来るかもしれんが、三人で突破するとなるとさすがに無理だ」

「それじゃあ、どうすんだよ？」

男三人が全員顎に手を当てて考える。

『こちらBチーム、第二制御室を制圧完了。今からセキュリティを解除するから、Aチーム直にそこを通れるわよ』

「……………だつてよ」

「悩む必要も無かったか」

彼らの目の前で、反対側の壁に突き刺さっていた棒がゆっくりと元の壁に戻っていく。

『セキュリティを解除したわ。もうトラップの危険は無いわよ』

「本当か？」

スミスがスイッチになつていられると思われる辺りの床を足を思いつきり伸ばしてつま先で用心深く軽く何度か突く。

壁が反応しないのを確認した後、スミスは用心深く床を踏みしめた。

「大丈夫のようだな」

「ああ」

注意して抜き足差し足で歩くスミスの横を、レンとスミスが平然と歩いて抜き去る。

「おい、こら待てよ！」

「置いてくぞ」

スミスが二人の後を慌てて追いかける。

ロックが解除されたドアのスイッチをレンが押すと、今までの苦労がウソの様にあっさりとドアは開いた。

「な、に……………!？」

「ん？どうし…」

レンが今まで見せた事もない様な驚愕の表情をしているのを見たスミスが何気に室内を覗き込み、思わず握っていた銃のグリップを放してその場に立ちすくむ。

そこには、薄暗い室内に並ぶ無数のBOW用の調整槽が並び、そして中には調整中のBOWが無数に入っていた。

「間違いねえ。ここがBOWの生産工場だ。だがこの数は……………」

同じ物を見た事が有るカルロスが室内に入りながら、並べられている調整槽の多さに絶句する。

「50……………いや、それ以上か？こんなにあるとはな……………」

「う……………」

室内に入ってきたレンとスミスが周囲を見回し、顔色を変える。

調整槽の中には、完成に近い物から調整途中らしい中途半端な物、そして、見た目は普通の人間の様でありながら、すでに目と爪がハンターの物へと変わりつつある調整初期の物までが並んでいた。

「こちらCチーム、BOWの生産ラインを発見。70近くは有る……」  
「人間がベースの物もあるってば聞いちゃいたが、直に見るときついな……」

スミスが顔を蒼白にしながら室内を探索していく。

出荷された後らしい空の調整槽の隣に、ハンターへとなりつつある少女が入っているのを見つけたスミスが顔面を更に蒼白にさせて口に手を当て慌てて部屋の隅へと走る。

「一つ聞きたい…… BOWに調整途中の人間は戻せるのか？」

「……調整の初期段階で自我はほぼ消失するらしい事が今までの調査で判明している。残念だが、手遅れだ……」

「そうか……」

「その場はそのままにしておいてくれ。アンブレラの人体実験の貴重な証拠だ」

「……ここには調整過程を記録した資料もあるはずだ、それだけで充分だろう」

レンはすぐ側に置いてあった調整過程を示した資料を握り潰しながら、あくまで無感情に話す。

「実際の物的証拠を見なければ納得できない連中もいるんだ。辛いとは思うが……」

「それまでこいつらを苦しませるといのか!？」

レンが普段からは想像できないような激昂した声で叫ぶと、刀の鯉口を切りながら手近の調整槽へと歩み寄る。

「すまない……」

日本語で呟きながら、レンは一気に抜刀した。

数秒間の間を置いて、調整槽に切れ目が入り、やがてそこから培養液が漏れ出したかと思った瞬間、中に入っていたBOWの体から鮮血が溢れ出し、圧力に耐えられなくなった調整槽が粉々に砕け散り、中身の培養液とBOWを床の上へとぶちまける。

「レン！？お前何を！？」

驚くカルロスの目前で、レンは完成、未完成を問わず次々と調整槽ごと中に入っているBOWを斬っていく。

「レン……………」

片手で口元を拭いながらスミスも呆然とその様子を見つめる。

静かな室内に、ガラスの割れる音と中身の培養液と両断されたBOWが床へと転がり落ちる音が響き渡る。

やがて、最後の調整槽 スミスが発見した少女の物をレンが無言で両断する。

胴体から両断された少女が床へと崩れ落ち、その獣の物へと変わっている瞳がレンを見ながら何かを哀願するように口を開閉させるのを見たレンが刀を逆手に構え直しその頭部を貫く。

短くケイレンするような仕草を見せた後、少女が動かなくなる。

その瞳からは涙とも調整液とも取れないような液体が流れていた。

「レン、お前……………」

「どうせ現世をさ迷う魂ならば、冥府に送ってやるのがせめてのも慈悲だ」



その顔に今まででもっとも冷徹な表情を張り付かせたレンが刀を振るって鞘へと収める。

「そしてそれは陰陽師であるオレの仕事だ。悪いな、証拠を残せなくて」

『いや……………確かにあんたにしか出来ない事の様だ。すまない、サムライ……………』

「言ったはずだ。オレはサムライじゃない」

バリーにそれだけを言うと、レンは踵を返して室内の探索を始める。

「やっぱりサムライだよ、あいつは……………」

スミスがそう呟くと、レンの後に続いた。

「はい、これで大丈夫。ちょっとムチうち気味になるかもしれないけど、後遺症の類の心配は無いわ」

「それはどうも……………」

背中一面に張られた湿布の匂いに辟易しながら、クレアはいそいそと服を着込んでいく。

「あんた、フランス人じゃないみたいだが、一体どこの人間だ？」

強引に壁の方を向かせられていたレオンが、手当てをしてくれた女性の英語が流麗なのをいぶかしむ。

「生まれはアメリカよ。今は日本に住んでるんだけどね」

「ニホン？一体こんな所に何しに来たの？」

「実は、どこぞに消えた婚や…」

「大変！」

クレアの疑問に答えようとした女性の言葉が、突然叫びながら立ち上がったシェリーの声にかき消される。

「地下研究棟にはとんでもなく危険なBOWがいるわ！レン達を引き返させないと！」

装備の類を全て外していたため、シェリーは片足を引きずりながらも無線機のある方へと走っていく。

「……そう、やっぱりここにいるのね」

女性はポツリと呟くと、ふとシェリーが落としたファイルを手に取りって見た。

そこには”ネメシス R詳細データについて”と書かれていた。

ゆつたりとした動きで、それは自分用に調整された海水の中を泳いでいた。

つい数日前までは開閉可能な仕切りよって隔絶された隣のプールに新鮮な獲物がいたはずなのだが、何故か開放されたままにそこには今半ば腐敗しかかった獲物しかいなかった。

空腹と退屈を感じていたその感覚に、僅かだが何かがこの場に近付いてくる事を捕らえた。

人為的に上げられたその知性は、その近付いてくる物を離れた

場所から観察する事を決める。

それが自分にとって獲物かどうかを判断する為に。

「ここには目新しい物はないようだな。先に進むか」

「……ああ……」

重苦しい雰囲気を漂わせながら、Cチーム一行は死臭と鼻を突く培養液の匂いが立ち込める部屋から続いているドアを開ける。

ドアが開くと同時に、そこからは潮の匂いが流れ込んできた。

「ん？」

いぶかしみながらその部屋に一步踏み込んだ一行はそこにある光景をみて絶句した。

「何だこりゃ？プール？」

「だよな？」

そこには大型体育館程の大きさはあるつかという部屋の半分が大きなプールになっていた。

靴音が変わった事に気付いたカルロスが下を見ると、足元の床も透明な材質で作られ、そこにもプールが広がっていた。

「海洋生物の飼育用か何かみたいだな」

「海洋生物ってこれか？」

スミスが足元の床の下に浮かんでいる、腐りかけたイルカの死体を指差す。

プールのあちこちにそうしたイルカの死体が浮かび上がり、まだ生きている物も弱々しく泳いでいるのが精一杯の状態となっていた。

「かわいそうにな、こいつらも犠牲者って訳か」

「犠牲者は犠牲者でも、少し違うようだがな」

「何がだ？」

レンはそれに答えず、足元に転がっていた給餌用と思われるバケツをプールの中央付近へと蹴り飛ばす。

それが着水した途端、今まで死体だと思っていたイルカ達が一斉にバケツの落ちた辺りへと凄まじい勢いで襲い掛かった。

「うげ……………」

「ひょっとしてこいつら、ゾンビ化してやがるのか？」

「一目瞭然だと思うが」

やがてそれが餌ではないと分かったのか、ゾンビイルカ達は散ると再び弱々しく泳いだり、死体のように動かなくなったりした。

「どうする？研究資料は多分この奥だぞ」

「どうするもこうするも、行くしかないだろ」

「あそこをか？」

スミスは愕然とした表情で前を見た。

奥の部屋へと続くドアは、ちょうどプールの中央を通る通路の先にあり、その両脇にはゾンビイルカ達がひしめいていた。

「気付かれないようにそつと行くか？」

「ああなるかもしれんぞ」

レンが通路の中央辺りを指差す。  
そこには細長い何かの軀がっていたが、よく見るとそれは食い干切られた人間の片足だった。

「最悪……………」

「一匹づつ倒してくのが一番だろ。弾はたっぷりあるからな」

カルロスがM4A1のセレクターをフルオートにセットして、手近な一頭に狙いを付ける。

「妥当だな」

「それしかねえか」

レンがサムライエッジを構えて別の一頭を狙い、スミスが右手にゾンビバスターを、左手にマーベリックを構える。

期せずして、四つの銃声が同時に響く。

死んだように水面に浮かんでいた一頭が最初の一撃で額を撃ち抜かれて絶命する。

異常に気付いたゾンビイル力達が一斉に三人のいる場所へと向かってくる。

ある者は頭部に収束されたライフル弾を食らい、ある者は的確に額に収束された9ミリ弾が脳髓を貫き、ある者は一発の改造力スール弾で頭部に風穴を開けられて次々と絶命していく。

水面から跳ね上がって襲い掛かろうとする者もいたが、至近距離から浴びせられる12番ゲージ散弾とグレネード弾がその体を貫き、振るわれる白刃が一撃でその体を両断した。

広い室内に無数の銃声と、音程のずれた弦楽器を思わせる咆哮と悲鳴が室内に木霊する。

水面から弧を描いて襲い掛かった最後の一頭が、その口内に撃ち

込まれたグレネード弾によって頭部が半ばから吹き飛ぶ。

「制圧完了、っと」

カルロスがアタッチメントのM203グレネードランチャーからグレネード弾の空薬莖を床へと落とす。

「何だ、水中用装備なんて持つてくる必要無かったな」

スミスが弾切れを起こしているマーベリックに装弾しつつ笑った時だった。

『Cチーム聞こえてる！？レン、まだ生きてる！？』

「シェリーか、どうした？」

インカムから聞こえてきたシェリーの切羽詰った声に聞いていた全員の頭に疑問符が浮かぶ。

『早くそこから逃げて！そこには水中用BOWの最新傑作、ネメシスーRがいるわ！まともに戦ったら勝ち目はないわ！』

「ネメシス R？」

「それって、こいつの事か？」

スミスが青い顔で足元を指差す。

連られてカルロスとレンが空薬莖と返り血が散らばっている床をみて同時に声を失った。

「な！？」

「こいつが……………ネメシスーR……………」

そこにはゾンビル力達よりも遥かに巨大な影が悠然と彼らの足の下を泳いでいた。

全長は10m近くは有ろうかというその影はまるで彼らを値踏みするようにその足元をゆっくり旋回する。

「こんな奴に襲われたら一たまりもないぜ……………」

「どうする？逃げるか？」

「相手の能力が未知数だからな。 unnecessary 戦闘は……」

そこで、水中からこちらを見上げたネメシスーRと床下の水面を見ていたレンの視線が重なる。

その視線の先でネメシスーRの顔が微かに歪んだようにレンには見えた。

(笑った……………?)

そう見えた事に、レンの頬に冷たい汗が浮かんだ。

が、その後にネメシスーRは突然水中で大きく口を開く。

「何だ？」

スミスとカルロスがネメシスーRの意味不明の行動に思わず床下を凝視する。

しばらく口を大きく開けた後、それを閉ざした瞬間、突然ネメシスーRの周囲から何かが無数に飛び出し、床へと突き刺さる。

その内の何本かは床を貫通し、その場に居た者達へと襲い掛かった。

「なんだとっ!？」

「何だこりゃ!？」

「おわあああ！」

戸惑いながらも三人とも持ち前の反射神経でその攻撃をかわす。その発射された何か よく見るとそれは直径5cm前後の無数の触手だった を完全に見切つて僅かに体を逸らしただけで避けたレンが後ろに一步引こうとして、突然その足が沈む。

（しまった！）

レンが後ろを見ると、彼の足は触手の攻撃によつてもろくなつていた床を踏み抜いていた。

足を引き抜こうとした時、触手が引つ込むと再度発射される。

それは、確実にレンの周囲に収束されていた。

触手が床に突き刺さると同時に、鈍い音を立ててレンの周囲の床が砕け散る。

「くっ！」

砕けようとする床の破片を驚異的な足運びで渡りながら砕けてない床へと渡ろうとしたレンの足に、貫通した触手の幾つかが絡んだと思つた瞬間、レンの体は水中へと消えた。

「レンー！」

「やばい！レンが引きずり込まれた！」

『何だと！？』

『レンー！』

インカムからシェリーの悲痛な叫びがハウリングした。



空気中から水中へと劇的に周囲の状況が変化する。

普通の人間ならばパニックを起こして闇雲に暴れるような状況で、レンは冷静にまず息を止め、足に絡んだ触手に抜いたままになっていた愛刀を突き刺そうとした。

その時、すぐ目前まで無数の鋭い牙の生えた顎が迫っている事に気付くととつさにその顎へと刃を突き刺す。

レンが突き刺したというよりも、自分から刃へと突っ込んでいた形になったネメシスーRは激しく水中で悶え、触手が緩んだ隙にレンは刀を抜きながらなんとか距離を取る。

慌てて水面へとは上がらず、レンは少し離れた場所から相手を観察した。

（こいつは、シャチ？）

ネメシスーRはシャチをベースにしているらしく、その姿形はシャチそっくりだったがその体は普通のシャチよりも一回り以上大きく、体のあちこちから無数の触手が生え、顔には大きな手術痕があった。

（ネメシスシリーズの水中用か。問題はどうかやって触手を飛ばしてきたかだ）

懷に仕舞い込んだサムライエッジの代わりに腰の後ろからショットシエルを一本取り出してレンは構える。

（長引けば長引く程こちらは不利、短時間に決める！）

こちらに向けて再び襲い掛かってきたネメシスーRに向けて、レンは渾身の力でショットシエルを突き出した。

「この野郎！！」

カルロスがAPS水中ライフルを水面下のネメスーRに向けてフルオートで連射する。

水中使用を前提とされた針のような極細の弾丸が水を貫きながらネメスーRへと突き刺さるが、ネメスーRはさしたるダメージにもなっていないのか、平然と泳ぐとレンへと襲い掛かる。

レンはショットシエルを手にそれを何とかかわしながらショットシエルをネメスーRへと突き出す。

双方からの攻撃によりネメスーRの動きは少しずつ鈍くなってきたが、すでに水面には弾丸の尽きた三本目のショットシエルが浮かび上がってきた所だった。

「くそつたれ！効いてやがらねえのか！」

「いくらレンでもそろそろやばいぞ！」

スミスがちらりと腕時計を見る。

すでにレンが水中に落ちてから三分近くが立とうしており、レンの呼吸は限界に近いであろう事が嫌でも感じられた。

「やっぱり潜るしかないか！？」

「馬鹿言え！潜った途端に食い殺されるぞ！」

「じゃあレンを見捨てるのか！？その水中銃とこのAPSをまとめて叩き込めばあいつだって効くはずだ！」

それが根拠の無い推論である事は言ってるカルロス自身にも分かっていていた。

だが、仲間が危険に晒されている今の状況では、例えそれがどんなに危険だろうともためらっている時間は無かった。

「考えるんだ！なんか手があるはずだ！何か！」

「どうしろってんだ！？潜水専用の装備なんて……」

そこで、カルロスは自分の視線の先に階段が有るのに気付いた。それを目で追っていくとその先には小さな制御室が有り、そこから給餌用らしいフックが伸びていた。

「あいつだ……」

「なんだって？」

「あれから命綱を付けて飛び込んだ！やばくなったら巻き上げりやいい！」

「クレーン程度じゃスピードはたかが知れてるぞ！」

「じゃあお前が引つ張れ！重石でも付けてな！」

「！分かった！」

スミスは制御室に走り寄ると、制御盤を操作してフックを降ろし、カルロスはそこいらに転がっている酸素ボンベらしきポンベを体に結びつける。

階段の下に有った観測用と思われる機械の入ったオリからチェーンを外すと、片方の端をカルロスの胴体に結び、もう片方はフックを通して階段を下りてきたスミスに握らせる。

「今助けるぞ！レン！」

カルロスは右手にAPS水中用ライフル、左手に水中銃を持つと、一気に水面へと身を躍らせた。

レンの口から、少量の気泡が吐き出され水面へと浮かび上がって

いく。

右手に村正、左手に最後の一本となったショットシエルを握り締め、体は必要のない限り脱力させてレンは水中へと留まる。

日本での修行で呼吸法の鍛錬も行っていたため、常人よりも遙かに長い時間水中に潜っている事は出来るが、それも限界に達しようとしていた。

（まずいな……………）

僅かに手足で水を掻いてその場に立ち泳ぎの状態で留まりながら、レンは自分の前にいるネメススーRに精神を集中させる。

先程までの猛烈な攻撃を中断させ、レンの周囲を旋回しながらネメススーRはこちらの様子を窺っていた。

今呼吸の為に水面へと行こうとすれば、襲ってくるのは確かだった。

（仕留めるのなら、一撃で確実にやらなければ間違い無くやられる。だが、どうすればいい？）

襲ってきた時に撃ち込んだはずのショットシエルの弾丸は、相手の予想以上のスピードと水の抵抗などもあってどれもが急所からは外れていた。

だが、踏ん張る場所が存在しない水中ではもつとも便りにしている光背一刀流も使えない。

（せめて踏ん張りが効く所、例えば……………）

ネメススーRを視界に捕らえたまま、レンが周囲を見ようとした時、ちょうど真正面に来たネメススーRがレンの方を向くと、離れている場所にも関わらず大きく口を開けた。

（襲ってくるのか？いや……）

その開いた口の中に、周囲に浮かんでいたゾンビルカの肉片が吸い込まれていくのを見たレンが怪訝に思った時、ふいにその口が閉じられる。

（これは！そうかあれは取り込んだ水の水圧で！）

それが攻撃の前兆である事に気付いたレンがかわし切れない事を悟ると少しでもダメージを少なくしようと身を丸める。

次の瞬間、魚雷のような勢いを持った無数の触手がレンを襲う。その内の一本が丸めた手足の隙間を掻い潜り、レンの胴に突き刺さる。

防弾用ケプラー材が裏地に縫いこまれた服とその下のチタン製プロテクター、対ショックスーツが貫通は防いだが、そのあまりの威力にプロテクターが大きくへこむ。

レンの口から、大量の気泡と一緒に鮮血が溢れた。

生じた隙を逃さず、ネメシスーRは鋭い牙の生えた顎を大きく開きレンへと襲い掛かる。

レンはとっさに刀を振るおうとするが、水中の動きではそれは間に合いそうになかった。

それでもレンが相手から目を逸らさず、最後の抵抗を試みようとした時、突然大量の気泡と共に何かが水面から飛び込んできた。

それが何かを確かめるよりも早く、発射された無数の水中弾とモリがネメシスーRへと突き刺さった。

予想外の攻撃に、ネメシスーRの攻撃がそれ、レンの横を大量の血を流しながら通り過ぎる。

飛び込んできたカルロスがそれを見て笑みを浮かべると、そちらの方をより強敵と判断したのか、ネメシスーRはカルロスへと襲い

掛かった。

「来たな！」

ネメシスーRがカルロスへと近付いていくのを見たスミスはチェーンを右手で強く握り締める。

階段の最上部で体に大量の重りを身につけたスミスは、一気に階段から飛び降りた。

最上部まで持ち上げられたフックを通してチェーンが一気に引つ張られ、カルロスが一息に水中から引きずり出される。

それを追ってネメシスーRが水中から跳ね上がってカルロスに噛み付こうとした瞬間、その体に大きな弾痕が立て続けに穿たれる。

「残念」

スミスが左手に構えていたM82A1の残弾全てを立て続けに撃ち込んでいた。

大きく顎を開いたまま、ネメシスーRは再び水面へと落ちていく。

「やったか？」

「いや、まだ生きてやがる」

最後の力を振り絞って水中へと潜っていくネメシスーRを見た二人がはたと同時に気付いた。

「レンは！？」

「まだ水中だ！」

水面へと跳ね上がったネメシスーRの巨体が水しぶきを上げながら水中へと戻る。

その体からは、明らかに致命傷になるだけの血が流れ出しているのをレンは水中から見上げていた。

そのネメシスーRが最後の力を振り絞り、水中に血の帯をたなびかせながら大きく顎を開いてレンへとまっしぐらに向かっていく。急激的に双方の距離が縮まっていく中、レンは僅かに斜め後ろ見ると、冷静に相対位置と相手の向かってくる方向を計算した。

（呼吸はもはや限界。チャンスは一瞬！）

レンは抜いていた刀を鞘へと納めると、まだ弾丸の残っているシヨットシエルを捨て、やや背を丸めて両手で輪を作るようにして胸の前に構える。

ネメシスーRが眼前に迫った瞬間、レンは両手を突き出すと唯一牙の届かない場所、ネメシスーRの鼻先を両手で押さえ込んだ。

無論その程度で勢いが殺せるわけが無く、レンはそのままネメシスーRに押されてより深い所へと沈んでいく。

（もう少しだ）

レンは背中に掛かる猛烈な水圧に耐えながら、必死にネメシスーRの鼻先を抑える。

やがて、その先にプールの底が迫っていき、激突しようとした瞬間、ネメシスーRの勢いによってレンの両足がしっかりとプールの底を踏みしめた。

（今だ！）

その一瞬を逃さず、レンは右手を放すと刀の柄を強く握り締め、踏みしめられた両足から伝導された力を腕へと伝え、水を斬り裂きながら一気に抜刀した。

「上がってこないぞ？」

「ひょっとしてやられちゃったのか!？」

「もう一度行くぞ!」

カルロスがAPSのマガジンを交換して再び潜ろうとした時、突然水面に水の存在しない細い直線状の空間が出現する。

「な!？」

何が起きたか分からずカルロスが呆然としている所で、水面に大量の血が浮かび上がってくる。

「どっちのだ？」

スミスが唾を飲み込みながら水面を凝視する。  
やがて、水面に一つの影が浮かび上がり、それは水面上へと出ると、大きく息を吸い込んだ。

「生きてたか!」

「無事かレン!」

「生きてるよ」

レンはその場で咳き込みながら呼吸器系に入った水と自分自身の血を吐き出すと、プールの端まで泳ぎ着きプールサイドへと上がる。



「酷い目に会った……………」

「怪我は無いか？」

「少しやられたな」

「まずこっち降ろしてくれ……………」

「おう、そうだな」

レンが袖を絞っている間に、スミスがフックを操作してカルロスをプールサイドへと降ろす。

ちょうどその時、水面に死体となったネメシスーRが浮かんできた。

「これお前がやったのか？」

「ああ」

ネメシスーRの体には無数の弾痕と複数のモリが突き刺さり、左側の顎の付根から胴体の半ばまでに大きな斬撃が刻まれていた。

「こちらCチー……………」

通信を入れようとした所で、レンは自分のインカムが機能していない事に気付く。

「壊れたか？」

「オレのもだ」

上着を脱いで絞っていたカルロスがインカムを小突くが、機能は完全に停止していた。

「こちらCチーム、スミス。ネメシスーRの撃破に成功。なお、戦

闘の際にレンが負傷及びレン、カルロス両名の通信機が故障。今度から防水型にしてくれ」

『了解。レンの負傷の具合は？』

バリーからの質問に、スミスがレンの方に視線を送る。

「怪我は大丈夫かだよ」

「少し痛むが問題ない」

「問題ないそうだ」

『そうか、一度戻るか？』

「いや、目的地は目の前だ。このまま進もう」

「風邪引いちまいそうだけどな」

「Ｃチーム、風邪引く前に目標の地下資料室に行って戻る」

『本当に大丈夫？』

「レンの事なら心配ないだろ」

シェリーの不安げな声に、スミスが笑いながら答える。

「用心するに越した事は無いが、本当にすぐそこだからな」

カルロスが目の前のドアを指差す。

「開けたらまたあんなのがいるって事はないだろうな？」

レンがボヤキながら懷からサムライエッジを取り出し、スライドから分離させて中に溜まった水を払う。

「いや、あの先は完全に資料室だ。問題はないだろ」

水を絞り終えた上着を着込んだカルロスが飛び込む前に外してお

いたモバイルを覗き込みながら確認する。

それを横目で見ながら、レンはサムライエッジを組み立てて懷に仕舞い、鞘をガンベルトから外して逆さにして溜まっていた水を出す。刀を鞘に納めて再びガンベルトに差した。

「行くぞ」

『おう！』

先頭に立ったレンが真剣な表情でドアの前に立つ。

後ろの二人は自分の銃のセーフティを外す。

レンが無言で自動ドアの開閉スイッチを押すと、即座にドアが開く。

レンが刀に手をかけながら室内に飛び込んだ瞬間、異変は起こった。

突然、室内灯が非常時用の赤色の点滅に変わり、研究所内に非常サイレンが鳴り響く。

「何事だ！？」

「オレが知るか！」

「まさかこいつは……」

室内に飛び込んだ三人が慌てていると、館内にフランス語と英語のアナウンスが流れた。

『自爆装置が作動しました。全ロックを開放、研究所員はマニュアルに従って速やかに脱出してください。繰り返します……』

『何ー！！』

「またこのパターンか！？」

驚くレンとスミスの隣で、カルロスがウンザリとした顔をする。

「いつもこんなのか!？」

「ああ、だがなんでいきなり?」

「おい、あれを!」

レンが室内の一番奥に置いてあったスーパーコンピューターに貼り付けられている妙な紙片を指差す。

間近に近寄って見るとそれには短くこう書いてあった。

Thank you very much to everyone . (ご苦労、諸君!)

A・W

「しまった……この研究所自体がトラップだったんだ!誰かがここに入ったら自爆装置が作動するようウイルスが仕掛けられていたのか!」

「A・W……あいつか!」

「誰だ?」

「説明は後だ!逃げるぞ!」

『こちらBチーム!自爆装置の発動と同時に研究所内の全てのBOWが活性化を始めたわ!システムが全然制御出来ない!』

「あんだって!?!???」

ジルの悲鳴のような通信に、スミスが完全に裏返った悲鳴を上げる。

「どうした!」

「研究所内の全部のBOWが動き始めたって……」

「随分と念入りな……」

三人の顔から血の気が消え失せる。

「急ぐぞ！すぐに通路は化け物で溢れ返る！」

「ジーザス！」

「最悪……………」

落ち込むのも一瞬で止め、三人は元来た通路を全力で取って返す。

トラップまでは発動していないらしく、何の反応も示さない通路を走り抜け、角を曲がった所で目覚めたばかりらしいタイラントタイプと遭遇する。

「邪魔だ！」

レンが日本語で叫びながら抜刀、相手が反応する間も与えずその首を一撃で刎ね飛ばす。

「そっちからも！」

「相手にするな！急げ！」

通路の向こう側から迫ってくるハンターに弾丸をばら撒きながらカルロスが叫ぶ。

『爆発まで、あと5分です』

無常なカウントダウンが研究所内に響いた。

「エンジンを掛ける！早く乗るんだ！」

バリーが指示を与えながらヘリポートに向かってくるBOW達に向けてトリガーを連続して引く。

「まだ帰ってきてない連中はいるか？」

「今GIGNのBチームが帰ってきました！あとはCチームだけです！」

レベッカからの返答にバリーは舌打ちしながら空薬莖を床に落とす。

『爆発まであと2分です』

「どうします！？」

「……………一杯のヘリから順次発進しろ。オレはここで待つ……………」  
「でも！」

その時、一機のエレベーターの扉が開き、そこから満身創痕のCチームが現れる。

「置いてけぼりにはされずに済みそうだな……………」

「ああ……………」

「それだけはゴメンしてほしいからな……………」

口の端から血を垂らしているレンの呟きに、お互いに肩を貸しているスミスとカルロスが呟き返す。

ヘリへと三人が近寄ろうとした時、彼らの目の前の床が何度か振動し、そこから何かが床を突き破って出現した。

「おいおい……………」

「ここまで来てこれかよ……………」

力無くボヤキながら、スミスとカルロスは肩を解くと残弾少ない銃を構える。

床を突き破ってきた者 変化したヘラは大きく咆哮する。  
吹き飛ばされたはずの顔の半分は肉が盛り上がり、そこにはまるで昆虫のような複眼が形成され、両腕は奇怪なまでに長く伸びていた。

「まともに相手している時間は無い。分かれて一気に駆け抜けるぞ」

「おう」

「分かった」

背後の二人が頷くと同時に、レンが走り出す。

その右をスミス、左がカルロスに分かれ、ヘラへと向けて連射しながら走り出す。

ヘラは迷う事無く両手を大きく背後へと振りかぶる。

そこから、異常なまでに伸びた両腕が三人を襲うが、スミスとカルロスはしゃがんでその下を一気に駆け抜け、レンは走りながらの抜刀で迫ってきた腕の片方を斬り落とした。

「よし、これであとは逃げれば……」

ヘリの間近まで来たスミスが後ろを見て愕然とする。

そこには、大きく弧を描いて背後から迫ったもう片方の腕に殴り倒されるレンの姿があった。

「レン！」

「構うな！こいつはオレが倒す！」

吐血した血を拳で拭いながらレンが立ち上がる。

「出来るか！オレ達はチームだ！」

「おうよ！」

スミスとカルロスが振り返ると同時にヘラへと向けてトリガーを引く。

だが、残弾の少なかった銃はすぐに弾切れを起こし、二人は舌打ちしながら装弾されたマガジンを探し、無い事に気付いて愕然とする。

「逃げるんだ、サムライ！これは命令だ！」

『爆発まで、あと1分です』

バリーの怒声に、無常なカウントダウンが重なる。

「十秒だけ待ってくれ。それで充分だ」

レンは抜いていた刀を鞘へと納めると、無造作にヘラへと向けて歩き出す。

それを見たヘラが片方だけになった腕をレンへと向けるが、レンはそれを見切って最小限の動きで避ける。

ヘラが続けて腕を振るうが、その全てをレンは全神経を集中させ、かわしていく。

距離が2 m近く間で迫った時、ヘラは大きく息を吸い込み、強酸の胃液を噴き出す。

レンはそれを右前方に軽く跳んでかわすと、無造作に間合いを詰める。

ヘラが刀の間合いに入った瞬間、レンは刀に手を掛けた。

呼吸は浅く、必要以上に力を加えず、極限にまで最小の動き、あ



くまで自然なテンポで鞘鳴りの音すら立てず刀は鞘から引き抜かれた。

そのまま、レンはヘラの横を通り過ぎると、振り返って刀を鞘に納めつつヘリへと歩み寄る。

次の瞬間、ヘラの体が斜めにずれ、床へと崩れ落ちた。

「光背一刀流奥義、《因果断ち》」

日本武術の最秘奥、完全なノーリズムの抜刀が刀身に一切の抵抗も与えず、相手を斬り裂く究極の奥義が見ていたSTARSの面々にも理解出来ないレベルで炸裂していた。

「何をしたんだ？」

「分からねえ……………」

啞然とした表情でレンを見るSTARSメンバーの視線の先で、胴を両断されたヘラがこちらへと顔を向けた。

「レン！そいつまだ……」

スミスの声よりも早く、その隣を誰かが駆け抜けた。

レンの背後で、ヘラが斬り落とされた両腕を強引に使って跳ね上がるとレンへと襲い掛かる。

だが、レンの肩口に血まみれの鋭い歯が掛かる瞬間、その顔面に強力なドロップキックがめり込む。

そして、その靴底に最後の切り札として仕込まれていた指向性クレイモアが爆発し、ヘラの顔を完全に吹き飛ばした。

勢いをつけ過ぎたその人物、挫いた足を無視して駆け寄ったシェリーが体勢を崩して床に尻餅を着く。

「あいたたた………」  
「無茶をするな」

振り向きざまに抜刀しようと鯉口を切っていたレンがシェリーに  
向き直る。

「レン程じゃないけど」

立ち上がるうとして、シェリーの両足の裏に激痛が走る。

「!!」

声にならない悲鳴を上げてシェリーが倒れこむ。

「そいつは爆発は指向性はあるが、熱までは無理だと説明しなかつ  
たか？」

「だって………」

両足の裏を火傷したシェリーが涙ぐむ。

『爆発まで、あと30秒です。29、28、……』  
「急ぐぞ」

レンはシェリーを抱き返ると、へりへと走る。

「あ、あの……」  
「文句は後だ」

顔を真っ赤にしているシェリーを無視して、レンがへりに入ると  
同時に、床のあちこちから爆風が吹き上がる。

「発進するぞ！」

操縦席に着いたカルロスが一気にヘリを上昇させる。

爆風にあおられたヘリが振動するが、カルロスは巧みな操縦でバランスを保ち、研究所から離れていく。

やがて、研究所のあちこちから爆風が吹き上がり、やがてそれは研究所その物を飲み込む巨大な爆風へと変わっていく。

「助かった、か」

「何が助かったよ」

ヘリの内部から聞こえてきた意外な声に、レンがそちらに振り向くと、そこにはシェリー達を手当てした女性が凄まじい表情でレンを睨んでいた。

「ミリィ？なんでここに？」

「スミスからユメちゃん経由で聞いたのよ！どうしてアメリカで別れたのにフランスに居るの！？」

レンに掴みかからんばかりの勢いで女性 ミリィはまくし立てる。

レンは横目でスミスを睨むが、スミスは明後日の方向を向いて口笛を吹きながらごまかしていた。

「なんでそういつも無茶ばかりするの！連絡もよこさないし！どれだけ心配したと思ってるの！」

「いや、下手に連絡すると迷惑が掛かるかと思ってな……」

「何が迷惑よ！半年前だって急にいなくなっただかと思えば傷だらけで帰ってきて！後で横須賀基地に不法侵入したって聞いて心臓止ま

るかと思ったのよ!」

一方的にまくし立てるミリィにヘリの内部で妙な雰囲気が漂う。

「何者なんだ?彼女?」

「レンのフィアンセだよ」

『フィアンセ!?!』

バリーの問いにスミスがぶっきらぼうに答えると同時に、ヘリの内部に動揺が走る。

「いたのか?こんな奴に!?!」

「ウソ?本当に?」

「じゃあフィアンセほつとしてこの馬鹿こんな危険な事してたのか!?!」

「悪かったな」

「悪かったんじゃないでしょ!」

騒ぎ立てるヘリの中で、唯一シェリーだけが俯いている事に気付く者はいなかった。

「以上の通り、STARSのメンバーに負傷者は多数出たが、死者は一人も出ていない。説明をもらおうか」

「彼らがこちらの予想を上回る程優秀だった。それだけですよ」

「それだけではない!あの研究所を爆破しなかったのはSTARSメンバーの減少の為だと言ったのは君自身ではないか!この責任をどうするつもりだ!」

「直接関与したくないと言ったのはあんた達だったはずだ。だから

「そここんな手を取らざるを得なかった。違つか？」

「それは……」

「まあいい。では次の作戦を実行に移す」

「分かっているな。あくまで目標は……」

男はサングラスを指で押し上げながら不適に微笑んだ。

## 第八章 『魔人VSサムライ！音速の決闘！』

（どうしてだ！？）

彼は自問した。

小さな島国に住むある一家の拉致、それだけの今までやってきた事に比べればひどく単純な任務のはずだった。

（どうなっているんだ！？）

自分に問い掛ける。

その問い掛けの答えが出るよりも早く、彼の部下の一人が突撃を掛けた。

全身を黒地のタクティカルスーツで包んだ体が、一瞬にして普通の人間には有り得ない速度まで加速し、一陣の黒い風となる。

だが、その風よりも速く、銀色の煌きがその体に追い付き、通り越す。

「NOOOO！」

その銀色の煌きが通り過ぎた場所、自分の肘から鮮血を巻き散らかしながらその部下は自らの腕を抱え込んでうずくまる。

防弾性も併せ持つ筈の特殊素材製のタクティカルスーツもろとも、その部下の腕は半ばまで深く斬れていた。

彼の喉が酷く粘つく唾を飲み込んだ。

周囲には、その部下と同じように一撃で戦闘力を奪われた部下達が転がっており、もはや戦えるのは彼一人となっていた。

「止めておけ。致命傷では無いが、放っておけばそいつらは死ぬか

もしないぞ」

彼の目の前に立つ、部下達を一撃で戦闘不能にした若い男がこの国の言葉で警告する。

彼は答えず、無言で手に握った大振りのチタンブレードナイフを構える。

彼の部隊の者達ならば、このナイフだけでいかに重武装した相手だろうと敵では無い。……はずだった。

しかし、今彼の目の前にいる男は重火器はおるか、ハンドガン一つ持っていない。

男が手にしたたった一振りの日本刀、それが彼の部隊を全滅寸前までに追い込んでいた。

「無視か？それとも日本語が分からないか……意味は分かっているんだろうけどな」

男は呟きながら刀を構える。

右手で正眼に構えた刀の背に、空いている左手を添える変わった構え。

そこから振るわれる白刃は、人間を超えたはずの彼の部隊の者ですら凌駕する速度で迫ってくる。

彼は、今までの男の攻撃を分析し、一瞬にして攻撃法を決定、次の瞬間には男へと向けて突撃する。

常人の目には捕らえられないはずのスピードで男へと肉薄する。

驚異的な反射神経で男が刀を振り下ろそうとした瞬間、彼の体は男の目前から消失する。

（取った！）

振り下ろされる瞬間を見計らって、ギリギリで真横の死角へと跳

んだ彼は絶対的な自信を持ってナイフを男の首筋へと振るった。

だが、その刃が男の首筋に届く瞬間、まるで魔法の様にそこに白刃が出現した。

「what's!?(なに!?)」

振り下ろされたはずの刃が、一瞬にして自分の攻撃を防御した事に彼は驚く。

だが、この状態からならば純粹に力比べになる。

そしてそれならば負けるはずはない。

彼は勝利を確信した。

力を込めて、彼はナイフを押し込む。

男は片腕ではそれを防げず、両手持ちに変えるがそれでも力は彼の方が上だった。

顔を覆うタクティカルマスクの下で彼が笑みを浮かべた瞬間、信じられない事が起きた。

鏑迫り合いを行っていた刃同士が少しずつめり込んでいく。

「はあっ!」

男が気合を上げると同時に、刃がお互いを通過する。

次の瞬間、両断されたチタンブレードが甲高い音を立てて地面へと落ちた。

「!!!!」

彼は声にならない絶叫を上げた。

鏑迫り合いの状態からチタンブレードを日本刀で両断する。そんな芸当が可能な訳がない。

だが、自分の手にしているナイフはキレイに折れて、いや斬られ



ている。

その非現実な光景に彼が困惑してる時、彼の首筋に刃が突付けられる。

「無駄だ。その程度でオレは倒せん。さあ、なんでこの家を襲ったか吐いてもらおうか。通訳が必要ならどうにかしてやる」

「sa、サムライ samurai……………」

「違うな、オレは陰陽師だ。もっとも違いはお前らには分からないだろうけどな」

彼の呟きに、男は反論する。

その姿、黒いキモノを着て日本刀を振るうそれは彼が昔見た映画に出てきたサムライその者だった。

（強すぎる……………とてもオレ達で相手出来るレベルじゃない。これが東洋の伝説の戦士……………）

彼は任務の失敗を悟った。

おとなしく両手を上げながら、靴底を微妙に地面に押し付け、そこに仕掛けられているスイッチを踏み込んだ。

途端、彼の靴から煙が垂直に吹き上がり、その体を覆う。

「何だっ!？」

男は左手で口を覆いながら跳び退り、刀を構える。

だが、それを見た彼の部下達も同様の仕掛けを作動させ、瞬く間に周囲は煙で閉ざされる。

やがて、その煙が晴れると、そこには血痕だけを残して部隊は完全に消えていた。

「逃げた、か」

周囲に気配が無い事を知ると、男は刀を鞘に納めた。

「くおら！壊した分弁償していけ！」

男の背後の家から骨董品の部類に入るライフル（ただし中身は最新のもの取替えられ、しっかりと実弾装填済み）を持った中年の男性が出てきて怒鳴る。

「もういなくなっちゃいましたよ」

「あに！？くそ！あのナイフでも差し押さえておけばよかった！ありや最新のHVナイフだったぞ！」

「そういうところはよく見えますね」

男は呆れながら中年男性を見た。

だがすぐにその表情は真剣な物へと変わる。

「それで、ああいう連中に襲われる覚えは？」

「知らん！少しヤバイ商売はした事は在っても、あんな最新装備の部隊差し向けられる程の事をした覚えは無い」

「だとしたら……………」

二人は無言で見詰め合った後、ふと男は空を見上げる。

「一体何をしているんだ？練……………」

同時刻、イギリスのとある病院にて

「我、五行相克ごぎょうさうこくの法にて邪を払う。木気には金気、金気には火気、火気には水気、水気には木気を持ちて相克となす。オン！」

レンの口から朗々たる呪文が唱えられる。

彼の前には格子状に木材を組んだ護摩壇が燃え上がり、その手前に設けられた卓には盛られた塩の上に御神酒を満たした杯が置かれ、その前に抜き身の村正とサムライエッジが置かれていた。

「臨、兵、闘、者、皆、陣、裂、在、前！」

九字を唱えながら手印を結び、それを終わると右手の人差し指と中指を突き出す刀印と呼ばれる印を組み、お神酒の表面へとそれを突き刺す。

僅かに御神酒の表面に波紋を立てる程度で止め、一度指を抜いて指先に付いた分を振って払うと、左手で杯を手に取り、中身を一口含むと、卓上の武器へと吹き掛けた。

杯を再び卓上に戻し、レンはサムライエッジを手に取り護摩壇の炎にかざし、用意していた半紙で吹き付けた御神酒を拭き取り、再び卓上に置くと今度は村正を手にとって同様の事をする。

村正を卓上に置いた所で御神酒を拭き取った半紙を護摩壇の火に放り込み、それが完全に燃え尽きた所で再び右手で刀印を構え、大きく息を吸い込みながら左肩の位置まで持ち上げると息を鋭く吐き出しながら真横へと素早く刀印を移動させる。

再び息を吸い込みながら刀印を胸元へとかざし、それを解くと抜き身のままの村正を鞘へと納め……

「何、してるの？」

「この間かなり使ったからな。邪気を払っていた、何度も見てるだろ」

後ろから突然掛けられた声に、レンは横目でそちらを見ながら答える。

そこには、いつの間にかSTARSの医療担当者に修まっているミリイが、顔には微笑を浮かべ、しかし目はピクリとも笑っていないという表情で立っていた。

「ふ〜ん。で、ここがどこだったかしら？」

「病院の屋上だが？」

刀を鞘に納め、護摩壇に用意しておいたバケツの水を掛けながらレンがさも当然といった声でミリイに返答する。

「それで、あなたは何の為にここにいるんだったかしら？」

「もう治った」

顔が笑ったまま、こめかみをケイレンさせていたミリイがレンの襟首をがっしりと掴んだ。

「まだ絶対安静の身で何言ってるの！ようやく骨がくっ付いたんだからしばらくは寝てなさい！」

「まだ片付けている途中……」

「あたしがやつとくから！いい！OKが出るまでトレーニングも駄目よ！」

「昨日から再開して……」

「駄目！」

「……またやってるぞ。あの二人」

カルロスが手札を配りながら呆れ顔でばやく。

「あれがあのだ人流のコミュニケーションなんじゃないのか？」

ようやくギブスが取れた首を鳴らしながら、レオンが手札を見る。

「間違いじゃないな。五年前もそうだったから。まあ、その時はミリイはあんな強気じゃなかったけどな」

スミスが手札を真剣に覗き込み、もう一枚足してもらつ。

「レンもあまり彼女心配させなければいいのに。肋骨三本ヒビで二本折れて、しかもその内一本は肺かすってたんでしょ？」

クレアが手札を見ると顔をしかめて降りる。

「レントゲン取ったら医者が目白黒させてたからな。あいつ顔色一つ変えてなかったぞ」

カルロスが自分の手札にも一枚加えながら呟く。

「頑丈な奴だからな。絶対安静どころか入院して三日目には平然と歩いていたぞ」

スミスが眉根にシワを寄せながら、もう一枚足す。

「頑丈だけじゃすまされないぞ。どうやったら全治三ヶ月の奴が半月で普通行動が出来るんだ？」

レオンが一枚足してもらった手札を見て、ため息を一つつくと降りる。

「東洋の神秘だろ。そっぴや前にシュギョウで身体能力をある程度コントロール出来るようになったと手紙に書いてあったな」

チップを上乗せしながら、スミスが笑みを浮かべる。

「人間離れしてるな。コール！」

「19だ」

「20、オレの勝ちだな」

「だあ！また負けた！」

「ポーカーフェイスが下手なんだよ」

「そうそう」

「入院中でギャンブルなんてしない！」

レンを病室まで引きずってきたミリイの怒声に、皆が一樣に首をすくめた。

「賑やかだな。隣は」

「原因がいつも同じですけどね……………」

明日退院予定のクリスが隣室に続いている壁を見ながら微笑し、報告に来ていたレベツカが吊られて苦笑する。

「それで、進展は？」

「はい、あまりいい結果は出てませんね。フランス警視庁が昨日で

研究所跡の潜水調査を打ち切ったそうです。調査結果はまだ出てきてませんが、途中報告ではよっぽど高性能の爆薬を計算して使ったらしく、瓦礫ですら細分化されていて判別不能だそうです。今の所有効的なのが目撃証言と持ち帰ったデータだけでは立件出来るかどうかは難しいです。一週間前に行われたアンブレラパリ支社の家宅捜索で押収されたデータにもアンブレラ自体の人体実験の証拠は一切無かった模様です」

「当然だな。アンブレラ社の経営に携わっている人間でアンブレラの真相を知っている人間は少ない。会社の方を叩いても何も出てはこないだろう」

「そうですね。あと、この間持ち帰ったROWのデータですが、解析は難航しています」

「まったく新型のBOWか………どんな物かだけでも分からないのか？」

「それが、ファイルの方は水と血で濡れていて何が書かれていたか判別不能ですし、MOの方も一部破損していましたからね。断片的なデータを拾ってなんとか私とミリィとシェリーちゃんで分析していますが、今の所断片的なゲノムデータらしき物しか分かってません」

「ゲノムデータ？」

聞き慣れない言葉に首を傾げたクリスにレベッカが説明する。

「遺伝子、DNAの配列を数値化した物ですよ。この数値解析が完全に出来ればいかなる生物も自由に想像可能と言われてますけどね」

「アンブレラがそれに成功している可能性は？」

「何とも言えません。断片だけではどんな生物のどこを示した物かすら分かりませんからね。シェリーちゃんが独自に研究してますけど、どうやら無脊椎動物らしいという事しか………」

「それだけじゃな……………」

二人とも深刻な表情で押し黙る。  
そのまま、深い沈黙がその部屋を覆った。

『ちよつと！何してるの！』

『いや、どうにも妙な予感がするから卦を見ようかと』

『絶対安静！』

『別に体使う物じゃないが』

『駄目！スミス、そのロープ取って！』

『おお、こんな所でSMプレイか！？』

壁越しに聞こえてくる声に、クリスとレベツカは無言でそちらを見る。

「……………ホントに賑やかですね」

「ああ、そういえばミリイとシェリーの仲が悪いって聞いたが本当か？」

「仲が悪いって言うか、シェリーちゃんが一方的に嫌ってるだけみたいですけど」

「チーム内に不和が有るのは問題だ。なんとか出来ないか？」

「……………難しいと思いますけど……………」

「どうしてだ？」

（どうしてこう体育会系の男性は鈍いんだろう……………）

レベツカは口には出さず、ただ深いため息をついた。

「全滅？」



「正確には一人を除いて戦闘不能にされた。しかも全員が一撃でだ」  
音、電波、その他考えられうる全ての外界へと通じる情報から完全に隔絶された密室で二人の男が密談を交わしていた。

「報告によれば、”彼”と同じ黒装束のサムライにやられたらしい。命に別状は無いそうだが、しばらくは作戦行動には使えない」  
「失敗したとなれば次の作戦は中止するかね？」

片方の男の声に、もう片方の男は答える。

「いや、失敗した事が彼に知れるのも時間の問題だ。予定通り作戦は結構する」

「部下が使い物にならないのにどうやってかね。まさか私一人ですと？」

「幸いに、この間入手したハーメルンシステムのノウハウが解明出来た。”グレムリン”に応用可能だそうだ」

「それでは……」

「ああ、結構は今夜、人員は君と”グレムリン”40体。目的は……」

同日 深夜

「……きろ、起きろ」

「何だよ……何時だと思ってるんだよ………」

眠い目をこすりながら目を覚ましたスミスが、完全武装している

レンを見た途端に意識が急激に覚醒する。

枕元の台に乘せられた時計が夜中の二時を指しているのを見ながら、スミスは手早く枕の下からゾンビバスターを抜いた。

「敵襲か!？」

「まだ分からん。だが、何かが近付いてくる。とんでもない殺気を持った何かが……………」

先に起きていた同室のカルロスとレオンが目を見合わせる。

「勘、か？」

「ああ……………」

カルロスが無言でコインを一枚取り出すと、指で跳ね上げ、手の甲に落ちてきたのを素早く隠す。

「どっちだ？」

「裏だ」

ためらいも無くレンが答えると、カルロスが隠していたコインを見る。

「信じるぜ。アンタみたいに勘の鋭い戦友に助けられた事があるかな」

カルロスも枕の下から銃を取り出す。

「クレアを起こしてくる」

デザートイーグルを片手に、レオンが病室を飛び出す。

「おう、どさくさまぎれに夜這いするなよ」

カルロスがセーフティを外しながらの冗談に皆が小さく笑うと、  
全員の表情が真剣な物に変わる。

「相手の規模は？」

「そこまでは分からん。だが、一人って事はないだろ」

「やばいな……………」

レンを除いて、全員持っている武器が念の為に用意していたハン  
ドガン一丁だけ、という状態に皆の額に冷や汗が浮かぶ。

「今夜は誰がガードしてるんだっけ？」

「下にバリーがいたはずだ」

用心の為に交代制のガードをしているはずのバリーに連絡しようと  
通信機のスイッチを入れたカルロスが、それを耳に当てた所でノ  
イズしか入ってこない事に気付く。

「こちらスミス、STARS本部応答せよ。おい！こちらスミス！  
応答してくれ！」

スミスも同様に通信が使えない事に気付き、愕然とする。

「ECM（電波妨害）か？どうやらすぐそこまで来ているようだな」

「クリスは？」

「もう起こしてる」

レンが鞘を鳴らしながら表情を険しくする。

「こちらの様子がおかしい事に本部の連中が気付いて、増援に来るまでの間オレ達だけで持ち堪えるしかないな」

「もし、前みたいに大量に来られたら？」

「その時はオレが半分受け持つから後は頼む」

「無茶言うなよ」

スミスが弾丸を枕元の棚から取り出しながら、顔をしかめた。

「少し様子を見てくる」

「オレ達が死ぬ前に戻ってきてくれよ」

病室を出て行くレンに冗談とも取れないような事を言いながらカルロスがタクティカルベストをパジャマの上から纏う。

「そういや、その勘の鋭い戦友ってのはどうしたんだ？」

「死んだよ。五年前ラクーンシティで」

カルロスの返答に、スミスの表情が一気に暗くなった。

窓から月明かりが差し込んでくる廊下を、レンは気を張り巡らしながらゆっくりと歩を進める。

突然、目の前の点いていたはずの非常灯が忽然と消える。

「来たか。他の入院患者が少ないのは好都合だな」

STARSの協力者である院長に無理を言って頼んでいた事を思

い出しながら、レンは刀を抜き、サムライエッジを取り出してセーフティを外す。

（何が来る？BOWか？それともエージェント？）

レンは武器を構えながら、目を閉じ、精神を集中させて周囲の気を探る。

（この感じ…… BOWか？それともかなり多い…… だが）

思考の途中で、向こう側から聞こえてきた甲高い泣き声にレンは集中を解いて声の方へと向き直る。

廊下の向こうから、妙に低い位置にある双眸を確認した時、そこから何かが伸びてきた。

（触手？いや、腕か。パンダースナッチか？）

その伸びてきた腕を見たレンがアメリカで戦ったBOWを思い浮かべるが、最初に見えた妙に低い双眸と、側の壁に張り付いた細い腕を見てそれを否定する。

「新型か？」

レンの疑問と同時に、光る双眸が急激的に近付いてくる。

伸びてきた腕とは反対側の腕に双眸以外に光る何かを確認するとそれから身を逸らしながら刀を横薙ぎに振るう。

短い断末魔と共に、それは床へと両断されて落ちる。

それは、全長が1mにも満たない毛の無いサルに似たBOWだった。

ギョロリとした双眸に瘦せぎすの体をし、右腕は伸縮自在の腕、

左腕は鎌のように湾曲した鋭く長い爪が生えている。

「室内用か？だが、こいつじゃない……………」

先程から感じていた殺気の根源がその新型のBOWでない事を知ったレンが再び精神を集中させる。

（いる……………どこだ……………近い……………）

病院のあちこちからガラスの割れる音や悲鳴、銃声が聞こえ始めていたが、それらよりも遥かに危険と思われる殺気の元を探り当てる。

「まさか!？」

レンは振り返ると、その殺気を感じた場所へと走り始めた。

深夜の予想外の来客に、クリスは愛用のグロッグ17を握り締めながら、冷や汗を流した。

「やあ、傷の具合はどうかね、クリス」

「ウエスカ……………」

その予想外の来客、全身を黒いタクティカルスーツに包んだ男、元STARS隊長にして、部下達をBOWの実戦テストの相手にして全滅寸前まで追い込んだ非道な裏切り者、アルバート・ウエスカにクリスは奥歯を強く噛み締めながらグロッグ17のセーフティを外す。

「二年前、君に付けられた私の傷はなんとか治ったよ。だいぶ掛かったがね」

そう言いながらウエスカーは掛けていたサングラスを外す。  
そこには、隻眼と化しているハンターと同じ縦長の魔物の瞳と、本来瞳が有るべき場所を大きくえぐっている銃創が有った。

「再生させる事も出来たらしいが、このままにしてもらったよ。男は傷が有った方が箔が付くからな」

薄く笑いながら、ウエスカーはサングラスを掛け直す。

「それじゃあ、クリス。久しぶりで会ったのに何だが、サヨナラだ」

「ウエスカー……！」

クリスがトリガーを引くが、発射された弾丸はウエスカーが先程までいた空間を虚しく通り過ぎ、壁へと突き刺さる。

驚異的なスピードでクリスの懐へと接近したウエスカーがチタンブレードナイフをその胸へと突き刺そうとした瞬間、横手からいきなり現れた白刃がそれを受け止めた。

「来たな、サムライ……………」

ウエスカーは微笑しながら、ナイフを受け止めた人物、レンへと視線を移す。

バックステップで離れたウエスカーに向けて、レンが用心深く刀を構える。

「気を付けるレン！そいつは…」

「分かっている。こいつは人間じゃない」

クリスの警告をレンが最後まで聞かずに肯定する。

「こんな邪悪な殺気を持った人間がいて堪るか。間違い無くこいつは人外の者だ」

「ほう………なかなか鋭いな。確かに私は悪魔に魂を売った身だ」

ウエスカーが楽しげに顔を歪ませながら、ナイフを構えた。

「なら、オレの管轄だな」

レンが摺り足で微妙に間合いを調節しながら、ウエスカーと対峙する。

「言っておくが、オレはサムライじゃない。陰陽僚五大宗家が一つ、御神渡家当主補佐役、水沢 練、流派は光背一刀流免許皆伝」

「HCF超人隊リーダー、アルバート・ウエスカー」

名乗りを挙げたレンに半ば嘲りを込めてウエスカーも名乗りを挙げる。

「いざ、参る」

「行くぞ！」

二つの黒い疾風と化した二人が、白刃の煌きを伴って激突した。



「こなくそっ！」

「くたばれつての！」

室内に飛び込んできた見た事も無いBOWへと向けてカルロスとスミスが立て続けにトリガーを引くが、的が小さい上に動きが素早く、撃ち出された弾丸の殆どは壁や床に虚しく弾痕を刻む。

弾切れを起こした銃からマガジンを交換しようとしたカルロスに、彼の背後の壁に腕を伸ばしたBOWが一瞬にして近寄り、すれ違いざまに爪で切り付けた。

「ぐっ！」

「カルロス！」

「大丈夫だ！こいつらそんなに攻撃力は無い！」

切り裂かれた二の腕から流れ出す血を無視して、カルロスが手早くマガジンを叩き込み、初弾を装填する。

「これならどうだ！」

スミスがとつさにベッドから布団を剥ぐと、それをBOWへと向けて被せる。

覆い被さった布団で身動きが取れなくなった隙に、続け様に弾丸が叩き込まれ、もがいていたBOWが倒れ伏す。

「使えるな、この手は」

「ああ……………」

二の腕の傷をタオルで縛り付けながら、カルロスが渋い顔をする。

「傷は大丈夫か？」

「ああ、傷は深めだが、幅が狭いみたいだ。首さえ狙われなければ死ぬこたあないだろ」

「ショットガンでも用意しとくべきだったな」

スミスが部屋中のベッドからシーツを剥ぎ取りながらボヤクが、この状態ではどうしようもなかった。

「まさかこんなのが襲ってくるとは思わなかったからな。下の倉庫に置いてあるのを取りに行くしかないな」

「そこまで無事に辿り着ければな……………」

カルロスがタクティカルベストの肩口に点灯したビームライトを取り付け、スミスがシーツを腕に巻き付けながらお互いに渋い顔で向かい合った瞬間だった。

『ウエスカー！！』

クリスの絶叫と同時に、銃声が隣室から響いてきた。

「何だ！？」

「ウエスカー？まさか！」

二人が慌てて病室を飛び出し、隣室へと向かおうとした時、通路に無数の光る双眸が有るのに気付いた。

『げっ……………』

二人同時に絶句するのと、双眸の幾つかがこちらに気付くのは同時だった。

こちらへと向けて複数の腕が伸びてきたのを見た二人が同時に床へと倒れ込む。

「見え透いてんだよ！」

倒れ込みながらスミスがシートの一枚を上へと放り投げる。

そこに何かが包まると同時に、カルロスがSIGPRO SP2 009のトリガーを引いた。

絶叫がシートの中から聞こえてくるのを待たず、二人は転がって起き上がると申し合わせたように背中合わせになる。

肩のビームライトと銃口の下タクティカルライトが相手を照らし出すと同時に、無数の銃声が廊下に響き渡る。

「こんな時にレンの野郎は何処行きやがった!？」

カルロスが怒鳴ると同時に隣室のドアが勢いよく開き、そこからレンが後ろ向きに吹き飛ばされてくる。

「レン!？お前何やって…」

「後にしてくれ」

壁際で体勢を立て直して着地したレンへと向けて、開け放たれたドアから何かが飛び出してきたのを、レンが刀を持ち上げて受け止める。

甲高い金属音が響き、その飛び出してきた物の動きが止まる。

「アルバート・ウェスカー!？」

レンと鏢迫り合いを行っている相手を見たカルロスが驚愕しながらも、銃口をウェスカーへと向ける。

それを横目で見たウェスカーが薄く笑みを浮かべた。

「やあ、STARS諸君。済まないが、私はサムライの相手で忙しい。君達の相手はグレムリンがしてくれるだろう」

「この小つこい奴か！」

目の前のグレムリンを駆逐したスミスが振り返りながらタクティカルライトでウェスカーを照らし出す。

それを見たウェスカーがレンから離れると、そのまま廊下を凄まじい速度で走り出す。

「逃がすか！」

レンがその後を追おうとした時、ウェスカーが振り返り様にナイフをレンへと向けて高速で横に振るった。

レンがそれを刀で受け止めると、一瞬にしてナイフは違う角度からレンを襲う。

レンがそれを受け流し、ウェスカーへと下段から振り上げるような斬撃を放つ。

ウェスカーがバックステップでそれをかわすが、かわし切れなかった斬撃がタクティカルスーツの表面を薄く斬り裂く。

刀が振り上がり切ると同時に、ウェスカーが間合いを詰めながらナイフを突き出す。

レンはそれを流れるような足取りで横へとかわすが、かわしきれずに袖の一部が切り裂かれる。

そのまま横を通り過ぎようとしたウェスカーにレンの上段から斬撃が襲い掛かるが、ウェスカーは体を驚異的な速度で捻りながら、ナイフでそれを受け止める。

「やるな」

「そちらこそ」

膠着状態に陥る前に、二人が離れて間合いを取る。

と同時に、レンがサムライエッジをウェスカーへと向けて立て続けにトリガーを引いた。

弾丸が発射されると同時に、ウェスカーが驚異的な速度のサイドステップでそれをかわす。

今度はウェスカーがお返しとばかりにガンベルトからベレッタM9を抜くとトリガーを引く。

それを見たレンがトリガーが引かれるのと同時に身を屈め弾丸をかわすが、かわしきれないと見た最後の一発を刀の背で上へと跳ね上げる。

「弾丸、しかもホットロードの徹甲弾をカタナで弾くとはな。カー

トウーン（アニメ）の中の事だとばかり思っていたよ」

「現実には架空よりも非常識な物だ。知らなかったのか？」

「知っていたさ、私自身でな！」

再び間合いを詰めた二人が、月光を反射して光る軌跡を残す白刃を打ち合わせる。

打ち合わされた部分から火花を撒き散らしながら、鋼がぶつかり合う音が廊下へと響き渡った。

「すげえ……………」

「ああ……………」

まるで倍速再生を見ているかのようなレンとウェスカーの攻防の速さにスミスとカルロスが絶句する。

二人の目にはお互いの攻撃が僅かに月光が映った時だけ残像として見えるかどうかで、とても介入出来るレベルではない事をまざま

ざと見せ付けられていた。

「カルロス！上！」

「あつ！」

超高速の攻防に気を取られていた隙に、撃ち洩らしたグレムリンの一匹が頭上からカルロスへと襲い掛かる。

スミスがとつさにカルロスを突き飛ばしながら左腕を頭上にかざす。

さすがに金属製の義腕までは切れないらしく、爪が弾かれて体勢が崩れた所にカルロスが弾丸を叩き込む。

「悪い。助かった」

「あつちは任せよう。オレ達はいつらを駆逐するぞ！」

「おう！」

カルロスは力強く答えると、レン達とは反対方向へと走り出した。

「病室から出るな！ベッドの中で布団でも被って隠れている！」

病室から出ようとしていた入院患者に怒鳴りながら、レオンはデザートイーグルをグレムリンに向けて乱射する。

こちらに向かってきた二匹の内の一匹が頭を吹き飛ばされて崩れ落ちるが、もう一匹は敏捷な動きでレオンへと近寄ると鋭利な爪を振るってきた。

それに気付いたレオンが両腕を上げて首をガードする。

その両腕には、クレアの病室に有ったファッション誌やバイク誌

を重ねて括りつけた即席の盾が有った。

グレムリンの湾曲した爪がそれを切り裂こうとするが、半ばまで食い込んだ所で引っかかりその動きが止まる。

自分の腕にぶら下がるような形で動きを止めたグレムリンへと向けて、レオンが躊躇無くトリガーを引いた。

大口径弾特有の強力なバックファイアーがレオンの顔面に吹き付け、前髪を僅かに焦がす。

それを気にも止めず、レオンは腕を振るって頭部が吹き飛んだグレムリンの死体を床へと投げ捨てながら背後のクレアへと向き直った。

クレアが3点バーストにセットしたベレッタM93Rを連射していたが、グレムリンの速過ぎる動きに対処しきれず、発射された弾丸は虚しく廊下に弾痕を刻む。

「このっ！このっ！」

焦るクレアが至近距離まで近付いたグレムリンにようやく弾丸を命中させた所で、M93Rの弾丸が尽きる。

「くっ！」

上着のポケットからスペアマガジンを取り出そうとした所で、別のグレムリンが天井に張り付き、そこから急降下しながらクレアを襲ってくる。

「危ない！」

レオンが叫びながら、両腕を顔の前で交差させながらグレムリンへと体当たりを食らわせる。

そのままの勢いでグレムリンを壁へと押し付け、完全に動きを封

じる。

動きを封じられたグレムリンが無茶苦茶に腕を振るい、爪がレオンの頬を切り裂き、そこから鮮血が流れ出すが、レオンは冷静にその頭部に銃口を押し付け、トリガーを引いた。

「レオン！大丈夫？」

「大丈夫だ」

マガジンを交換し終えたクレアが側へと駆け寄って来る。

レオンは顔面にこびり付いた自らの血と返り血を袖で拭いながらクレアへと向き直った。

「傷が…」

「これ位大丈夫さ。それよりも早い所他の連中と合流しよう」

傷をなるべくクレアに見られないようにしながら、レオンが弾丸が尽きたデザートイーグルのマガジンを手早く交換し、初弾を装填する。

階下へと向けて走り出そうとした所で角から現れた別のグレムリンへと向けて、レオンは銃口を向けた。

甲高い金属音を残して、二つの影が距離を取って対峙する。  
窓から差し込む半月の光の中、二人はしばし無言で微動だにしない。

「そろそろ、ウォーミングアップはいいかな？」

「ああ、そつだな」



ウエスカーの余裕の一言に、レンが何の感慨も見せずに応える。

「お互い本気を出そうじゃないか。それとも、もう出しているのかね？」

「見たいか？」

レンがゆつくりと、しかし隙を見せずにサムライエッジをホルスターに仕舞い、刀を鞘に納め、半身を引き抜刀の姿勢を取る。

「アイヌキか……………一度見てみたいと思っていた」

「見せてやるよ。見えたらな」

ウエスカーが薄く笑みを浮かべながら、姿勢を低くする。

次の瞬間、その体が急激的に加速し、レンとの間合いを一気に詰める。

レンがそれに反応して柄に手を当てた瞬間、ウエスカーの体が抜刀の死角である左側へと瞬時に移動する。

それに併せるようにレンの体がそちらを向こうとした時、ウエスカーが今度は反対側へと跳んだ。

ウエスカーがナイフをレンの右腕へと向けて突き出した瞬間、柄に伸びていたレンの右手がぶれ、消失したように見えた。

「!？」

ウエスカーがとつさに背後へと跳び退る。

一瞬の間を置いて、廊下に金属とはまた違う甲高い音が響き渡り、窓ガラスが細かく振動する。

「過小評価をしていたつもりはないが、どうやら君を見くびっていたらしい。まさか音速を超える攻撃とはな……………」

左腕と胸を斜めに走る傷に、ウエスカーが苦笑を洩らす。

「光背一刀流最速抜刀技《閃光斬》。見えたか？」

レンがその顔に僅かに笑みを浮かべる。

レンの右腕も袖が切り裂かれ、その下のチタンプロテクターまでもが破損し、床へと血が滴っていた。

「見えなかったよ。さすがに。だが、生身でそれ程の技を出せば、かなりの負荷が掛かるのではないのかな？私と違って！」

言葉が終わるよりも早く、ウエスカーが再び高速で突撃してくる。

繰り出される高速のナイフの連続攻撃に、レンの右手が驚異的な速度で反応し、受け止め、かわし、受け流す。

そこへウエスカーの膝が腹部を狙って突き出される。

それをレンは後ろへと跳んでかわしつつ、素早くサムライエッジを抜いてトリガーを連続して引いた。

それに対してウエスカーが顔を片腕で隠しただけで、弾丸を物ともせず再び突撃してくる。

その腕に弾丸が突き刺さるが、袖の繊維に阻まれ、貫通はしていない。

（防弾！？あの薄さで！？）

レンが内心驚愕しつつも刀を振るおうとした時、その刃をウエスカーが二本の指で挟み込む。

ウエスカーが嘲りの笑みを浮かべた瞬間、レンがためらいも無く刀を手放すと反転しながら素早くウエスカーの懐に入り込み、刀を

掴んでいた腕を肩越しに背負う。

そのまま右腕でウエスカーの腕を引きながら腰を跳ね上げつつ、刃を掴んでいた手にサムライエッジのグリップを叩きつける。

ウエスカーの体が宙を舞いつつ、指から刃が離れる。

その体が床へと叩きつけられるよりも早く、レンがその手を離し、ウエスカーの顔面へと向けて倒れこみながら肘を突き降ろす。

床に叩きつけられながらも、ウエスカーは横に転がってその攻撃を避け、そのまま廊下の端まで転がると手早く片膝をついて起き上がり、ナイフを構える。

その視線の先には、反対側の壁際でまったく同じ姿勢で拾った刀を油断無く構えるレンの姿があった。

「格闘技の方も使えるようだな。ジュードー、ではないようだか？」

「光背流拳闘術だ。技的には柔術と骨法と合気道の合いの子といった感じだがな」

レンが弾切れを起こしたサムライエッジを口に咥え、手早くマガジンを交換し、口に咥えたままスライドさせて初弾を装填させる。

「こちらも一つ聞きたい。そのHV（高周波振動）ナイフや特殊素材のタクティカルスーツといった最新装備、そしてその戦い方。ある男と似ている。リオン・マドックという男を知っているか？」

「ああ、知っているも何も、私の部下で教え子でもあった男だよ。優秀な男だったが、半年前君の国で何者かに殺されたがね」

「……………そうだろうな。そいつを殺したのはこのオレだからな」

レンの言葉に、ウエスカーが少なからず驚愕する。

「ほう！なる程。半年前にヨコスカの米軍との共同研究所に殴り込

んできて壊滅させた命知らずのサムライとは君の事だったか」

「ああ、そうだ」

レンがゆっくりと立ち上がりながら、刀を真横に構える。

「という事は、あれを見たんだな？」

「見たさ。日本で開発されていたBOWをな！」

怒号と共に、横殴りの斬撃がウェスカーを狙う。

ウェスカーは逆手に構えたナイフをそれを受け止め、その場で凄まじい力を込められた二つの刃が静止する。

「そして知った。世界中で何かが起きている事を！だからオレは日本を出てきた！五年前のラクーンシティの借りを返す為に！」

感情を露にしているレンに、罅迫り合いの状態でウェスカーが低く笑う。

「ふふふふ、そうか。そういう事だったのか。これで君を生かしておく訳にはいかなかったな！」

ウェスカーの空いている左手が、拳となってレンの顔面を狙う。

レンはサムライエッジを握ったまま左手でその拳を上へと跳ね上げ、身を低くして罅迫り合いから脱しながらウェスカーの足元を狙って刀を振るう。

ウェスカーが小さくジャンプしてそれを避け、着地すると同時に無防備なレンの背中へとナイフを振り下ろす。

そこへ鋭い鋭角を描いて切り返された刀が出現し、ナイフを受け止める。

すかさずレンがサムライエッジをウェスカーに向けると、そこに

数cmの距離でウェスカーのM9のマズルが同じポイントにあった。

二人の顔に同時に笑みが浮かび、お互いトリガーを引かずに自らの右手へと跳んで距離を取り、対峙する。

「さて、本番といこうか……………」

「そうしよう……………」

再び黒い疾風と化した二人が、激突した。

「不用意に顔を出すな！もう少し持ち堪えれば仲間が来る！それまでの辛抱だ！」

病院入り口の上の階までの吹き抜けとなっているロビーで、バリーが手にしたレミントンM1100Pショットガンを連射しながら大声で叫ぶ。

その周囲には、震えながら不慣れな手つきで銃を手にしている当直の医師や看護婦、入院患者達がロビーのイスをバリケード代わりにして散発的に上へと弾丸を撃ち込んでいた。

彼らの頭上の吹き抜けとなっている空洞には、無数の光る相貌がある物は仕切りとなっているガラスに張り付き、ある物はその伸びる腕で移動しながら、こちらを見ている。

それはまるで悪夢の光景その物だった。

時たま急降下しながら襲ってくるグレムリンに散弾を撃ち込みながら、バリーは焦りを覚えていた。

（まずい……………無線も電話もやられてやがる。定時連絡が届かない事に気付いた皆がやってくるまで後どれ位だ？それまで持ち堪えら

れるか？)

側にいた医師がグレムリンの迎撃に失敗して短い悲鳴を上げながら倒れる。

それに近寄ろうとしたグレムリンに向けて散弾を撃ち込んだ所で弾切れに気付いたバリーが舌打ちしながら装弾しようとした時、外から無数のヘッドライトがホイルスピンの音を響かせながら玄関の前で急停止する。

「バリー、無事！？」

「上だ！」

ジルを先頭にして病院内になだれ込んできた重武装のSTARSメンバー達が、バリーの声に一齐に上へと向けて銃口を向け、トリガーを引いた。

先程までとは比べ物にならない大量の銃声がロビーに響き渡り、瞬く間に天井の星座を象ったステンドグラス毎グレムリン達を銃弾が貫く。

数秒後、銃撃に耐え切れず崩壊したステンドグラスと一緒にグレムリン達の死体がロビーへと降り注ぎ、皆が慌てて落下地点から逃げ出す。

「早かったな。助かったよ」

「帰りがけにレンに何か嫌な予感がするからいつでも出撃出来る準備をした方がいいって言われてたんです」

「サムライに？」

負傷者の手当てを始めたレベツカの言葉にバリーが怪訝な顔をする。

だが、こちらへと近付いてくる足音を聞いた途端に装弾を終えた

レミントンを素早くそちらへと向けた。

「ち、ちよつと待て！」

「オレ達だ！」

「カルロス！スミス！無事だったの！」

お互い肩を貸し合いながらこちらへと近付いてくる人物が誰か気付いたジルが歓声を上げる。

二人の手足には包帯代わりに切り裂いたシートが巻かれ、そのどれもが傷口から流れ出した血で紅く染まっていた。

「大丈夫！？何が有ったの！？」

「襲撃してきてのはHCFの新型だ！オマケにウェスカーが来てやがるぞ！」

『何！？』

カルロスの言葉に全員の顔色が変わる。

「他の連中は？」

「クリスとレオンはクレアを探しに行った。レンは今ウェスカーと交戦中だ」

「何だつて！？あいつ一人で大丈夫か！？」

「逆だよ、あいつだから大丈夫だ。多分な」

応急手当を受けながら、スミスが断言する。

「探してきます！」

「おい！一人じゃ危険だ！」

シェリーがいても立ってもいられずに走り出す。

「しょうがないわね」

ジルがその後につき、やがて二人の姿が曲がり角に消えた時、ロビーに続くエレベーターが短い電子音と共に開いた。

全員の銃口がエレベーターへと集中する中、中からクレアとクリス、そして二人に両肩を借りている満身創痍のレオンの姿があった。

「何があつた!？」

「レオンが私を庇ってくれたの……………」

クレアが彼女にしては珍しく意気消沈した声で呟く。

「自分を囷にしながら戦ってやがった。とんでもないクレイジーだよ。こいつは」

クリスがバリケードとなっていたソファアを一つ戻すとそこにレオンを横にする。

「護るべき者の為に絶対の盾になる。それがオレの戦い方だ……………」

……」

「しゃべらないで」

クレアが心配そうに見ながらレオンの手当てを始める。

レオンの両腕にはもはや用をなさなくなった即席の盾の隙間から無数の裂傷が見え、左肩には半ばからへし折れたグレムリンのカギ爪が突き刺さっている。

それでもなお、その手には弾丸の尽きたデザートイーグルが握られていた。



「レオン……………」

「心配するな。オレは不死身だ」

涙ぐんでいるクレアに優しく声を掛けながら、痛みにレオンが顔をしかめる。

「休んでいる。後はオレ達が片付ける」

「頼みます……………」

それだけ言うと、レオンは気が抜けたのか失神する。

「残るはサムライとミリィか……………」

「二人共無事ならいいがな」

クリスが呟きながら手渡されたSPAS12ショットガンのセーフティを外した。

（何処にいるの？レン……………クレア……………）

シェリーが暗い廊下を走りながら不安な思いに捕らわれる。

そこへ正面から跳び上がりながらグレムリンが襲い掛かるが、シェリーはそれを電圧を最大にセットしたスタンナックルと強力な右アッパーカットで迎撃し、天井に激突して落ちてきたそれに駄目押しのハイキックを叩き込んだ。

シェリー自身の異常身体能力の攻撃に加えて叩き込まれた電撃と特製スパイクで完全に絶命したグレムリンにシェリーは目もくれずに再び走り出す。

間を置かず、今度は天井の通気口の中から別のグレムリンが襲い掛かるが、今度はサマーソルトキックで背後へと蹴り飛ばす。

が、いつの間にかそれとは別のグレムリンが背後に現れ、体勢の崩れたシェリーを狙う。

シェリーが慌てて振り向くよりも早く、突然横手から発射された散弾がグレムリンの体を貫いた。

「前ばかり見てたら危ないわよ」

散弾の発射された横手のドアから、ベネリM1スーパー90ショットガンを手にした白衣姿のミリイが出てきたのを見たシェリーの顔が本人も気付かない内にムスツツとした表情に変わる。

「ところでレン見なかった？」

「知りません」

シェリーが不機嫌な声で言いながら再び走り出す。

「ちょ、ちょっと待って」

慌ててミリイもその後続く。

「この間から気になってたんだけど、あたし何か嫌われるような事、貴方にした？」

「いいえ」

シェリーが応えながら、わざと速度を上げていく。

段々離れていくシェリーの背中を見ていたミリイがその背に向けて、確信と疑惑が半々の言葉を掛けた。

「ひょっとして、レンの事を好きになってあたしが邪魔とか？」

それを聞いたシェリーが突然急停止する。

ぶつかりそうになったミリィがなんとか回避しながら、シェリーの前へと回った。

「え？な？あの……………」

「凶星、みたいね」

銃口の下に付けられたタクティカルライトで照らされたシェリーの顔が真っ赤になっているのを見たミリィがくすりと笑う。

「苦勞するわよ。ああいうのを好きになると」

「そ、そうなんですか？」

シェリーが先程とは正反対の口調の問いに、ミリィが苦笑を浮かべる。

「そうよ、週に一回は必ず怪我してくるし、月に一回は大怪我してくるし。デートの時でも武器手放さないし、ムード出そうとしているのに気付かないし、オマケにキスする時口の中ガンオイル臭いし、他にも……」

「はあ……………」

次々とミリィが並べていくレンの欠点に、シェリーが半ば啞然とする。

「でも、あげないわよ」

「はい？」

最後の一言に、シェリーが間の抜けた声を出す。

「あたしだって、居候から恋人になるまで三年半掛かったんだから。そう簡単に取りられて堪るもんですか」

「それって、奪えたら奪ってもいいって事ですか？」

「奪えたら………ね」

余裕有り気なミリイにシェリーが挑戦的に微笑み返す。

「宣戦布告？」

「そう取って貰って結構です」

「フェアに行きましょう」

「もちろん」

ミリイが差し出した手を、シェリーが少し強めに握り返す。

「話が着いた所で、いいかしら」

いつの間にか側にいたジルに声を掛けられたシェリーの肩が跳ね上がる。

「い、いつからそこに？」

「ガンオイル臭いし、の辺りから」

「……………聞いてました？」

「一応ね。それよりも来るわよ」

廊下の向こうから聞こえてくるグレムリンの泣き声に、全員の顔が緊張する。

「続きは生き残ったらね」

「OK」

闇に閉ざされている廊下の向こうに見えた双眸に向けて全員が戦う構えを取った。

廊下に死闘の後が無数に刻まれていた。

壁、床、天井を問わず穿たれている弾痕、壁に刻まれた斬撃の跡、床に転がっている空薬莢、そして無数の血痕。

それらの先に、二人は再び対峙していた。

レンの袖は最早スタレの様に切り裂け、その内幾つかからは血が滴り、脇腹を浅くえぐった銃創から血が滲み出している。

対するウエスカーも無傷ではない。

傷自体はレンよりは少ないが、どの傷も明らかにレンよりも深い。

純粋なリーチの差だけでなく、身体能力の差を埋める程の修練された技術と揺ぎ無い気迫の込められた攻撃がその結果を生んでいた。

二人共無言で、しばし向き合う。

床に血の滴る音と微かな呼吸音だけが響き、やがてどちらからともなく、動く。

ウエスカーがまったく衰えない高速で間合いに踏み込みながらナイフを突き出す。

レンがそれを防ごうとその軌道上に刃をかざした時、ウエスカーが薄く笑った。

突き出された右手に何も握られていないのに気付いたレンがとっさにサムライエッジを握ったままの左手の小指だけで鞘の装飾に付けられた小柄を引き抜くと銃のグリップと一緒に握りこみながら、いつの間にかウエスカーの左手に握られているナイフの軌道にか

ざす。

甲高い金属音が響き渡り、しばらくの後、小柄が双方の力に耐え切れず砕け散る。

それと同時に二人の体が離れ、レンが的確に斬撃によって斬り裂かれた防弾繊維の隙間を狙ってトリガーを引く。

一発撃った時点で弾丸が尽き、ウエスカーは微かに体をよじらせて弾丸を無傷の防弾繊維で受け止める。

「誰がいるの？」

そこへ、突然横手のドアが開き、一人の若い看護婦が出てきた。

状況を理解出来ていないらしい看護婦がこちらに振り向くよりも早く、ウエスカーが彼女の影、レンにとって絶対的な死角へと体を滑り込ませ、M9を構える。

ウエスカーが看護婦の体越しに自分を狙っている事に気付いたレンが間合いを急激的に詰める。

ウエスカーがトリガーを引こうとした時、レンが看護婦の胸にサムライエッジを握ったままの手の甲を添え、軽く押しながら右足で彼女の足を払った。

弾丸が銃口を飛び出す瞬間、看護婦の体がキレイに回転し、レンの視界に驚愕へと変化しつつあるウエスカーの顔が飛び込んでくる。

間一髪で弾丸が飛び出す前にレンが刀の柄でM9を上へと弾き上げ、弾丸はレンの頭頂部を僅かにかすめながら天井へと突き刺さる。

「隠れている」

背中を床にぶつけて転げ回っている看護婦に短くレンが言いながら、その体を飛び越えるように前へと進み、前蹴りをウエスカーの

腹部へと放つ。

ウエスカーがそれを後ろに跳んでダメージを和らげ、体勢を立て直そうとした時、突き出されたレンの足が力強く床を踏む音が周囲に響く。

「はあっ！」

短い声と共に、ウエスカーのナイフを上回る速度で白刃が上段から弧を描く。

ウエスカーの回避はその速度の前に僅かに遅れ、最新の防弾繊維が白刃の前に抵抗も出来ずに斬り裂かれ、微かな間を持って鮮血が噴き出す。

返り血を浴びながらも、レンは振り下ろした刀を真横へと跳ね上げ、ウエスカーの胴を横薙ぎに襲う。

だが、それは傷を物ともせず下がったウエスカーの前に空振りに終わる。

今度はウエスカーがレンの肩口を狙ってナイフを突き出す。

それをレンが左手でウエスカーの腕を跳ね上げるが、僅かに間に合わず肩が衣服とその下の防具ごと切り裂かれ、鮮血が虚空に飛び散る。

そのまま二人は交差し、離れる瞬間にレンはサムライエッジのグリップを、ウエスカーは裏拳をお互いの脇腹に叩き込み、弾けるように離れる。

また距離を取って二人は対峙する。

やがて、ウエスカーの口から低い笑いが漏れ始める。

「私とここまでやり合ったのはクリス以来だよ。もつとも彼とは殴り合いだったがね」

「余程の奴でもなければ武器を持つてはお前のスピードについていけない。妥当な戦い方だな」

レンの返答に、ウエスカーが不適な笑みを浮かべる。

「その通りだ。武器を持って私と互角に戦えたのは君が初めてだ。だが、それもそろそろ限界ではないかね？」

レンは無言で答えない。

それを肯定と受け取ったのか、ウエスカーが邪悪な笑みで顔を崩す。

「気付いているんだろう？爆発しそうな心臓、止まらない汗、酸素を求めて喘ぐ呼吸、きしみ始めている筋肉……………君は今疲労してきているんだろう？」

「……………」

レンはまた無言。だが、その言葉を肯定するかのように一筋の血混じりの汗が頬を伝い、床へと落ちる。

（気付かれたか……………）

レンは目立たないように呼吸を整えながら、僅かな焦りを覚える。

確かに、彼の体は限界に近付いてきていた。

それに対し、ウエスカーが多少の発汗は見られるが、それ以外の疲労は見受けられなかった。

「そろそろ、ファイナーレかな？」

「クライマックスはこれからだぞ」

レンが最後のマガジンをサムライエッジに叩き込み、手早くリロ



ード。

ウェスカーの方へと向けて連続してトリガーを引くが、発射された弾丸は全てウェスカーにかすりもせず背後に消える。

「何を…」

「おおおおおお！！」

ウェスカーの疑問は、雄叫びを上げながら突っ込んでくるレンにかき消される。

（カミカゼ？ いや、ただの体当たり？）

刀を突き出す風でもなく、ただこちらに向かって突っ込んでくるレンに疑問を浮かべながらも、ウェスカーがその体を抑える。

それでも勢いは止まらず、ウェスカーの体がレンと絡み合いながら進み、ウェスカーの背が何かに触れる。

振り返ったウェスカーの目に、一階のロビーへと繋がる吹き抜けを隔てているガラスと、そこに穿たれた無数の弾痕が飛び込んだ。き

「貴様、まさか！？」

ウェスカーがレンの狙いを知ると同時に、背後のガラスが砕け散り、二人の体が宙を舞う。

「ここ、三階…」

こちらを見ていた先程の看護婦の声が僅かに届く中、レンはウェスカーの体を蹴ってその上へと踊り出ると、刀を大上段に構える。

「あああああああああ！！！！」

絶叫にも近い声を上げながら、レンは渾身の力を込めて刀を振り下ろした。

「あああああああ！！！！」

頭上から聞こえてきた声に、階下にいた者達が一斉に上を見た。頭上からガラスの破片と共に、何かが降ってくるのに気付いた者達が驚愕の顔のまま、それが落下してくるのを見届ける。

落下してきた影は、着地と同時に片方が弾けるように離れた。

「レン！？」

「ウエスカー！？」

落下してきた者が何かを気付いた者達の声が二分するが、即座にSTARSメンバー達は銃口をウエスカーへと向けた。砕けたガラスだらけの床に、両断されたチタン製の刃と鼻あてから真つ二つにされたサングラスが落ちる。

「油断したよ……………」

ウエスカーが胸の前で交差させていた両腕を降ろす。

右手には半ばから両断されたナイフが握られ、左腕は深く斬り裂かれて鮮血が床へと溢れ出す。

「《雷光斬・轟》かみひびきを受けて倒れなかったのはお前が初めてだ」

レンが切り札の一つにしていた技を防がれた動揺をおくびにも出

さず、刀を一振りして付いていた血を払うと構え直す。

「ウェスカー！」

バリーの怒声に、予備のHVナイフを出しながらウェスカーが周囲を見回す。

「お揃いのようだな。STARS諸君」

「黙れ！」

バリーが激昂しながらトリガーに指を架ける。

「そんな物では私は殺せない事は承知しているはずだ。それにサムライに当たるかもしれないぞ」

その言葉に、同じくトリガーを引こうとしたSTARSメンバー達の動きが止まる。

「どうかな、ここはお互いに引き分けにでもしないかね？」

「逃げられるとも思っているのか？」

ウェスカーの言葉にレンが鋭い殺気を込めた声で応じながら、摺り足で間合いを詰めていく。

「君の家族を預かっている。と言っても？」

「プラフ（はったり）だ！」

ウェスカーの意外な一言に、バリーが叫ぶ。

「バリー、それは早計だな。確かに五年前は私の単独犯行の為、プ

「ラフを仕掛けたが今の私の後ろには組織が有るのだよ？」

「くっ……………」

バリーが言葉に詰まったのを見たウェスカーがレンへと向き直ろうとした時、一気に間合いを詰めたレンが横殴りの斬撃を繰り出す。

後ろへと跳んでそれをかわしたウェスカーが意外そうな表情を浮かべた。

「君の家族がどうなってもいいのかね？」

「プラフに乗る必要は無い」

レンが冷静な声で断言する。

「根拠は？」

「まず一に、本当に人質がいるのならば何らかの証拠を出してくるはずだが、それが無い。二にタイミングが悪い。本当ならば一番最初にそれを出してきていいはずだが、今まで出さなかった。そして三にオレがその事を考えないとも思ったか？家族にはオレが一番信用している男がボディガードに付いている。以上だ。言い返したい事は有るか？」

レンの並べた根拠に、ウェスカーが低く笑い始める。

皆が訝しく思う中、やがてそれは大きくなっていき高らかな哄笑となって周囲に響き渡る。

やがて、ピタリと笑いを止めたウェスカーがさも楽しそうな、かつ邪悪な笑みを浮かべる。

「素晴らしい。戦闘能力だけでなく、考察力、現状判断能力、どれもが一級とはな。確かに君の家族を拉致しようとはしたよ。だが、

君と同じ黒いサムライに部下達は全員手も足も出せずに撤退したぞうだ」

「そいつはオレの従兄で光背一刀流の正統後継者だ。亜流のオレとは戦闘力の桁が違う。あいつと互角に戦いたいなら一個大隊は用意する事だな」

「私の部下は一人で特殊部隊一個小隊分の戦闘力は持っているはずなのだが、それでは足りなかったようだな」

二人の顔に、不敵な笑みが浮かぶ。

同時に、お互い小さく笑い、そして、急激的に動いた。

周囲の人間の目には何が起きたか理解する時間の間に、刃が打ち合わされる音が立て続けに響く。

援護しようとする者もいたが、瞬く間に位置が入れ替わる二人のスピードに着いていけず、トリガーを引くに引けなかった。

「そして四。お前は余裕が在るようにしてるが、実はかなり焦っている。だからあんな事を言い出した。違うか？」

「それはどうか？」

まったく衰えないスピードで、二つの刃が交錯する。

お互いの言葉にも、焦りや疲労は感じられない。

超高速の命懸けの輪舞を、二人は舞い続ける。

レンが繰り出した刺突をウェスカーは受け流し、滑るようにナイフをレンの懐へ振るう。

体を横へと流してレンはそれをかわすと、体をそのまま回転させて突き出した刃を横薙ぎへと変化させる。

ウェスカーがそれをしゃがんで避けると、そのまま下段の回し蹴りがレンの足を狙う。

かわし損ねたレンが体勢を崩すと、すかさず心臓へと向けてナイフが突き出される。

バランスを崩しながらもレンが臂力だけで刀を振るい、それを受け止める。

サムライエッジを握ったままの左手でレンは床を裏拳で殴りつけ、その反動で床を転がると素早く片膝について起き上がる。

そこでウェスカーがM9を向けているのに気付くと一気に間合いを詰め、M9目掛けて刀を振り上げる。

ウェスカーがとつさにM9を引き、後ろへと跳ぶ。

その体は戦闘の影響か、開きつ放しになっている玄関から屋外へと飛び出した。

止められたままになっているSTARSメンバー達が乗ってきた車の陰に隠れながら、ウェスカーがトリガーを連続して引く。

レンも同じく車の陰に隠れ、弾丸はウィンドウの防弾ガラスに食い込み、それを砕け散らせた。

銃撃が止むとすかさずレンは影から飛び出しながら同じようにトリガーを連続して引く。

弾丸はウェスカーの影を的確に捉えるが、こちらは虚しく防弾ガラスに阻まれる。

ウェスカーが影から出ようとした瞬間、レンは車のボンネットを蹴ると大きく宙へと踊り出る。

真下へと突き降ろされる刃をウェスカーは辛くも逃れ、距離を取る。

二人はそのまま距離を取りながら並走し、広い駐車場の中央で止まった。

「そろそろ、終わりにしようじゃないか」

「異論は無い」

二人が油断無くそれぞれの獲物を構え、慎重に間合いを取る。

「最後に言っておこう。今回の私の任務はSTARSの中でもトッ

ブクラスの戦闘力を誇るクリス・レッドフィールド、レオン・S・ケネディ、そして君の抹殺だ」

「光栄、と取ればいいのかな？」

レンがゆつくりと刀を八双に構え直す。

「だが、君の能力は我々の予想を遥かに越えていた。だからこそ、君一人を殺せば今回の任務は成功とみていいだろう」

ウエスカーがナイフを逆手に持ち直し、僅かに背を屈め、攻撃態勢を取る。

「出来ると、思っているのか？」

「何も必殺技を持っているのは君だけじゃないのだよ」

ウエスカーが不敵な笑みを浮かべながら、その場で何度か小さくジャンプする。

やがて、その体勢のままウエスカーの体は横へと流れていき、急激的に加速していく。

「ニンジャと戦った事は有るかね？」

「一度だけな」

「じゃあ見覚えが有るだろう。この技を！」

今や、ウエスカーの体は超高速でレンの周囲で円を描いていた。そのスピードどステップが独特のリズムを生み、その姿は無数の残像となってレンの周囲を取り囲んでいた。

「分身の術とはな。初めて見る」

「これを使うのは君が初めてだ。光栄に思いたまえ。そして、死ぬ

「がいい！サムライ！」

次の瞬間、無数のウェスカーがレンへと襲い掛かった。

「レン！」

後を追ってきたらしいスミスの声が響く。その目前で、レンが刀を鞘へと納め、体勢を低く構える。

「シャイニング・スパイラル！」

スミスが五年前に見たのと同じ構えに、思わず叫ぶ。

ウェスカーがレンへと無数のナイフを突き刺そうとした瞬間、レンの体が高速で回転しながら抜刀した。

低い軌道から繰り出された刃が、五年前とは比べ物にならない速度で高速の螺旋を描き、周囲のウェスカーを次々と斬り裂いていく。

「ぐああっ！」

全身に無数の裂傷を負ったウェスカーが悲鳴を上げながら一つの姿に戻ってレンから距離を取った。

レンの回転が止まり、血塗られた血刃が斜めに星空にかざされる。

「光背一刀流、《光螺旋》ひかりらせん」

「まさか、そんな技を持っているとはな……………油断したよ」

意表を突かれたウェスカーが苦笑する。

けっして浅くないその傷から鮮血が地面を濡らしていく。



「今ので、見切った。最早お前に勝機は無い」

「どういう事だね？」

「こういう事だ！」

訝しがるウエスカーの目前で、レンが刀を上へと投げ捨て、サムライエッジを構える。

「馬鹿が！」

ウエスカーが負傷を物ともせず、今まで最高のスピードでレンの懷に潜り込む。

そこには、無防備となっているレンの胴体が有った。

（勝った！）

勝利を確信しながら、ウエスカーが刃をレンの心臓目掛けて突き出す。

高周波による振動で分子間結合の隙間を縫いながら、刃は衣服とその下のプロテクターを突き破り、レンの胸へと突き刺さる。

鮮血が、地面に溢れ出した。

「お前の敗因は二つ。一つは極僅かだが、お前は自分のスピードに反射神経と五感が追いついていない」

胸にナイフが突き刺さったまま、レンは呟く。

「もう一つ、オレはサムライじゃないと言ったはずだ。勝つ為なら刀も捨てるさ」

ウェスカーが、自らの口から溢れ出した鮮血を信じられないといった顔で凝視する。

レンの胸に突き刺さったナイフは、刃の三分の一が潜り込んだ所で止まっていた。

そして、それよりも深く、レンが逆手で突き出した鞘が、ウェスカーのみぞおちに突き刺さっていた。

「まさか……………自分の命と誇りを囷にするとはい……………」

ウェスカーがナイフを手放しながら、ふらりと後ろに下がる。

「だが……………この程度で私は……………」

言葉の途中で、レンが無言で天を指差した。

ウェスカーがそれに連られて上を見た瞬間、投げ捨てられたはずの刀が流星となって、ウェスカーの額に吸い込まれるように、突き刺さった。

「ば……………かな」

何が起こったのか理解したウェスカーが、頭部に刀が突き刺さったまま呆然とレンの方を驚愕に満ちた隻眼で見た。

「黄泉帰りし亡者は冥府へと戻れ」

レンがサムライエッジを正確にウェスカーの頭部へと向けて、トリガーを引いた。

一発の銃声が、騒乱の夜の終わりを告げた。

「まさか、ウエスカーに一对一で勝つとはな」

STARSMEMBER達に病院内のグレムリンの掃討を命じた後、間近まで近寄ってきたクリスが、レンの隣からウエスカーの亡骸を見た。

「あいつが隻眼じゃなかったら勝てなかった……」

レンが抜き取った刀を一振りして鞘に納めると、大きく息を吐いた。

だが、ウエスカーの体が小刻みに動き始めたのを見たレンが再び柄に手を掛ける。

「Tウイルスで改造された生物は細胞レベルでのダメージを与えないとたまに復活する事がある」

クリスがその様子を冷静に見ながら、手にしていた一つのオイル缶の封を開けた。

「だから完全に殺すにはこうするのが一番だ」

クリスがそのオイル缶を動き始めたウエスカーへと向けて放り投げる。

鼻を突く独特の方向が辺りに漂った。

（ナパームオイル？）

それがナパーム弾の中に入れられる急燃焼性を持つオイルだとレンが気付いた時、クリスの手の中には愛用のジッポライターが握ら

れていた。

「あばよ、ウエスカー……………」

クリスはそれに火を灯すと、ウエスカーの方へと向けて放り投げた。

それが地面に触れるよりも早く、揮発したオイルに着火、ウエスカーの亡骸は猛烈な炎に包まれた。

それを見ていたレンが、突然片膝をついた。

「大丈夫か！？」

「ああ、心臓にまでは届いていない」

胸に突き刺さったままのナイフを抜こうとした時、レンの体を何者かが羽交い絞めにする。

「シェリー？何を……」

振り返ったレンの目に、後ろからレンを羽交い絞めに行っている意図な人物が入ってくる。

問い質すよりも早く、レンの首筋に消毒も無しに注射針が突き立てられた。

レンがそちらを振り向くと、すでに中身を入れ終えた注射器を手にしたミリイの姿が有った。

「いきなり……………なに……………を……………」

急激的にレンの体から力を抜けていく。

「すぐに手術室に！外科のジャック先生に緊急手術の連絡を！」

「了解！」

麻酔が効いて動けなくなったレンの体を二人が引きずって行く。  
クリスが呆気に取りられた顔でそれを見ていると、それと入れ違いにジルが姿を現した。

「あの二人、いつの間に仲良くなったんだ？」

「ちよつと、ね……………」

ジルが悪戯っぽく微笑む。

事情が今一理解出来ないクリスが頭を捻るが、答えは出そうになかった。

「あ、そういえばこれどうしようかしら？」

「何がだ？」

ジルの手には、一冊の古びたノートが有った。

「それは？」

「日本からレン宛に届いたんだけど、日本語らしくて誰も読めないのよ」

「手術の後で渡せばいいだろ。それがなんなのかは知らないがな」  
「そうね」

そのノートの表紙には、漢字でこう記されていた。

「細菌災害追意録」

その驚愕の内容を彼らが知るのは、それから三週間後の事だった。

## 第九章 『追跡！過去からの協力者！』

1978年 カナダ エルズミア島

北極圏に入る厳寒の大地を、一人の変わった老人が訪れていた。防寒用コートの下には、淡い雌黄色しおういろの小袖袴を着込み、その顔には年齢よりも年かさに見える深い皺が刻まれているが、その目には老いを感じさせない強い意志が宿っている。

借り物のスノーモービルを慣れない手付きで運転していた老人が、ふとブレーキを架けてその場に止まると、周囲を鋭い目で見渡す。それを見計らったかのように、突然老人の目の前の雪に覆われた地面が跳ね上がり、そこから奇怪な怪物が姿を現す。

粘液質の肌をした肉食のゴリラとでも形容するべきその怪物は、老人を見ると同時に飛び上がると、鋭い力ギ爪を振り下ろしてくる。

老人は年齢からは考えられないような機敏な動きでそれをかわし、怪物と対峙する。

よく見ると、怪物の体はあちこち腐敗し、左の眼球は崩れて頬へとぶら下がっている。

それでも、怪物は鋭い牙が生えた口から唾液を垂れ流しつつ、老人を狙う。

「外道が……………」

老人は日本語で呟きながら、分厚い皮手袋で覆われた右手の人差し指と中指を立て、眼前で構える。

「我、五行相克の法を持ちて六黒水気を持ちて素を貫く！」

呪文を鋭く叫びながら老人は突き出した二本の指を足元の雪原へと突き刺す。

すると、老人の周囲の雪が突如として盛り上がり、それが無数の槍となって怪物を貫き、一撃で絶命させた。

怪物が崩れ落ちるのと同時に、槍もその形を失い、ただの雪の塊として地面へ戻っていく。

「間違いない……………ここだ……………」

老人は眼前に広がる広大な雪原を睨みつけながら、低く呟く。

「見つけた。ようやく……………」

そこで、ふいに老人は咳き込んで口に手を当てる。

何度か咳き込んだ後に手を見ると、そこには僅かながらも血の混じった痰がへばり付いていた。

「長かった……………長過ぎた。最早、我には奴らを、アンブレラを潰せるだけ力が残っておらぬ……………」

老人は自嘲と悔恨の籠った声で呟く。

「だが、きつと現れるはずだ。我と同じ志を持った者達が……………必ず……………」

老人の呟きは、雪原を吹き抜ける風にかき消されていった。  
ラクーンシティの惨劇の起こる、二十年前の出来事だった。

2003年 イギリス

「看護婦と入院患者に死者二名、重軽傷者十五名、内重体が一名か」

「それくらいで済んだ、と思うべきだろうな」

HCFの襲撃から三日が経過し、見舞いに來たクリスの報告に再入院となったレン達は苦い顔をした。

「対応が遅ければ死者はもっと増えていただろうな」

「ああ、それに重体のはずの奴が何でか平然としゃべってるし」

前の病室とまったく同じ面子が入院している病室で、今朝ICU（集中治療室）から出てきたばかりのレンに全員の視線が集中した。

「っていうか、胸刺された奴がなんで平気なんだ？」

「狙いが正確に心臓だけだったからな。他の臓器や動脈の類は傷ついていない」

「心臓まであと3cmだったけどね」

レンの寝ているベッドの側でカルテをまとめていたミリィが限りなく冷たい声で言い放つ。

「……………ちょうど一押し分か？」

「それって一歩間違えれば即死なんじゃあ……………」

両腕をギブスで固定されているレオンと、その付き添いをしているクレアが啞然とした表情で呟く。



「さすがサムライ、戦い方が無茶苦茶だな」

「五年前もそうだったからな」

体中包帯だらけのカルロスとスミスが自分の手の中の手札を見ながらどこか感心したような声を上げる。

「あの時は未熟だったただだし、今回は敵が強かったただだ。別に好き好んで負傷した訳じゃない」

「好きで怪我されたらこっちが堪らないわよ……………」  
「そうですね」

ミリイのため息混じりの呟きに、レンのベッドの隣に座ってノートパソコンにデータをまとめていたシェリーが苦笑を含んだ賛同を漏らす。

「取りあえず、様態は安定したからこれを外して欲しいんだが」

「駄目」

「駄目です」

レンが自分の手首に繋がれている手錠を示すと、ミリイとシェリーが同時にそれを否定する。

「刀傷15箇所、その内胸部に10cmに及ぶ刺創傷有り、肋骨癒着箇所全剥離、右脇腹に擦過銃創、切り傷打撲は計測不能、ひいき目に見てもまた全治三ヶ月。一ヶ月は絶対安静よ」

「そうですよ、動いたら駄目です」

断言するミリイにシェリーがにこやかに肯定する。

だが、ミリイの腰には護身用のスタンガン内臓の特殊警棒が、シェリーの手には電圧が最低にセットされたスタンナックルが装備さ

れている様はどう見てもレンを看護、ではなく監視しているようにしか見えない。

「いざという時に動けないのでは困るんだが……………」

レンがそれぞれの足首とベッドの骨組みに繋がれている手錠を指差す。

「外したらまた勝手に出歩くじゃないの！絶対に駄目！」

「半年前に比べれば軽症だぞ」

「そうね。あの時は胃が破裂しかかったものね」

ミリイが笑みを浮かべたまま、レンにまったく笑ってない瞳で微笑みかける。

「そうだったな。飯がしばらく食えなくて苦労したっけ」

「そ・う・い・う・問題じゃないでしょ？」

ミリイが重低音の効果音が付きそうな表情でレンに迫る。

「とにかく！あたしがいいって言うまでベッドから一步も出ちゃ駄目！」

「もしまた襲撃があつたら？」

「その時は私がベッド每持ち出してあげますから」

シェリーが腕を持ち上げながらにこやかに答える。

「第一、銃もカタナも修理中だろが」

カルロスが手札を交換しながらぼやく。

「サムライエッジはありや修理効かねえんじやないか？グリップ歪んでたぞ」

スミスが手札を交換しながら呟き、交換後の手札を見た所で表情が凍りつく。

「殴り過ぎたか？どうりでマガジンが入りにくいと思った」

「オレはカタナが折れなかった方が不思議だがな」

クリスが呟きながら、懷からウェスカーの使っていたHVナイフを取り出し、振動スイッチを入れると、それを刃を下に向けて胸の高さまで持ち上げ、手を放した。

ナイフは重力に従って落下し、そのままの勢いで床に鍔元まで突き刺さった。

「うげ……………」

「何それ……………」

それを見た者達が絶句する中、クリスはナイフを拾い上げる。

「オレはウェスカーがこいつで車のボンネットや建物の柱を平然と切り裂くのを見た事が有る」

「成る程な。村正銘の刀じゃなけりや、一撃で折れてたな」

「修理にどれ位掛かるんだ？」

レオンの問いに、レンは首を左右に振る。

「分からん。知り合いの腕のいい刀鍛冶の所に送っておいたが、あそこまで損傷していたら完全に打ち直しになる。銃は代わりを前に

頼んでおいたのがあるが、村正以上の刀はそうそう無いしな」

「代わりって、あれか。そろそろ完成しているか？」

「銃はともかく、二ホントウなんてそうそう手に入る物じゃないしな」

スミスがおとなしくカルロスにチップを払いながら思い出したかのように呟く。

「武器と体の修復が終わるまで、警備を更に厳重にするしかないだろう。院長が他の入院患者を全員他所に移してくれたしな」

クリスの提案に、全員が無言で頷く。

「取りあえず兄さん」

「何だ？」

「その穴、塞いどいてね」

クレアの指摘に、クリスが気まずい顔で先程ナイフが突き刺さった隙間を見つめる。

「あとね、シェリー。この間から言おうと思ってたんだけど…」

「何？クレア？」

「その眼鏡、全然似合ってないんだけど」

シェリーが何故か数日前から架け始めた伊達眼鏡を直そうとした指が止まる。

「確かにな」

レンがボソリと呟いた一言に、シェリーの顔が完全に凍りつく。

「なあ、ひょっとしてあいつそういう趣味か？」

「さあな。それにレンがミリィと付き合い始めた原因は二年前のクリスマスに……」

小声で話していたスミスに、ミリィが無言で肩を叩く。

「いや、何でもない………」

「ああ、そうか………」

何か薄ら寒い物を感じた二人がそれとなく話題を逸らす。

その時、少し前のヒットソングを模した着メロが病室内に響き渡る。

「オレのか」

レオンが訝しげな顔で枕元にある衛星電話をクレアに取ってもらって耳に当てる。

『よお、派手にやられたそうだな』

「アーク！？アークか！お前今何処に？」

電話の相手が友人である探偵のアーク・トンプソンである事に気付いたレオンの顔が一転して明るい顔に変わる。

『今か？イタリアだ』

「イタリア？」

STARSの独立諜報員としてあちこちを飛び回っているアークの言葉にレオンの顔が再び怪訝な物へと変わる。

『凄いネタを掴んだんでな、近い内に詳細は伝える。それに今頃襲撃を警戒してるだろうが、その必要はないぞ』

「なんでだ？」

『ウエスカーが死んだ事でHCFの一角が危なくなっただけで、その隙を突いてアンブレラが攻勢に出ている。しばらくはSTARSまで手が回らないだろう。あと、この間入ったっていうサムライの件なんだが…』

「レンの事か」

『アンブレラ、HCF双方が彼を最危険人物に指定した。数ヶ月前まではランク入りすらしていなかった奴がお前とクリスを抜いて一気に首位だよ。あのウエスカーにタイマンで勝ったって本当か？』

「本当らしい。生憎とオレは現場を見れる状態じゃなかったけどな」

『そうか。だとしたら危険度がAAクラスも頷けるな』

「AAって言えば……………」

『即時抹殺を要す、だ。アンブレラ、HCFの両方がそのサムライの抹殺をプロの殺し屋に頼んだらしい。下手したら今日辺り…』

ふと、それまで寝ていたレンが急に体を起こす。

「寝てな…」

それを見たミリィがレンへと向き直った瞬間、乾いた発砲音と共にガラス窓とレンの枕に小さな穴が穿たれる。

「狙撃！？」

「早速か！」

その音の正体に気付いたクリスがグロッグ17を抜きながら窓際の影に隠れ、クレアが銃を使えないレオンを庇うようにしてキヤリコM 100Pを二丁拳銃で構える。

「狙いはレンだ！安全な所へ！」  
『分かったわ！』

シェリーとミリイの声がきれいに重なり、二人掛りでレンの寝ているベッドを窓から遠ざけようとする。

「頭を下げていろ」

そんな二人に声を掛けながらレンが再び横になる。その直後、先程までレンの頭が有った位置を二発めが通過した。

「なめるなあ！！」

役が出来かかっていたトランプを投げ出してベッドの下をまさぐっていたスミスが、そこから巨大なバーレットM82A1を取り出すとベッドをまたぐようにして構える。

「ちょっと待て！こんな狭い所で……」  
「相手はここから500m位先のビルの屋上にいるぞ」  
「あいつか！」

レオンの抗議の声も聞かず、レンの指示に従って狙いを着けたスミスがためらいも無くトリガーを引いた。

50口径弾の強力な銃声が病室どころか病院中に響き渡り、反動軽減用のガスポートから抜けた爆風が病室中に吹き荒れる。

「外れた！右に二度、下一度！」  
「了解！」

同じくベッドの下からM4カービンを取り出して、そのスコープを覗いていたカルロスが座標修正に従ってスミスが微妙に狙いを変え、二発目を発射。

スコープの向こう側にいた狙撃手の至近距離を弾丸はかすめ、真後ろのワインの看板に大穴が開いた。

「下手くそ！」

「悪かったな！オレは突撃班で狙撃班じゃねえ……って逃げやがったぞ！」

「ほっとけ、もう二度と来ないだろ。鼓膜くらいイカレてるだろうしな」

自分が狙われたにも関わらず平然としているレンに全員が怪訝そうな視線を集中させた。

「何で狙われてるって分かった？」

「相手が一流では有っても超一流で訳じゃなかったんだ。殺気で分かった」

「あの距離からか？」

「師匠や従兄ならkm単位でいけるけど、オレじゃアレ位が限度だな」

「……………」

今一信じられないような話にレンとミリィを除いた全員が顔を見合わせる。

『おい！どうした！レオン無事か！？』



その時になって、通話中の電話がそのままになっているのに気付いたクレアがそれを拾うとレオンの耳元へとあてがった。

「全員無事だ。どうやら情報通りらしい」

『凄い音がしたぞ。何が有った？』

「狙撃されたからな、50口径で撃ち返した」

『……………病室だよな、そこ……………』

「言うな」

そのまま妙な沈黙がしばらく続いたが、おもむろにアークが口を開く。

『用心しろ。他にも凄腕の殺し屋と、HCFの暗殺者が送り込まれてるらしい。詳しい所までは分からなかったが、殺し屋の方はとてもない奴らしいぞ』

「分かった、用心しておく。そっちも気を付けろよ。一応子持ちの身の上だろ」

『まだあんな大きなガキのいる年じゃないさ。ま、この調査が終わったら土産を買っとかないといけないけどな』

「大変だな。また何か分かったら頼む」

『OK。じゃあな』

発砲音を聞きつけてやってきた面々に事情を説明していたクリスが、電話が切れると同時にレオンの方を向いた。

「アークからか。内容は？」

「レンがAAクラスの最危険人物とし認定されたい。アンブレラとHCFから最低でもあと一人ずつ暗殺者が送られてくるそうだ」

『！！！』

驚愕の情報に全員の表情が険しくなる。

「それと、ウエスカーが死亡した事でアンブレラとHCFの抗争が激化したそうだ。しばらく大規模な襲撃は無いらしい」

「問題はその殺し屋だな……………」

クリスの深刻な声に全員が表情を曇らせる。

「とにかく、レンを安全な所に移さない」と

「まだ絶対安静よ。病院内の何処かじゃないと……………」

クレアの提案にミリイが補正する。

「病院内で狙撃とかの危険が無くて、警備が行き届きそうな場所か

……………」

「有るか？そんな都合いい場所？」

ベッドの下に取り出した武器をまた仕舞い込みながらスミスとカ  
ルロスが顔を見合わせる。

「二ヶ所、有る事は有るけど……………」

「どこだ？」

「手術室とモルグ（死体安置室）、どっちがいい？」

「……………」

ミリイの問いにレンは思いつきり表情を曇らせる。

「聞くまでもないと思うが……………」

「オレもそう思う」

「私も」

「確かに」

「普通そうでしょ」

「大抵はな」

提案者と当人を除いた全員の意見が見事に一致する。

「すぐに部屋を移動するよう手配させるわ」

「そうした方がいい」

そこで、クリスが何かを思い出したらしく、持ってきたバッグの中をまさぐると一冊の古びたノートを取り出した。

「そういえば、これが日本から送られてきたらしい。送り主は、オ、オミ？」

「おみわたり、だ。オレの母親の実家からだな」

手渡されたノートの中身を見たレンの顔が怪訝な物に変わる。

「なにこれ？」

それを脇から覗いたミリイも脳裏に疑問符が浮かんだ。

「……暗号か。陰陽僚に伝わる五行と五十音を掛けた奴だ。解くのにはしばらく掛かるぞ、これは」

「暇つぶしが出来てよかったじゃねえか。ちなみにタイトルは何て書いてあるんだ？」

「……英訳すれば、バイオハザード・レポート」

『何っ！？』

「冒頭は従兄が解いておいてくれたようだな」

ノートの中に挟まっていたレポート用紙を見たレンの顔が次第に驚きの表情へと変わっていく。

「何が書いてある？」

クリスの問いに、レンは神妙な面持ちで顔を上げ、ゆっくりと言葉を選ぶようにして言葉を紡ぎ出す。

「もしこれが本当なら……………おそらく最古のＴ ウイルスによるバイオハザードの記録だ」

「何時の事だ？」

「……………皇紀2601年、西暦に直せば1940年の事か」

「それって！」

「二次大戦日本参戦の前年だな」

「ちょっと待て！いくら何でもそんな昔に……………」

「いや、少なくともＴ ウイルス自体は1960年代には存在している。その元になったらしい始祖ウイルスがその時代に有っても不思議じゃない」

「詳細はこいつに書いてあるだろう……………取り合えず分かっている分だけでも英訳しておく」

そう言いながらレンがレポート用紙の内容をシェリーがデータ整理用に持ってきていたファイルの裏側に写していく。

「著者は土御門 展善？二代前の土御門家当主か……………ひょっとしたらこいつは……………」

「何か心当たりか？」

クリスの問いにレンは苦い顔をして黙り込む。  
やがて、英訳を終えた部分を手渡しながら口を開いた。

「聞いた話なんだが、彼は海外旅行が好きでよく世界中を飛び回っていたと聞いている。だが、それが旅行じゃなくて別の目的があったとしたら……………」

「お前の先輩の可能性が有る訳か？」

クリスの手の中の訳を覗き込みながらのカルロスの言葉に、レンは小さく頷く。

「あくまで可能性だがな」

「本人に聞けば早いんじゃない？」

「オレの生まれる二年も前に死んでるよ」

「妄想とボケの産物の可能性は？」

「それは無い。偉い博識な人で四ヶ国語ぐらい喋れたそうだからな。それに死因は老衰じゃなくて呼吸器系の疾患と聞いている」

「それにこれはどう見てもＴ ウイルスによる物だ……………」

クリスが深刻な表情をして訳を他の者へも廻す。  
それにはこう書かれていた。

皇紀式六〇壹年 六月十日

来るべき日本の参戦に備え、ナチスのオカルト部門が中心となった妖術的戦略研究の為に我と小玉家当主・小玉 盛芽、軍の技術将校阿部少尉と共にイタリアに到着。

地中海の孤島に作られた三国同盟秘密研究所へと案内される。  
戦略研究のみならず、兵器研究等も広く行われているようであり、

明日所内の案内を約束される。

皇紀式六〇壹年 六月十一日

研究所の想像以上の規模に圧倒。

兵器研究と言ってもこれ程あるのかと驚かされる程の多種の研究が行われている。

中でも最新の細菌兵器の研究には興味を引かれた。

ただ敵軍を病気にさせるだけでなく、自軍を強化させる為の物も研究していると知り、改めて科学の進歩に戸惑う。

午後、ナチスの地政学者と意見の衝突により口論。危うく妖術戦になるうとする所を双方止められる。

同盟国との対立は避けるべきと自戒する。

皇紀式六〇壹年 六月十二日

昨日の細菌兵器の詳細を知りたく、説明をしてくれた学者の元を訪ねるが病気で寝込んでいるとの事。

最近所内で体調を崩す人間が多いとの話だが、言われて見れば食堂内で顔色の悪い人間が多い。が、皆食欲は有るようなので大した病気では無い模様。

自らも健康管理に気を配る事とする。

皇紀式六〇壹年 六月十五日

病気の者、更に増えた模様。

午後から予定されていた会議も病欠の者がいる為延期となる。

同行した阿部少尉も少し体調が悪い模様。

皇紀式六〇壹年 六月十八日

早朝、突然の発砲音で目が覚める。

何事かと聞いた所、例の病気で重体になっていた患者が突然発狂、傍にいた將兵に襲い掛かった為に止む無く発砲、射殺したとの事。

この時点で症状を問わず発病している者は所内の三割近くに達し、伝染病の疑いありとして医療対策班が急遽結成される。

症状が悪化して昨日から寝込んでいる安部少尉の安否が気づかれる。

皇紀式六〇壱年 六月二十日

一昨日以来、発病者がまるで魍魎が如く人に襲い掛かる件が本日で五件を数える。

異例の自体故、我々も医療対策班に組み込まれ、初めて患者を見る。

体の各所が腐り、うめく様はまるで屍鬼が如く、腕を掴まれた時の異常な握力はとても病人とは思えず。

その上、我らの目前でいきなり発狂した患者が医師の一人に襲い掛かる。

気付いた時にはすでに医師は絶命、その腸を引きずり出し貪り食らう様は妖魔その物。

何らかの呪詛の可能性も考慮し、性急な対策が必要と思われる。なお、この日を持って発狂した患者は即時射殺が申し渡される。

皇紀式六〇壱年 六月二十五日

とうとう患者の半数以上が発狂、感染率は四割近くに達していた為、射殺もままならず所内は逃げる生者と幽鬼が如き死者がたむろする地獄と化す。

指揮権を持つ将校とも連絡が取れず、とにかく生存者を集めて倉庫に立て籠もる事にする。

逃げ込めた物はたった十名足らず、残るは幽鬼と化したかその幽鬼に食われた模様。

残った人員で脱出を計画する。

皇紀式六〇壱年 六月二十六日

脱出経路を確保しに赴いた者達が幽鬼に襲われ、同行した盛芽ただ一人を除いて全滅。

盛芽自身も重傷を負い、早急な治療が必要なるも薬品、器具双方無い為に応急処置に留まる。

十年近く我に仕えてくれた者を失いたくはなき故に徹夜で看病する。

すでに生存者、五名。

皇紀式六〇老年 六月二十七日

生存者の一人、オズウェル博士により衝撃の事実が判明。

この地獄絵図は研究されていた未知の細菌の変異体が感染する事によって引き起こされると断定される。

所内には幽鬼のみならず、奇怪な怪物や巨大化した虫のような物まで跋扈する様がその裏付けとの事だが、それならば盛芽もすでに感染している恐れ有り。

当人は射殺をほのめかすも、私の独断でそれを却下。

更にオズウェル博士の進言により、しばし様子を見ながら治療法の確定に乗り出す。

『……………』

訳を読み終えた者達に重い沈黙が下りる。

やがて、おもむろにクリスが重い口を開いた。

「残りを訳すのにどれ位掛かる？」

「……………最嚴重用の暗号が残るページ全部だからな。急いでも半月以上は……………」



そこでページをめくっていたレンの手が止まる。

「何箇所か場所を指し示しているのが有るな。ひょっとしたら重要な手がかりが有るかもしれないな」

「アンブレラの秘密研究所とか？」

何気無いシェリーの一言にレンは小さく頷いた。

「アンブレラがこの事を知っている可能性は？」

レオンの問い掛けにレンは少し考え込む。

「おそらく無いな。多分陰陽僚の封印書庫に有ったのを偶然発見したんだと思う」

「今、アークはイタリアに居るって言っていた。ひょっとしたらあいつもこの事を探っているのか？」

「判っている部分だけでも送っておいたら？」

「いや、下手な連絡手段で内容を知られるとまずい、ジルにで持っ  
ていってもらおう。最大の問題は未解読の部分に何を書いてあるか  
だ」

クリスの言葉に、全員の間に重い緊迫感が落ちた。

「……詳細は不明、しかも解読出来るのはこの重体の上に丸腰でそ  
の上殺し屋最低二名以上に狙われているサムライだけ……」

「……最悪」

いつの間にか、全員の視線はレンへと集まっている。

その当人はさして気にした様子も無く、ノートの内容をチェック  
している。

「すぐに部屋を移して警備の人員を増やそう。大至急だ」  
「出来れば予備の武器を持って来てほしいんだが」  
「絶対安静！」  
「解読手伝います」  
「日本語と陰陽五行が分かるか？」  
「一週間あれば覚えられます」  
「……………忙しくなりそうだな」  
「ああ……………」

一週間後 イタリア

郊外のカフェで昼食を取っていた男の前に、一人の女性が現れる。

「いい天気ね」  
「午後から降るそうだが」  
「傘を用意した方がいいかしら」  
「風が吹かなければな」

一連の暗号符丁のやり取りの後、女性 ジルは男 アークの向かいの席に腰を降ろした。

「レオンから話は聞いている。最重要機密を入手したって？」  
「ええ。ツチミカド テンゼンという名前に心当たりは？」

その名を聞いたアークの顔が僅かに緊張する。

「何処でそれを？」

「この間参戦したサムライがその人物が所属していたのと同じ組織に入っているらしくてね。彼が残した手記が発見されたの」

「何……」

アークが思わず驚愕の声を出しそうになるのを必死に堪える。

「暗号で書かれてるらしくて、現在解読中だけど、分かっている部分はここに」

手渡された資料をアークは手早く目を通していく。最後の行を読み終わると、彼は大きく息を吐いた。

「間違いない。今オレが追っているのはこの人物の足跡だ。未確認だが、彼はアンブレラのかんりの部分まで把握していたらしい」

「手記には秘密研究所の場所らしき物まで書かれているらしいわ。ただ解読にはしばらく掛かりそうだけど……」

「こつちも重要情報がある。前に話したHCFの暗殺者は、すでに病院内にいる」

「……」

「正確にはHCFの襲撃の前から病院内にスパイとして潜り込んでいたらしい。分かっているのはファントムレディというコードネームだけだ」

「すぐに知らせないと！」

「注意した方がいい。潜入工作のスペシャリストとの話だ」

焦りながらも、ジルは連絡用の衛星電話のボタンを押した。

「クリスだ」

『クリス！大変よ！』

「ジルか。どうした？」

『HCFのスパイが病院にいるらしいの』

「……………やっぱりか」

『気付いてたの？』

「この間の襲撃がやけに手際よかったんでな。オレ以外にも勘のいい奴は何人が気付いてるだろう」

『アークが調べた限りでは、ファントムレディっていうコードネームしか分からなかったらしいわ、特定は出来る？』

「いや、それとなく医者、看護婦、出入りの業者まで探って見たが、全員半年以上も前からここに出入りしている。ここの院長とSTAR Sの関係を知ってだいぶ前から潜り込んでいたらしいな」

『……………そう。とりあえず持ってきたデータは役に立ちそうよ』

「残りは解読を急がせてるが、思ったよりてこずっているらしい。

後半は予想通りT ウイルスの追跡行になってるらしいが、詳細は今だ未解読だ」

『何だか、あのサムライが来てから急に慌しくなったような気がするわ……………』

「そうだな。だが、今じゃ間違い無くあいつがSTAR Sのトップガンだ。失う訳にはいかない」

『そうね。取り合えず、予定通りしばらくこっちでアークのアシストに回るわ』

「ああ、頼んだぞ」

「ジルからか？」

背後から掛けられた声に、携帯電話の電源を切りながらクリスは振り返る。

そこには、背中にレミントンショットガンを背負ったバリーの姿

が有った。

「ああ、無事接触できたそうだ」

「そうか、まあ向こうは向こうで頑張ってもらうか」

バリーはそう言いながら周囲を見渡す。

割れたガラスが片付けられただけの病院内のロビーには、重火器を持ったSTARSメンバーが警備の名目の元うろついている様は、まるで最前線の軍事基地を思わせた。

「そういえば、屋上で見つかった妙な機械の報告がスコットランドヤードから来てたが、見たか？」

「いや、まだだ」

「オレもざっと目を通しただけだが、なんでも強力な低周波の発信機らしい」

「低周波？」

「なんでも超音波の一種で、レベッカが言うにはそれを使ってあの小さなBOWを制御していたんじゃないかって話だ」

「そんな物が開発されてるとはな。一度BOW用戦術を見直す必要が有るかもしれんな」

「かもな。まあ、あのサムライには必要無いだろうが」

「全治してればな。オレが入院してた時だってここまで警戒してなかったが……」

「………来るとしたら、そろそろか？」

「だろうな………」

その日の夜

一人の看護婦が、医療用カートにコーヒー入りのサーバーと複数のカップを載せて、物静かな廊下をカートを押しながら歩いていた。

やがて、廊下の突き当たりにある部屋の前で立ち止まった彼女は、その部屋の前に立っている人物へと声を掛けた。

「毎日ご苦労様ですね」

「お、レイラさん。また差し入れですか」

その部屋、手術室の前に立っていたSTARSメンバーの一人が、顔なじみとなったその看護婦に気軽に挨拶しながら、カートの傍へと近寄った。

「あんたも物好きだな。他の看護婦のほとんどは辞めるか他所に行っちゃったつてのに」

同じく手術室の前で警備に当たっていたバリーが苦笑を漏らしながら、彼女の注ぐコーヒーを見つめる。

「怖くないって言ったらウソになりますけどね。患者をほっとく訳にもいきませんし、それにいざって時はまた皆さんが助けてくれるでしょ？」

「どおだかな。ひょっとしたらこの中のサムライを先に助けようとするかもしれないぞ」

「だったらそれより先に逃げ出しますよ」

それを聞いた警備の二人は一頻り笑った後、彼女の入れてくれたコーヒーに口を着けた。

ここ数日で定例になっている差し入れ、のはずだった。

だが、そのコーヒーを飲んだ二人の手から、カップが滑り落ちる。

陶器に似せた特殊セラミック製のコーヒーカップは床に落ちてもさして大きな音を立てない。

それを見た看護婦の顔には、先程までの笑顔が消え失せ、今までの院内では誰にも見せた事の無い冷徹な表情へと変わっていた。

（第一段階は成功）

その看護婦　HCFのスパイ”ファントムレディ”は手早く床にこぼれたコーヒーを拭き取り、カップをカートへと戻した。

コーヒーに入れておいた薬品は一時的に服用した者の意識を短時間だけ喪失させ、擬似的な記憶喪失状態へと陥れる事が出来る代物だった。

警備の二人が突っ立ったまま、目を虚ろな物にさせているのを確認した後、彼女は手早く手術室の中へと潜り込んだ。

薄暗い手術室の中、本来なら手術用のベッドに横になっている人影を発見すると、ポケットからボールペンに偽装してある小型拳銃を取り出す。

その小ささの割に完全なサイレンサー機能まで備えているHCFの最新装備を手にした彼女は、無言でそれを人影の首筋に押し当て、スイッチ型のトリガーを押した。

コーラの口を開ける程度の小さな発砲音の後、人影の生死を確認しようとした途端、突然手術灯が完全点灯する。

「そこまでだ、ファントムレディ」

眩しさに目が眩みながらも、彼女は後ろを振り返る。

そこには、こちらに銃口を向けているクリスを筆頭にしたSTA R Sメンバー達の姿があった。

「残念だけど、それは外れよ」

クレアの一言で彼女は後ろを振り返る。先程銃弾を撃ち込んだのはなんと医療練習用のダミー人形だった。

「馬鹿な……ここが一番警戒が厳重だったはず……」

「警戒はな。悪いがサムライの案でな、自分の居る所は一番警戒を薄くしてくれとさ」

自分が完全に罠にはまった事を悟ったファントムレディは強く歯を噛み締めながら、黙って両手を上に上げようとした。

「両手を上げさせるな。何か仕込んでいる事が有る。靴にもな」

そこで、突然後ろから聞こえてきた声にクレアが振り返ると、そこにはまだ両腕にギブスを付けたままのレオンの姿が有った。

「レオン！まだ寝てなきゃ！」

「いや、寝てもいられないんでな」

クレアの脇からファントムレディの方へと近寄ったレオンは、厳しい目で彼女を見つめた。

「悪い事は言わない、投降してくれ。ファントムレディ……いや」

そこでレオンは一呼吸置くと、懐かしい名前を呼んだ。

「……エイダ」

「！？」



その名前を聞いた事の有るクレアが、驚愕の表情でレオンとファントムレディ エイダの両方交互に見た。

「……………エイダ・ウオンは死んだわ。五年前に」

「じゃあなんて呼べばいい？レイラ・フォウリー？アキラ・マドック？それともキム・カーリン？」

今まで使った事の有る偽名を次々に並べられたエイダが、僅かに驚きの表情を浮かべると、次には呆れたような笑みを浮かべた。

「いつから、気付いてたの？」

「生きているのは二年前から知っていた……………もっともここに居るって気付いたのは、ほんの数日前からだかな」

「あなたの所にだけは行かないようにしてたのが、逆効果だったみたいね」

自嘲的な笑みを浮かべた次の瞬間、彼女の手の中に飛び出し式のトラップパーガンが現れた。

「ばれたからには、こうするしかないの」

エイダがその銃を自分のコメカミに充てる。

「待て！エイダ！」

「今度こそサヨナラ、レオン」

エイダがトリガーを引こうとした瞬間、突然背後の手術用ベッドが上へと跳ね上がる。

驚いたエイダが振り返って銃をそちらに向けようとした時、その

みぞおちにスタンガン付きの拳が叩き込まれた。

「か、はっ……」

肺から空気を漏らしながら、エイダが床へと崩れ落ちる。

その体をベッドの下に潜んでいた人物 シェリーが受け止めた。

「……シェリー、昨日から見かけないと思ったら、ひょっとしてずっとそこに？」

「うん」

エイダを取り合えず床へと横たえながら、シェリーがさも得意そうに応える。

「レンが、多分来るとしたそろそろだから念の為に……」

よく見ると、ベッドに掛けられていたシーツの影になっていたベツドの真下には、ノートパソコンやライト、果ては毛布や空になったカンパンの缶やチョコバーの包み紙等が影からはみ出さないように散乱していた。

皆が呆れて絶句している所へ、薬の効果が切れたらしいバリィ達が室内へと入ってきた。

「死んだのか？」

「気絶させただけよ」

「で、どうする？」

「取り合えず警察に引き渡そう。取調べは後からだな」

「……悪いが、彼女の事はオレにまかせてくれないか？」

レオンの突然の提案に、クリスはしばし考えた後、小さく頷いた。

「……いいだろう。もっとも怪我が治ってからになるがな」

「来週にはギブスも取れるそうだ。そうしたら彼女を説得してみる」

「じゃあ頼む」

気絶しているエイダが他に武器を持っていないかボディチェックした後、バリーが彼女を担ぎ上げる。

「これで半分は片付いたか」

「あと、最低一人か………」

「そうか、上手くいったようだな」

次の日の朝、死体安置室に置いてある司法解剖用のベッドに寝ながら、レンは事情を聞いていた。

「そりゃ、普通はこんなところに好き好んで寝ているとは思わないでしょうけど」

室内に本来の住人（ようは死体）が居ないとはいえ、普通の人間ならば無闇に近付かない場所を病室に選んだレンの神経を少し疑いながらも、ミリイはレンの包帯を取り替えていく。

「スパイが居るらしい事は気付いてたが、まさかレオンの知り合いとはな」

「詳しい事はオレも知らない。レオンは、ただ五年前のラクーンシティで知り合ったとしか教えてくれなくてな」

事情を説明していたバリーが首を傾げる。

「あまり言いたくない間柄って事だろ。本人が言いたがらないんじゃない、無理に聞く必要も無い」

素っ気無く言いながら、レンは枕元のカート（本来は手術道具用）に載せておいたレポート用紙をバリーへと手渡す。

「昨夜まで掛かってようやく前半は訳せた。案の定生き残りの中にオズウェル・E・スペンサーの名が有った」

「そこまではいい。問題は後半部分だ」

レンは同じくカートに載せておいた古びたノートを手取る。

「残りはいきなり年号が戦後に飛んでる。まだ途中だが、戦後になつて例の事件の事を気にした彼は、趣味の旅行という事にして世界中を飛びまわって調べていたようだな」

「……………そして、アンブレラとウィルスに辿り着いた」  
「恐らくは」

バリーの推論に、レンが短く同意を示す。

「まさしくレンの先輩って訳ね」

「違うのは、当時彼以外ウィルスを追っていた人間は居なかったって事だ。彼には力は有ったが、仲間はいなかった。五年前のオレには力が無かった。……………今のオレには、力と、頼れる仲間がいる」

「ああ、そうだな」

いつの間にか真剣な表情をしていたレンを見たバリーが、小さく笑みをこぼす。

「はいはい、とにかく今は力よりも絶対安静ね」

包帯を替え終えたミリィが少し呆れた顔をしながらも、レンの腕に点滴の針を刺す。

「そうだ、その力が届いてるぞ」

バリーはアメリカ名義となっている小包を、レンへと手渡す。

「完成したか」

送り主がジョー・ケンド名義となっているのを確かめたレンが、手早く包装を解いていく。その中にはSTARSのエンブレムがプリントされたガンケースが入っていた。

「例の特注品か」

「ああ」

ガンケースを開けると、そこにはサムライエッジを一回り大きくしたような、見た事も無い銃が収められていた。

「ベレッタ……じゃないな。45口径？」

「ああ、パーツのほとんどは知り合いの刀鍛冶に作ってもらった。45口径でサムライエッジ並の扱いやすさを保てないかと注文しておいたからな」

銃を手にとって握り具合を確かめていたレンがその顔に微笑を浮かべる。

「予想以上だな。45口径をここまでバランスよく作れるとは」

そこで、レンはスライド部分に入っている刻印を見た。

「サムライソウル、それがこいつの名前か」

「まさしくの名前だな」

ガンケースの中に入っていた弾丸をマガジンへと込め、マガジンを銃へと入れると装弾せずに銃を構える。

「装弾数は十発か。後は撃ってみなくちゃ分からないか……」

「ええ、そうね」

ミリイが笑顔のまま、その手に備品固定用のチェーンを握り締めた。

数日後

「やっぱり何もしゃべらないか……」

「らしいぞ。毎日の様にレオンの奴が無理して警察まで行ってるらしいんだが」

一応退院許可が出ると同時に、院内の警備に廻されたカルロスからの話を、レンは解読の手を一時的に休めて聞いていた。

「レオンの奴も、いくら昔の女だからって、スパイが早々しゃべってくれるとも思ってるのかね」

「さあな。まあ、そっちの方はまかしておけばいいだろ」

「それと、さつきから気になってたんだが……………」

「何だ？」

「お前、そういう趣味があるのか？」

カルロスが指差した先、レンの下半身は細いチェーンでベッドに完全に固定されていた。

「これか、この間届いた銃を試射していいかとミリィに言ったらこっうされた」

「……………無敵のサムライも女には弱いのか」

カルロスはボソリと呟くと、深い溜息を吐いた。

「そういえばスミスは？」

「ああ、あいつだったらあちこちの骨董屋でカタナ探してる」

「無駄だと言っつけ。安物じゃ光背一刀流の技に耐え切れん」

「さつきムラマサとかいうカタナ見つけたからこれから交渉するって電話が……………」

「今すぐ辞めさせる。おそらく99%の確立で贋物だ」

「おいレン！いい物有ったぞ！」

そこへ、嬉々とした顔でスミスが室内へと入ってきた。

「遅かったか……………」

「そうだな……………」

「？何が？」

レンは無言でスミスから刀を受け取ると、少しだけ鞘から出して即座に収めると無造作にスミスへと返した。

「幕末に大量生産された安物の贗物だ。今すぐ返してこい」

「え？でも場繋ぎぐらいには……」

「多分大技一撃で折れる。危なくて使えるか」

「あ、そ……………」

スミスがすごすごと刀を手に部屋を出て行く。

「そういえば、もう片方の殺し屋つてのもそろそろ来るんじゃないかねのか？」

「警戒がきつい間は来ないかもしれんな。わざわざこつちが治るのを待っててくれるような連中とも思えんが……………」

ふと、そこでレンの脳裏にある人物が浮かび上がった。

「まさか、な……………」

更に一週間後

「来ねえよな……………」

「諦めたんじゃないの？」

レンの隣のベッド（無論司法解剖用）に腰掛けながら英訳を手伝っていたスミスのボヤキに、スミスの左義腕を整備しながらカルロスが応える。



ファントムイレディの暗殺未遂以来、何の進展も見せない状況に、全員が疑問を感じ始めていた。

「ま、怪我也治ってきたし、解読は進んでるしで悪い事はねえけど」

「動くな、こんな複雑なの整備した事ねえんだ。ただでさえ見た事無い動力で動いてやがるし……………」

「わりい、わりい」

医療用ループで覗き込みながら、内部の結線と特殊金属製の人工筋肉をチェックしていたカルロス注意到、スミスは謝りながらも姿勢を正す。

「取り合えず、三分の二は訳し終えたな」

「内容は？」

レンが解読の終えた部分をスミスへと手渡す。

「大した物だ。終戦後のイタリアから始まって、ドイツから南米、そこからオズウェル博士とT ウイルスを追って北上。まさかライオンシティの研究所を三十年以上も昔に突き止めてたとはな」

「だけど、ここに書かれている研究所のほとんどがもうSTARSがHCFの手によって壊滅させられてるけどな……………」

「ま、そんなに昔のじゃ仕方ないだろう、と」

義腕のチェックを終えたカルロスが目につけていたループを外す。

「さてと、自爆装置とギミックガン、どっちを付けとく？」

「いらん！」

スミスが手早く左腕を引っ込める。

「ちっ、せっかく作ったのに」

「そういうの作ってる暇あったら、もう少し実のある事をしとけ」

レンが呆れてる所へ、携帯の着信音が鳴り響いた。

「はい、スミス…ってミリイか。レンに？」

スミスが懷から出した携帯電話をレンへと手渡す。

『あ、レン？あなたに見舞いつて人が来てるんだけど』

「見舞い？」

『……………この場所、家族にすら教えてないはずよね……………』

「どんな奴だ？」

『タキシード着てステッキ持った手品師みたいなおじいさんなんだけど』

「！-！」

それを聞いたレンの頬を、一筋の汗が流れ落ちた。

「ああ、オレの知っている人だ。こっちに通しておいた方がいいだろう」

『そう、分かったわ』

電話が切れると同時に、レンは真剣な表情でスミスとカルロスを見た。

「スミス、この戒めを解いてくれ」

「その手錠と鎖か？勝手に解いたらオレがミリィに怒られるんだが……」

「カルロスはシェリーに戦闘準備をするように言っておいてくれ。オレ以外で銃に頼らない戦闘手段を持っているのはアイツだけだからな」

「おい、見舞い客じゃ……」

「後で説明する」

後が有ればな、とはあえてレンは言わなかった。

「レン、連れて来たわ……って何勝手に外してるの！」

ミリィの怒声に反応したスミスが身を縮こませるが、レンは無言でミリィが連れて来た初老の男性を見ていた。

「まさか、あんた程の人が来るとはな……シャドウ・ジェントルマン（影の紳士）」

「こちらとしてはあなたの回復をもう少し待ちたかったのですがね」

レンの傍へと近寄りながら、初老の紳士は手に持っていたステッキを軽く持ち上げ、次の瞬間にはそのフォームが微かに揺らいだ。何が起きたかを周囲の人間が理解する前に、レンの手首に掛かっていた手錠の鎖が中央から分断される。

「やっぱ、こいつは……」

「"シャドウ・ジェントルマン"、リーヴィング・ステートマン。オレの知ってる中でも最強の暗殺者だ」

「！」

それを聞いたスミスが、ホルスターから瞬時にしてゾンビバスターを取り出すと発砲。

が、弾丸は僅かに首を傾げた暗殺者の先程まで顔のあった位置を通り過ぎる。

「なかなか怖い物を使いますな。だが…」

暗殺者はステッキを一振りする。すると、そこから鮮やかな木目を思わせる刃紋を持った刃が飛び出してきた。

「当たらなくては意味は無い」

スミスが次弾を撃とうとするより速く、暗殺者の体が予想以上の速さで間合いを詰め、刃を突き出した。

「がつ！？」

正確に義腕の付根を貫かれたスミスが、驚愕の表情を浮かべながら傷口を押さえる。そこからは血とオイルの入り混じった液体が溢れ出した。

「……さすがだな。二十年前師匠と引き分けた腕前はそのままか」

スミスの手によって緩められたチェーンから足を引き抜きながら、レンはそつと枕に手を伸ばす。

「なるほど、彼の弟子でしたか。彼はお元気です？」

「ああ、早々と息子に跡目継がせて楽隠居決め込んでる、よ！」

レンが掴んだ枕をいきなり暗殺者に向けて放り投げると同時に、その下に有ったサムライソウルを枕越しにポイントする。

立て続けに発射された45ACP弾が枕を貫き、ターゲットへと迫るが、すでにそこにはターゲットはいなかった。

「その程度のトラップに引つかかるとでも？」

「いや……」

すぐ真横から聞こえてきた声に怯えもせず、レンはサライソウルを降ろす。

その時、開け放たれた扉が閉まる音に、走り去っていく足音が重なった。

「なるほど、あのレディに応援を呼ばせる為ですか」

「いや、あいつがいるといつドクターストップ掛けられるか分かった物じゃないんでな。それに、あんたの狙いはおそらくオレ一人なんだろ？」

「その通り」

暗殺者は小さく笑うと、レンの正面へと向き直りながら、おもむろに手にはめていた手袋を脱ぐと、レンへと放り投げる。

「お相手願いましょうか、STARSのサムライ……」

「いいだろう……」

宙を飛んできた手袋を受け取ったレンは、ベッドの脇に置いてある結局スミスが返し損ねた安物の刀を手取る。

「大丈夫か？レン？」

「さあな」

心配そうにこちらを見ているスミスに、レンは短く答えながら刀を抜くと、鞘を投げ捨てる。

「おや、あなたの流派は居合い抜きが得意技では？」

「生憎と安物でな。オレの技にどこまで持つか……………」

レンは右手で刀を正眼に構えると、それと交差するようにサムライソウルを握った左手を刀の峰に添える。

「いざ、参る」

次の瞬間、二人の間を無数とも思える銀光が交差する。

甲高い金属音が鳴り響き、それが一段落したと思った瞬間、レンの体のあちこちから血が滴り落ちる。

「レン！」

「五撃か。思ってたよりは少ないか……………」

受け流し損ねた回数を冷静に数えながら、レンは滴り落ちる血を拭いもせず、暗殺者との間合いを微妙に摺り足で調整する。

「さすがですな。もう少し入るかと思ってたのですが……………」

暗殺者はステッキソードを一振りすると、それを前へと突き出すフェンシングの構えを取る。

「楽しませてもらえそうですね」

「失望はさせないさ」

レンは刀を八双に構えながら、瞬時にしてサムライソウルを構えると発砲。

しかし、完全に射線が見切られている弾丸はかわした暗殺者の脇を虚しく通り過ぎる。

僅かに体勢の崩れた一瞬の隙を狙ってレンが間合いを詰めながら、刀を横薙ぎに振るう。

暗殺者はそれを刃を下に突き立てるようにして受け止め、そのまま上へと跳ね上げる。

レンが刀を構え直すよりも速く、暗殺者の刃がレンの胴を横薙ぎする。

とつさにレンはバックステップでそれをかわすが、その後に斬り裂かれた患者服と血が宙を舞っていた。

「純粹にスピードだけならフェンシングが世界最速と聞いていたが、間違いじゃないようだな」

「いやいや、それに反応出来るあなたも大した者ですよ」

再び間合いを空けながら、レンが刺突の構えを取ると、相手もそれに応じるように構える。

次の瞬間、刃が無数に分裂したかと思わせるような無数の刺突が両者の間を交錯し、正確に突き合わされた剣先の奏でる無数の金属音が周囲に鳴り響く。

最後に一際大きな金属音が響いたかと思うと、お互いの剣先を突き合わせた状態で、鏑迫り合いに入る。

「《烈光突》と互角か……………」

「どうでしょうか？」

極めて奇妙な鏑迫り合いから、レンの剣先が僅かに前に出る。が、

次の瞬間レンは刃を横へと弾かせながら後ろへと飛び退る。

「剣士の差を決めるのは技術と剣。残念ですが、あなたの技量ではその剣が追いついていないようですな」

レンが無言で刀を見る。剣先から少し下がった部分に一筋のヒビが入っていた。

「やっぱり安物は使うもんじゃないな」

「そのカタナが折れるのが先か、決着が先か。私としては前者はつまらない限りですがな」

再び膠着状態に入ろうとした時、扉が破らんがばかりの勢いで大きく開け放たれた。

「そこまでだ！武器を捨てて地面に伏せろ！」

バリーを先頭にしてなだれ込んできたSTARSメンバー達が、一斉に銃口を暗殺者へと向ける。

「やれやれ、剣士の決闘を邪魔するとは無粋な方々ですな」

「黙れ！早く武器を捨てろ！」

バリーの恫喝に、暗殺者は呆れたような顔をしてステッキソードを下げる。

「！まずい！」

唯一それが降参の意で無い事を悟ったレンが攻撃するよりも早く、暗殺者の体が微かに揺らぎ、次の瞬間にはなだれ込んできたSTARS



RSメンバー達の真横へと現れる。

「な!？」

ウェスカーの超スピードとも違う、全く無駄の無いフットワークで瞬時に移動した暗殺者は文字通りの目にも止まらない速さで刃を連続して突き出す。

「このやろ!」

そちらを向いたSTARSメンバー達が次々とトリガーを引くが、半数は弾丸が出ず、残る半数は最初の一発で打ち止めとなる。

『!？』

慌てて全員が自分の銃を確かめると、ハンドガンのハンマーが、ショットガンのマガジンチューブが、ライフルのロアレシーバー（マガジンを入れておく部分）がいつの間にか破壊されていた。

「銃とは悠長な物です。トリガーを引き、ハンマーが落ち、炸薬が爆発し、それが弾頭を押し出して初めて攻撃となる。のろいかぎりですな」

「黙れ!」

何人かが腰のホルスターから予備の銃を抜こうとするが、暗殺者の手が翻ると同時に、切り離されたホルスター毎銃が床へと落ちた。

「無駄というのがまだ分からないのですか？」  
「知るか」

小さく呟きながら、暗殺者の背後へと回り込んだレンが袈裟懸けに刀を振り下ろす。

そちらを見もせずに、暗殺者はステッキソードを持ち上げてその斬撃を防いだ。

「後ろから不意打ちですか。卑怯と言うべきか、実戦的と言うべきか」

「気付いている相手にやるのは不意打ちとは言わないだろ」

しばし鏖迫り合いを行った後に、二人は素早く離れる。

距離が開くと同時にレンはサムライソウルを連射するが、暗殺者は僅かに身を逸らしてそれを避ける。

（あと、五発……）

冷静に残弾数を数えながら、レンはこちらを見ているスミスの方に足元の空薬莢を小さく蹴りながら僅かに目配せする。

その意図に気付いたスミスが血まみれの手を拭いながら、慌ててサムライソウルのスペアマガジンをベッドの下に有ったガンケースから取り出し、弾丸を込めていく。

「なるほど、あなたは師とは全く違うタイプの方のようだ。彼は猛々しい虎のような方でしたが、あなたはあくまで回りの状況を冷静に把握し、的確に相手を追い詰めていく。さしずめ豹といった所ですかな」

「動物占いじゃキタキツネと出たけどな」

「狐にしては寧ろ過ぎるでしょう……」

「確かに……」

お互いの顔に笑みが浮かぶと同時に、双方が前へと進み、一瞬にして交錯する。

その僅かな間に、両者の間で無数の金属音が鳴り響く。間合いが広がるより速く、レンは強引に体を切り返す。相手が振り向くと同時に、その心臓目掛けて全力の刺突を繰り出す。

それが相手の体に到達するほんの数cm手前で突如としてその軌道上に相手の剣が出現、その軌道を的確に逸らす。

再度お互いが交錯する瞬間、レンはサムライソウルを暗殺者の即頭部にポイント、すかさずトリガーを引くが、発射された弾丸はコンマ数秒のタイムラグを持って、下へと沈んだ頭部のかつて有ったはずの場所を通過する。

お互いの体が離れる瞬間、無防備になったレンの背中を暗殺者の刃が斬り裂いた。

（やばいな……………）

振り返ったレンの額を、急激な運動による物とは違う汗が流れる。

（ウェスカーの時はまだしも互角だったが、今はこっちが俄然不利か）

レンが隙を見せないようにしながら、ちらりと刀を見る。明らかに先程よりもヒビは大きくなっていた。

（見切りも技術も経験も、そして得物も向こうが上か。師匠と戦った時は、お互いの得物が同時に折れたせいで引き分けになったという話だったが……………）

レンが相手の様子を注意深く観察する。年齢のせい、僅かに発

汗している様子は有ったが、他に何らこちらの有利となる要素は見当たらなかった。

（ダマスカス鋼（ナイフ等に用いられる特殊鋼）の刃相手じゃ、おそらくこの刀が持つのはあと僅か………一氣に決めるしかない！）

レンは覚悟を決めると、瞬時にしてサムライソウルを構えて残弾を速射する。

それが自分を狙っていない事に気付いた暗殺者が訝しく思った瞬間、放たれた弾丸はそのすぐ後ろにあつた医療用酸素ボンベを撃ち抜く。

急激的に漏れた酸素に相手が氣を取られた瞬間、レンはベッドを台にして天井ギリギリまで跳ね上がる。

「ああああああ！！」

雄叫びと共に、刀を大上段に構える。それに気付いた暗殺者が驚異的な速度で刃を頭上にかざす。だが、そこにはなんの手ごたえも無かった。

（掛かった！）

大上段に構えたまま、それを振り下ろさなかったレンが、暗殺者のすぐ手前に着地する。

その反動を全力まで生かしながら、レンは最下段から跳ね上がるようにして刀を振り上げた。

間に合わない事を悟ったのか、暗殺者はステッキソードの柄をその軌道上にかざす。

刃と柄が激突した瞬間、砕け散ったのは刃の方だった。

（！柄もダマスカス製！！）

自分のミスをレンが悟った時、駄目押しとばかりに暗殺者の刃がレンの手の中に残っていた柄尻を貫く。

今までの激闘で限界に来ていた刀は、レンの手の中で完全にスクラップとなって崩壊した。

「残念でしたな」

暗殺者の渾身の刺突がレンの心臓を狙う。それが突き刺さる瞬間、何かがその軌道を遮った。

「……ほう、それは？」

感嘆の声を上げながら、暗殺者は自らの刃を遮った物、弾切れを起こしているサムライソウルを見た。

「生憎とこいつは日本刀の製法で鍛えてある。ダマスカス鋼の刃でも貫けないぞ」

かなり無理のある体勢で刃を防いでいたレンの言葉に、暗殺者は微かに口を笑みの形に歪める。

「だが、銃は剣ではありません」

刃を引くと同時に、暗殺者が凄まじいまでの連撃を繰り出してくる。

レンはサムライソウルでそれを次々と受け止めながらさばいていくが、明らかにじりじりと押されていった。

「レンー!!」

その時、突然響いてきた声と同時に暗殺者の体に影が掛かる。暗殺者がとつさに飛び退った空間を、完全武装したシェリーの飛び蹴りが通り過ぎた。

「受け取れ!」

その一瞬の隙に、スミスが投げたマガジンをレンは受けとると素早く装弾する。

その間も、シェリーは果敢に暗殺者を狙って攻撃を繰り返すが、その全てが完全にかわされていた。

「これはこれは、勇敢なレディだ」

「下がれシェリー! お前じゃ無理だ!」

「くっ……」

連続のパンチからハイキックへと繋げる得意のコンビネーションを完全にかわされたシェリーが、レンの指示に従ってレンの傍に一旦下がる。

（いいかシェリー、お前に頼みたいのはあいつの相手じゃない）

（えっ?）

シェリーにだけ聞こえるような小声の日本語の指示に、シェリーは覚えたての日本語で聞き返す。

（もしもの時、あれをお前の手で守れ）

レンはベッドの上に置いてある、解読しかけの古びたノートに視線を送る。

（恐らくアンブレラはあれの存在に気付いた。だからあれを解読出来るオレを消したがつている。解読方法は教えたはずだ、いざという時はお前が残りを読解しろ）

「そ、そんなのダメ!!」

シェリーが叫びながら、暗殺者に迫る。

だが、彼女の攻撃はやはりかすりもしない。

「そんな殺気丸出しの攻撃ではプロには通用しませんよ、レディ」

ハイキックの空振りの隙を突いて、ステッキソードの柄がシェリーの太股を痛打する。

「!!」

激痛が走ると同時に、まったく同じ場所をレンに叩かれた事と、その時教わった事をシェリーは思い出した。

激痛を意図的に無視するよう勤めながら、シェリーは蹴り足をそのまま中段の逆軌道へと変化させる。

予想外の行動に暗殺者の行動は遅れ、結果そのミドルキックをモ口に食らい、吹き飛ぶ羽目となった。

「…油断しました。そのレディ、サムライの弟子のようですね」

骨でも折れたのか、ダラリと下がった左腕をそのままにして暗殺者は立ち上がる。

「心頭滅却、でしたか。精神力で身体感覚を制御する東洋の秘術。まさかそのレディも使えるとは……」

「買い被りだな！」

隙を逃さず、レンはサムライソウルを連射した。傷の激痛の為か、一瞬反応の遅れた暗殺者の皮膚を弾丸が僅かにかする。

「本当の心頭滅却とはこういう物だ」

レンは無造作に暗殺者へと歩を進める。それに反応した暗殺者が繰り出した刃へと向けて、レンはいきなり自分の右腕を突き刺した。

「いつ！？」

ただ呆然と戦いを見ていたSTARSメンバー達が、レンの予想外の行動に目を丸くする。

レンはそのまま腕に力を込め、筋肉で強引に刃を押さえ込みながら腕を捻る。

だが、弾性に富んだダマスカス鋼で限りなく薄く作られていた刃はしなやかに曲がっただけだった。

「残ね……」

暗殺者が薄く笑みを浮かべながら刃を引き抜くよりも速く、レンはサムライソウルを刃の腹に押し付け、トリガーを引いた。

ダマスカス鋼の刃は零距离から発射された弾丸にも耐え、逆に刃の突き刺さっているレンの腕から血が噴き出す。

傷口が広がるのも構わず、レンは次々とトリガーを引いた。三発目で刃に亀裂が入り、四発目でとうとう刃はへし折れる。



「なんと……………」

へし折れたステッキソードを見ながら、暗殺者は驚嘆の声を漏らした。

レンは腕に突き刺さったままの刃を口で咥えて抜くと、床へと吐き捨てる。

「さすがですな。師匠と同じ手を使う」  
「何？」

暗殺者の言葉をレンが理解すると同時に、ステッキが反転、そしてそこから二つ目の刃が飛び出す。

「一度食らった手には対策を講じる。セオリーでしょう？」  
「確かにな」

自分にピタリと向けられている刃を見ながら、レンは状況の打開策を考える。

（刀は無し、銃は撃つても避けられる……………よって支援も期待出来ない。八方塞がりか？）

視界を目前の刃から、周囲で手を出し損ねている仲間達へと移り、そこでちょうど暗殺者の背後となっている場所でスミスが大きく義腕を振り上げているのに気付く。

「おらあー!!」

気合と共に、スミスの義腕が床をフルパワーで殴りつけた。次の

瞬間、地震のような衝撃が室内を揺るがす。

「!?!」

何が起きたか暗殺者が理解する僅かな隙に、レンは後ろへと飛び退り、サムライソウルを構えた。

最後のチャンスに掛けて、レンは残弾を全て連射する。

放たれた弾丸の一発はたたらを踏んでいた暗殺者の胸へと突き刺さるが、残るは全てかわされる。そして、その弾痕から血が全く流れ出さない事にレンは気付いた。

（防弾か!?!）

レンの手の中で、サムライソウルのスライドが後退したまま停止、最後の弾丸が尽きた。

「覚悟!」

暗殺者の全力の刺突がレンを襲う。レンはサムライソウルで何とかそれを受け流すが、予想以上のスピードに流し損ねた刃がレンの脇をかすっていく。

「見苦しい限りですぞ」

「諦めが悪いんでね」

矢継ぎ早に繰り出される刃は徐々にだが、確実にレンを追い詰めていく。

とうとうサムライソウルが手の中から弾かれ、床へと転がった。

「チェックメイト」

暗殺者が勝利を確信した時だった。

「使え！！」

何処からかクリスの声が響くと同時に、一振りの日本刀がレンの方へと飛んできた。

それがどんな刀を確かめもせず、レンはそれに向けて手を伸ばす。

「させません」

狙いを変えた暗殺者の刃が刀を弾くべく、迫る。だが、一瞬速くレンの手が刀の柄を握り締めた。

「あああああ！」

そのまま、レンは全力を込めて刀を空中で抜刀する。引き抜かれた刃は、寸前まで迫った凶刃をしっかりと受け止めた。

その時になって、レンはようやくその刀に見覚えが有る事に気付いた。

「だいっうれん大通連！？」

それは、刃の半ば辺りまでが諸刃となっている、極めて珍しい作りの日本刀だった。

そしてその所持を許されるのはどんな人間かもレンは知っていた。

「変わった刀ですな」

「御神渡家の副当主にだけ許される刀だ。どうやら師匠はとっとと帰って来いと言いたいらしいな」

罅迫り合いから、両者が同時に離れる。

レンは足元に有った大通連の鞘の端を踏んで宙へと躍らせ、それを受け止める。

「条件は五分」

レンは一度刀を鞘へと納め、抜刀の姿勢を取る。

「御神渡け…いや」

名乗りを挙げようとしたレンが、ふと出掛かった言葉を言い直す。

「STARSメンバー、ミズサワ レン。お相手仕る」

「お受けしましょう」

暗殺者もそれに応じて、大きく刀を引いた刺突の体勢を取る。

そのまま、しばらくの間両者は微動だにせず対峙する。

お互いの傷口から滴る血が足元に小さな血溜まりを作っていく、何らかの偶然で同時に血がその血溜まりに落ちた瞬間、両者は動いた。

レンの右手がかすみ、大気を斬り裂きながら超高速の抜刀が繰り出される。

暗殺者の手から、目にも止まらない速さで刺突が繰り出される。お互いがもつとも得意とする技が激突する。凶刃がレンの胴体に突き刺さる瞬間、ステッキソードの握った腕を超高速の刃が斬り落とし、そのままの勢いで暗殺者の体を斜めに斬り裂いた。

「お見事」

呟いた暗殺者の口から、鮮血が溢れ出す。

「あんたがもう五歳も若かったら、勝てなかったさ」

血刃をそのままに、レンは暗殺者の傍に佇む。

「年は取りたくない物ですな……………」

自嘲気味の笑みを浮かべながら、暗殺者は軽く咳き込む。

「依頼を受けた時の説明がようやく分かりましたよ……………あなたは味方の力を何倍にも高め、いかなる強敵にも打ち勝てる者……………紛れもないヒーローです……………」

「買い被りだな。オレはそんな大層な存在になるつもりは無い」  
「……………」

苦笑を浮かべて何かを呟いた暗殺者の瞳から光が失われる。それを見届けると、レンは刀を振って鞘に収めた。

「大丈夫!？」

ミリィが慌てて駆け寄ると、応急処置を始めた。

「向こうの腕がよかったからな、かえって傷は浅い。それよりも、これは何処から？」

「ああ、実は空港の方のトラブルでだいぶ前に届いていたのが送られてなかったんだ」

大通連を持ち上げたレンに、クリスが手短に説明する。

「そんなに凄いカタナなのか？」

「御神渡家に伝わる二振りの秘め刀の一本だ。鬼女が使ったとされる本物の妖刀だよ」

「動かないで」

いささか興奮気味に話すレンにミリィが一瞥をくれんがら、少し手荒に包帯を巻いていく。

「とにかく、これでもう心配は無くなったか」

「いや、逆だ」

バリーの言葉をレンが即座に否定する。

「向こうも最早手加減無しで全面攻勢に出てくる可能性がこれ出来た訳だ。出来れば、もう少し時間を稼ぎたかったが……」

「時間？」

気が抜けたのか、それまで放心したように座り込んでいたシェリーがそれを聞いてピクリと反応する。

「シェリー、その一番最初の訳と水差しを取ってくれ」

「？」

いぶかしみながらも、シェリーはノートと共に送られてきたレポート用紙と水差しを取る。

「こっちの体勢が完全に整うまで誰にも教えない気だったんだが……」

……」

レンはレポート用紙を裏返すと、そこに水差しの水を垂らしながら五芒星を描いていく。

「何を…」

その行動を興味深そうに見ていたSTARSメンバー達の前で、レンはレポート用紙の裏に分からないように貼り付けられていたトレッシングペーパー（書き写し用の極薄の用紙）を慎重に剥がした。

「見てろ」

そのトレッシングペーパーに、レンは水差しの残っていた水を全部ぶちまける。すると、白紙だったはずのそこに文字と地図が浮かび上がった。

「こいつは!？」

「従兄が訳しておいてくれたのは最初と最後だったんだ。恐らくこれがアンブレラの本拠地だ」

シェリーが間近までよって書かれている事の詳細を読み取っている。

「西経78度9分、北緯88度……ここは、北極!？」

STARSメンバー全員がイギリスから忽然と消えたのは、その四日後の事だった。

## 第十章 『発動！STARS最終作戦！』

『まだ奴らの所在は掴めないのか！』

薄暗い部屋の中に、複数の人間が密談を行っていた。

よく見ると、それらは一人を除いて全員が高精度のディスプレイを使った双方向通信であり、映し出されている顔はどれもが困惑や焦りを浮かべていた。

『今の所バリー・バートンが家族の元を訪れた事と、レオン・S・ケネディが再三に渡ってHCFのスパイの説得を行っている事は分かっている』

『問題は他のメンバーだ！特にリーダーのクリス・レッドフィールドと最強のサムライ、ミスサワ レンの所在を早急に突き止めなくては！』

『フリーメーソンがSTARSに協力しているとの話もあるぞ』  
『何も慌てる必要は無いだろう』

唯一、そのディスプレイ群を前にして今まで無言だった男が口を開いた。

「彼らは間違い無くここに来る。歓迎の用意をしておけばいい」

『しかし……』

「何か問題でも？」

反論しようとした日本人らしい中年男性の映っているディスプレイを、男は冷笑を浮かべながら見据える。

ただそれだけで、その中年男性は震え上がるようにかしこまった。



『い、いえ、こちらも新型タイラント”スサノオ”の調整がまもなく完了します。準備は万全です』

「例の件は？」

『ネメシスーO型の詳細調整要綱はすでに提出済みです。あとはそちらの調整だけです』

「よろしい。他の皆も充分に警戒するよう。近い内に彼らはまた大規模な作戦を展開するだろう」

『了解しました』

皆の返答と同時にディスプレイが消える。それを見た後に、男はおもむろに立ち上がりながら、部屋の照明を点ける。

部屋の照明が点くと同時に、男の背後にあったブラインドが上がっていき、その向こう側にある物を次第にあらわにする。

「もう直だというのに、無粋な輩が来るかもしれません」

男はそれに向かって語りかけながら、窓へと歩み寄る。

「いや、これも運命なのでしょうか？それとも彼らに会わせると？」

そこまで言つて、男は微かに微笑を浮かべる。

「それもまた一興。せいぜい手厚い歓迎の準備をするか……………」

意味ありげに笑いながら、その男 製薬会社アンブレラ代表取締役ダーウィツシュ・E・スペンサーはその部屋を後にした。

同時刻 フランス パリＩＣＰＯ事務総局

「以上が、我々が五年を費やして集めた全データです」

クリスの説明が終わると同時に、室内の秘密裏に召集された世界中の警察の最高責任者がある者は疑惑の、ある者は確信の表情を浮かべながらデータに目を通していく。

「はつきり言えば信じられないと言いたい所だな」

列席者の一人が口を開く。

「だが、似たようなデータがパリ警視庁とＧＩＧＮから届いている。信じない訳にはいくまい」

その人物、パリ警察警視総監は苦い顔で呟いた。

「紛れも無く、これは真実だ。ＩＣＰＯも大分前から世界中の誘拐、人身売買事件に関与している組織の影を追っていた」

「それが、アンブレラだったと？」

別の列席者の問いに、ＩＣＰＯの事務官は無言で頷いた。

「この度皆さんに集まってもらったのは他でもない。このデータを元に、全世界でアンブレラの一斉検挙を行う為です」

『！』

事務官の言葉に、クリスと彼を除いた全員が驚愕する。

「かりにも軍用生物兵器だ。警察で対処出来るのか!？」

「最低でも対テロ部隊、場合によっては特殊災害の未然阻止として軍の特殊部隊を動かす必要が在るかもしれません」

「軍を動かす事が可能なのですか？」

「これと同じ物が国連の安全保障理事会に提出されております。最悪の場合、国連軍が直接介入する可能性も有ります」

「だが、一つだけ肝心のアンブレラ総本部は北極にあるというではないか。そこはどこが対処するのだ？」

「そこは、我々が向かいます」

クリスの言葉に、全員が彼へと視線を集中させる。

「大丈夫かね? かりにも君達是对テロ部隊ですらないと聞いているが」

「だが、私達是对BOW戦のプロです」

クリスの自信に満ちた言葉に、全員が押し黙る。

「決行の日程は？」

「追って連絡する。くれぐれも関係者以外には家族であっても機密にするように」

解散が告げられた後で、各々が席を立って資料を手に室内を去っていく。

「少しいいかね？」

「なんでしよう？」

クリスも席を立とうとした時、日本警視庁の警視總監が声を掛けてきた。

「STARSに御神渡家の関係者がいると聞いたが、本当かね？」

「サムライの、いやレンの事でしょいか？」

「レン……なるほど彼か」

「ご存知で？」

「恥ずかしい話だがね、二年前に関西SATが訓練とはいえ、たった二人相手に壊滅させられた事が有った」

「それを彼が？」

「彼と御神渡家の現当主がだ。二、三人ばかり病院送りにされたが、彼は痣位しか負傷してなかったそうだ。もっとも、警察の道場でゴム弾とはいえ実銃を発砲したのも彼が初めてだったかね」

レンの予想外のエピソードに、クリスがどう反応したらいいか困っている所を警視總監は楽しそうに笑いながら、肩を叩いた。

「まあ、彼がいるならそちらは心配いらないな。よろしく頼むよ」  
「は！」

クリスの敬礼に、警視總監も返礼した。

四日後 カナダ

「……………これで何日目だ？」

「かれこれ半月です」

バリーの問いに、ミリイが答える。

二人の視線の先では、ベッドの上で座禅のような姿勢のレンが微動だにしないで座っていた。

「僅かに食事を取る以外は本当に動こうとすらしないとはな……………」

「なんでも呼吸法と瞑想を組み合わせた独自の治療法らしいんです。ただ、その間は完全に無防備になっちゃうんで余程の事が無い限り使えないらしくて」

「まるでヨガだな」

「でも、実際ここ半月の回復は凄いですからね。あと一週間もすれば全治しそうです」

「そうか、なんとか間に合いそうだな」

バリーは先程届いたばかりの資料をミリィに手渡す。

「とうとうICPOが？」

「ああ、恐らく世界刑事事件捜査上、例を見ない超大規模な作戦になるはずだ」

「それまでにあの二人が場所ちゃんと特定してくれてるといいんですけど……………」

同時刻 北極

「寒……………!!」

「言うな!」

ブリザードが吹き荒れる中、分厚い防寒着を着込んだスミスとカ  
ルロスの二人はテントの中で震えていた。

「とにかく、大分絞れてきたな」

「ああ、間違い無くこの近くのはずだ」

テントの中央に敷かれた地図を二人で見ながら、徐々に小さくなっていった範囲を二人は確認する。

「問題はこの間見かけたあいつだな……………」

「あれか、間違い無くあいつがこの番人だろ。下手したらサムライの回復を待つしか…!？」

そこで、二人は吹雪の音に紛れて響いてくる唸り声に気付いた。

「来やがったか……………」

「どうする？」

「逃げられる相手じゃないだろ」

スミスは嚴重に包んでいたバーレットM82A1を取り出し、カルロスはAT4ロケットランチャーを準備する。

そのまま、注意深く外を見たカルロスが敵を確認すると、無言のまま手で左右に分かれるように手でサインを送り、スミスは無言で頷いた。

カルロスのサインがカウントを数え、0になると同時に二人は外に飛び出した。

そこには、雪のスクリーンの中に半ば溶け込むような色合いの巨大な影がいた。

「でけえ!!」

「どう見ても天然物じゃねえな!」

それは、体重が1tを軽く超える巨大な白熊だった。

「食らいやがれ！」

素早く巨大白熊の右手に回り込んだカルロスがAT4を発射する。

噴煙を上げながら飛んだロケット弾が相手の右肩に炸裂し、巨大白熊の右腕を半ばまで吹き飛ばす。

激痛の為か一際巨大な咆哮を周囲に轟かせながら、巨大白熊はその場に立ち上がった。

「まだ来るか！？」

いきなり家でも出現したかのようなその巨大さに圧倒されつつも、スミスがM82A1を連射する。

50口径弾が巨大白熊の体に次々と大穴を穿つが、構わず巨大白熊は残った左腕を振り下ろす。

「おわっ！」

スミスは雪原を転げるようにしてそれをかわすが、巨大白熊の攻撃はそのまま二人のいたテントへと当たり、一瞬にしてテントを残骸へと変える。

「気を付けろ！食らったらミンチどころかペーストにされるぞ！」

「肉はステーキに限るんだがな！」

片膝を着いた状態で、スミスはこちらを振り向こうとした巨大白熊の肩に銃口を向ける。

だが、素早く前足を着いた巨大白熊はその巨体からは想像出来ない素早さでスミスの横手へと回り込む。

「なにつ!？」

巨大白熊はそのままの勢いでスミスへと襲い掛かるうとするが、寸前で千切れかかっている肩口で炸裂したグレネード弾がその軌道を目標からずらした。

「ぼさつとしてるな!食い殺されるぞ!」

「冗談じゃない!こつちが熊ステーキにしてやる!」

A T 4を投げ捨て、M 4 A 1を構えているカルロスがアタッチメントにグレネード弾を再装填しながら怒鳴りつける。

スミスも怒鳴り返ししながら、バランスを崩して倒れている巨大白熊へと向けて、立て続けに50口径弾を叩き込む。

至近距離で撃ち込まれた大口徑弾が巨大白熊の巨体を幾度となく震わせる。

最後の弾丸が尽きると、スミスは警戒したままマガジンを交換しようとして、スペアマガジンがテントの中だった事を思い出して小さく舌打ちする。

「やったか?」

「どうだか…」

な、と言い切るよりも早く、雪色の毛皮を深紅に染めながら巨体が周囲一帯に響き渡る咆哮を轟かせながら立ち上がった。

「まだ生きてやがる!」

「化け物が!」

カルロスが正確に頭部に狙いを定め、フルオートで巨大白熊の顔面にライフル弾を叩き込む。



弾丸が片目をえぐり、下あごを貫いてもなお獰猛な咆哮を上げ、巨大白熊は二人を見下ろす。

「……男前が上がったじゃねえか」

「オスかこいつ？」

M82A1を投げ捨て、防寒着の下からゾンビバスターを取り出しながらスミスは焦りを感じていた。

振り下ろされた巨腕を左右へと分かれて避けながら、二人は巨体の両側から弾丸を叩き込む。

銃撃を意にも介さず、再び前足を地に着けた巨大白熊は素早くスミスの方へと三本足で器用に旋回する。

「くたば、！？」

相手の顔面に銃口を向けようとした時、スミスの足が雪で隠れていたくぼ地に取りられ、転倒する。

「スミス！」

スミスが体を起こすよりも、巨大白熊がその牙を突き立てようとする。

（間に合わない！）

とっさにスミスがゾンビバスターを構えてトリガーを引こうとした時、その脇から小さな白い影が飛び出した。

その影は巨大白熊の顔面に飛び乗ると、そこにへばり付いて執拗にその視界を閉ざす。

「……ウサギ？」

その白い影が、一匹のウサギである事に気付いたスミスが首を傾げる。

視界を閉ざされた巨大白熊が首を必死に振ってウサギを払い落とそうとするが、ウサギは必死になってそれを堪える。

「なんで北極にウサギが？」

「どうでもいい！今の内に後ろ足を狙え！」

カルロスの声で我に帰ったスミスがゾンビバスターを正確に後ろ足に狙い、マガジン内の残弾を全て撃ち込む。

反対側の足にもグレネード弾が撃ち込まれ、なんとか立ち上がるうとした巨大白熊がバランスを崩して後ろ向きに転倒し、その顔面に張り付いていたウサギが素早く離れる。

なおもがきながら咆哮する巨大白熊の口の中に、カルロスが再装弾を終えたM203グレネードランチャーを向ける。

「悪いが、ゲームオーバーだ」

トリガーが引かれ、グレネード弾が的確にその口腔内に飛び込む。

僅かな間を置いて、炸裂したグレネード弾がその頭部を粉々に吹き飛ばした。

「……………生きてるか？」

「なんとか……………」

凍りかかっている振り返り血を拭っているカルロスの傍にスミスは歩み寄ると、何気無く先程自分を助けてくれたウサギへと視線を移す。

「なんで北極にウサギが？」

「それさっきオレ言った」

ウサギは立ち上がると二人をじっと見、突然向こうを向いて数歩跳ねると再び二人をじっと見た。

「……付いて来て欲しいのかな？」

「不思議の国にでも招待してくれるのか？」

お互い顔を見合わせた二人は、今だこちらを見ているウサギの跡を追いつめる。

ウサギは何度となく振り返って二人が付いて来ているのを確認しつつ、先へと進んでいく。

やがて、一つのクレパスの手前まで来ると、その中を覗きこむような仕草をした。

「何か有るのかな？」

「知るか」

二人はそれに習ってクレパスを覗き込むと、その遙か奥の方に何かが見えた。

「まさか……」

カルロスがポケットからオペラグラスを取り出してそれを覗くと同時に、その目が大きく見開かれる。

「見つけたぞ……」

カルロスから手渡されたオペラグラスを覗いたスミスもそれに気付く。

クレパスの奥には、なんらかの施設の物と思われる通気口が隠れるように備え付けられていた。

ふと、カルロスはここまで案内してくれたウサギがいつの間にか消えているのに気付いた。

「あいつは？」

「……前にレンから聞いた事が有るんだが、オンミヨウジが使うシキガミって使い魔は動物の姿をしているんだそうだ」

「あのウサギがそうだとでも？」

「ひょっとしたらな。恐らく20年以上オレ達が来るのを待っていたのかも……」

「……とにかく、ここの座標を調べて連絡だ」

「ああ」

四日後 日本

深夜の国道を、一台のトラックが走っていた。

「くそ、これで三連敗か……」

ラジオから流れてくるナイター結果を聞いていた運転手の男が、馴染みのチームの連敗を知り舌打ちしていた。

出来ればカーラジオなどではなく、ビールでも飲みながらテレビで観戦したかったのだが、運んでいる物が物だけに夜中にしか運ぶなと厳命されている。

その苛立ちが、さらなるストレスを呼んで男の気分は滅入っていく一方だった。

その時、男は後ろから猛スピードで追ってくるバイクに気付いた。

「随分と飛ばしてやがるな……………」

さして気にもせず、そのバイクが追い越していくのを見ていたが、しばらく行った所で突然バイクはスピンを掛けて急停止すると、それに乗っていた人物が手に持っていた物から光る何かを撃ち上げる。

「何だあ？」

男が首を傾げた瞬間、それは眩いばかりの光を放った。

「おわっ!？」

いきなりの出来事に男は急ブレーキを踏んだ。

法定速度を厳守していた車体は若干の惰性を残し、そして停止する。

それが、戦場の夜間戦闘で用いられる照明弾だという事を知らない男は突然の出来事に呆然としていた時、乾いた音と同時にフロントガラスに小さな丸い穴が開いた。

「いいっ!？」

「Don't move! You are get off slowly!」

それに驚く間もなく聞こえてきた英語に、男は硬直した顔のまま

前を見た。

そこには、バイクに跨ったままサブマシンガンをこちらに構えている赤いレザーベストを着た女性 クレアの姿が有った。

「Hullyy!」

「え?え?」

「ゆっくりと車を降りろ、と言ってるらしい」

真横から聞こえてきた男の声に運転手がそちらを向くと、そこには若い男が一人立って、開け放っていたウィンドウから何かを差し伸べていた。

ゆっくりとその若い男が手にしていた物を視線で追っていた運転手が、それが自分の首筋に突き付けられた一振りの日本刀である事に気付くと一気に顔面を蒼白に変えた。

「わ、分かった………降りる。降りるから、それ離してくれよ………」

「妙な真似をするな。向こうは下手な事したら即座に撃つ気のようなだからな」

女性の方を顎で示しながら、若い男は刀を鞘に納める。

ゆっくりと車を降りた運転手は、その時になってその若い男が墨色の和服姿である事に気付くと全身の血が一気に引いていくような感触に捕らわれた。

「あ、あんた、黒いサムライ………」

「それを知ってるという事は、積荷が何かも知ってるな?」

鋭い眼光でこちらを見た男に怯えながらも、両手を高々と上に上げて必死に抵抗の意思が無い事を示す。

「く、詳しくは知らねえ！でも、後ろ半分は普通の薬だが、前半分に何かヤバイ物を積んでるって話だ」

「それだけか？ただの運び屋が何で練の、従弟の事を知っている？」

「従弟？」

目の前の男が、社内の裏で手配されていた男で無い事に気付いた運転手が手を少し下ろすが、こちらに銃口を突きつけたままクレアが近付いてくるのに気付くと再び手を高々と上げる。

「か、会社の、アンブレラの裏に少しでも関わっている人間全員にSTARSの手配書が配られたんだ！特にあんたそっくりの格好をした男を見つけたのを報告するだけで、スゴイ賞金が貰えるんで覚えてただけだ！」

運転手の目が恐怖を満面に湛えているのを見た若い男は、それがウソでない事を断定すると、女性に銃を下げるように手で促した。

「問題はこいつの中身か……………」

「残念だけど、そいつは開けられねえぜ」

運転手の男は、コンテナを調べようとした若い男に向けて皮肉気な笑みを送った。

「見た目はただのコンテナだが、特殊鋼製の20mの高さから落つことしてもへこみもしない特製品だ。開けるには内部の電子キーに外部から解除コードを入れるしかないが、生憎とオレは持ってない」

「いらん」

若い男は短く言い放つと、半身を引き、鞘に手を添えて居合の構えを取る。

「はっ！あんたが例えゴエモンでその刀が斬鉄剣でも斬れる訳が…」

言葉の途中で顎に押し付けられた、まだ余熱の残っている銃口が男の口を強制的に閉ざす。

それを意にも介さず、若い男は目を閉じ、呼吸を整える。数秒間の間の後、刃が超高速で鞘走った。

素人目には一撃にしか見えない斬撃が、複数の金属音を周囲に響かせる。

その余韻が残る中、刀が再び鞘に収められる。

「一つ教えておこう。斬鉄剣とは鉄をも斬れる業物を指す事と」

若い男の説明の途中で、ちょうどドアくらいの大きさに斬り取られたコンテナの外壁がゆっくりと外へと倒れていく。

「このような技を指す事の二通りある」

こちらに向かってくる若い男の背後で、斬り取られた外壁が音を立てて路面に転がり落ちる。

これ以上ない位大きな口を開けて絶句している運転手の隣で、銃口を突きつけていたクレアも驚愕の表情を浮かべている。

「Are you stronger than REN?」

「なんつってんだ？この姉ちゃん」

「オレにも分からね。今通訳が来る」



ちょうどそこへ、一台のパトカーがゆっくりとこちらへと走ってくる、彼らの間近で止まった。

「おまわりさん！ちょうど良かった！今何か妙な連中に……」  
「悪いが署で聞こう」

最後まで言わせず、車から降りてきた若い刑事が運転手の男に無造作に手錠を架ける。

「危険物無許可搬送の容疑で現行犯だ。詳しい事は後でな」  
「あいかよ、そんなの………」

一緒に降りてきた年配の刑事の言葉に、運転手はがっくりと頭を落とした。

「で、有りましたか？若」  
「これから調べる所です。あと、若と呼ぶのは辞めてくださいよ」  
「おお、これはすみません。癖になつとるようで」

笑いながら、年配の刑事がコンテナの中を覗きこみ、途端に表情を険しくする。

「うわっ……………本物なんですか、これ？」

年配の刑事の後ろからライトを照らしていた若い刑事が中を見て絶句する。

「間違いない。これとは違うタイプだが、似たようなのを見た事がある」

若い男がコンテナの中に入り込み、間近でそれを見る。そこには、冷凍ポットの中に入れられた二体のタイラントが納められていた。

「Not go near. Very danger」

「危ナイデスカラ、近寄ラナイデクダサイ」

クレアの警告を、刑事達と一緒にのパトカーから降りてきた何故かあちこち傷だらけのシェリーが通訳する。

「本物の生物兵器でしたね。確かに近寄らない方が………」

興味深そうに間近で見ていた若い刑事が慌てて身を翻した時、間違つて手が傍に有ったスイッチに触れる。

「え？」

スイッチの入る小さな音と共に、冷凍ポットに繋がれた機械が次々と点灯していく。

「馬鹿！何やってんだ！」

「あ、あのこれって何かヤバイような……」

「No! Wake up pattern!」

「離レテ下サイ！蘇生処置二入りマシタ！」

シェリーの警告を聞いた刑事二人が慌ててコンテナから離れ、運転手は猛ダツシュでその場から逃げ出そうとする。

「ちょうどいい。生きたまま渡すのは危険だと思ってた所だ」

悠然とコンテナを降りた若い男が、少しだけ離れると身構える。

「一体はこっちで受け持つ。もう一体はそっちで。修業の成果を見せてもらおう」

「イエス」

短く答えながら、シェリーが無武装のまま構える。

そこへ、タイラントがその怪力でコンテナの斬り取られた穴を強引に広げると外へと出てくる。

その体が全て外に出ると同時に、クレアがフルオートにセットしたMP5A5のトリガーを引いた。

発射された9mmパラベラム弾がタイラントの巨体を次々と穿つが、銃撃が止むと同時に、先頭のタイラントはクレアへと襲い掛かるうとする。

だが、的確にその頭部に狙いを定めたシェリーの飛び蹴りがタイラントの体を揺るがせる。

タイラントが体勢を整えるよりも速く、着地したシェリーが全身を使って跳ね上がるような強力なアッパーカットをタイラントの顎に食らわせる。

巨体が再びよろめいた所で、続けてシェリーがタイラントの右足のくるぶし、膝、太ももの三箇所に連続してローキックを打ち込むと一度離れて間合いを取る。

「SHERRY、Are you safe? (シェリー、大丈夫?)」

「All right、Don't worry CLAIRE (大丈夫、心配しないでクレア)」

マガジン交換を終えたクレアが銃口をタイラントへと向ける。こちらを睨みつけるタイラントへと向けて、シェリーは油断なく構え

た。

後から出てきたタイラントがその瞳で、先に交戦状態に入ったタイラントを見据える。

何を思考したかは分からないが、そちらへと向かおうとしたタイラントの二の腕が突然斬り裂かれた。

「悪いが、お前の相手はこっちだ」

その横手に、血刃を構えた若い男が立っていた。

そちらを見たタイラントが、突然横殴りの強力なパンチを繰り出す。若い男は僅かに後ろに下がってそれをかわし、勢い余った拳はそのままコンテナに突き刺さる。

「ほお……………」

若い男が感心したような声を漏らす中、タイラントは腕を引き抜くと、今度は反対側のパンチを繰り出す。

今度はそれを横にかわしながら、前へと踏み出した若い男は刃を真横に振るいながら、タイラントと交錯する。

一瞬の間の後、タイラントの片腕の拳から肩の辺りまでに赤い線が引かれ、次の瞬間にはそれは傷口となってタイラントの腕を二つに裂いた。声にならない絶叫を上げながら、タイラントの体がよるめく。

だが、すぐにその傷は変化を始めていき、やがてそれは二つの小さな腕へと変化する。

「中途半端なダメージはかえって変化を促す、か。資料通りだな」

確かめるように言いながら、若い男は刀を一振りすると、一度鞘に納める。

「ならば取る手は一つ」

居合の構えを取る若い男に向けて、タイラントは一つの巨腕と、二つの小腕で押さえ込もうとする。

「はっ！」

それが彼を取り押さえるよりも速く、刀が鞘走る。繰り出された刃はその軌道上にある物を斬り裂き、それを過ぎた所で突如としてその軌道を変え、再び相手を斬り裂く。

連続。

タイラントが若い男を押さえ込もうとした腕はそのまま空振りになった。

正確には、肘の辺りで斬られた両腕が自分自身の腕力の勢いで、若い男の両脇に肘から先を残したまま通り過ぎたのだった。

「光背一刀流、《光乱舞》（こうらんぶ）」

三本の腕が地面に落ちると同時に、タイラントの全身に先程と同じ朱線が無数に走る。

若い男がタイラントに背を向けると、無数の肉片と化したタイラントの死体が地面へと崩れ落ちた。

「あいつはこんなのはっかを相手にしてるのか……………」

そう呟きながら、若い男は懷から取り出した半紙で刀身を拭ってから鞘へと収めた。

大きな破砕音と共に、パトカーのボンネットがエンジン諸共破砕散る。

「おわっ!？」

「どひい!!!」

「ひええええ!」

情けない声を上げながら、パトカーの陰に隠れていた刑事二人と運転手の男が慌てて逃げ出した。

「こ、これはもう警察の対処出来る範疇じゃありませんよ!SATが自衛隊が変身ヒーローの管轄です!」

腰でも抜けかかっているのか、若い刑事が地面を転げるように逃げながら悲鳴のような声を上げる。

「SATは準備中、自衛隊は動かすと後がめんどい、ついでに変身ヒーローの知り合いなんて居るか?」

呆れ顔でボヤキながら、年配の刑事が懷からニューナンプM60を取り出して構える。

「威嚇は……無駄だろうな」

若干躊躇しながら、年配の刑事は発砲。

弾丸はタイラントの胸に突き刺さるが、タイラントは意にも介さず周囲を見回す。

「マシンガンが効かねえんだ!そんなの効く訳無いだろ!」

「そうですよ!専門家に任せましょうよ!」

クレアのバイクの影に隠れている（つもりらしい）運転手の男と若い刑事の言葉に、年配の刑事は舌打ちしながら、残弾を撃ち込みつつ離れる。

「嬢ちゃん二人に任せなきゃならないってのは情けねえ限りだな」

年配の刑事が離れると同時に、タイラントに向けて9mmパラベラム弾が斉射される。

頭部に収束された銃撃の一発がタイラントの片目に突き刺さり、巨体が大きく揺らぐ。

その隙を突いて、タイラントの右後ろへと近寄ったシェリーの体が旋回しながら跳ね上がり、強烈な後ろ回し蹴りがタイラントの延髄に炸裂する。

タイラントの体が崩れるように膝をつく、それに畳み掛けるように着地したシェリーのコンビネーションパンチが脊髄付近に収束して打ち込まれる。

確実に行動力を奪う事を前提とされた連続攻撃を食らわせてるにも関わらず、タイラントの巨体が立ち上がる。

そこへ再びクレアが頭部へと向けて銃弾の雨をお見舞いする。残っていた方の目も銃弾の洗礼を浴び、脳漿の一部が貫通した銃弾と共に路面へと飛び散る。

それでもなお、タイラントは闇雲に巨腕を振るい、それがかすったパトカーのルーフが紙細工のように軽々と吹っ飛んだ。

「ひよええええー!!」

「おわわわわ……………」

自分達の頭の上をすっ飛んでいったルーフを見たバイクの影の二人が情けない声を上げる中、シェリーはたくみに巨腕を掻い潜りな

がらタイラントの前へと出る。

そこでシェリーは呼吸を整え、両拳を腰ために構える。精神を集中させ、狙うべき一点のみを見据える。

闇雲に振り回されている巨腕がシェリーにぶつかる瞬間、力強い踏み込みの音と同時に、両拳が前へと突き出された。

周囲に大きな踏み込みの音が響く。若い男が音のした方を見ると、そこにはタイラントの腹部に両拳を深々と突き刺しているシェリーの姿が有った。

「そつちも終わつたか」

口から鮮血を溢れ出しながらタイラントが倒れると、シェリーは懷からアンブルケースを取り出し、その中のアンブルをタイラントの死体に注射していく。

「それは？」

「Ｔ ウイルス用ワクチンデス。コレヲ注射シテオケバ蘇生ヲ防ゲルライ事ガコノ間ノ研究デ判明シタンデス」

「そうか、じゃあ、あそこまでする必要無かったな……………」

若い男はすぐ向こうに転がっているタイラントのコマ切れをチラリと見た。

「終わりましたか？若」

すでに原形を留めていないパトカーの陰に隠れていた年配の刑事と、バイクの陰に隠れていた（つもりらしい）若い刑事とと運転手の男が、そつと顔を出してこちらを見た。

「大丈夫です。これで捜査令状も取れるでしょう。あと、若と呼ば



ないでください」

「あ、これはスミマセン」

年配の刑事が謝りながら、携帯電話で手早く鑑識を手配する。

「こんなのが作れるような時代になったんですね……………」

「オレも動いてんの見たのは初めてだ」

若い刑事と手錠を架けられたままの運転手の男が、おっかなびつくりタイラントの死体を覗き込む。

「研究所に出入りしてたんだろ。他にも大量にいるはずだ」

「知らねえよ。オレは出されたのを持ってだけが仕事なんだ。それ以上やバイ事はさすがにゴメンだ」

「取り合エズ、コレデニホンデノ調査ハ終ワリデス。後ハヨロシク才願イシマス」

「ああ、練の奴によるしくな。手早く片付けて帰って来いって」

「伝エテオキマス」

三日後 アメリカ

「いいか、野郎共！相手は三つ目だったり、手足が伸びたり、口から火吐いたりするアンデッド系モンスターだ！倒すには動けなくなるまでたつぷりと弾叩き込め！」

『はっ！』

「あのく、ちゃんと資料読んでます？」

訓練前のブリーフィング中のSWAT部隊隊長の思いっきり勘違

いしている発言に、レベツカは恐る恐る問い質す。

「おう、ちゃんと読んだぞ。各ページ最初の三行ずつな」

「三行……………」

啞然としているレベツカを、副隊長が手招きする。

「大丈夫です。他の者はちゃんと全部読んでますから」

「ホントにあの人が隊長さんなんですか？」

「まあ、確かに小隊長以上には絶対出世出来ないって言われていますけど、あれで結構信頼されていますから」

「はあ……………」

どこか釈然としない物を感じながら、レベツカはちらりと横目でSWAT隊長を見る。

「スミスの野郎が新人のくせして北極までしゃばってやがるんだ！こつちをとつと終わらせて助っ人に行くつもりで気合入れる！」

『了解！』

「あの、管轄の問題が有りますし、第一どうやって北極まで……………」

たじろぐレベツカの肩を副隊長が叩き、ゆっくりと首を左右に振る。

「本当に大丈夫ですか？BOWはとんでもなく危険な存在なんですよ？」

「その点はご心配無く。隊長はあれでも州警察の射撃大会のディフェンディングチャンピオンで、熊を拳銃一丁で仕留めた事も有ります

から」

「……とにかく、今日中に詳しい決行日時が決定します。けつして油断しないでください」

「任せてください。SWATの誇りに賭けて、任務は必ず成功させます。スミスの事をよろしく」

「はい。本人に伝えておきますよ」

同時刻 イギリス

「……何も話してくれないのか？エイダ」

「何を期待しても無駄よ、職業柄口は堅いから」

「どうしてもか？」

「ええ……」

今まで何回繰り返されたか分からない問答に、同席していた刑事は小さく溜息をついた。

彼は三日に一度は来てはこのような彼女に情報提供を説得する。結果はいつも収獲無し。

（どういう神経してるんだか……）

二人共凄腕のスパイだと聞いていたが、これだけ話が平行線を辿ってもお互いまったく引かず、その上口を滑らせもしないのはある意味驚嘆を通り越して呆れる物があった。

しかし、その日はいつもと少し違っていた。

「近日中に、アンブレラに強制捜査が入る。次はHCFにも捜査が入るだろう。事の全容が解明されれば、どれだけの罪に問われるか分からないんだぞ」

「……分かりきってた事よ。今更後悔しないわ」

「……………司法取引の話は付けてある。どんな些細な情報でも提供すれば罪は軽くなるぞ」

「一年二年じゃ変わらないわ」

「エイダ！」

思わず立ち上がったレオンが、思い直したように再び座り直す。

「……………オレはこの後、すぐカナダに行く」

「カナダ？」

「アンブレラの本拠地が判明した。近い内にSTARSがそこに捜査のメスを入れる。ひょっとしたら、会うのも今日が最後かもしれない」

エイダの顔が、僅かに表情を変える。

「……………一つだけ教えておくわ」

「！」

状況の変化に驚きながらも、同席している刑事が耳を澄ます。

「ダーウィツシュ・E・スペンサーのデータは有る？」

「ああ、すでに入手済みだが？」

「彼の実年齢は46歳。だけど、半年前にHCFが入手した彼の顔はどう見ても二十代だったわ」

「！」

「あの、それが何か？」

今一意味が理解出来ない刑事が首を傾げるが、レオンはその意味を悟ったらしく、表情を陰しくする。

「情報はそれだけよ」

「そうか……………ありがとう」

「レオン！」

立ち上がって背を向けたレオンに、エイダが思わず声をかける。

「……………気を付けて」

「ああ……………」

そのまま、振り向きもせずレオンは部屋を出た。

「相変わらずだな」

「アーク……………」

玄関近くのイスに、見知った顔が有るのに気付いたレオンはそちらへと歩み寄る。

「モテるくせにフラれやすくて、その上、女の扱いは下手くそで切り替えも遅い。学生の頃から変わらないな」

「フラれてばっかのお前よりはいいだろ」

「かもな」

微笑しつつ、アークの手の中の紙コップに入ったコーヒーを飲み干す。それを下げた時、その顔は真剣な表情へと変わっていた。

「ついさっき、世界18ヶ国の警察にICPOからの最終決定が降りた。全アンブレラ秘密研究所の一斉摘発作戦、作戦名は”トインクル・スター（輝く星）” 作戦」

「日時は？」

アークはちらりと自分の腕時計を見る。

「今からちょうど、70時間後だ」

20時間後 カナダ

極圏へと入ろうとする位置に在る、ついこの間まで何も無かったはずの空き倉庫に、次々とICPO経由のコンテナが届けられる。その向こうには、大型のヘリやハリアーまでもが止められ、その周囲には幾人もの人間が忙しそうに動いていた。

「届いた順からコンテナの中身をチェックしろ！急げ！」

「得物は大口径か散弾、フルオートが効く物だけにしろ！何が出てくるか分からんぞ！」

「最新型ワクチンの予防接種が済んでない人はこっちに来てくださーい」

「ボディアーマー、人数分届いたわ！」

「自分の分を各自確保しておけ！サイズを間違えるなよ！」

「50AE弾入ってるのはどれだ！？」

「向こうのコンテナの一番底！誰よ、引っ掻き回して整理してないの！」

「ジョー・ケンド特製カスタムガン十丁届いた！早い者勝ちな」

「とか言いつつ二丁も取るな！」

「なあに？この変なロープ巻いてるコンテナ？」

「オレが封印しておいた武器がまた勝手に送られてきたらしい。手に取ると同時に傍にいる誰かを射殺してしまうコルトSAAだの、

三日に一度は人を斬らないと悪夢に悩まされるサーベルだのが入ってるが、使うか？」

「通信機関係全整備完了したぞ。手空いた奴から持ってってくれ」

「今日中に準備を完了しておけ！急げよ！」

「暇な奴こつち来てくれ！ハリアーに給油するのに手が必要だ！」

STARSの面々が慌しく準備を進めていく。

その傍で、作戦開始時刻をセットしておいたタイマーが、刻々と時を刻んでいた。

作戦発動まで、残る40時間 日本

「オンキリキリ、オンキリキリ……………」

護摩壇の炎が赤々と周囲を照らし出す中、若い男が唱える呪文が朗々と響く。

男の前には水を湛えられた大きな鼎（かなえ）儀礼用の金属製の水入れの事）と抜き身の刀に呪符が置かれ、彼の後ろには彼と同じ墨色の小袖袴を着込んだ痩身の中年男性と、衣装は同じだが色だけが燃えるような赤色をしている筋肉質の壮年の男性、はてはこの間の年配の刑事とパリから帰ってきたばかりの警視總監までもが真剣な表情で眼前で行われている儀式を見ていた。

「オン！オン！オン！」

呪文を唱えながら、若い男は抜き身の刀を手に取り、空いている左手で刀印を結んで鼎の水に指先を浸し、それで刀身に梵字を書き連ねていく。

「我、五行相生の法を用い、金氣を用いて相生とし、水氣を用いて水鏡と成す！」

若い男は呪文を唱えながら、梵字を書き終えた左手で呪符を数枚掴むと、呪符を一気に刃へと突き刺した。

「臨！兵！闘！者！皆！陳！烈！在！前！はっ！」

左手で早九字を切り終えると同時に、刀が上へと持ち上げられ、次の瞬間鼎の水面へと刃の先端が突き刺された。

水面に刃紋が広がり、数瞬その場に炎のはぜる音だけが響く。だが、突然前触れも無く刃に突き刺さっていた呪符が次々と破裂していき、次の瞬間には鼎が木っ端微塵に砕け散った。

「ぐっ！」

「若！」

とつさに顔を袖で庇った若い男の傍に、後ろで見ていた者達が駆け寄る。

「返されたか？」

「いや……返されたというよりは……弾かれました」

「弾かれた？」

若い男の言葉に、中年男性と壮年の男性が顔を見合わせる。

「やはり、土御門家の当主でも見る事すら適わなかったのに、我らでは無理か……」

「ただ、何かとてつもない力を持った何かが、いる事だけは確かだ



す。そう何かが……………」

若い男が沈痛な顔で呟く。

その場にいる者全員に重苦しい沈黙が降りていく。

「くそっ！せめてもう少し時間があればシェリーの奴にもっと色々教えられたのに！」

壮年の男性が齒軋りしながら自分の右拳を左の掌に叩き付ける。

「一体、何があるというのだ？北極に……………」

遠くを見ながら、警視總監は小さくそう呟いた。

作戦発動まで、残る20時間 カナダ

全ての準備を整えたSTARSのメンバーが、倉庫の中央に集合していた。

今まで共に戦い抜いてきた仲間達の顔を見ながら、クリスはゆっくりと口を開く。

「いよいよ、明日オレ達は今までで最大の作戦に望む。北極のアンブレラ本部の詳細は今現在を持つても、一切が不明だ。おそらく、いや間違い無く明日の作戦は今までももっとも過酷な戦いになるだろう。無論、危険度の差は言うまでも無い。……………よって、作戦の参加の意思は個人の判断に任せようと思う。この作戦参加にする者は、明朝4：30にここに集合してもらいたい。……………以上だ」

クリスの言葉が終わると同時に、皆が解散していく。

ある者は個室代わりのプレハブの中に消えていき、ある者はその場に残って銃の整備を始める。

その場に残っていたクレアが何気無くシェリーの姿を探すと、木刀を持ったレンと共に外へと出て行くのが見えた。

しばし迷った後、クレアは二人の後を追って外へと向かった。

「少しは強くなってきたか？」

「結構ハードでした」

レンの問いに、体中の生傷を見ながらシェリーが苦笑いする。

「まさか、布団に包まって石段転げ落ちたり、バネ仕掛けのギブス着けたりはしてないよな？」

「いえ、拳で布団を打ち抜く練習だの、素手で狼犬（狼と犬の混血。純粋な狼よりも凶暴）と戦わせられたりだのはしましたけど」

「……オレの時は木刀で熊だったな」

物騒な事を言いつつ、二人は倉庫からある程度離れた空き地まで来ると、レンはシェリーに向き直る。

「結果を、見せてもらおうか」

「……分かりました」

レンは中に鉄を仕込んで真剣と同じ重さに調節された木太刀を正眼に構え、その峰に手を添える光背一刀流独自の構えを取る。

シェリーもそれに応じ、両拳を持ち上げてマーシャルアーツの構えを取った。

「やる前に聞いておくが、妙な技を教え込まれたりしてないだろうな？」

「時間が有れば教えたいって言っていました。あ、でも格闘技マンガを参考資料だと言ってたくさん読まされましたけど」

「相変わらずか」

レンは微笑しながらも、構えに隙を見せない。

「そういえば、従兄の方から伝言貰ってます。手早く片付けて帰って来い、だそうです」

「そうか……………」

そのまま、二人は無言で数秒間対峙する。

後を追ってきたクレアも声を掛けるに掛けられず、その様子を見つめていた。

だが、沈黙は一瞬にして破られる。

瞬時に間合いを詰めたレンが、木刀を上段から振り下ろす。

それを右手によけながら、木刀を握っているレンの右手を狙って肘を突き出すが、レンは僅かに木刀をずらして顴元でそれを受け止める。

「得物を持った相手には攻撃の予備動作に入るより前か、攻撃の後。覚えてきたようだな」

「他にも色々」

シェリーの肘を跳ね上げ、レンの木刀がシェリーの胴体を横薙ぎに狙う。

それをシェリーはバックステップでかわし、その反動を利用して今度は逆にレンへと一気に詰め寄りながらストレートパンチを繰り出す。

レンは僅かに身を横に逸らしながら、空いている左手で突き出された腕を掴み、それを引きながら足払いを掛ける。

「あつ!？」

バランスを崩したシェリーは転倒しながらも素早く身を丸め、その場で前転すると手早く起き上がってレンへと向き直りながら再度構える。

「投げ技は投げられる事よりも投げられた後の方が危険。追撃を食らうよりも早く迎撃体勢を整えるべし」

「そう教わりましたね」

シェリーが微笑しながら、レンの膝へと向けてローキックを放つ。

その予想以上の鋭さにかわせない事を悟ったレンは膝に力を込めて打撃に備えるが、その蹴りは膝に当たると今度はくるぶし、続けて太ももへと繰り出される。

太ももに当たる寸前に、レンは木刀で蹴り足を払うと同時に離れて距離を取る。

「技を変えずに本質をダメージ狙いから破壊に変えたか。短期間でよく出来た物だ」

ローキックのダメージで麻痺に近いほど痺れている足の感覚を確かめながら、レンは構えを正眼から下段へと変える。

「狙うポイントを腱と関節に絞ればいいんです。結構簡単でした」  
「そうか………じゃあ少し本気を出させてもらうか!」

言葉が終わると同時に、レンが超高速の連続刺突《烈光突》を繰り出した。

だが、シェリーはその刺突を全て拳で正面から正確に迎撃する。

「光背流拳闘術の《烈光突》を覚えてきたか。まさか全部併せられるとは思わなかったが……」

「多分G ウイルスの影響が神経にも出てきてるんだと思います。ここ数ヶ月で反射神経も飛躍的に向上したみたいですから」

「鍛えれば鍛える程進化していく訳か。うらやましい限りだな」

レンは間合いを詰めながら上段からの袈裟切りを放つが、シェリーは僅かに身を逸らしてそれをかわす。

だが、レンは更に間合いを詰めながら手を翻し、まったく同軌道上の斬り上げを繰り出す。

その攻撃をかわせない事を瞬時に悟ったシェリーが、その斬撃の軌道上に右腕を突き出し、強引に木刀を止める。

「胴を斬られるよりは腕一本犠牲にするか」

「速度が乗るよりも早く、鰐元に食い込ませれば斬り落とされる事は無いそうですね」

「それなりに筋肉が付いてればな」

「今度はこちらから行きます」

言い終えるとはば同時に、シェリーは大振りの左フックを繰り出す。

レンはその軌道を見切って僅かに下がってかわすが、シェリーの体はそのまま回転し、続けて右の肘がレンを襲う。

「これは!？」

それをかわすと次は左の回し蹴りが、続けて左のリアットが、右のバックブローが、立て続けにレンを襲う。

「《連水月》（れんすいげつ）！」

回転する体から間合いに应じての技を連続して繰り出す、光背流拳闘術の技をシェリーが会得してきた事にレンは内心驚きつつ、立て続けに放たれる攻撃をかわし、逸らし、防御する。

が、木刀の使えないレンの懷にシェリーは必要に詰め寄り、とうとうさばき切れなかった肘がレンの脇腹に突き刺さる。

「やつ！？」

初めて攻撃がまともに命中した事にシェリーは喜ぼうとしたが、肘から伝わってくるゴムのような感触に慌てて離れて再度構える。

「いい攻撃だ。だが、懷に入られれば格闘技の方が有利なのは百も承知」

呼吸を整えながら、レンが鋭い目付きでシェリーを見据える。

「その程度が効くような柔な鍛え方はしていない」

次の瞬間、シェリーの肌が総毛立つ。レンの体から、明確なまでの殺気が放たれていた。

「明日の戦いに参加する資格があるかどうか、試させてもらおう。本気で行くぞ」

「……はい」

頬を冷や汗がつたっていく感触を感じながら、シェリーはレンの僅かな動きも見逃さないように全神経を集中させながら、隙を探る。

「ちょ、ちよつと二人共！？何考えて……………」

その様子を見ていたクレアが慌てふためき止めようとするが、レンの本物の殺気の籠った視線を突き付けられると同時に萎縮する。そして、レンが一気に間合いを詰めながら、先程とは比べ物にならない速度の斬撃をシェリーの脳天目掛けて振り下ろす。

シェリーはなんとか後ろに下がって、からくもそれをかわすが、瞬時に木刀は斜めに跳ね上がり、今度は首を横薙ぎに狙う。

慌ててシェリーは転倒するような勢いでしゃがみ込むが、その勢いで残ったポニーテールの尻尾の部分が、木刀に触れると同時にキレイに斬り落とされる。

それに驚く間も無く、体勢の崩れたシェリーにレンの前蹴りが繰り出される。

両手でそれを受けながら、その勢いを利用してシェリーは後ろへと飛び退り、一度距離を取ってレンと対峙した。

（練に勝ちたい？じゃあ、あと三年は頑張る事だな）

日本で言われた事をシェリーは思い出す。

多少は強くなってきたつもりだったが、それでもなおレンとの圧倒的な実力差に、シェリーは心の底から驚愕していた。

（光背一刀流の免許皆伝者クラスになると、木刀だろうが竹刀だろうが真剣と変わらん。どうしても勝ちたいなら、あいつが本気を出す前にどうにかするしかないな）

話には聞いていたが、本当に真剣と変わらない斬撃にシェリーは冷静に対処法を考える。

（刃が無いのに切れるのは驚異的なパワーとスピード、そしてバランスが整ってるから。ようは紙の本で指が切れるのと理論上は同じ。そのどれか一つを崩せばただの木に戻る！）

そこで、レンが左手を懐に入れるのが見えたシェリーは、銃撃を警戒して一気に間合いを詰めようとする。

だが、レンは銃ではなく懐から取り出したペンを弾丸に劣らない勢いでシェリーへと向けて投じた。

顔面へと向けて飛んできたペンをシェリーは思わず叩き落すが、体勢が崩れた所ですかさずレンの横薙ぎの斬撃がシェリーの胴を襲う。

シェリーは慌てて急制動を掛けてその斬撃の範囲に入らないようにするが、わずかに触れた剣先が衣服を斬り裂き、その下の皮膚に朱線を刻む。

「いい判断だ」

ぼそりと呟きながら、レンは手元へと戻した木刀を一瞬動きの止まったシェリーの鳩尾へと向けて突き出す。

シェリーは真後ろへと転ぶようにしてそれを避けながら、体が地面に付く寸前に片手について全体重を支えつつ、ローキックでレンの足元を狙う。

レンは小さくジャンプしてそれを回避すると同時に、木刀を手中で反転させて逆手に持ち替え、シェリーへと向けてまっすぐ突き降ろす。

慌てて転がりながらその場から回避し、起き上がった所でシェリーが見たのは、地面に半ばまで突き刺さった木刀だった。



「逃げてばかりか？」

一息に木刀を引き抜きながら、レンはシェリーの方へと向き直る。

一歩間違えれば即死しかねない程容赦の無い攻撃と、レンの全身から放たれている殺気に、シェリーの背筋を悪寒が走り抜ける。震えだしそうになる両足をなんとかためながら、再度構える。

（一番有効的なのは攻撃のスピードを落とさせる事、だとしたら……）

頭の中で素早く攻撃法をシュミレートしたシェリーは、構えを一度解くとレンへと向けてダツシュする。

そしてその体が木刀の攻撃半径内に入ると同時に、いきなり左へと跳んでレンの右手へと回る。

レンはそちらを向かず、目だけをシェリーの方へと向けて木刀を真横に振るう。

（今だ！）

予めそれを見越していたシェリーが、両足に強引に力を溜め込み、一気にジャンプした。

「え！？」

ただ固唾を飲みながら二人の戦いを見ていたクレアが思わず驚愕する。

跳び上がったシェリーの体は、そのままレンの頭上を飛び越え、トンボを切りながらレンの武器を持っていない左手へと着地する。

（行ける！）

レンへと振り向きながらシェリーは渾身の右ストレートを繰り出そうとした。

だが、一瞬シェリーの背筋を悪寒が走り抜ける。とっさに体を捻ったシェリーの左肩口を、突き出された木刀の切っ先がかすめ、斬り裂いた。

「外見で判断するなと教えたはずだ」

いつの間にか左手に木刀を持ち替えたレンが、冷徹な眼差しでシェリーを見つめる。

「余計な小細工を覚えさせる為に日本に行かせた訳じゃないはずだが？」

「分かってます」

再度距離を取りつつ、シェリーはレンと相對する。

（傷はどれも浅い……戦闘には支障は無いけど、例えどんなにスピードでかく乱しても、レンの反応速度はさらにその上。あと残されている手段は……）

シェリーは焦りを感じながら、レンの隙を探るが、どう脳内でシミュレートしても有効的な方法は思い浮かばない。

「力が足りぬのならば、明日の作戦に共に行かせる訳にはいかない。残念だが、戦えない体になってもらう事になる」

木刀を右手に持ち替えながら、レンがゆつくりと、だが一切隙を見せない完璧な歩法でシェリーへと歩み寄る。

その体から一際強力な殺気が発せられているのに気付いたシェリーが、思わず固唾を飲み込む。

ふとその時、日本で一度だけ見せてもらった、ある技を思い出す。

（こいつを扱いこなすには、才能と努力と勘が必要だ。まあ、出来ればの話だが）

見せてもらった時の説明を思い出しながら、シェリーは構えを解き、全神経をレンの微細な動きの監察に集中させる。

「シェリー！？まさか！」

それを戦闘放棄かと思ったクレアが思わず歩み寄りそうになるが、シェリーの目がまだ真剣な事に気付くと、黙ってそれを見守る。

「……………正気か？失敗すれば死ぬぞ」

それが何か気付いたレンが、問い質しつつもゆつくりと正眼に構えていく。

「覚悟、完了です」

「いいだろう」

日本で教えられた言葉を呟きながら、シェリーがレンを真剣な目で見据える。

それを受けたレンが一部の隙も無い構えから、ゆつくりと摺り足で間合いを詰めていく。ほんの数cmずつに数秒を掛けながら、二

人の距離がゆつくりと縮まっていく。

やがて、木刀の有効攻撃圏内にまで距離が縮まりながらも二人はまだ攻撃しない。

そして、有効攻撃圏から確実な殺傷圏に入ると同時に、レンの手に握られた木刀が瞬時にその頭上に掲げられ、全力で振り下ろされる。

全神経を集中させ、レンの僅かな動きをも冷静に観察していたシェリーが、刹那にも満たない時間内で自らの脳天に振り下ろされようとするとする木刀を、その視界に捉えると同時に、両手が跳ね上がる。

周囲に、破裂音に似た音が響き渡った。

シェリーの額を、一筋の血が流れ落ちる。

顔面のほんの5cm程前で合唱するような形で合わせられた掌の間に、木刀は挟み込まれて止まっている。

完璧な白刃取りだった。

硬直状態はほんの一瞬。

次の瞬間には、レンの左の貫手と、シェリーの膝がすれ違ふ。

シェリーの膝から放たれた変形の発勁、《光破断・狼牙<sup>ネツガ</sup>》が木刀を砕くのと、レンの貫手がシェリーの鳩尾に突き刺さるのは同時だった。

数秒間の間の後、シェリーの体が崩れ落ちる。

「シェリー――！」

クレアが慌てて駆け寄り、その体を起こす。

「問題無い。一瞬だけ心臓の拍動を停止させて失神させたただけだ」

レンが呟きながら、手の中の木刀を見る。

シェリーの膝が命中した場所の表面を覆っていた木材は完璧に砕け散り、中に仕込まれていた鉄は半ばまで砕けかかっていた。

「レン！！シェリーにもしもの事が有ったらどうするの！」

クレアが激怒しながらレンの襟を掴む。

「有ったら、じゃない。場合によっては本気で病院送りにするつもりだった」

「どうして！」

「修羅場に行こうとする人間は選んだ方がいい。彼女はまだ若い、死地に向かわせる訳には行かない」

あくまで冷静なレンの口調に、クレアはしばし襟を握る手を緩めなかったが、やがてゆっくりとその手を離す。

「……………私も、シェリーは置いていくべきじゃないかと思ってた」  
「どうやら、その必要は無いようだ。彼女は立派なSTARSのメンバーだ」

失神しているシェリーの顔を見ながら、レンが微笑する。

「明日までゆっくり休ませておけ。目が覚めたら、オレが合格だと言っていたと伝えておいてくれ」

「自分から言ったら？」

「生憎と、自分の手で傷だらけにした女の子の前に立つ勇気が無くてな」

本気がジョークか分からない事を言いながら、レンは彼女達に背を向け、その場を後にした。

作戦発動まで 残る15時間 カナダ

5cm四方の画面の中で、赤いパワードスーツを着たコマンドーが爆弾を放り投げる。

だが、それをジャンプしてかわした黄色いネズミが、お返しとばかりに電撃をコマンドーにお見舞いする。

まともに喰らったコマンドーがダウンし、再び起き上がろうとした所に、背後から近づいた赤い帽子を被ったヒゲオヤジが火の玉を投げつけ、コマンドーが再びダウンしながら下の階に落ちていく。駄目押しとばかりに、落ちてきたばかりのコマンドーをピンク色のボールに手足が付いたような生物が吸い込み、画面外へと吐き出す。

ライフゲージが無くなったコマンドーのプレイ画面にYOU LOSEの文字が大きく浮かび出た。

「……………」

レオンが鎮痛そうな表情で手の中の携帯ゲーム機の画面から目を離れた。

「相変わらず弱いな。射撃はあんなに上手いのに」

「ホントホント」

「向いてないだけじゃ、あっ！？」

ケーブルで接続された携帯ゲーム機をそれぞれ手にしているアイク、レベッカ、スミスがマイキャラを操作するが、やがてスミスの、次にレベッカの顔が曇る。

「オレの勝ちだな」

「むっ……」

「相変わらずだな。本番前は遊ぶ、か」

「マジメになるのは本番だけでいいだろ」

レオンの苦笑に、アークが微笑で答える。

「レベツカさん、抗生物質のストックどこです？」

「え、無いですか？」

向こうから聞こえてきたミリイの声に、レベツカがその場を離れる。

「おいスミス、追加のカスール炸裂弾届いたぞ」

「おう、今行く」

カルロスの声にスミスもその場を離れ、期せずして二人きりになったレオンとアークはしばし無言で向かい合った。

「なあ、レオン。お前、この作戦が終わったらどうする？」

おもむろに口を開いたアークの問いに、レオンはしばし考えてから口を開く。

「……さあな。そういうお前は？」

「オレか？オレはまた探偵に戻るだけだ」

「そうか」

また、しばし両者は無言。

「…………もし、この作戦が成功して、アンブレラを壊滅させても、世界にはまだ多くのＴ ウイルスが存在する。オレは、この世界から全てのＴ ウイルスを消滅させるまで、戦うつもりだ……………」

レオンはそう言いながら、硝煙の染み込んだ自らの拳を強く握り締める。

「変わってないな、あの時から」

アークが苦笑しながら、プレイしていた携帯ゲーム機の電源を切り、傍のテーブルの上に置いた。

「いつもそうだ。騒動を起こすのはお前、巻き込まれるのはオレ」

「わるかったな」

「いいさ、好きでやってる事だ」

アークは苦笑。それにつられてレオンも苦笑を浮かべる。

「そういう訳だから、付き合ってやるよ。最後まで」

「すまない」

アークが差し出した手を、レオンは強く握り締めた。

作戦発動まで 残る１０時間 カナダ

「…ん」

「起きた？」



シェリーが目を覚ますと、そこはベッドの中だった。負傷していた箇所はきちんと手当てされ、ベッド脇のイスに腰掛けていたクレアが心配そうにこちらを見ていた。

「あれ？わたし……」

「レンがね、合格だった」

クレアの一言に、シェリーは一瞬虚を突かれた表情になり、次に心底嬉しそうな顔をしながら跳ね起きる。

と、同時にその腹から乾いた音が周囲に響いた。

「あ………」

「お腹すいたでしょ。冷めてるけど食べる？」

「うん」

クレアが用意しておいた夕食のトレイを受け取ると、シェリーはそれを猛烈な勢いで食べ始める。

その様子をじっと見ていたクレアが、ふと顔をほころばせる。

「どうかした？クレア？」

「ちよつとね……初めて会った時の事を思い出してた」

シェリーの頭を何気無くそつとなでながら、クレアが五年前同じ事をした時の事を思い出す。

「なあに？クレア………」

「大きくなったな、って思ってた」

「もうわたしも１７だもん。一人前よ」

「………そうね」

優しく微笑みながら、クレアがシェリーの頭から手を離す。

「食べ終わったら、装備を点検してからまた寝た方がいいわよ。明日は早いから」

「うん、大丈夫。準備万端よ」

「そ……明日は、頼むわよ」

「任せて！」

シェリーは、クレアに力強く答えた。

作戦発動まで 残る8時間 カナダ

「ダイジョウブ、準備万端心配無用！モオ、オーガだろうが、アナコンダだろうがコワイ物ナシだって。ア？レン？野暮はシナイ方がいいと……」

英語訛りが残るも、やたらと流暢な日本語で長電話しているスミスを、同室のカルロスが銃を手入れしながら呆れた顔で見っていた。

「ダ〜カ〜ラ〜、詳しいトコは言えないケド、もう直全部終ワルから。ウン、その時は。じゃあ、Good Night」

電話が切れると同時に、カルロスは溜息をつく。

「出撃前夜に彼女に長電話か……のん気な奴だな。しかも、相手がああのサムライの妹とは……」

「ん？ユメちゃんはレンと全然似てないぜ？あいつがサムライなら、

ユメちゃんは本物のヤマトナデシコだからな」

「ヤマトナデシコねえ……………」

カルロスの脳裏に、芸者風の着物を着て腰に刀を差している間違  
いまくった日本人女性像が浮かぶ。

「ま、どこに女作ろうがせいぜい泣かせないようにするんな。特  
にその子泣かせたら確実にサムライに斬られるぜ」

「大丈夫。今の所はレンも認めてくれてるしな。それに絶対泣かせ  
やしないさ」

「そうかい。じゃ、オレも女泣かせないようにしに行くかな」

「おう、せいぜいひっぱたかれないようにな」

含みの有る笑みを浮かべながら部屋を出て行くカルロスにスミス  
が無責任な声援を送る。

ちなみに、頬を赤く腫らしたカルロスが部屋に戻ってきたのはそ  
れから21分後だった。

作戦発動まで 残る 7時間 カナダ

「こんな所にいたのか」

「おう、一杯どうだ？」

テーブルを囲んで酒盃を手にしているバリー達の元に、クリスが  
歩み寄った。

「悪いが、出撃前はな」

「そうだったわね」

同じく酒盃を手にしたジルが、くすりと笑って杯を傾ける。

「パイロットの癖でしたっけ。あ、じゃあコーラでもどうぞ」

なめる程度にしか飲んでなかったレベッカが、クーラーボックスからコーラを取り出して氷を入れたグラスに注いでいく。

それを受け取って、期せずして旧STARSメンバーが揃ったその場で、クリスは黙って杯を空ける。

「……………ようやく、この日が来たな」

「ええ、思えば長いような、短いような五年だったわ……………」

「オレにとつちや長かったぞ。何せ、いつの間にか長女が彼氏作ってやがったからな」

「え？ そうなんですか？」

「ああ、次に帰ってきた時に会わせてくれるとき」

バリーの手の中のついこの間取られた家族の写真を、レベッカが興味深そうに覗き込む。

「会ってすぐ殴るなよ。やりそうだからな」

「馬鹿言え。娘との進展度聞いてから殴るさ」

「ダメですよ、娘さんに嫌われますよ」

「そうそう」

しばし、その場を談笑が響く。

「まあ、明日生きて帰れば、だけどな」

クリスの一言に、全員の表情が少し厳しくなる。

だが、クリスは無言で杯にコーラを注ぐと、それを目上に掲げる。

「我らに、勝利を」

それに、三つの杯が奏でる音が重なった。

「まだ起きていたのか」

「うん……寝付けなくて」

部屋を訪れたレンに、ミリイは苦笑しながら応える。

「レンこそ、寝なくて大丈夫？」

「オレは多少寝なくても平気だ。それに、この間までずっと寝たきりにさせられてたからな」

「また怪我して寝たきりにならないでね」

再度苦笑しているミリイに、レンは黙って一つの封筒を手渡す。

「これは？」

「特別に手配した日本への直行便だ。今すぐ出れば時間までに間に合う」

「レン！？いきなり何を！？」

ミリイが手渡された封筒を見ながら驚愕する。それに構わず、レンは言葉を続ける。

「明日は今までとは比べ物にならない激戦になるはずだ。戦闘訓練

を受けてないお前をこれ以上危険に晒す訳にはいかない」

「そんな！ここまで来て何言ってるの！？あたしだって……」

「お前一人の体じゃないんだろ？」

レンのその一言に、ミリイの動きが止まる。そして、ゆっくりとベッドに腰を降ろした。

「……気付かせないつもりだったんだけど……いつから気付いてたの？」

「疑い始めたのは一月くらい前から、確信したのはここ一週間だな」

「……そう」

ミリイは無言で自分の下腹部に手を当てる。

「もうじき四ヶ月よ。安定期に入ってきてるから、多少は大丈夫よ

……」

「だが……」

何かを言いかけたレンの裾を、ミリイは強く握り締める。

「いやなの……五年前みたいにレンに迷惑掛けるだけなのは……あたしだって、この五年一生懸命医者の勉強したのは、レンの役に立ちたかったから……やっと、その時が来たのに、一人だけ帰るなんて出来ない……」

裾を握り締めている手に、雫が落ちる。

見ると、ミリイの目から大粒の涙が零れ落ちていた。

「ミリイ……」

「何も……言わないで。……お願いだから……」

涙ぐむミリィを、レンはそっと抱き寄せる。

「レン……」

ミリィは静かにレンにその体を預けていく。力の抜けた手を、レンはゆっくりとはがしていく。

そして、ミリィの左手をそっと取ると、自らの懷から取り出した物をその薬指にはめていく。

「これ……」

それは、飾り気の無い金色の指輪だった。

ミリィが問うのと同時に、レンはもう一つの同じ指輪を取り出すとミリィに手渡す。

「例え何があっても、オレの命が燃え尽きる時まで、傍にいてくれるか？」

「……はい」

ミリィは涙目で無理に微笑しながら、レンの薬指に指輪をはめていく。

やがて、お互いの手を強く握り締めながら、その唇がゆっくりと重なった。

その直後、先程まで部屋の様子をうかがっていた気配が遠ざかっていくのを、レンはあえて追わなかった。

ドアが開く音で気付いたクレアがそちらを見ると、そこに俯いたシェリーが立っていた。

「……どうだった？」

問いにシェリーは無言でベッドに歩み寄る。

ふと、その足元に雫が落ちているのをクレアは気付く。

俯いたシェリーの目から、大粒の涙が、一つ、二つ、こぼれ出ていき、やがて両目から大量の涙がこぼれ出す。

「そう………」

クレアはそれ以上何も言わず、そつとシェリーを抱きしめる。

「う、わああああー」

それと同時に、シェリーが嗚咽を漏らしながら号泣する。

クレアは黙って、シェリーが泣き止むまで彼女を抱きしめ続けた。

少女の涙と共に、決戦前夜の夜は更けていく……

作戦発動まで 残る 2時間半 カナダ

壁時計が集合時間の20分前を示すと同時に、レンは閉じていた瞳を開く。

睡眠を一切取らず、己の気を限界まで高める為の瞑想から覚めると、おもむろに新調した装備に手を伸ばす。

着衣を脱ぎ、下着の上から対衝撃用のアンダースーツを着込む。



両手、両足、胴体にそれぞれ特注のチタン製プロテクターを身に着け、シオルダーホルスターを肩に架ける。

日本から送られてきたばかりの裏地にケプラー材の縫い込まれた小袖に袖を通し、袴を履いていく。

厚手のコンバットブーツを履き、無数のマガジンが付いたガンベルトを腰に巻く。

更にそのガンベルトにサスペンダーリングを通し、そこに爆薬内臓のスローイングナイフ（投げナイフ）を刺していく。

格闘用と滑り止めを兼ねた砂鉄入りのグローブをはめ、額に服と同じ墨色の鉢金が付いた鉢巻を巻く。

サムライソウルに初弾を装弾させ、マガジンを抜いて追加の一発を装填すると銃に戻し、それをホルスターに収める。

最後に、大通連を手に取り、静かに腰に挿して全ての準備は整った。

「おい、そろそろ時間だぞ」

「準備は出来ている」

ノックして間髪入れずに部屋に入ってきたスミスに、レンは静かに応える。

「気合入ってやがるな」

「まあな」

レンの完全武装を見ながら、スミスは不敵な笑みを浮かべる。

「行くか」

「ああ」

言葉少なに、レンは集合場所へと足を向ける。

その背には、STARSのエンブレムが大きく縫い込まれていた。

張り詰めた空気の中、準備を整えたSTARSメンバーが集まっていた。

皆が緊張した顔で、言葉を交わす者も少ない。

自らの腕時計が集合時刻を刻むと同時に、クリスは周囲を見回した。

「来ていない奴は何人だ？」

「シェリーがまだ……」

クレアが顔を曇らせながらシェリーの姿を探すが、どこにもその姿は無い。

「……時間だ。今いるメンバーを出撃メンバーとして……」

「すいません！遅れました！」

クリスの言葉の途中で、転げそうな慌てぶりのシェリーが姿を現す。

「遅いぞ。時間厳守が……」

そこで、ふとシェリーを見たクリスが言葉に詰まる。

レンとは色違いの燃えるような紅い色の鉢金付きの鉢巻を額に巻いたシェリーの両目が赤く腫れ、クレアと合わせてポニーテールにされていたはずの髪が肩口で切りそろえられていた。

それを問い質すよりも早く、クレアがクリスを肘で小突いて小さ

く首を左右に振る。

何人かが小さな声で囁きながらレンの方を横目で見たりするが、あえて誰もそれ以上問い質そうとはしなかった。

「それでは作戦を説明する」

クリスが用意されていたホワイトボードに簡潔に書かれた地図を指す

「部隊はA、B二つのチームに分かれ、Aチームはこの洞窟に偽装された入り口から強行突入。Bチームはこちらのクレパスに偽装された資材搬入口を爆破の後に内部に突入。目的は内部での人体実験の証拠の入手及び製造中のBOWの全消滅、そしてアンブレラ代表取締役ダーウィツシュ・E・スペンサーの逮捕だ。内部の構造、警備状況、その他は一切不明。チーム分けはそのリストを見てほしい。以上、質問は？」

誰一人無言の中、レンが静かに手を挙げた。

「一つ聞きたいが、オレは警官でも軍人でもない。そのダーウィツシュとやらを見つけると同時に斬り捨てるかもしれないが、それでもいいか？」

「それは……」

クリスが答えるよりも早く、レオンが口を開く。

「ダーウィツシュ・E・スペンサーには自らの体を改造している疑いがある。逮捕するか、倒すかどちらかしか無理だろう。逮捕出来ればの話だがな」

「……分かった」

「他に質問は？」

「オレは無い」

他の者からも質問が出ない事を確認したクリスが、隣に立っていたジルとレベッカに目配せする。

それを見た二人は、用意しておいたグラスを載せたカートと、一本の一升瓶を持ってきた。

「こいつは景気付け用にとサムライの実家から送られてきた物だ。希望者は自由に飲んでいってくれ」

グラスに注がれていく日本酒を、レンがいの一番に取るとそれを一口口に含み、刀を抜く。

鈍く光る刃へと向けて酒を吹き付け、一振りして鞘へと収めると、杯の残りを一気に飲み干した。

それに続くようにシェリーが杯を取り、真似をして一気に飲み干そうとするが、失敗して大きくむせ返る。

「大丈夫？」

慌ててクレアが駆け寄り、シェリーの背をさする。

「プ……」

誰かが嘔き出すと同時に、緊迫した空気が一転して爆笑がその場を満たした。

「アルコール度数40%を越えてるからな。弱い奴は飲まない方がいいぞ」

「お酒なんて飲んだの初めてで……」

レンの言葉に、赤面しながらシェリーが呟く。

「それなら止めといた方がいいな」

レオンが杯を手に、少し味わいながらそれを飲み干していく。

「そうだな。お酒は大人になってからだ」

スミスがグラス、ではなく一升瓶の方をレベッカから奪うと、その中身をらっぱ飲みする。

「てめえ！何一人で大量に飲んでやがるんだ！」

「いいじゃねえか！お前へり操縦するんだから飲むな！」

カルロスとスミスが一升瓶を奪い合う様子を皆が笑いながら、杯の中身が空けられていく。

最後に、クリスが一口だけ酒を口に含み、口を拭くと、その顔が真剣な物へと変わる。

「STARS、出撃せよ！」

『了解！！』

全員の復唱が、その場に木霊した。

作戦発動まで 残る 2時間 アメリカ

SWAT達が異様なまでの重武装の準備を進めていく。

やがて、全ての銃に初弾が装弾され、セーフティが架けられた。

「隊長！準備完了しました！」

「おうよ」

出勤前にも関わらず、バトワイザーのボトルを手に使っていたSWAT隊長がぶつきらばうに返答する。

その顔には、酔いの欠片も無く、不敵さと壮絶さを兼ね備えた笑みが浮かんでいた。

ボトルの中身を一気に飲み干すと、隊長はそれを地面に叩きつけて木っ端微塵にした。

「野郎ども！出勤だ！」

『了解！！』

作戦発動まで 残る 1時間 イギリス

留置所の壁を、エイダは無言で見つめる。

時計すら無いその牢の中で、ただ過ぎていく時間を感じながら、エイダはふと遠くを見た。

「……レオン………」

その口から漏れた呟きは、誰の耳にも届きはしなかった。

作戦発動まで 残る 30分 日本

初めて迎える大規模な実戦を前に、S A T隊員達は無言で研究所の包囲を固めていく。

訓練以外で撃った事すらない実弾の込められた銃を握る手に汗を大量にかきながら、所定の位置に着くと皆が緊張した顔で固唾を飲み込む。

ただ一人、その中にいる墨色の小袖袴に腰に日本刀を挿した若い男が、落ちついた顔で時を待っていた。

無情に時計は時を刻んでいき、そして、ついに予定の時間を指す。

世界中でそれを待っていた特殊部隊が、一斉に動き出した。

”トインクル・スター（輝く星）” 作戦 発動

## 第十一章 『苦戦！北極圏の悪夢！』

硝煙が染み込んだ手首にはめられたG S H O C Kが、作戦時刻にセツトされたアラームを短く鳴らす。

「時間だな」

「ええ」

ナビゲーター席に座ったジルに今更ながら確認しつつ、クリスはハリアーの操縦桿を強く握り締め、号令をかけた。

「作戦開始！」

『了解！』

通信機からの返答を聞きながら、クリスは操縦桿を一気に倒す。上空を旋回していたハリアーが一気に急降下を始め、白銀の地表が瞬く間に近づいてきた。

その内の一点、クレパスに偽装された搬入路にクリスは正確にポイントすると、A S M 65マーベリック空対地ミサイルの発射スィッチを押し込む。

翼に取り付けられたマーベリックミサイルが、ハリアーの機首に取り付けられたレーザーポインターの誘導に従いながら、噴煙を上げながら目標に突き進んでいく。

だが、それが目標に炸裂する寸前、突如として周囲の雪原から無数の影が飛び出した。

「何！？」



「何だあれは!？」

ミサイルの命中後、即座に突入するべく控えていたヘリの中で、Bチームは突然別のクレパスから出現した無数の機影を目撃していた。

「あれは…ネメシス―I型!あんなに!？」

それが20体近くのネメシス―I型 イカロスの群れだと気付いたレオンが驚愕する。

その内の何体かが到達寸前のミサイルの軌道を遮り、自らを壁としてそれを阻んだ。

残ったイカロスはその全てが急上昇していくハリアーへと迫っていく。

「まずい!クリス達を狙っているぞ!」

「兄さん!!」

バリーの声に、クレアが絶叫に近い声を上げた。

『クリス!無数のイカロスがそっちに向かっている!ジェット機の機動性と鳥類の機敏性を併せ持っている奴だ!気をつける!』

「了解」

クリスはレオンからの忠告を聞きながら、不適な笑みを浮かべて返答した。

「まさか、こんな局地でドッグファイトやる羽目になるとはな」  
「大丈夫なの？」

ジルの不安そうな声に、クリスは片手を上げてサインを送る。

「任せろ」

それと同時にクリスは操縦桿を引き、噴射ノズルの角度を調整。  
機体は急激的な弧を描きながら機首を上空へと向けていく。  
それを追って、無数のイカロス達がその距離を縮めていく。

「来たな……」

レーダーに映る光点を見ながら、クリスは完全に真上を向いた機体の推力をゆつくりと落としていく。

「クリス！？」

「大丈夫だ。敵との距離は？」

失速していくのに気付いたジルが慌てた声を上げるが、クリスの落ち着いた声に我に帰ると、慌てて手元のレーダーに目を走らせる。

「あと500、400、300、早い！？」

「上等だ」

クリスが操縦桿を横へと倒しながら、噴射ノズルを偏角し、一気に推力を上げる。

急激的な推力変化を受けた機体は真横へと倒れこみ、更にそのまま真下を向きながら、急激的に加速した。

急加速したハリアーが一気にイカロス達との距離を縮める中、クリスは更に操縦桿を横に倒し、機体を旋回させる。

「ちよっ！？クリス！？」

「喋るな！舌かむぞ！」

とんでもない高速機動にジルが悲鳴に近い声を上げるが、クリスは構わず機体を更に加速させる。

そして、先頭のイカロスが機銃の有効射程範囲に入ると同時に、トリガーを引いた。

放たれた25mm炸裂弾が先頭のイカロスを貫き破裂させていく中、クリスはトリガーを引いたまま、機体を旋回させながら横へと滑らせ、次々と標的の中にイカロス達を捕らえていく。

そのままの速度でハリアーはイカロス達が攻撃するよりも速くその群れの中を突っ切り、それと同時に機体は旋回を止め、再度弧を描きながら上昇する。

「こいつがオレの得意技だ！残数は！？」  
シザースロール

「あ、あと12、いえ13！」

ジルの報告を聞きながら、クリスは再び操縦桿を手前に引いた。その高速度の為に要する大きな弧を描きながら、ハリアーがその機首を上へと向けていく。

それを追うように、イカロスの群れがジェット機では絶対不可能な動きで軌道を変える。

「ちいっ！」

上昇軌道を塞ぐように向かってきたイカロスの群れを、クリスは驚異的な操縦でかわしつつ、弾丸を叩き込む。

再度上空へと踊り出たハリアーに向かって、残りのイカロスが後を追う。

「なんて動きだ。ハリアーの機動性を上回ってやがる……」  
「あと、7!」

ジルの告げた残数を聞いたクリスは強く齒軋りした。  
ハリアーの真後ろに付いたイカロスは、若干速度の違いで遅れながらも、後ろから離れようとしない。

（距離が短い……あの機動性じゃ反転すると同時にやられるな……どうする?）

クリスが自問しつつ、高度計を見る。

それは、もう直高度限界に達する事を示していた。

「進む事も戻る事も出来ないなら、止まるまでだ!」

クリスは、操縦桿をいきなり手前に引きながら噴射ノズルを真下に調整。

慣性の付いた機体が、急激的な機体の引き起こしで進行方向に機体の腹を向けるような状態からの噴射ノズルの噴煙が、急激的に機体の速度を落とす。

”コブラ”と呼ばれる高度操縦技術に反応の遅れたイカロス達が衝突寸前に慌てて左右へと散る。

「今だ!」

群れを通り過ぎると同時に、クリスは操縦桿を前へと倒し、機体を即座に戻すとトリガーを引いた。

放たれた弾丸が慌てて方向を変えようとするイカロス達を貫く。破裂した肉片を撒き散らしながら落下していくイカロス達をすり抜けるようにして再び上空へと舞い上がったハリアーが、弧を描きつつ水平背面飛行へ、それから反転して水平飛行へと体勢を立て直す。

「あと、4！」

「来い！」

こちらへと向かってくるイカロスの群れへとクリスは機首を向けると、真正面から最加速で突っ込んでいく。

そのまま、イカロスの反応速度を越える猛スピードですれ違い様にクリスは25mm弾をイカロスの体に叩き込んでいく。

「あと二匹！」

ジルの声を聞きながら、クリスは手元の残弾数メーターをチエツクする。残弾はもはやほとんど無い。

「こちらの弾が尽きるのが先か、向こうがくたばるのが先か……」

眩きながら、クリスは背後から迫ってくるイカロスとの距離を冷静に図る。

イカロス達との相対高度から機体を微妙に上げ、イカロスが追いつこうとする瞬間操縦桿を引いた。

イカロス達の目前で、忽然とハリアーが消失する。

一瞬にしてイカロスの真下に潜り込んだハリアーが、次の瞬間にはイカロス達の真後ろを取った。

「終わりだ」

”木の葉落とし”と呼ばれる操縦技術でバックを取ったクリスがトリガーを引いた。

残ったイカロスの内の一匹が全身を貫かれ、肉片へと変わり果てながら即死する。

だが、もう一匹の体に弾丸の数発が命中した時点で残弾が尽きた。

「やったか？」

クリスの予想を覆し、全身から血と煙を撒き散らしながらも、最後のイカロスは突如として身を翻し、ハリアーへと向けて舌を突き出す。

「くっ！」

僅かに機体を逸らしたハリアーのキャノピーを舌がかすめ、キャノピーの側面に無数のヒビが入る。

「クリス！」

「まずいな」

手持ちの兵装を使い果たしたクリスが、距離を取ろうと速度を上げるが、イカロスは負傷しながらもそれに追いつこうとする。

「クリス！」

「バリー！こっちはもう弾が無い！そちらだけで突入出切るか！？」

「駄目だ！手持ちの爆薬程度じゃ威力が足りない！」

「……だったら、手は一つだな。だが…」

クリスはちらりとレーダーを見る。

「あいつをどうにかしないと……」

「クリス！キャノビーが！」

ジルが悲鳴に近い声を上げる。

キャノビーに入ったヒビが、風圧に耐えかねて徐々に広がっていく。

「……どうする？」

『クリス！一瞬でいい、そいつを止めてくれ』

自問するクリスに、通信機からレオンの声が響いてくる。

「分かった！任せる！」

何をするかも問わず、クリスは再度”コブラ”を仕掛ける。

衝突寸前にハリアーを回避したイカロスが、素早く身を翻そうとした瞬間、機首を水平にしたハリアーが急加速して接触寸前の至近距離でイカロスの眼前を通過する。

次の瞬間、ハリアーの巻き起こしたスリップストリームが、真空を生み出し一瞬だけイカロスのジェットエンジンを停止させる。

その隙を逃さず、レオンはヘリの中から構えていた史上最強最大の銃、IWSアンチマテリアルライフルのトリガーを引いた。

発射されたフレシエット（矢型の特殊弾）がイカロスの頭部を完全に粉碎する。

「やった！」

「ああ、だが問題はこれからだ」

『どうするクリス？今からAチームと合流するか？』

「……………いや、ヘリを少し離してくれ。これから予定通り突破口を開く」

『クリス、お前まさか……………』

「大丈夫、無駄死にはしない」

クリスはハリアーを真上に上昇させると、一瞬だけ静止させて機首を真下へと向ける。

「幸い、まだ燃料がたっぷり有るしな。ジル、脱出方法は教えたよな？」

「……………まさか……………」

クリスはそのままハリアーをどんどん加速させていく。

「今だ！脱出するぞ！」

クリスの意図に気付いたジルが慌てて脱出レバーを引き、キャノピーが外れて座席ごとその体が射出される。

クリスもそれに続いて脱出し、加速の付いたハリアーはそのまま偽装された搬入路に激突し、大爆発を起こす。

『クリス無事か！』

『兄さん！？』

爆炎の向こう側で、二つのパラシュートが開いたのを見たSTA RSメンバーが胸を撫で下ろす。

「こっちは無事だ、突破口は開いたか？」



『バッチリだ』

「そうか、Bチーム突入開始！」

クリスの号令に続くように、今だ炎を上げている突破口に消化用手榴弾が投げ込まれ、パラシュートを着けたBチームが次々と穴へと向けて降下していく。

「こちらBチーム、レオン。これより研究所内部に突入する！」

『侵入者在り！侵入者在り！第二搬入路から多数の武装した一団が侵入。対侵入者用トラップがBレベルまで自動起動、戦闘要員はパターン3にて戦闘配置。繰り返す…』

研究所内に響き渡る非常警報に、アンブレラの武装警備員が次々と銃を手に通路内を走り回る。

「敵は今どこだ！」

「まだ格納庫の中だ！」ヘルハウンド”が迎撃体制に入るから近付くな！」

「他の搬入路からの同時侵入もあるかもしれんぞ！至急向かえ！」

詰問と号令が響く中、一人の男がゆっくりとマガジンに弾を詰めしていく。

「ようやくか……待ちくたびれたぞ……」

装弾を終えたマガジンを銃へと込め、初弾を装填させたその男  
“死神” ハンクは顔に壮絶な微笑を浮かべながら、自分の配置へ

と向かった。

「敵影はあるか!？」

「いや……こちらからは誰も来てないな」

洞窟に偽装された搬入路の入り口に配置されたアンブレラの武装警備員達が、周囲を見回す。

ふと、そこで純白の雪原に一つだけある黒点に気付いた。

「おい!あれは!」

即座に首から下げていた双眼鏡を覗き込んだ武装警備員の一人が、ゆっくりとこちらに向かってくる黒装束の男の姿を確認した。

「間違いない!ブラックサムライだ!」

「一人か!?他に仲間がいるかもしれん!」

慌ててその場の警備員達が周囲を確認するが、その黒装束以外の人影は見当たらない。

「まさか……たった一人で乗り込んでくるつもりか!？」

「馬鹿が、あそこはトラップ地帯のど真ん中だ!」

その言葉が終わるとほぼ同時に、雪原のあちこちが盛り上がり、そこからそれぞれ計4体のハンターが姿を現す。

素早く獲物を確認したハンターが黒装束の男へと襲い掛かる。

男は歩行速度を変えず、自らの右手を刀の柄に、左手を懐のホルスターに伸ばした。

そして、襲い掛かってきたハンター。2体と男が交差した次の瞬間、胴体を両断された物と頭部を一撃で打ち抜かれた物の二つのハンター。の屍が雪原に転がった。

「な……………」

驚愕のうめきを漏らす警備員達の眼前で、残ったハンター。2体が男へと襲い掛かる。

その内の1体が宙へと跳ね上がって男の首筋を狙おうとするが、冷静に狙いを定めたサムライソウルから放たれた45ACP弾が正確にその頭部に炸裂し、内部破壊及び残留を目的に作られたホローポイント弾頭がその用途通りにハンター。の脳髓をかき乱し、ただのたんぱく質の塊へと変える。

もう1体は雪原の雪を撥ね上げながら男へと走り寄ってその力ギ爪を振るうが、それが届くよりも早く振り下ろされた大通連がその腕を一撃で斬り落とし、その刃が地面スレスレまで下がった瞬間、瞬時にして大通連は同じ軌道を逆に跳ね上がる。

諸刃作りになっている峰の刃が、その軌道上にあったハンター。の股間から脳天までをキレイに斬り裂いていき、一瞬遅れて噴き出した血が雪原を紅く染めながら、凍りついていく。

数瞬後、屍の仲間入りをしたハンター。の死体が男の通り過ぎた雪原へと崩れ落ちた。

「は、ハンター。が足止めにもならないだど!？」

「化け物が!」

警備員の一人が銃を構えようとした瞬間、一瞬その体がケイレンして地面へと倒れ込んだ。

「おい、どうし…」

問い掛けの途中で、その警備員も同じように一瞬ケイレンした後  
同じように地面に倒れ込んだ。

その首筋には、一本の矢が突き立っていた。

「な!？」

残った警備員が慌てて横を向くと、すぐそばの雪原から覗いてい  
るサイレンサーと矢じりに気付く。

が、そのすぐ後にそれぞれから放たれた弾丸と矢が残った警備員  
達に突き刺さっていた。

「単純な手に引つかかったな」

真っ白に塗られた対電磁波、対赤外線センサー用ステルススコート  
の施されたシートを被り、レンが注意を引いている隙に雪原を這い  
ながらコソコソ進んできたカルロスが、シートを投げ捨てながら手  
にしたコンバットボウ（実戦用の組み立て式弓矢）を仕舞い込む。

「あれだけ派手にやってりゃ気付かないだろ」

その向かいで同じようにシートを投げ捨てたアークが、銃口から  
サイレンサーを外す。

それを気に、周囲の雪原が次々と盛り上がり、同じ手でここまで  
近寄ったSTARSメンバー達が次々と顔を現していく。

「上手くいったようだな」

「……寒くないのか、お前……」

「真冬に毎日2時間淹に打たれりゃ、これ位平気になる」

その時になってようやく入り口へと辿り着いたレンに、分厚い防寒着から雪を払っていたスミスが妙な物でも見るかのような視線を送るが、レンは平然と言い放ちながら率先して入り口の前に立つ。

「さて、行こうか」

「こちらAチーム、アーク。突入開始！」

アークが通信機に叫ぶと同時に、レンを先頭にしてAチームのメンバーは走り出した。

下方に伸びている天然の洞窟を利用しているらしい部分を走り抜け、分厚い扉を潜り抜けるとそこにはいかにも研究施設らしい白い通路が伸びていた。

「北極の真下にこんなもん作りやがって……」

「南極にもあったし、カリブ海の海の中なんてのも有ったからな。今更驚くまでもない」

「あん時は危うく溺れ死にしそうになったな」

「……そうなのか」

アークとカルロスの会話を聞きながら、スミスが警備カメラに律儀に中指を立てて通り過ぎようとした時、突然両脇の壁が音も無く開く。

「さっそく歓迎か！」

その場に立ち止まったAチームの面々がそれぞれの銃を壁のスリットへと向ける。

だが、そこから漏れてくる呻き声に気付いた者達が首を傾げた。

「ゾンビ？なめやがって！」

スミスが手にしたドラムマガジン使用のAS12ショットガンのトリガーを引こうとした瞬間、壁のスリットから出てきたゾンビの姿がスミスの視界から消える。

「!？」

「上だ!!」

レンが叫びながら、スミスの前へと踊り出し、真上へと跳び上がって襲い掛かるうとしたゾンビを一刀の元に斬り捨てる。

「気を付ける!気の質が全然違う!こいつらはゾンビ型のBOWだ!」

「やつかいな物を!」

現れたゾンビ型BOW達が次々とハンター並の素早さで皆に襲い掛かる。

一瞬対処の遅れたミリイにゾンビ型BOWの一体が跳びかかろうとするが、サムライソウルから連射された弾丸が額、喉笛、心臓に突き刺さり一瞬にして絶命させる。

「あ、ありがとう……」

「下がってろ!まだ来るぞ!」

「こちらAチーム!ハンター並の機動性を持ったゾンビ型BOWと現在交戦中!」

アークが通信機に叫びながら、アーウェン37グレネードガンを壁のスリットに向かって連射する。

何体かのゾンビ型BOWがグレネード弾の直撃もしくは誘爆を食らって吹き飛ぶが、巧みに避けた者が肉薄してくる。

「最初から熱烈歓迎か!？」

「美女以外はお断りだ!」

カルロスがフルオートにセットしたM4A1を、スミスがAS12とゾンビバスターの凶悪な二丁拳銃を連射して弾幕を張り、それに続くように他の者達も銃を連射して次々と敵を駆逐していく。

最後の一体が宙から襲いかかろうとした所をレンの斬撃が胴を両断し、残った上半身がそれでもなお腐臭のする顎あごを突き立てようとするが、次の瞬間には直撃した454カスール弾がその頭部を木っ端微塵に吹き飛ばした。

「あちい!誰だ着たままでいいなんて言っただ奴!」

「お前だろ」

戦闘が終わると同時に、ボヤキながらスミスが防寒着を脱ぎ捨てようとするのを、レンの一言で動きが止まる。

同じように防寒着を不必要と判断したAチームのメンバー達が次々と脱いでいく中、アークが通信を入れた。

「Aチーム交戦終了、負傷者は無し。そちらは?」

『こつちも来たぞ!これより交戦に入る!』

レオンが通信機に叫びながら、アサルトライフルそっくりの外見を持つスパス15ショットガンを構える。

Bチームの周囲には茶色い毛並みを持った、何匹もの大型犬が唸りを上げている。

「新型の”ケルベロス”か？」

「いいえ、あれは狼犬！純粋な狼よりも危険な…」

シェリーの説明の途中で、狼犬の一匹がレオンに向けて襲い掛かるが、レオンが瞬時にトリガーを引いてあっさりとそれを迎撃する。だが、散弾の直撃を食らって地面へと倒れ込みながら、それは内臓を床へとこぼしつつ立ち上がる。

「狼犬のBOW!？」

シェリーが驚くと同時に、その狼犬のBOW　¥”ヘルハウンド”が大きく遠吠えした。

それに呼応するかのように、周囲のヘルハウンド達も次々と吠える。

そして、さらにそれに呼応するかのように、通路のあちこちからも同様の遠吠えが返って来た。

「まさか！」

「そのまさかのような……………」

通路のあちこちから続々と姿を現し始めた大量のヘルハウンドに、その場の全員が素早く円陣を組みながら銃を構える。

「群れで襲ってくるBOWとはな……………」

「来るわ！」

周囲を包囲していたヘルハウンドの内の数匹が突如として襲い掛かってくる。

自分へと襲い掛かってきたヘルハウンドに、クレアはP　90アサルトマシンガンフルオートで連射する。



だが、その一匹を迎撃すると、即座に別のヘルハウンドが襲い掛かってくる。

「くっ！」

クレアが銃口をそちらへと向けた一瞬の隙に、同時に襲い掛かってきたもう一匹のヘルハウンドが、彼女の喉笛に牙を突き立てようとした。

その鋭い牙がクレアの喉に届く寸前、凄まじい速さで繰り出された分厚いプロテクターに覆われた拳が、ヘルハウンドの顔面にめり込む。

次の瞬間、プロテクターに内蔵されたギミック式2連ショットガンが作動、零距离から放たれた散弾がヘルハウンドの頭部を吹き飛ばす。

「助かったわ、シェリー……」

「まだ来る！」

礼を言おうとしたクレアに、繰り出した拳を素早く戻しながらシェリーが叫ぶ。

「気を付ける！ケルベロスとは全然違うぞ！」

そう言いながら、バリーは迎撃しそこねたヘルハウンドに、とっさに持っていたM60E3ヘビーマシニングンを噛み付かせながらなんとかそれを振り解こうする。

「こっちに！」

シェリーの声に、バリーがヘルハウンドを振り回しながらそちら

を向くと、シェリーの強力なキックがヘルハウンドを強引に銃から引き剥がす。

それと同時に脚のプロテクターに内蔵されたギミックガンから、ショットガン用のスラッグ（単発）弾が発射され、ヘルハウンドの胴体を貫いた。

「一人で対処するな！円陣を二重にして二人以上で対処しろ！」

レオンが叫びつつ円陣の内部に一步下がり、空になったマガジンを素早く交換する。

他の者もそれに習い、互いに重なるように組まれた二つの円陣からの銃撃が襲ってくるヘルハウンドを迎撃し、至近距離まで近付いた物はシェリーの拳と蹴りが仕留めていく。

だが、ヘルハウンドの苛烈な猛攻の前に、とうとう重なって撃っていたクレアとレオンの弾丸が同時に尽きる。

マガジンの交換が間に合わない事を悟ったレオンが腰のデザートイーグルに手を伸ばした時、突然襲い掛かってきたヘルハウンドが吹き飛ばされる。

「援護する！」

「兄さん！」

上から聞こえてきた声にクレアが振り向くと、そこには爆破して開いた穴の淵から架けられたロープにぶら下がりながら、スパスパ2ショットガンを構えているクリスの姿が有った。

「振り向かないで！」

同じようにロープにぶら下がっているジルが、円陣の中央にフラッシュグレネードを放り投げる。

数秒の間を置いて炸裂した閃光が、ヘルハウンド達の動きを止め、そこへ無数の銃火がその体を貫き、絶命させていく。

最後に残った一匹、一際体の大きなおそくはボス格と思われるヘルハウンドが、全身を銃弾に貫かれながらも果敢に向かってくる。

「この……！」

バリーがフルオートで放たれる7・62ミリ弾をそのヘルハウンドに全弾叩き込むが、それでも勢いは止まらず、ヘルハウンドの巨体が宙へと踊り出す。

「はあっ！！」

だが、それと同時に宙を舞ったシェリーの飛び蹴りが、ヘルハウンドの体を弾き飛ばす。

「シェリー！」

「任せてください！」

シェリーは着地と同時にそう言い放つと、素早く起き上がって同じく起き上がるうとしているヘルハウンドに向けて構える。

低く唸りながら、ヘルハウンドはゆっくりとシェリーの周囲を回り始め、シェリーもそれに合わせるように体の向きを変えていく。

皆が固唾を飲んで見守る中、大きく吠えながらヘルハウンドの巨体がシェリーへと襲い掛かる。

その牙がシェリーに届く寸前、風切り音を伴って繰り出されたシェリーの垂直蹴りが、ヘルハウンドの体を真上へと跳ね上げる。

さらに、シェリーは素早くヘルハウンドの落下予想地点に移動すると、心持ち両足を開き、拳を腰ために構える。

ゆっくりと息を吸い、それを肺へと溜めていく。

そして、ヘルハウンドの体が頭上へと落ちてくると同時に、シェリーは力強く地面を踏みしめながら、両拳を頭上へと突き出した。拳から伝わった衝撃がヘルハウンドの内臓を一撃で破裂させ、更に撃ち込まれた散弾がそれを吹き飛ばす。

周囲一帯に盛大な地と肉のシャワーを降らせながら、半ば胴体が吹き飛んだヘルハウンドの屍が床へと崩れ落ちた。

「交戦終了」

返り血を浴びながら、シェリーは小さく呟いた。

通路にはおびただしい数の血痕と空薬莢がばら撒かれ、所々にBOWや武装警備員の死体、時たま失神させられた拳句に手錠の口ープだので両手を拘束された研究員が転がっていた。

それらが続く先で、また一つの戦闘が起こっていた。

「ああああああ！！」

敵の銃撃が途絶えた一瞬の隙を縫って敵陣へと乗り込んだレンが無表情のまま銃撃をしてきた奇妙な兵士達の中央で旋回しながらの居合抜き《光螺旋》で敵を斬り裂いていく。

その刃の嵐に巻き込まれなかった兵士達が、手早くマガジンを交換してレンへと狙いを定めるが、その銃口から銃火が放たれるよりも前に飛来した弾丸が彼らの頭部を撃ち抜いた。

レンが旋回を止めた時には、そこには屍と化した兵士達が転がっているだけだった。

「”掃除屋”まで投入してきやがったか……」  
「これが？」

生命活動が停止すると同時に、融解していく奇怪な死体　ＵＴＦ  
オース、通常掃除屋とも呼ばれるアンブレラの造り出した人造人間  
を見ながらのアークの呟きに、初めて見るスミスやミリイは顔を  
しかめる。

ふと、刀を振って血を振るい落としていたレンが通路の先を見据  
える。

「妙だな」  
「何が？」

レンの呟きに、スミスがそちらを向く。

「トラップが一つも作動してない」  
「そういえば……」  
「……罠か？」

カルロスの一言に、皆がハツとする。

「よっぽどこの先にある物に自信が有るらしいな……」

彼らの眼前で、先程までロックされていたはずの隔壁のロックが  
突如として勝手に外れた。

「パーティ会場の準備が整いました、会場にお進み下さい。ってか  
？」  
「料理と酒とウェイトレスはどうした？メイドでもＯＫだぞ」

スミスがばやきながら、腰のガンベルトにぶら下げていたAS12のドラムマガジンを空になったマガジンと交換して初弾を装填する。

「こちらAチーム、掃除屋との交戦終了。先に進む」  
「行くぞ」

アークの通信が終わると同時に、先頭のレンに続いて皆が進む。程なくして、無造作にドアが開いている一つの研究室が見えて来た。

レンが手で後ろにサインを送ると、皆が無言で左右の壁に分かれて張り付く。

先頭のレンが刀を鏡代わりに内部の様子を確かめ、中に危険な存在をいないのを確かめると一気に内部に踏み込んだ。

「動くな！」

レンに続いて踏み込んだスミスとカルロスが素早く室内を確かめる。

そこは大きな研究室で、無数に並ぶデスクにパソコンや実験器具が置かれ、奥にはBOW培養用と思われる空のカプセルが並んでいた。

しかしそこにいるのは、パソコンに向かって一心に何かを打ち込んでいる一人の科学者だけだった。

「そこのお前！両手を上げながらゆっくりと腹ばいになれ！」

スミスの警告に、科学者は振り向きもせず一心にキーボードを叩いている。

「聞こえないのか！」

「英語が通じないんじゃない？」

ミリイの言葉に、スミスが威嚇の銃撃を天井に向けて発砲した。

「次は射殺するぞ！意味くらいは分かるはずだ！」

「なんじゃ、うるさいの……………」

ようやく、その科学者がイス每こちらに振り向く。

老人、と言っても過言ではないその男性科学者の目が、銃を構えているSTARSメンバーを見ると同時に、その目が驚愕に見開かれた。

「おお、おお……そうか、ようやく来たのか」

「英語分かるじゃねえか！とつとと腹ばいになれ！」

「貴様に用は無い」

「なんだと！」

スミスがどなるが、老科学者はその視線を一番先頭に立って銃を向けている男 レンに向け、口元に引きつった笑みを浮かべた。

「用があるのはそのサムライ、そう、君だよ」

「オレか？」

レンが銃口を老科学者にポイントしながら、微かに首を傾げる。

「そう、君は興味深い。非常に興味深い。その一振りのサムライブレードと、ハンドガンだけで私の造り出したネメシスシリーズを次々と撃破した。これは驚くべき事実だ」

「能書きは取調室で言え！それとも神の身元がいいか！？」

「黙れ、凡人」

「何いっ!!」

激昂するスミスを、カルロスが抑える。

「駄目だ、あのじいさんイッちまってる」

「麻醉でも嗅がす?」

「いや、痴呆症介護センターに……」

レンを除いたAチームの面々が後ろで呟くのを無視して、老科学者は続ける。

「君の事は我々の間でも話題になっている。STARSに参加したほんの数ヶ月の間に、確認されているだけでも完全調整されたBOWを50体以上を撃破している。これは脅威としか言い様が無い。ある者は君はどこかの組織が作り上げた強化人間だと言い、またある者は東洋から来た魔人だと言う。だが、私は違う」  
「ほう?」

老科学者は、さも楽しげに笑いながら、背後のディスプレイを見えるようにその体をずらす。

そこには、レンに関するありとあらゆるデータが映し出されていた。

「アンブレラ諜報部の調べたデータによれば、完全に確認はされてないが、君は半年前にたった二人でヨコスカの米軍基地に潜入、内部の研究施設を破壊しているそうだね。それだけじゃない。日本警視庁には君が関与したと思われる事件が幾つか保管されていたが、そのどれもが驚異的な数字を示している。例えば、三年前に鎌倉で起きた銀行強盗による立て籠もり事件は、発生から27分、より正



確を期するならば、警察からの委託を受けた君と君の従兄が到着してからたった3分で解決している。これはSWAT等とは比べ物にならない速さだ」

「よく調べているな」

老科学者は、さらに深い笑みを浮かべながら続ける。

「これらのデータから、私はこう考えた。君は本当のサムライ、すなわち人類が進化の過程において、大脳新皮質の記憶、処理容量を増加させる為に退化させた戦闘の為に本能と感覚、それを今に伝える人間なのだ！」

「オレが戦国時代の人間だとでも？」

「違う！違うのだよサムライ！君が、君こそが戦いの為にもっとも進化した人類なのだよ！」

「……本気でイかれてるぞ、あのじいさん………」

スミスの呟きにも耳を貸さず、老科学者はその狂気じみた目を輝かせる。

「そして、私は考えた。その君に対抗するにはどうすればいいかを」

老科学者の指が、素早く背後のキーボードを叩く。

「これがその答えだ！」

不吉な予感を感じたレンがとっさにサムライソウルの銃口をキーボードへと向けるが、45ACP弾がキーボードを破壊するよりも一瞬速く、年老いた指がエンターキーを叩いた。

すると、不気味な起動音のような物が響き、突然研究室の奥の壁

がせり上がって、そこから巨大なカプセルが現れる。

「受け取ってくれたまえ、これが君のために創り上げた私の最高傑作、ネメシス　〇型”オーガ”だ」

カプセルの前面が左右へと開く。

そこに有ったのは、タイラントの体を更に何倍も筋肉質にしたような異様に太い体に、まるで西洋の騎士を思わせるような甲冑を着込んだ、奇怪な物体だった。

よく見れば、頭部を覆う兜と面を合わせたような物には外を見るための覗き穴すら無く、額に当たる部分に開いた穴から二つの角のような物が露出し、右手には太いパイプのような物と、それから細長いチューブが背中へと伸びていた。

「撃てっ！」

レンの声と共に、我に帰ったメンバー達が一斉にトリガーを引いた。

「無駄だよ」

老科学者がボソリと呟く。

その奇怪な甲冑　ネメシス―〇型”オーガ”は、無数の銃撃を物ともせず、前へと一步を踏み出す。

異様に鈍い、大重量特有の足音を響かせながら、それは前へと進み出た。

「戦車か、こいつは！」

弾丸が全て甲冑で弾かれているのを見たスミスが、背中のパール

ットM82A1を構える。

50口径の強力な弾丸が、大きな銃声と共に放たれた。

だが、オーガの胴体の中央に命中した弾頭は、僅かに甲冑の表面をへこませただけだった。

「無駄だと言ったはずだよ。オーガのアーマーはチタン、セラミックス、カーボンなどの素材の隙間に特殊な衝撃吸収材を複合させた物だ。たとえ戦車砲でもビクともせんよ」

さも楽しげに笑みを浮かべながら、老科学者は自慢気に解説する。

皆が冷や汗を流す中、オーガはカプセルの中にあつた、自らの身長半分はあろうかという巨大な刃を持った斧を手に取り、大きく咆哮した。

「さあ、見せてくれサムライ！君の戦いの遺伝子を！」

「うるさい」

日本語で呟きながら、レンはオーガに向けて刀を構えた。

『こちらAチーム！新型のネメシスと交戦状態にはい……た……じょ……況……』

「どうしたAチーム、状況は！」

バリーがM60E3を連射しながら、通信機に怒鳴る。

だが、通信機からはノイズしか聞こえてこなくなっていた。

「ECMか？」

「間違いないです」

クリスの問いに、持ってきていたノートパソコンで通路のケーブルからハッキングを試みていたシェリーが答える。

「管理システムから研究所全域にジャマーが架けられています。こちらからの解除は不可能ですね」

「寸断させる寸法ね」

そう言いながら、クレアが身を隠していた通路の角からチラリと向こうを見る。

そこには、大量のUTフォースが無数の銃口をこちらに向けていた。

試しに空のマガジンを通路の先に投げると、途端に文字通りの弾幕が吹き荒れる。

「どうする？」

「……できれば使いたくなかったんだけど……」

レオンが顔をしかめてた所で、ジルが手荷物から黒い塊を取り出す。

「それは？」

「爆弾よ。ただ、爆薬の方はサムライが妙なツテから流してもらった奴だから、威力の方に心配が……」

表面のスイッチを操作したジルが、それをクリスに手渡し、クリスはそれをフルパワーで敵の方へと投げた。

再度弾丸の雨が飛来した直後、予想以上の大音響と振動が周囲を揺るがした。

目の前を吹き抜けていく爆風を見ながら、作ったジル当人が目を丸くする。

「……ひよつとして、C4（プラスチック爆弾の名称）じゃなく、C20（C4の倍の爆発力を持つ新型）だった？」

爆風が吹き抜けた後で、そつと通路の先を見た皆の視界に入ってきたのは、爆発の影響で広大な空間となった通路のなれの果てだった。

「……やり過ぎだ」

「ゴメン」

「確かにな」

突然、STARSメンバー以外の声が聞こえたと同時に、フルオートで放たれた弾丸が角から覗いていたメンバー達の顔のそばを横切っていく。

慌てて顔を引っ込めたメンバー達に、低い笑い声が響いてくる。

「危うく人形達と一緒に吹っ飛ぶ所だった。だが、残念ながらオレがいる限り通行禁止だ」

「……ハंक！」

その声の主をその場で一番よく知っているレオンが、強く奥歯を噛み締めた。

「”死神”ハंक。アンブレラ最強のエージェントか……」

クリスが深刻な顔で、スパス12を構える。

「オレが相手する」

レオンが突然言うと、いきなり通路の先へと踊り出した。

「危ない！」

「レオン！」

ジルとクレアの悲鳴が響く中、レオンへと向けて弾丸が放たれる。

その内の何発かをボディーマーに食らいながら、レオンはスパス15のトリガーを引いてハンクを牽制した。

「レオン！」

「大丈夫だ！先に行け！」

シェリーに怒鳴り返しながら、レオンは狙いを定める。

「行こう」

「でも、レオンが！」

クレアの問いに答えず、クリスが通路の先へと進んでいく。

「無事でいて！レオン！」

「オレは不死身だと言ったはずだ！」

背中越しに叫びながら、レオンはハンクの隠れているらしい物陰から狙いを外そうとしない。

複数の足音がその場から離れていき、そして聞こえなくなった。

「……お前とこうしてやり合うのもかれこれ4回目か？」

「間違えるな5回だ」

物陰から聞こえてくるハンクの声に、再度通路の角に隠れてマガジンを交換しているレオンが答える。

「いつも、いつもそうだ。カリブでも、コロラドでも、ギアナでも、生き残ったのはオレと、お前だけ」

「ミッドウエーの時は、妙な事になったっけな」

「ああ、着いていきなりお互い仲間をへらに皆殺しにされ、時には協力しあい、時には奪い合い、そして殺し合った」

「いつからか、オレは不死身を名乗り、お前は死神と呼ばれるようになった」

負傷の具合を確かめながら、レオンは薄く笑った。

「……そろそろ終わりにしないか？」

「オレもそう思っていた。お前もそろそろ生き残るのに飽きてきただろう？」

「お前の方がだろ！勝負だ！」

レオンは叫びながら、通路の角から飛び出すと同時にトリガーを力強く引いた。

「ゴガアアアア！！」

金属の仮面の中からくぐもった雄叫びと共に、巨大な斧が振り下ろされる。

とっさに横へと跳んだレンが先程までいた空間を、空気ごと切り

裂くかのような勢いで斧が通過し、その上端が触れたスチール製の机が机上に置かれていたパソコン毎二つに両断され、さらに床へと深々と斧が食い込む。

「この馬鹿力が！！」

カルロスがコンバットボウの弦を引くと、対ヘリ用エクスプローションアロー（矢じりに爆弾を使用した矢）を放つ。

命中した矢じりが周囲のデスクを吹き飛ばしながら爆発を起こすが、爆炎が晴れた後には、平然とその場に佇んでいるオーガの姿があった。

「それでもダメか！」

「戦車どころか、こいつはまるで戦艦だ！」

オーガの周囲を包囲するような形で銃撃を繰り返すAチームのメンバー達が顔を青くする。

先程からスミスのバーレットに続いてグレネード弾やスラッグ弾、はては切り札のロケット弾まで撃ち込んだのだが、オーガに対してダメージらしいダメージどころか、全身を覆うアーマーに傷すら付けられていない。

「はあっ！」

オーガの横へと回り込んだレンが必殺の居合を繰り出すが、繰り出された刃はアーマーの表面をなぞり、僅かに引っ掻き傷を残すだけに終わる。

そして、オーガは無造作にレンへと向けて右手に付けられた奇妙なパイプを向けた。

一瞬悪寒を感じたレンがその場に伏せると、そのパイプから何



かが噴き出すのは一瞬の差だった。

パイプから噴き出したガスのような物がレンの背後にあったデスクに吹きかかり、それが晴れた時にはそこに有ったデスクとパソコンに無数の小さな穴が開いており、数秒の間を持ってパソコンはその場で原形を留め切れなくなって崩壊した。

「何だ！？ショットガンか？」

「違う！ニードルガンだ！」

「ご名答」

戦闘を部屋の隅で見ていた老科学者が、それが何かを言い当てたレンを見てボソリと呟いた。

「直径0・1ミリのチタンニードルを圧搾したアセチレンガスで噴出させる特製のニードルガンだよ。有効射程は5mにも満たないが、射程範囲内になれば例え防弾チョッキを着ていようと僅かな隙間から潜り込み、突き刺さる。一発辺り8000本ものニードルを防ぐ手など存在しないのだよ」

「いちいちうるせえ！」

カルロスが老科学者の顔面に今だ余熱の残るM4A1の銃口を押し当てる。

「つまらない能書き垂れてる暇が有ったらあいつの弱点を教えろ！でなきゃその腐った脳味噌吹っ飛ばすぞ！」

「無駄だよ。オーガに弱点など存在しない。唯一の欠点は、費用がタイラントタイプの十倍近くかった事かね……………」

「てめえ……………」

カルロスが歯軋りする程歯を噛み締めながら、トリガーに指を架

ける。

「いちいち無駄弾を使う必要は無いよ。私は生物工学以外の能が無い老いぼれだからね。それに、お仲間がピンチだよ」  
「何っ!？」

カルロスが振り返ると、オーガの死角に回り込もうとしたスミスがオーガに殴られて壁へと吹っ飛ぶ所だった。

「スミス！」

「大丈夫!？」

それを見たカルロスとミリィが慌てて駆け寄る。

「大丈夫だ………生きてる」

スミスが壁に手を付きながら、なんとかその場に立ち上がる。

「撃つても斬つてもダメなら殴ってやろうと思ったんだが……」

「それこそ効くか！」

「あいつ、目見えてないのになんでこっちの位置が分かるんだ？」

カルロスがハツとした顔でオーガの方を見た。

周囲を取り囲みながら攻撃を繰り返すAチームメンバー達に向けて、オーガはそちらを見もせずには斧を振り回している。

「目じゃないなら……」

カルロスがスリングに吊るしていたスタングレネードを取ると、ピンを啜えて引き抜いた。

それを手にしたまま三数えると同時に、それをオーガの顔面へと向けて放り投げた。

「目をつぶれ！」

カルロスの声聞いた皆が目を閉じる。

次の瞬間、オーガの頭部の至近距離でスタングレネードが炸裂した。

「どうだ！その距離なら爆発音でめえの耳はイカれて……」

言葉が終わるよりも速く、オーガがニードルガンでカルロスへと向ける。

慌ててその場にいた三人は左右へと跳ぶと同時に、ニードルガンが発射された。

「ぐっ！」

足に鋭い痛みを感じたカルロスが床を転げて離れながら、素早く足を見る。

かれの足には無数の小さな穴が生じ、血が流れ出していた。

「何発か食らったか……」

「聴覚だと思ったのかね？」

老科学者がそんなカルロスを見て低く笑う。

「いや、これで分かった」

レンがカルロスを守るようにカルロスの前へと立ちながら、オー

ガに相対した。

「こいつの弱点は……」

レンはサスペンダーからスローイングナイフを二本取ると、柄のスイッチを押し込んでから投じる。

投じられたナイフは、オーガの両脇の床へと突き刺さった。

「何を？」

不思議そうにカルロスがレンを見た時、ナイフに内臓されていた爆薬が爆発する。

爆発同時に、レンはオーガへと向けて迫る。

「そこだ！」

間合いに踏み込むと同時に、レンは抜刀した。

今だ立ち込めている爆煙を白刃が斬り裂く。

一瞬の後、そこからオーガの絶叫が響き渡った。

「……え？」

皆が何が起こったかを理解出来ずにいると、小さな音を立てて何かが床へと落ちた。

それは、オーガの頭部から生えていた二本の角だった。

「こいつの感覚器官は目でも耳でもなく、その角、正確には”触角”だ。蜂と同じくそいつで空気の流れを読み取って相手の場所を探る。だから爆発に紛れて近づくオレに気付かなかった。違うか？」

「その通り、さすがだよ」

レンの問いに、老科学者が小さく拍手する。

「だが、そこから先どうするかね？」

絶叫していたオーガが、無茶苦茶に斧を振るいながら、ニードルガンで乱射する。

「かえって状況は悪化しているよ、さてどうする？サムライ？」  
「そいつはもう考えている」

レンは威嚇の為にホルスターからサムライソウルを抜いて連射しながら、スミスの方に近寄り、何かをスミスの耳元にささやく。

「本気か！？」  
「本気だ、頼むぞ」

驚くスミスを尻目に、レンはオーガへと詰め寄る。至近距離で発射された無数のニードルを、体を捻ってかわすが、かわし切れなかったニードルがレンの頬をかすめ、そこから血が噴き出す。

「はあっ！」

流れ出した血を気にも留めず、レンはオーガへと向けて刀を下段の構えから一気に斬り上げる。

必殺の威力を込めた刃も、オーガのアーマーの前に虚しく傷を残すだけに終わるが、それに気付いたのかオーガがレンの方へと向き直る。

「そうだ、オレはこっちだ！」

至近距離からサムライソウルの全弾を、先程斬撃を加えたポイントと同じポイントに撃ち込みながら、レンは後ろにバックステップで下がる。

その一瞬後に巨大な斧がその場に振り下ろされるが、手ごたえが無い事に気付いたのか、オーガは斧を再度頭上へと持ち上げる。

「そう、外的感覚器官が無くなれば、僅かな触覚に頼らざるを得なくなる」

素早くマグチェンジを済ませたサムライソウルに初弾を装弾させると、レンは今度は頭部に銃口を向ける。

「そして散発的に撃ち込まれる物よりも、集弾される物に注意が向く」

額のだ真ん中に連続して撃ち込まれる45ACP弾に、オーガがニードルガンをそちらへと向けた。

（今だ！）

発射されようとするニードルガンへと向けて、いきなりレンは走り出す。

「危ない！」

「レン！」

アークとミリイの声と、ニードルガンが発射されるのは同時だった。

無数のニードルがレンへと突き刺さる寸前に、レンの体が下へと

沈む。

頭のすぐ上をニードルが通過すると、今度はレンの体が跳ね上がりながら、水平に構えられた刀がレンの狙っていたただ一点、アイマーとニードルガンの接合部分を斬り離す。

「スミス！」

「おうよ！」

スミスが斬り落とされたニードルガンをそばに駆け寄って拾い上げると、その銃口をオーガへと向けた。

「自慢の物だろ！自分で味わえ！」

スミスが笑みを浮かべながら、ニードルガンのトリガーギミックを引いた。

鈍い音と共に発射されたアセチレンガスと無数のチタンニードルが、オーガの体を覆い尽くす。

「……それを考えないとも思っただのかね？」

「何？」

老科学者の呟きにカルロスが首を傾げた時、ガスの中から横殴りに振るわれた斧が、とっさに後ろに飛び退いたレンの片袖の裾を半ばまで切断する。

「普通、戦艦等の兵器を作る際には自らの攻撃に耐えられるよう作る。兵器開発の常識だよ」

「くそっ！」

スミスがニードルガンを手放しながら、オーガの方を睨みつけた。

ガスが晴れたそこには、外見上は無傷なオーガの姿が現れた。

「不死身かアイツは！」

「ロケット弾もサムライのカタナも効かないのでは……」

「あああああああー！」

Aチームのメンバー達が漏らした弱音を、レンの雄叫びがかき消す。

そこには、オーガへと向けて次々と斬撃を繰り出すレンの姿があった。

「何やってんだ、サムライ！逃げた方が！」

「オレに考えがある！ありったけのロケット弾とグレネード弾を撃ち込め！」

駄目押しの袈裟斬りをオーガのアーマーに叩き込むと、後ろに下がりがながらレンが叫ぶ。

「だが………」

皆が今まで効かなかった攻撃を続ける事をためらっていると、一つの爆発音が部屋中に轟いた。

そこには、カルロスが次のエクスプロージョンアローをつがえようとする所だった。

「オレはあいつに賭ける！オッズは当たってからのお楽しみだがな！」

そこへ、別の方向からのグレネード弾がオーガへと炸裂した。



「オレも一口載せてもらおうか」

アークが、アーウェン37を連射する。

「オレは五年前からずっと賭けてるがな！」

スミスがゾンビバスターを構える。

皆が、頷くと同時に攻撃を開始した。

次々と炸裂するエクスプローションアローが、グレネード弾が、ロケット弾が、454カスール弾が、爆薬入りのナイフがオーガの絶叫を爆音で覆い隠していく。

「止める！」

レンの声と同時に、皆がトリガーから指を離す。それを見ながら、老科学者は酷薄な笑みを浮かべていた。

「無駄な事を……………」

爆煙が晴れていくと、そこにはアーマーが一部赤熱化している以外は変わらない姿のオーガが、ゆっくりと斧を持ち上げようとしている所だった。

「スミス！あいつをもう一発だ！」

「分かった」

レンがオーガの足元に転がっているニードルガンを指差す。

スミスがスライディングしながらそれを手に取ると、再度オーガへと向けてトリガーギミックを引いた。

「だから無駄だと…？」

言葉の途中で、老科学者の視界に意味不明の物が飛び込んできた。

それは、レンが懷から投じた救急スプレーだった。

無数のニードルがそれを撃ち抜くと、そこから圧搾されていたガスと傷薬がオーガの体に降りかかる。

「もつとだ！あいつを冷やせ！」

「！そうか！」

レンの意図に気付いた皆が次々とスプレーを投げ付け、それをミスがニードルガンで撃ち抜いていく。

「こつちの方が効くぜ！」

アークが虎の子の液化窒素入りの冷凍弾をオーガにお見舞いする。

「ま、まさか！？」

老科学者が初めて狼狽する中で、レンは静かに笑みを浮かべた。

「調べたなら分かってるだろうが、オレの実家は古武具専門の骨董商でな。甲冑の保管注意くらい知っている」

皆の前で、オーガのアーマーに小さなヒビが生じた。

「一つは水分による錆、もう一つは傷、そして最後に温度変化だ」

ヒビは一つに留まらず、アーマーの表面に無数のヒビが生じていく。

「傷がついた状態で極端な温度変化が起きれば、その傷から歪みが生じ、仕舞いには修復不可能となる。例えば、予め点と線を刻んでおいたこいつのようにな」

とうとう、アーマーの表面を斜めに横切る大きなヒビが発生した。それはレンが最後に放った袈裟斬りと同じ場所だった。

「こいつで終わりだ！」

スミスがニードルガンを投げ捨て、M82A1を構える。

「そこに大きな衝撃が加われば一巻の終わりだ」

M82A1から放たれた50口径弾が、今までいかなる攻撃をも阻んでいたアーマーに突き刺さり、そしてとうとうそれを微塵に粉砕し、オーガの体に突き刺さる。

「ゴガアアアア！！」

今まで感じた事の無い苦痛に、オーガの絶叫が周囲に轟く。

それでもなお、オーガは斧を振るって襲い掛かろうとするが、レンは刀を中段に構え、オーガに相対する。

「いざ、参る」

レンは刀を構えたまま、オーガへと向かって疾走する。

横薙ぎに振るわれた斧をかすかにしゃがんでかわすと、そのまま

の勢いを載せて刀をオーガの腹部へと深々と突き刺した。

「ゴグルルル……」

オーガは唸りながら腹部の刀に手を伸ばそうとする。

だが、レンは刀を捻って刃を上に向けると、鏑元の刃になってない峰に強く拳を叩きつけながら、一気にオーガの体を斬り裂いていく。

刃はオーガの仮面へと当たると、それを撥ね上げながらオーガの体から抜ける。

仮面が取れたそこには、斬り落とされた角以外には肉食の甲虫を思わせる奇怪な口が有るだけだった。

「光背一刀流、《連岳昇陽破》れんがくしょうようは」

レンが刀を一振りすると、鞘へと収める。

その背後でオーガが余力を振り絞って斧を振りかざそうとするが、そこへAチームメンバー達が次々と銃撃を加え、最後にその頭部にスミスが放った50口径弾が炸裂し、完全に粉碎した。

力を失ったオーガの屍が床へと倒れ込む音を背中で聞きながら、レンは老科学者の前へと歩み寄った。

皆の視線も、老科学者へと集中する。

「お、おおお………」

老科学者の驚愕の表情を、絶対零度の視線が取り囲む。だが。

「素晴らしい！」

「………は？」

老科学者の予想外の言葉に、誰かが間の抜けた声を漏らした。

「素晴らしい！素晴らしい！素晴らしいぞ、サムライ！観察力、判断力、そして攻撃力、どれもが我々の予想を上回っている！まさかオーガまでもが倒されるとは！さっそくデータをまとめなくては！」

そう言うなり、老科学者は手近の無事に残っていたパソコンの電源を入れながら、何かをブツブツと呟き始める。

無言でその背後に立ったアークが、静かにアーウエン37を頭上に持ち上げ、そのストックを老科学者の脳天に叩き落した。

一撃で白目を剥いた老科学者が床へと崩れ落ちる。

「で、どうする？この脳味噌産業廃棄物」

「コンクリで固めてツンドラの下に埋めとけ！」

「いや、北極海に沈めておいた方が安全かもしれんぞ」

「やっぱり痴呆症介護センターに……」

メンバー達が話し合ってる中で、レンは無造作に失神している老科学者に近寄ると、その襟首を掴み、引きずって行く。

「何する気だ？」

ミリイから手当てを受けていたカルロスの方に答えず、レンは老科学者を引きずっていくと、戦闘の余波で壊れかかっているオーガの入っていたカプセルの中へと放り込む。

更に、研究室の隅に置いてあったガスボンベを中に入れコックを開くと、カプセルのフタを閉める。

「スミス、重石」

「お、おう」

壊れかかっているためにちゃんと閉まらないフタを押さえている  
レンに、スミスがそこいらのデスクを持ってくるとそれを重石にし  
てカプセルのフタを強引に閉める。

「みんな手伝ってくれ。絶対出てこれないようにしとく」

「今の炭酸ガスじゃ……」

「確かな」

「そんなの中に入れたら、窒息死するか、酸素欠乏症で頭おかしく  
なるんだけど……」

ミリイが啞然と見ている中で、続々と壊れたデスクやイスやパソ  
コンがカプセルの周囲に積み上げられ、奇怪な前衛芸術を構築して  
いった。

「こんなキチガイ、いちいち相手にしてる暇は無い」

「そだな」

プリント用紙の裏に『DANGER!』だの、『危険！毒性物質  
流出の恐れあり!』だの書いた物をベタベタ貼り付けながら、スミ  
スが頷く。

「無線は？」

「ダメだ、まだ回復していない」

アークが首を振りながら、先程老科学者が電源を入れたパソコン  
を操作して情報を引き出していく。

「おっと、地図が出てきた」

「現在地は？」

マウスをクリックして、縮尺を変えたアークが、今まで来た道と地図を照らし合わせていく。

「現在地がここ、第四研究室。オレ達が入ってきたのがここで、Bチームが侵入したのがここだな。これから行けば、最深部はこの先、ちようど途中でBチームと合流出来るぞ」

「カルロス、怪我は大丈夫か？」

「これくらい、どうって事はないさ」

スミスの問いに不敵な笑みで答えながら、包帯を巻いている途中の足をカルロスは軽く叩く。

「問題は、この最深部の手前にある、馬鹿デカイ謎の空間だな……」

……

「何だこれは？演習場か何かか？」

縮尺からその謎の空間が下手なグラウンドより広い事に気付いたレンが顔をしかめる。

「かも知れないが、用心しておいた方がいいな」

モバイルに地図をインストールさせながら、アークは呟く。

「そうだな……」

サムライソウルのマガジンに減った分の弾丸を装填したレンが、それを銃に戻して初弾を装弾させる。

「準備はいいか？」

「ああ」

「OK」

「いいぜ」

各々の銃の装弾を終えたAチームのメンバーたちが頷く。

「行こうか」

再び、レンは先頭に立って進み始めた。

レオンの足元に、一直線に並んだ弾痕が穿たれていく。

身をすくめながらそれをやり過ごしたレオンが、素早く物影から踊り出ながらハンクの姿を探す。

だが、彼の視界に飛び込んできたのは物陰からこちらに向かって突き出している二種類の銃口が有る奇妙な銃だけだった。

それが何かに一瞬遅れて気付いたレオンは、トリガーを引きながら床を転がる。

放たれた散弾と交差するように、銃口の片方からグレネード弾が放たれ、レオンのすぐ隣で爆発する。

「OICW（アサルトライフルとグレネードランチャー、FCSファイアコントロールシステムを一体化させた最新鋭銃）か！そんなの使つてると腕が落ちるぞ！」

「落ちるような腕はしていない」

バイザーの片側に映る、FCSに内蔵されたカメラから送られてくる映像で照準を定めながらハンクは低く呟く。



再度物陰に隠れたレオンは、マガジンを散弾からスラッグ弾に変えてチェンバー内の弾丸を装弾して交換する。

（どうする？向こうは隠れたまま狙えるが、こっちは無理だ……………）

レオンが試しに突入前の部屋の探索に使う小型ミラーで様子を見ることがおうとすると、確かめるよりも速くミラーが撃ち抜かれ、四散する。

「確かに、相変わらず正確な射撃だな」

「どんなに最新鋭の武器を使おうと、最後に物を言うのは経験と勘だ。違うか？」

「その通りだ。例えばこれだ」

レオンの言葉と同時に、投げられた何かがハンクの足元に転がってくる。

慌ててそちらを見たハンクの足元に転がっているのは、先程の爆発で崩れた建材の欠片だった。

「？」

ハンクがそれを疑問に思った瞬間、突然バイザーの映像が純白に染まり、そしてブラックアウトする。

「くっ！」

映像が回復するのを待たず、ハンクがバイザーを外して投げ捨てる。

その隙を突いて、レオンが物陰から飛び出しながら銃口をハンク

に向けた。

それに反応してハンクも銃口をレオンに向ける。

二つの銃声が同時に響いた。

レオンの左足と、ハンクの右腕から血しぶきが飛び散る。

二人はそのまま転げるようにして、別々の物陰に再度隠れた。

「オレも前にそいつを使ってみた事があってな。手元に注意がいくと一瞬FCSがおろそかになるんだ」

「なるほどな、注意しよう」

空になったマガジンを外して足元に音を立てないように置きながら、ハンクが低く笑う。

先程レオンは建材を投げると同時に、スタングレネードのピンを抜いて、ハンクの注意がそれると同時にOICWに向かってスタングレネードを炸裂させる。

閃光遮断装置が働いて一瞬映像が途切れた僅かな隙を狙って撃ってきた事に、ハンクは驚嘆を覚えていた。

「これで条件は五分だな」

「ああ、やはりお前相手じゃ小細工は通用しないようだからな」

「決着をつけるか？」

「もう少し楽しんでからな！」

再度二人は飛び出しながら、同時にトリガーを引いていた。

幾つものディスプレイが並んだ部屋で、男は悠然とイスに座って映されている映像を見入っていた。

『Eエリア、占拠されました!』

『こちらサウスタコダ研究所! 侵入してきたS W A Tの中央研究室への侵入はもう時間の問題です! 指示を!』

『こちら丹波研究所! S A Tと一緒に侵入してきた黒装束のサムライが次々と……ダメです! タイラントでも歯が立ちません! スサノオの使用許可を!』

『こちらシャルキーヤ研究所! 軍特殊部隊との交戦でB O Wの損傷率が70%に達します! もう持ちません!』

『こちらリング研究所……』

『……スペンサー卿、これはもう……』

男の傍に立っていた、執事兼秘書の老人が世界中から送られてくる通信に顔を青く染め上げる。だが、イスに座っている男　ダーウィッシュ・E・スペンサーは楽しい微笑を浮かべたまま、画面を見ている。

「全研究所に伝達、証拠の隠滅を最優先事項として各自対処せよ。戦闘可能戦力が20%を割った時点で即座に研究所の自爆装置を作動させるよう」

「かしこまりました」

「それから、レギオンの調整は終了しているか?」

「準備万端でございます」

「至急、覚醒処理を。客を持て成さなくてはならないからな」

「すぐに手配致します」

青い顔のまま、執事兼秘書がその場から去ると、ダーウィッシュはおもむろにイスから立ち上がった。

「さて、果たして何人ここに辿り着けるかな?」

その顔には、この上なく残忍な笑みが浮かんでいた。

演習場としても使用出来るよう設計された広大な空間の一角で、無数に積み上げられたコンテナにランプが灯った。

ランプの色が赤から青へと変わり、コンテナが開く。

そこから、無数の目が屋内灯の明かりを照り返して光っている。

そして、コンテナに取り付けられた小型ディスプレイにはこう映し出されていた。

ROW”レギオン” 覚醒処理完了

## 第十二章 『破滅への序曲！這い寄る地獄からの軍勢！』

日本 京都 アンブレラ製薬丹波研究所

「あぐっ！」

「沖田！」

太ももに巨大なトゲのような物が突き刺さったSAT隊員が床へと崩れ落ちる。

それを見たSATの隊長が、トリガーを引きながら指示を飛ばす。

「斎藤！沖田を連れて下がれ！土方は二班もここに呼べ！藤堂は上層部へ連絡！最悪の場合自衛隊が必要になるぞ！他の者はアイツをここから一步も出すな！」

『了解！』

手にしたMP5サブマシンガンをそれに向けて連射しながら、SAT隊員が復唱するが、その声には怯えの色が隠しきれていない。

「御神渡さん！下がってください！危険です！」

隊長の声を聞いて、彼らの一番先頭に立っていた黒装束の若い男が僅かに振り返る。

「そういう訳にはいかない。従弟からここは任せられているもんでしてね」

男は答えながら、手にした日本刀を構え直す。

その前には、男の身長の二倍を軽く越える巨大なBOW 対装甲目標破壊用大型タイラント”スサノオ”が低い唸り声を上げながら足元にいる者達を見下ろしていた。

「グガアアアッ！」

雄叫びと共に、スサノオが右腕を振り回す。

すると、腕に生えている無数のトゲがその勢いで周囲に向けて発射された。

「はっ！」

男は手にした刀を振るい、自分に向かってきたトゲを一瞬にして全て叩き斬るが、あまりの速さに対処し損ねたSAT隊員達の数名が、防弾チョッキをも貫通する威力のトゲを食らって床へと倒れ込む。

「永倉！原田！」

「下がっててください。こいつはオレが相手します」

「しかし…」

言いよどむSAT隊長に、男はハッキリと言い放った。

「どうみてもこいつは、警察の管轄じゃないですからね。だとしたら、こちらの管轄だ」

鋭い目でスサノオを睨みつけながら、男は刀を片手で正眼に構え、その峰にもう片方の手を添える独自の構えを取る。

「陰陽僚五大宗家が一つ、御神渡家第三十七代目当主、御神渡徳治

いざ、参る」

スサノオの振り下ろされた巨腕と、徳治の繰り出した神速の刃が、交錯した。

同時刻

アメリカ サウスタコダ州 アンブレラ製薬サウスタコダ研究所

「おらあつ！」

気合と共に振り下ろされたトマホークが、SWAT隊員の足に巻きついていったツタを一撃で切り落とす。

「スイマセン、隊長……」

「礼は後だ！」

足を引きずるようにして立ち上がる隊員に肩を貸しながら、隊長はもう片方の手に握られているM4A1アサルトライフルのトリガーを引き絞る。

フルオートで放たれるライフル弾が蠢いているツタに突き刺さるが、ツタはそれを意にも介さないように後ろへと下がっていく。

「ビリー！外の車からガソリンを持って来い！ベンはドクの奴を引きずって外に出ろ！」

『了解！』

隊員達に命令を出しながら、隊長は空になったマガジンを交換してツタの大元に銃口を向ける。

「アンデッド系だと聞いてたが、それ以外もいやがるとはな……………」

SWAT隊員達が取り囲む先に、巨大な樹木型BOW ￥”トレント”がそのツタを伸ばして隊員達を捕まえようとしてくる。

「ここはカウボーイとインディアンの土地だ！化け物はとっと失せな！」

怒鳴りながら、SWAT隊長は祖父から譲り受けたお守り代わりのトマホークを握り締めながら、M4A1のトリガーを強く引く。

「ルーキーのスマスが頑張ってやがるんだ！ここはオレ達でなんとかしてでもやるぞ！」

『おう！』

SWAT隊員達は力強く答えながら、各々の銃口をトレントへと向けた。

同時刻 北極 アンブレラ秘密研究所

通路を巨大な爆音と共に爆風が吹き抜ける。

爆発で開けられた床の大穴に、Aチームの背後から迫ってきていた巨大な鉄球がはまるが、勢いを殺しきれずにワンバウンドすると天井にぶつかり、床へと落ちると再び転げ出そうとする。

「はあっ！」



「この！」

そこへ、待ち構えていたレンが居合で鉄球の一部を斬り落とし、さらに斬り落とされてちょうど平らになった部分をスミスが義腕のフルパワーで殴りつけるようにしてなんとか止める。

「インディ・ジョーンズじゃねえんだぞ……………」

「この世に本気でこんなトラップ仕掛ける馬鹿がいるとはな」

あやうく押し潰される所だったAチームメンバーが胸を撫で下ろしながら、鉄球を転がして先程の穴へと収める。

「くそ、さつきからモンスターとトラップのオンパレードだ。いつからRPGになった？」

「RPGにしては悪趣味が過ぎるけどな」

横手の壁に堂々と飾ってあるハーケンクロイツや旭日旗を横目で見ながら、レンが呆れたように呟く。

「アウシュビッツや731の研究員がアンブレラ初期メンバーに混じってたらしいからな。趣味は気にしない方がいいぞ」

アークが手元のモバイルを操作して現在地を確認する。

「ちょっと遠回りになるが、そっちからいくしかないな」  
「閉まってるぜ？」

少し離れた曲がり角にあるシャッターを指差したアークに、カルロスが首を傾げる。

「行き止まりにしてから鉄球か。念が入ってやがるな」

苦い顔をしながら、スミスはシャッターを叩いて厚みを確かめる。

「結構薄いぞ、これならぶち破れるんじゃないか？」

「たぶんそれ、バイオハザード用の防疫シャッターよ。強度じゃなくて遮蔽性を重視してあるんだわ」  
「なるほどな」

ミリイの説明を聞きながら、レンがスミスの横から同じように軽く叩いてシャッターの厚みを確かめる。

「これ位なら斬れる。下がっていてくれ」

「おう」

レンが居合の構えを取るのに邪魔にならないように、皆が距離を取る。

ゆっくりと呼吸を整え、半身を引きながら柄に手を伸ばしかけたレンの手がふと止まる。

「どうした？」

それに気付いたスミスが声をかけるが、レンは無言で構えを解いて周囲を見回す。

「見られている……………」

「あれか？」

カルロスが通路の上隅に取り付けられているカメラを指差すが、

レンはそちらではなく通路の向こう、これから向かおうとしている研究所の最深部の方を真剣な表情で見ている。

「いや、ここに入った時から何かに見られている気配がした。それがどんどん強くなってきた」

「何だ？幽霊でもいるのか？」

「そんなもんそこいら中にいるぞ。そうとう人体実験してたみたいだな、ここ」

『え？』

レンの一言に当人以外の全員が硬直するが、気にせずレンは続ける。

「だが、そんな半端な存在じゃない。はっきりとは分からないが、なにか強い力を感じる」

「オカルトは止めてくれ……頼むから……」

スミスの恨めしそうな声に、レンは真剣な表情を崩さぬまま、再度居合の構えを取る。

「何が在ろうが、オレ達は進むしかない」

高速で鞘走った刃が、数瞬の間に無数の金属音を響かせ、再度鞘へと収まる。

僅かな間を置いて、シャッターは裁断された金属片となって床へと崩れ落ちた。

「先に進もう」

呟いて走り出したレンの後ろを、Aチームメンバー達は頷きなが

ら後へと続いた。

「ふっ！」

小さな呼気の音に続いて、連続した打撃音と銃声が響く。

そのツタを伸ばして襲い掛かろうとしていたイビーが、動物でいえば胴体に当たる中央部の茎に直線で繋がる連撃と、それに付随して放たれた散弾を食らって破片と樹液を撒き散らしながら倒れ伏す。

敵が戦闘力を失った事を確信したシェリーが素早く振り返る。

明確な急所を持たないイビーに他のメンバー達が苦戦しているのを見て取り、そちらに向かおうとしたシェリーがふいに足を取られて転倒しそうになる。

先程倒したと思ったはずのイビーのツタが自分の足に巻きついているのに気付いたシェリーは、片手を付いてなんとか転倒を防ぐと足を捻って逆にツタを強固に巻きつかせる。

「ふせてクレア！」

シェリーの背後を守るような形で戦っていたクレアが、シェリーの声を聞いてとっさに伏せる。

その頭上を、シェリーの胴回し蹴りとそれに引きずられる形となったイビーの死体が通り過ぎ、クレアの前にいたイビーに激突して壁へと吹っ飛ぶ。

そこへP 90からM79グレネードランチャーに持ち替えたクレアがグレネード弾を叩き込み、二体まとめて四散させる。

その隣では、他のイビーが吐き出した粘液をかわして接近してクリスガ、至近距離から散弾を連続して撃ち込み、自重を支えきれな

くなったイビーの体が崩れ落ち、床へと四散する。

「これで最後！」

レベツカが自作した特製ナパーム手榴弾のピンを引き抜いて、残っているイビーへと投げつける。

数秒の間を持って炸裂したナパーム手榴弾が、一瞬にしてイビーを炎に包み込んだ。

「一体何匹BOWがいる訳？」

マガジンを交換しながら、ジルが連続する戦闘にばやいた。

「本拠地だからな、それこそ今まで造ってきたBOWが全部いても不思議じゃないさ」

新たな弾帯を繋げながらのバリーの苦笑いに、皆がうんざりとした顔をする。

「ゴールは分かっているんだ。そこまで辿り着いてボスを逮捕すれば全てが終わる。弾が尽きようが、仲間の屍を乗り越える事になるうが、誰かがそこへ辿り着けばいい」

弾丸の装填を終えたクリスの言葉に、皆が頷く。

「Aチームとの合流予想地点は？」

「え」と

「ここから20m先の曲がり角からルートは合流します。戦闘によるタイムロスがこちらとほぼ同様ならば、合流時間はプラスマイナス10分以内になるはずです」

クリスの問いにモバイルのマップをチェックしようとしたレベッカが、何も見ないですらすらと答えたシェリーの言葉に啞然とする。

「……………合ってる?」

「ええ……………」

ジルがレベッカの手にしてるモバイルを覗き込みながらの問いに、慌ててマップを確かめたレベッカが頷く。

「マップはともかく、何で時間まで?」

「あ、今までのBOW出現ポイントの距離と出現個体の戦闘力が一定の比率になってたみたいだから、それと戦闘時間を方程式にして計算してみたんだけど……………」

「暗算で?」

クレアの問いに、シェリーが頷く。

「これが終わったら、オックスフォードでもMITでも好きな学校に行くといい。それだけの頭脳なら特待奨学生になれると思うから」

「オフアット基地にいた時からすでに話がありましたけど」

クリスがそう言いながらシェリーの肩を叩くが、シェリーの即答にその手が一瞬硬直する。

「とにかく、早い所Aチームと合流しよう」

「そうね」

Bチームメンバーが先へと進む中、クリスがクレアへと近寄ると、小さく耳打ちした。

「何かあった時、あの子だけはなんとしても脱出させるぞ」

「もちろんよ兄さん。妹を守るのは姉の勤めなんだから」

「そうだな」

クレアの返答に、クリスが微笑した。

曲がり角から同時に突き出されたスパス12とサムライソウルの銃口が、クリスの頭部とレンの胸にポイントされる。

「脅かすな」

「そっちこそ」

銃を降ろしながら、お互いの先頭にいたクリスとレンが苦笑する。

「被害状況は？」

「負傷者が数名出てるが、いずれも軽傷だ。そっちは？」

「似たようなもんだ」

「レオンは？」

「ハンクと決着をつけるって……………」

レオンの姿が見えない事に気付いたアークの問いに、クレアがうつむきながら答える。

「……………死神と決着か……………あいつなら、きっと勝つ……………」

「信じて前に進むしかない。オレ達に止まっている時間は無いんだからな」

「ああ……………」

Bチームの通つて来た方を見ているアークに、レンが冷たく言い放つ。

あえて誰もが反論しないまま、無言で先へと続く通路を見た。彼らの視線の先に、謎の巨大空間へと繋がる扉が静かに、だが、どこか圧倒的な雰囲気を漂わせてSTARSの行き先を閉ざしていた。

「あそこを過ぎれば、最深部の中央制御室に辿り着くはずです」  
「問題は、あそこに何がいるかだな」

アークのモバイルとのデータ差異をチェックしていたレベッカの言葉に、バリーがうめくように言いながら扉を睨みつける。

「間違いなくあそこが最終防衛ラインだ。BOWの一個師団が出てきたって不思議じゃないだろう」

クリスが残弾と、スパス12のセーフティを確かめる。

「まずい料理と嫌味な歓迎はもう飽きたからな、とつとと終わらせて帰ることにしようぜ」

「同感だ」

カルロスとスミスがお互い苦笑しながら、M82A1とコンバットボウを構える。

「帰ったら、皆でパーティでも開きましょう。おいしい料理いっぱい



用意して」

「いいですね、それ」

ジルが空のマガジンに弾丸を装填し、レベッカが救急治療用具をチェックする。

「私ローストチキンが食べたい！」

「トボーンステーキもいいわね」

「……太りますよ」

ミリイの一言に、シェリーとクレアが硬直する。

「最高の酒も用意しよう、勝利の美酒って奴をな」

レンが微笑しながら、装填を終えたマガジンをサムライソウルにセツトし、初弾を装弾する。

全員が顔に笑みを浮かべながら、己の銃に弾丸を装填し、それをチェンバーへと送り込む。

それを構えた時には、すでに全員の顔が真剣な物へと変わっていた。

「準備はいいな？」

無言で全員が頷くのを確かめたクリスが、扉の開閉スイッチを押した。

ゆっくりと扉が重い音を響かせながら響いていくのを皆が固唾を飲み込みながら、異様に長く感じられる時間が過ぎていく。

扉の向こうが見えてくると同時に、無数の銃口が一斉にそちらへと向けられる。

張り詰めた緊張がその場に立ち込める中、やがて扉は完全に開く。

だが。

「……………あ？」

スミスが思わず間拔けな声を漏らす。

扉の開いた向こうには、まるでどこかの荒野を模したような広大な空間だけが広がっていた。

「てつきり大量に待ち伏せしてるかと思ってたけど……………」

「油断するな。罠が張られている事も有りえるぞ」

首を傾げるジルをクリスはたしなめる。

レンが刀を抜いて、刃だけを扉の先に入れトラップの有無を確認しながら、刃に映った影で室内を探る。

「入り口付近は大丈夫そうだな」

「全員、2、3人で一チームを組んで、4 m感覚で進行。トラップに気をつける」

刀を鞘に収めて歩き出したレンの後に続いて、クリスが指示を出しながら広大な室内へと足を踏み入れる。

「でかいな。こりや象でも戦車でも動き回れるぞ」

「マジで演習用みたいだな」

用心深く銃を構えたまま、スミスとカルロスが興味深そうに周囲を見回す。

土まで入れて本物の荒野のように作られた室内には、一部に市街地を模したセットのような物や、林のようになっている部分、本物

か贖物かまでは分からないが、壊れた砲塔のような物までが置いてあった。

「ここでBOWの実戦試験をしてみたいね」

シェリーが足元の土をすくってみて、その中にBOWの一部と思われる有機物の破片や、空薬莖が転がっているのに気付く。

室内の半ばまで来た辺りで、先頭を歩いていたレンの足が突然止まる。

「どうした？」

「いる……」

その一言で後ろを歩いていたスミスが素早く銃口を左右に向けて敵影を確かめる。

「どこだ!？」

「オレの目の前だ」

レンの前方へと銃口を向けたスミスが表情を陰しくする。

そこには、今までと変わらない光景があるだけだった。

「まさか透明か？」

「いや、うかつだった……ここまで気付かなかったとは……」

レンがサムライソウルを、目の前の地面へと向けて、トリガーを引いた。

発射された弾丸は、地面に突き刺さると、甲高い音を立てて上へと跳弾した。

「敵は地中だ!!」

レンの声が響くと同時に、周囲の地面が一斉に盛り上がり、そこから巨大な虫のようなBOWが大量に出てきた。

それは、2m近くはある平べったい体をしたカメムシのような姿をしており、あごにはクワガタのような巨大なハサミが生えていた。

「撃て！」

クリスの命令と同時に、全ての銃口から弾丸が吐き出される。

だが、マグナム弾やグレネード弾のような破壊力の強い一部の弾丸を除いて、ほとんどの弾丸はその虫型BOWの甲殻に弾かれる。

「何だこいつは!？」

二本目のエクスプローションアローをつがえようとしたカルロスに、虫型BOWが昆虫特有の薄い羽を甲殻の隙間から出して、一斉に宙へと舞いながら襲い掛かる。

「カルロス！」

スミスが叫ぶと同時に、ゾンビバスターを連射する。

頭部に風穴が開いた虫型BOWが地面へと倒れ込む中、その屍を超えて次の敵がそのオオバサミを開いて襲い掛かってくる。

「こいつら、撃った隙を突いてくるのか!？」

「ぎゃああ！」

バリーの驚愕を、誰かの悲鳴が遮る。

「集まって円陣を組むんだ！破壊力の強い得物を使え！」

クリスの命令が響くが、陣形の崩れた場所へと敵は地を這い、宙を舞いながら襲い掛かってくる。

「はあっ！」

レンが頭部と腹部の甲殻の隙間を狙って斬撃を繰り出し、虫型BOWの一匹を地へと沈めるが、そこに三体が同時に襲い掛かってくる。

「ああああああ！！！」

レンは中央の宙を飛んできた一匹に狙いを定めると、雄たけびと共に全身ごと突撃する強力な刺突を繰り出し、その複眼から相手を串刺しにしながら、その体を押し出すように前に出て他の二匹の攻撃をかわす。

「フォーメーションアタックを使ってくるだろ？」

刀を素早く引き抜きながら、レンは振り返って残ったはずの二匹に対処しようとするが、すでにそこにはその二匹はいなくなっていた。

「なんて早い判断だ。まさかこいつら……………」

レンが苦戦している仲間の元へと駆け寄るが、その目前でまた一人悲鳴を上げながら地面へと倒れる。

「まずい……………」

「まずい……………」

期せずして、レンと同じ言葉を呟きながら、クリスは自分の判断ミスを呪った。

今戦っている虫型BOWは今まで戦ったいかなるBOWとも次元その物が違う存在だった。

こちらの隙を的確に突き、まったく無駄の無いフォーメーションでSTARSメンバーは一人、また一人と倒れていく。

「兄さん！このままじゃ！」

重傷を負った仲間の一人を助け起こしながら、クレアが叫ぶ。

そこへ、虫型BOWの一匹が近寄ると、その昆虫特有の繊毛が生えた口から、何かの液体を吐いてくる。

「クレア！」

クリスがスパス12をその吐き出された液体へと投げながら、クレアの体へと覆い被さる。

大半がスパス12に当たって阻まれながらも、その残った液体がクリスの背中に掛かる。

「ぐっ！」

クリスの背中に激痛が走る。

その吐き出された液体、強力な融解液はボディーマーに阻まれながらもクリスの背中を焼いていた。

「兄さん！大丈夫！？」

「大丈夫だ……」

眩きながらクリスは体を起こす。

そこへ先程の虫型BOWが地を這いながら襲い掛かろうとするが、シェリーがその背中に飛び乗ると同時に頭部に散弾二発付きの強力なパンチを食らわせて沈黙させる。

「すまない」

「後です！まだ来ます！」

狙いを負傷者とその介護者に向けたらしい無数の虫型BOWが徐々に迫ってくる。

「このままじゃ全滅する！」

「どうするクリス！？」

アークとバリーの声を聞きながら、クリスは奥歯を強く噛み締める。

確かに、このままでは全滅は時間の問題だった。

「一度退くんだ！こいつらがここで造られた物なら、どこかにデータが有るはず！それから対策を立てるんだ！」

「確かに！データさえあれば……」

レンの指摘に、シェリーが頷く。

クリスは短い思考の後、叫んだ。

「総員！一時撤退だ！こいつらの対処法を探す！」

『了解!』

皆が復唱して引こうとするが、それに気付いたのか、虫型BOW達は一斉に退路を塞ごうとする。

「逃さないつもり!？」

「なんちゅう陰険な虫だ!」

ジルとカルロスが叫びながら、トリガーを引こうとする。

「待て!オレが血路を開く!」

そこへ、レンが叫びながら敵の群れへと突っ込んでいく。

「一人でカッコつけるなと言ってるだろうが!」

その後スミスが続く中、レンは一度銃も刀も鞘とホルスターに収める。

敵との距離が寸前まで近づいた所で、レンは柄に手を伸ばす。

「ああああああ!!」

走りながら繰り出された居合が、まったく止まらない流麗かつ強靱な動きで三匹の虫型BOWを連続して斬り捨てる。

継いで抜かれたサムライソウルが、至近距離から虫型BOWの複眼を狙ってポイント、三連続で銃弾が吹き出され、複眼を吹き飛ばしながら突き刺さった弾丸が内部を攪拌する。

「くたばりやがれ!」



スミスがスラッグ弾を装填したAS12とゾンビバスターを縦横に撃ちまくり、レンの背後から襲いかかるうとする虫型BOWを駆逐していく。

その背後から負傷者をつぎながらSTARSメンバー達が続く。

来た時の何倍も何十倍も感じられる距離を通り、一人、また一人とSTARSメンバー達が扉を抜ける。

最後に、扉の前に立ちはだかつて敵を防いでいたレン、スミス、カルロス、バリーの四人が残った。

「全員行つたな！」

「生きてる奴はな！」

弾丸をばら撒きながら、四人が扉へと下がり始めた時だった。

カルロスが腰の矢立に手を伸ばし、そこにもうエクスプロージョンアローが無い事に気付いた。

「しまった……」

その隙を逃さず、虫型BOWが宙から襲いかかるうとする。

「馬鹿！」

スミスが怒鳴りながら、左手だけでカルロスの体を突き飛ばす。先程までカルロスがいた空間を、オオバサミがえぐる。

「虫風情が！」

スミスが至近距離で右のAS12のトリガーを引いた。

虫型BOWの頭部をスラッグ弾が吹き飛ばす。スミスが別の敵に

左のゾンビバスターを向けようとした時、違和感に気付いた。

「スミスー!!」

カルロスの声に、地面に何かが落ちる音が重なる。

肘から切断されたスミスの義腕が、オイルとスパークを巻き散らしながら、地面の上でケイレンしていた。

「ぐ、ああ……………」

スミスが愕然とした表情で、自分の肘までとなった左腕を見る。

「退くんだスミス!」

レンの一言にスミスは我に帰ると、素早く切断された義腕からゾンビバスターを抜き取り、通路へと転がり出、カルロスもそれに続く。

「お前達も早く!」

「退くぞサムライ!」

「分かっている」

レンが扉の方を向いて走り出し、バリーがM60E3の残弾を撃ち尽くすとそれに続こうとした時だった。

突然レンは立ち止まると、バリーに道を譲る。

「何を…」

言葉の途中で、自分を追い越そうとしたバリーの背中にレンは蹴りを入れて彼を通路へと叩き出した。

「レン！お前まさか！」

スミスが慌ててレンの方へと向かおうとするのを、レンはサムライソウルの銃口を向けて押し留め、扉のこちら側に有った開閉スイッチを柄尻で押し込んだ。

「誰かが、足止めをする必要が有る。一時間だけ時間を稼ぐ。その間に対処法を」

「レン！！」

「馬鹿！お前一人で！」

「レン！！！」

皆の叫びが響く中、無情にも扉は閉ざされる。

扉が閉ざされる音を聞きながら、レンは無数の敵に対峙して刀を正眼に構え、サムライソウルに新しいマガジンを叩き込む。

「我が剣、大通連と我が銃、サムライソウルに賭けて、これより先は一步も通さぬ」

レンの周囲を、虫型BOWがゆっくりと囲み、徐々にそれを狭めていく。

「水沢 練、いざ、参る」

その包囲網へと向けて、レンは走り出した。

扉が閉じると同時に、急いで開閉スイッチを押そうとしたシェリ

ーの腕を、クリスが掴んで止めさせた。

「離して！」

「ここで開けば、全員死ぬ」

シェリーはハツとして、そこにいる負傷者と疲れた表情のSTARメンバー達を見た。

「……あいつの言う通り、対処法を探すしかない。サムライが、命を賭けて時間を稼いでいる間に……」

シェリーの腕を浮かんでいる手に、必要以上に力が籠る。それに気付いたシェリーがクリスの顔を見ると、そこにはあまりにも悲壮な表情が有った。

「地図によれば、まだ調べていない研究室はこの奥のを除けば6箇所あるな」

アークが手早くモバイルのデータを検索していく。

「負傷者の搬送とガードにメンバーの半分は残れ。残る半分で研究室の探索を行う」

「ああ、こうなれば核弾頭でも構わねえ。あのクソ虫どもを皆殺しにしてやる……」

クリスの指示を聞きながら、スミスが残った右腕でゾンビバスターのグリップを強く握り締めた。

「すぐそこに医務室があったはずですよ。そこにみんなを！」

レベツカが負傷したジルに肩を貸しながら、医務室のある方向を指差す。

「急げ！」

皆がそこを走り出す中、ミリィとシェリーが残って閉じたままの扉を無言で見つめていた。

「二人とも……」

「今行きます」

クレアが声を掛けようとした所で、ミリィは扉に背を向ける。シェリーも背後を振り返りながら、通路を走り出した。

（お願い、無事でいて……レン……）

走りながら、ミリィは左の薬指にはめられた指輪を強く握り締めた。

最早何度目かになるかお互い分からない銃撃の後、レオンは物陰に身を隠し、荒い呼吸を押さえ込もうとする。

通路には今までの激戦を物語る弾痕や空薬莖、そして血痕が床と壁に巻き散らかされ、その中に残弾の尽きたスパス15と、弾丸を喰らって半ばから大破したOICWが無造作に放置されていた。

手の中のデザートイーグルのマガジンを交換すると、レオンは自らの状態を確かめる。

ボディアーマーはすでに何発もの弾丸を喰らって役に立たなくなりつつあり、かすめた弾丸の銃創が手足に二つずつ。

内、足の一つは肉までえぐられていた。

ポケットから救急スプレーを出して傷口へと拭きつける。

激痛をこらえながらも、応急処置をしつつ、レオンは相手の様子をうかがった。

ハンクが隠れていると思われる物影の手前には、先程の交戦による物と思われる血痕が壁に付着していた。

「条件は五分か……」

止血用パッドを傷口に貼り付けながら、レオンは相手の隙を探る。

戦況は完全に膠着していた。

この状態を打破出来るにはどうすればいいかを考えていたレオンが、ふと胸ポケットを探っていた指に触れた感触に気を取られる。

それを取り出して見て、今更ながらそんな物を持っていた事をレオンは思い出した。

「そういえば、何でもまだ持ってたな、こんなのを……」

「そろそろ、楽しみ終えたか？」

突然聞こえてきてハンクの声に、レオンは身を固くする。

「先に行った仲間の事が気になってしょうがないんじゃないのか？」

「そういうお前はどうかんだ？」

「死神の仲間は死人だけだ」

ハンクの笑えない冗談に、レオンは苦笑しながらデザートイーグルを強く握り締める。

「次の一撃で決着をつけるのはどうだ？お互い逃げも隠れもしない。早く撃って当てた奴の勝ちだ」

「……………」

レオンは、自分の今の状態から勝機を計算する。

長年扱ったデザートイーグルは完全に自分の体の一部のように扱えるが、この傷ついた体ではハンクとの早撃ちで先んじられるとは思えない。

ふとそこで、レオンは手の中にある物と、前にハンクに狙撃された時の事を思い出した。

「いいだろう」

レオンは返答しながら、素早く手の中の物を細工する。

「じゃあ、合図だ」

ハンクの指から、そこいらから拾った空薬莢が跳ね上がる。

極僅かな、だが二人の間には最高潮の緊迫感を張り詰めた時間の中、空薬莢が宙を舞い、そして床に当たって甲高い音を立てた。

二つの人影が完全に同時に物陰から飛び出す。

レオンのデザートイーグルが、正確にハンクの額を目指す。

だが、一瞬早く同じようにレオンの額に向けられたハンクのSIG PRO SP2009が弾丸を吐き出した。

レオンの指がトリガーを半ばまで引いた瞬間、発射された9ミリパラベラム弾がその額の中央に命中する。

ハンクが勝利を確信した時、レオンの額に貼り付けられている止血パッドに気付いた。

そして、次の瞬間には、銃口から発射された50AE弾がハンクの頭蓋を貫き、脳髓をかき乱しながら後頭部からそれらをぶち撒け

た。

「……レンの言った通りだな。お前の狙いは正確過ぎるんだよ」

未だ硝煙を上げているデザートイーグルを構えたまま、レオンが呟いた。

中央に弾痕の開いた額の止血パッドから流れ出した血がレオンの顔面を通り過ぎ、それが床に雫となって落ちると同時に止血パッドも額から剥がれ落ちる。

そして、その下に仕込まれた物、弾丸を目前で防いだ小さな金属板　五年前、着任と同時に付ける気でついにつけず終いに終わったポリスバッジが、床へと落ちて甲高い音を立てた。

中央でひしゃげたポリスバッジを拾おうとしたレオンが、突然膝から崩れ落ちる。

とっさに手をついて転倒を免れたレオンは、ポリスバッジを拾い上げてポケットに入れようとするが、思い直して胸へと付けた。

「悪いが、先に進ませてもらう……仲間が待っているんで……」

着弾の衝撃で割れた額からおびただしい血を流しつつ、レオンは足を引きずりながら壁に手を付きつつ、ハンクの死体に背を向けて進み始める。

だが、角を曲がろうとした所で、力を失った体が前のめりに倒れ、誰かがそれを支えた。

「レオン！！大丈夫か！」

「よお、アーク……首尾はどうだ？」

支えてくれたのが親友だというのに気付いたレオンの顔に、僅か



に笑みが浮かぶ。

「妙な虫型BOWに阻まれて、一時撤退した所だ。今サムライが一人で時間を稼いでいる。オレはお前の事が気になって来てみたが……」

「そうか、じゃあオレもレンの奴を手伝わないとな……」  
「無茶言うな！そんな体でどうするつもりだ！」

傷だらけのレオンをアークは怒鳴りつけるが、レオンはアークを押し退けて前へ進もうとする。

「待てレオン！お前はもう下がれ！」  
「行かせてくれ、アーク」

慌てて前に回りこんで止めようとするアークを、レオンは静かにその肩に手を置いた。

「オレもサムライと同じだ。五年前のラクーンシティから、こんな生き方しか出来なくなつた……どうせ死ぬなら、銃を握り締めたまま、一匹でも多く化け物共を道連れにしてやる……」

静かな、だが重い言葉を呟くレオンを、アークはしばし無言で見つめたが、やがてその肩をレオンに貸した。

「付き合つてやるって言つたはずだ。オレも行くぞ」  
「……悪いな」  
「なあに、後で返してもらうさ。色々とな」

二人の男が、再び戦場へと戻ろうとしていた。

「どきやがれ!!」

スミスが右手でゾンビバスターのトリガーを引く。

生身の腕ではその反動を押さえ込めず、大きく腕を跳ね上げながら、目の前のハンターが断末魔を上げるのをスミスは確認した。

「大丈夫か？片腕で……」

「ああ、かなり痛えただけだ」

別のハンターを倒したカルロスが心配そうに聞いてくるが、スミスは無愛想に答えながら前へと進む。

「本当にこの先にあるんだろうな？レンを助けられるような武器がある？」

「確証は無い。だが、この先に有るのが対BOW用兵器の研究室つてだけだ」

同行しているバリーの言葉に、スミスの足が速くなる。

「なんでもいい！あいつを助けられるんだったら、オレは何だってやってやる!!」

興奮しているスミスをなだめようとせず、カルロスとバリーは研究室を目指すスミスの後を追う。

やがて見えてきた研究室の扉を、スミスは安全を確かめもせず飛び込むと、いきなりゾンビバスターを天井目掛けてぶっ放した。

「おとなしくしろ！ここはSTARSが占拠する！なんでもいいか

ら武器をよこしやがれ！」

「ひい！」

「て、抵抗はしないから命だけは！」

「オレが悪かったです！自首しますから殺さないで！」

中にいた白衣を着た研究員らしい者達が、自分達にいきなり向けられた銃口に悲鳴を上げながら、ある者は手にしていたファイルを取り落とし、ある者は慌てて床に腹ばいになり、ある者は泣きながら命乞いを始める。

銀行強盗紛いのスミスの所業に、バリーとカルロスはまだ啞然としていた。

「てめえら、この先にいるデカ虫に効く武器は有るか？」

「虫？ROW”レギオン”の事か？」

研究員の一人の鼻に熱い銃口を押し付けながらのスミスの問いに、震えながら研究員は答える。

「ROW！あいつらが！」

「レギオン、それが名前か……………」

顔を見合わせたバリーとカルロスだが、スミスは無視して尋問を続ける。

「名前なんざどうでもいい。あいつらを殺せる武器は無いかって聞いて………」

言葉の途中で、スミスは研究員の背後にある物に目を奪われた。

「何だこいつは？」

「まさか……こんな物が……」

そこには、大型機械用の整備台に鎮座する巨大な甲冑を思わせる機械が有った。

「レギオンを倒せるという点なら、こいつでも出来るが……」

「何なんだ、こいつは？」

スミスの問いに、ようやく銃口をどけられた研究員が火傷している鼻先を押せえながら説明を始める。

「BOW指揮用機動装甲ユニット、タイプMV 2000”ギガン”だ」

それは、SF作品に出てきそうな大型のパワードスーツだった。右腕に当たる部分にはガトリングガンが、左腕には大型のカノン砲が取り付けられ、両肩には二門の小型レールガンが装備されている。

それにゆつくり近づきながら、スミスはそれに触れてみた。冷たく光る装甲からは、兵器特有の威圧感が漂っている。

我知らず、スミスは圧倒されていた。

「そもそもこのギガンとは、BOWの実戦運用の際のハーメルンシステムを使用した戦術指揮を目的とし、なおかつふいの暴走の際にそのBOWの殲滅をもコンセプトとして……」

「能書きはいい。動くのか？戦えるのか？」

説明の腰を折られた研究員が、静かに首を横に振る。

「使えないのか！？」

「兵器としては完成している」

「じゃあなんで！」

「こいつは、使用者の脳に直接神経インターフェースを電子接続しなければいけないんだ。残念だが、専用の改造を受けた人間でなければ……………」

「神経の電子接続…………こいつからじゃ無理か？」

スミスは、半ばから切断された自らの義腕を研究員に突き出す。  
しげしげとそれを見つめた研究員は、その構造をチェックして考え込んだ。

「可能かもしれん……………」

「よし、お前らは見逃してやるから、オレをこいつに早く乗せろ！」

「分かった。こつちも死にたくないし……………」

「オレも手伝おう。機械なら得意だ」

カルロスが側に置いてあった工具箱を取りながら、ギガントへと歩み寄る。

（待っている、レン。今助ける！）

スミスは無言でギガントを見つめていた。

「動かないで！」

クレアは研究室に飛び込むと同時に、中にいた科学者らしき男に銃口を向ける。

「やっと来たか……………」

男は座っていたイスから立ち上がると、静かにクレアの方へと向き直った。

「どうぞ撃ちたまえ。私は償いきれぬ罪を犯した……………」

科学者はそう呟くと、自らを銃口にさらす。

そこで、クレアと一緒だったシェリーがその科学者の顔をまじまじと覗き込むと、その顔が驚きの表情を浮かべた。

「トムおじさん!？」

「……まさか、シェリー?シェリーなのか!？」  
「知り合い?」

科学者とシェリーの顔を交互に見たクレアが、銃口を下ろす。

「パパの同僚だった人。小さい頃よく遊んでもらったけど……………」  
「驚いた。てつきり家族全員ラクーンシティで死んだ物だと……………」

しばし絶句していた二人だが、ふと我に返ったシェリーが口を開いた。

「トムおじさん、お願い!この先にいる虫型BOW、いえ、ROWの弱点を教えて!」

「ROW!?あれが!」

驚いているクレアを脇に、シェリーの真摯な顔を見たトムはイス

へと座り直した。

「弱点か……そもそもあのROW”レギオン”は……」

「DNAコントロールによって創り出された相互情報交換性を持つ戦闘用生体コンピューター」

言おうとしていた事をシェリーに言われたトムが一瞬驚愕するが、やがて大きく息を吐いた。

「さすが、あの二人の娘だな。少し見ただけで気付いていたか……」

……

「どういう事？」

いまいち理解できないクレアが首を傾げる。

「つまり、あのレギオンとかいうROWは、こちらの攻撃パターンを完全に解析し、それに適した攻撃をお互いに何らかの情報伝達手段、おそらくは超音波を使って連絡しあっていたのよ」

「つまり、こっちの攻撃は全部見透かされていたって事？」

「そうよ、私達は無数の敵を相手にしていたんじゃない、レギオンという一つの群体そのものを相手にしていた訳」

「パーフェクトだ」

トムが満足げに頷く。

「だとしたら、レンの刀の攻撃パターンも解析されちゃう！トムおじさん！何か手は！？」

「分かっているはずだ。手は一つしかないと……」

トムの問いに、シェリーは考えていたただ一つの手段を口にした。

「向こうが未解析の戦力を持って、解析されるよりも早く殲滅する………」

「その通りだ」

頷きながら、トムは側のコンソールを操作する。

「五年前、ウィリアムが死んだと聞かされて、初めて私は自分の罪を理解した。それ以来、私はずっと対BOW用兵器の研究をしてきた。そして、ようやくこれが完成した。」

研究室の中央、BOWの培養用に使われるカプセルを覆っていたシールドが開いていく。

その中に有ったのは、BOWではなく奇妙な物体だった。

「これは？」

「パラサイトアーマー」ベルセルク”。ネメシスシリーズの全く逆のコンセプト、すなわち非力な人間にタイラントタイプに匹敵する戦闘力を与える事が出来る」

「じゃあ！」

「だが、これに寄生された人間は莫大な負荷をその体に負う事になる。生半可な人間では………」

トムの説明を聞いたシェリーは、無言で腕のプロテクターを外す。

「シェリー、まさか………」

「私の体は、五年前感染したG ウイルスの影響で強化されてるの。それじゃ不足？」



「……いいだろう」

着衣を脱いでいき、シャツとスパッツだけの姿のシェリーを見たトムは、ベルセルクの活性処理を始める。

カプセル内部に活性用リキッドが流し込まれ、ベルセルクは不気味な脈動を始めた。

「OKだ」

シェリーは無言で拳を握り締めると、カプセルを一撃で叩き割る。

開放されたベルセルクは宿主を求め、シェリーの体へと絡みつぎ、その皮膚に自らの神経を突き刺していく。

「くっ………ああっ！」

神経と神経が絡みつく激痛に耐えながら、シェリーはただレンの事だけを思った。

（今行く。待ってて、レン！）

「はああああああっ！」

神速で繰り出された刃が、音速超化の高音を周囲に響かせる。その音が消えた時、そこには斬り伏せられたレギオンの死骸が三つ転がっていた。

「光背一刀流……《閃光斬・日輪》………」  
にちりん

大きく呼吸を乱しながら、奥の手の一つ、音速超化の連続斬撃を繰り出したレンが、疲労のために膝を付きそうになるのをなんとか堪える。

（今ので、12、いや13か）

冷静にカウントしつつ、レンは一度刀を鞘に収めて居合の構えを取る。

その周囲360度全てを取り巻くように、レギオンが待ち構えている。

（居合の間合いに入ってこなくなったな。やはり、こいつらには高い知性が有る……）

油断無く構えているレンの背筋に、突然悪寒が走る。

（見ている……何かがオレを……）

消えない悪寒を堪えながらも、レンは演習場の向こう、遠くに見える最深部へと続く扉を睨みつける。

「そこか」

低く呟くと同時に、周囲のレギオンが同時に溶解液を吐き出してくる。

「食らうか！」

レンは360度全てから襲ってくる溶解液の一角を居合で斬り裂

くと、それによって生じた僅かな空間に突撃する。

その勢いのまま、目前のレギオンに全体重を乗せた刺突で串刺しすると、その頭部にサムライソウルを速射する。

「待っている、オレが行けなくても仲間達がそこへ行く。だから、この場はこの命に代えてでも守り通す！」

扉の向こうに叫びながら、レンは次の敵へと対峙する。

約束の時間の半分が、ようやく過ぎ去った所だった……

## 最終章『輝ける星達（前編）』

アメリカ サウスタコダ州 アンブレラ製薬サウスタコダ研究所

『自爆装置が起動しました。爆発まで、あと4分です。全ロックを解除、研究員は至急避難してください。繰り返します自爆装置が…』

「うるせえ！残り時間だけ教える！」

肩に負傷した隊員を担ぎながら、非常灯が点滅している通路をSWAT隊長が必死に避難しようと走り回る。

「隊長………オレはもうダメです……隊長だけでも…」

「馬鹿野郎！おめえが死んだら二階級特進でオレより階級が上になるだろうが！勝手に出世されてたまるか！」

重傷を負っている部下に激を飛ばすSWAT隊長の眼前の壁を、突然炎に包まれたツタが飛び出して行く手を塞いでくる。

「たかがデカイ薪が、火付けられたからって逆恨みか？ふざけんじやねえ！！！」

SWAT隊長は腰のホルスターからコルトSAAを抜くと、ツタへと向けて連射する。

『爆発まで、あと3分です』

銃声に、無情なカウントダウンが重なった。

日本 京都 アンブレラ製薬丹波研究所

「五行相克！」

呪文と共に振り下ろされた神剣”そはや丸”が、スサノオの右腕を肩口から斬り落とす。

「ガアアアア！！」

周囲一体に轟くような絶叫が響かせながら、スサノオはもう片方の腕を振り回すが、そちらもすでに肘から先が消失していた。

「ただ破壊と殺戮を撒くが為に造られし者よ。お前が存在すべき場所など、この世の何処にも存在せず」

自分を見下ろす位置にあるスサノオの両目を見据えながら、徳治は刃の血を振るい落としながら淡々と宣言する。

「我が剣に賭けて、その在を滅せん。いざ、参る」

スサノオが、唯一残った顎で、徳治に噛み付こうとするが、自らに向かってくるそれを冷静に見つつ、徳治は一度刀を鞘に収め、居合の構えを取る。

「克！」

短い呪文と共に、僅かに身を反らした徳治の腰間から、神速の刃が繰り出される。

刃はスサノオの太い首を苦もなく斬り裂き、そして貫ける。  
スサノオの巨大な頭部が、その顎を開いたまま、宙へと舞った。

## 北極 アンブレラ秘密研究所

『SYSTEM: ザツ: EMERGENCY。ERECTOR: ザザツ:  
VE、CONNECT・FIRE CONTROL、SHIFT  
VOICE COMMAND・”GYGANT”STANDING』

「緊急システム、起動開始」

「電子神経接続、OK」

「火器管制システム、ボイスコマンドへ変更」

「ギガント、起動！」

ゆつくりと、歪な人型をした機械が前に一步を踏み出す。

「起動成功だ」

周囲にいた研究員が起動成功に沸く中、ギガントの頭部カメラが周囲を見回した。

「気分はどうだ？」

「最高だ。時たま頭の中にノイズが走るけどな」

カメラを覗き込んでいるカルロスに、試しに手足を動かしながらスミスは狭い機内でほくそ笑んだ。

「さっきも言ったが、本来は脳幹の運動神経中枢に改造を施してイ

ンターフェースを設ける所を、あんたの義腕の電子神経に無理矢理繋いでいるんだ。あとでどんな後遺症が起きても責任は持てないぞ」

「構わねえ、今勝てれば後はどうにでもなる」

機内の無数のディスプレイをチェックしながら、スミスが研究員の警告を聞き流す。

「取りあえず、インターフェース破損時用の緊急制御システムで動かす事は何とかなる。火器制御はボイスコマンドと併用、マニキュアルはちゃんと読んだな？」

「おう、腕から先がコントローラーで、ターゲットは声でだな。用はスーパードボットウォーズの要領でやりゃいいんだ」

「何だそれは？」

「日本のゲームだよ。レンのお勧めだ」

バリーに答えながら、スミスはギガントの右腕に取り付けられた20mmガトリングガンを向こう側のデスクに向ける。

「SET」

コマンドを入力しながら、スミスはディスプレイの中のデスクに視線を集中、それを搭乗の際に付けたバイザー型FCSが感知して、自動的に照準を設定する。

「FIRE！」

発射コマンドを入力すると、途端に銃口から20mm炸裂弾が連射され、一瞬にしてデスクはスクラップへと変わり果てる。

「ハ！こいつは最高だ！」

「ある程度なら脳波制御も可能だが、ボイスコマンドを最優先に設定しておいた。あとは君次第だ」

「OK」

スミスがギガントの右手を持ち上げると、格闘戦用のマニピレーターで親指を立ててみせる。

「その様子なら大丈夫のようだな。それでは、我々は約束通り退避させてもらう」

「ああ、あちこちに討ち漏らしたBOWがいるだろうから気を付ける。STARSの誰かに会ったら銃を捨てれば撃たれる事はないはずだ」

バリーの警告を聞きながら、非常時用の武器を手にした研究員達が我先に逃げ出す。

「さて、反撃開始だ」

スミスが壮絶な笑みを浮かべながら、脚部移動用ホイールを起動させた。

「鎮痛剤をこっちに！骨折処置の準備を！」

「血清を注射しときました。直に楽になります」

「輸血200ml！血液型はOのRH+！」

医務室に次々と運び込まれる怪我人を、ミリィとレベッカが中心になって応急処置を施していく。



その中には、アンブレラの警備員や科学者の姿も混じっていた。

「いやはや、とんでもない肝っ玉の嬢ちゃんだな」

「何せ、サムライの妻になろうって奴だからな」

医務室付きの医師に手当てを受けながら、クリスは次々と処置を施していくミリィを苦笑しながら見た。

最初にこの医務室に来た時、中で手当てを受けていた警備員とSARSの間で危うく銃撃戦が起こりかけたが、彼女の一喝で医務室周辺は中立地帯として扱われる事になっていた。

「あんたもこちらの手当てをしてくれてるのは何でだ？」

「そちらが派手にやってくれたお陰で、制御システムがあちこち壊れてるんだ。ここにもいつ暴走したBOWが雪崩れ込んでくるから分かん。生き残るには戦える人間に一体でもBOWを減らしておいてもらわんとな」

包帯を巻き終えた医師が溜息混じりに呟く。

「盾は多い方がいい、という訳か」

「そう取ってもらって結構だ。この状況でウソを言える程器用でもないんでね」

クリスの手当てを終えた医師が、別の怪我人の手当てを始めようとした時、誰かの悲鳴と爆発音が通路から響いてきた。

「ネメシスだ！」

別の誰かが絶叫する。

爆煙が立ち込めている医務室の入り口から、全身を黒いコートで

覆い、片目にスカウターのような物を付け、手に大型で妙に長い口  
ケットランチャーを持ったネメシス　Ｔ型が、その砲口を医務室内  
のＳＴＡＲＳへと向けようとしていた。

「馬鹿！オレ達は敵じゃないぞ！」

ベッドに寝ていた包帯だらけの警備員が叫ぶが、目標の殲滅以外  
の判断が出来ないネメシス　Ｔ型はためらわず、狭い室内に砲口を  
向けてトリガーを引こうとする。

「くっ！」

何人かが銃を向けた時、突然ネメシスの頭部を何かが貫く。

「？」

皆が疑問符を頭に浮かべる中、頭部を貫かれたネメシス　Ｔ型が  
通路の床へと倒れ伏す。

その上を、鮮血に濡れた長大な爪を持った人影が越えて室内を覗  
き込む。

『シエリー！？』

その姿を見たＳＴＡＲＳメンバー達が驚愕する。

そこには、全身に有機質のプロテクターとも、巨大な硬質のヒル  
とも取れる奇怪な物をまわり付かせたシエリーの姿があった。

「どうしたのその格好！？」

「ベルセルクか……………」

レベツカの問いを、彼女から手当てを受けていた研究員の呟きが答えた。

「何だそれは？」

「人間に寄生して宿主にタイラント級の戦闘力を与える事が出来るBOWの亜種と思えばいいです」

シェリーが説明しながら、右腕を覆っているベルセルクから伸びた爪を内部へと収納する。

だが、先程呟いた研究員が声を荒げながらシェリーへと詰め寄る。

「それがどんな物か本当に分かっているのか！もしベルセルクの生み出す筋力に体が耐え切れなければ手足が千切れ飛ぶかもしれないんだぞ！？」

「私ならそれに耐え切れるはずです」

「それだけじゃない！そいつは着用者に文字通り寄生する！使い過ぎれば衰弱死の可能性だって…」

「計算上、可能な連続戦闘時間はあと40分弱……」

「そこまで分かっている……」

冷静に答えるシェリーに、研究員は声を失う。

その肩を、手当てを終えたクリスが叩いて首を横に振る。

「さて、約束の時間まで残り少ない。反撃に移るぞ」

「でも、武器が……」

「これを」

シェリーが、背中に背負っていたケースを床に置くと、それを開ける。

そこには、対BOW用にアンブレラ内部で開発されたりニアランチャーや、最新型のOICWがぎっしりと詰まっていた。

「どこからこれを？」

「トムおじさんから、パパの同僚だった人から、ベルセルクだけじゃ足りないだろうからって言われて、武器庫の場所を教えてもらったんです。残りはクレアが……」

「ぶ、武器持ってきたわ……………」

その時になって、ようやくシェリーの後にいたはずのクレアが、シェリーと同じケースを背負って荒い息をしながら室内へと入ってきた。

「どうした？」

「あ、あの子、ノーベル賞と金メダルが同時に狙える……………」

息も絶え絶えになりながら、移動速度の違いからシェリーに置いてけぼりにされそうになったクレアがケースを床に下ろすと、なんとか呼吸を整えようとする。

「とにかく、人数分にはちよつと足りないけど、これで何とかなると思うわ。高速グレネード弾なんて物まであるから……………」

「いや、オレはこつちを使おう」

クリスが、通路に倒れているネメシスのロケットランチャーを取ろうとする。

そこで、ロケットランチャーから伸びている給弾チューブラしき物が、その背中の巨大なバックパックに繋がっている事に気付く。

「これは？」

「"ブリーナク"、付属AIが目標を自動判別、最適な弾丸を自動選択して発射するネメシス用の装備だ。自重がかなりあるから人間が使うには向いてな…」  
「よつと」

説明をする研究員の前で、クリスが勝手にバッグパックを背負う。

彼の筋肉質の背中からみ出す程巨大なバッグパックの重さによりめきそうになりながらも、クリスはランチャーの方も手にする。

「で、どう扱えばいい？」

「……そのスカウターがFCSに直結している。敵にランチャーを向けてスカウターに映っているターゲットが点滅すればターゲットロック完了だ」

「戦闘機と同じか」

「元はそれだからな」

クリスが説明を受けている脇で、STARSメンバー達が自分の分を取ると、初弾をチェンバーに送ったり、リニアランチャーのカタパルトスイッチを入れたりして準備を進めていく。

そんな中、ミリイが手当ての手を止めて、シェリーに歩み寄り、その手を取る。

「あたしは、ここに残るわ」

「えっ……」

「医者が怪我人の傍を離れる訳にいかないの。レンの事、お願い…」

「……」

奇怪な肉に覆われたシェリーの手を嫌悪する風情も無く、ミリイ

はその手を握り締める。

「はい……」

シェリーは呟くように答えると、彼女に背を向けて走り出す。

「何人が護衛の為にここに残れ。指揮はジルに一任する」

「分かったわ」

重傷を負いながらも、銃を手放さないジルがクリスの指示に頷く。

「行くぞ！」

『おお！』

シェリーを追って走り出したクリスの後を、あちこちに包帯を巻いた痛々しい姿にも関わらず、意気の衰えないSTARSメンバーが続く。

彼らを見送った後、ミリイはしばし無言で彼らの出て行った扉を見つめていた。

（レン、死なないで……）

彼女の左手の薬指にはめられた指輪が、室内灯の明かりを受けて微かに光った。

「はっ！」

風切音を立てながら飛来した数本の爆薬入りナイフが、隊列を組んでレンに迫ってきていたレギオンの間に収まるようにして地面に連続して突き刺さり、次の瞬間には同時に爆発する。

体の両脇から同時に架かった爆圧に耐え切れず、迫ってきていたレギオンの集団が碎片となって弾け飛ぶが、さらに別の集団がレンへと襲い掛かってきた。

「くっ……」

今の攻撃でナイフを全て使い切ったレンが、サムライソウルを口に咥えると空いた左手でヒビが入ってきていた額当てを剥ぎ取る。

そして、その裏に隠されていたスイッチを強く押し込むと、額当てを迫り来るレギオンの中心に投げ込み、僅かな間を置いて額当てに仕込まれたC20爆薬が爆発、レギオンを数体まとめて吹き飛ばした。

「奥の手だったんだがな……」

肩で呼吸しながら、レンが大通連とサムライソウルを構える。

その姿は片袖は半ばから千切れ、その下のチタンプロテクターもひび割れ、砕け散っている物まで有る。

体のあちこちにある裂傷からは血が滴り、かわし切れなかった溶解液で腐食したアンダースーツからはきな臭い匂いが漂っていた。

「三分の一は倒したか？」

満身創痍その物の姿で、レンは今だ数多くいるレギオンに相対する。

「そろそろ、一時間か……」

ちらりと扉の方をレンは見るが、すぐに視線を敵へと戻した。

「約束は果たした……あとはオレの運次第か……」

自嘲気味に呟きながら、レンは刀を構え直そうとした時だった。

突然、レギオンは二つの集団に分かれると、片方は扉へと殺到し、片方はレンへと一斉に襲い掛かる。

「そう来たか!!」

レンは扉に殺到するレギオンの集団にサムライソウルを連射するが、その程度で止まる訳は無く、それを遮るようにレンへと襲い掛かってきた集団が周囲を取り囲む。

「邪魔だ!!!!」

弾切れを起こしたサムライソウルを懷にしまうと、レンは鞘を左手で素早く抜くと、胸の前にかざして納刀すると、一息だけ息を吸う。

「あああああああ!!!!!!」

納刀した刀を腰だめに構えながら、レンは最初は呟くように、そしてじょじょに大きくなっていく雄たけびを上げながら、抜刀した。

繰り出された刃が間近まで近寄ってきたレギオン数体の頭部を斬り離す。

瞬時にして刃は鞘に戻り、そしてまた繰り出される。



「あああああ！！！」

絶叫と言っても過言ではない雄叫びと、連続で繰り出される完全  
に防御を無視した連続居合、光背一刀流《輝連閃》きれんせんがレンに迫り来  
るレギオンを次々と斬り捨てるが、それを切り抜けるよりも、扉に  
向かったレギオンが融解液を扉に吐き出す方が早かった。

「しまった……………」

レギオンの群れが室外へと飛び出すのを、進路を塞ぐ別のレギオ  
ンの背後に見たレンが齒軋りした時、突然通路から爆風と共に飛び  
出したレギオンが肉片となって弾き出される。

「レン！生きてるか！！！」

「スミスか！？」

融解液で消滅した扉から、出ようとしたレギオンを叩き返したギ  
ガントが内部へと入ってくる。

その姿を見たレンが、それから響いてい来るスミスの声に安堵と  
驚愕の混じった声を漏らした。

「後は任せる！さっきのお返しだ！FULL ARM SET！」

ボイスコマンドに応じて、脚部から姿勢維持用のアンカーが飛び  
出して地面に突き刺さり姿勢をロック。続いてギガントの両肩のツ  
インリニアランチャーが、右腕の20mmガトリングガンが、左腕  
の120mm滑空砲が、腰部の小型ミサイルランチャーがFCSか  
ら送られたスミスの視線に応じて、レンを除いた全てをターゲット  
イングする。

「FULL FIRE!!」

ギガントの全火器が一斉に火を噴く。

プラズマ弾が、20mm炸裂弾が、120mm砲弾が、小型ホーミングミサイルが次々とレギオンの群れに着弾し、それらを木っ端微塵の肉片にしながら周辺を血と火の海へと変えていく。

「ザマ見やがれ!」

「どこからそんな物を……………」  
「もらった」

一斉射撃（というよりは砲撃）の合間をくぐって、転げるようにギガントの傍に下がってきたレンが呆れたような顔でギガントを見る。

「あとはオレに任せろ! エースがバテたからにはリリースの定番だから! WHEEL ON!」

アンカーを解除して、移動用ホイールを起動させると、スミスはギガントの群れへと突っ込んでいく。

「ば、馬鹿! そいつら相手に突っ込むな!」

レンが慌てて後を追おうとするのを、その背後から来た何かが猛スピードで通り過ぎ、ギガントの後ろへと続いた。

「今のは……………」

「FIRE! FIRE! FIRE!」

ギガントを高速移動させながら、スミスが次々とレギオンを屠っていく。

だが、その火力に酔いしれていたスミスの目に、的確に円陣を組んで一斉攻撃してくるレギオンの姿と、ディスプレイの端に映るターゲッティング不能の警告が同時に飛び込んできた。

「やば…」

スミスが強引に機体を旋回させてそちらに銃口を向けようとした時、突然そのレギオンを上から何かが貫いた。

「え？」

スミスが銃撃を緩めずに、左面部ディスプレイに映るそれを見た。続けて、上から降りてきたそれが、レギオンの頭部に長い爪を突き刺し、完全に絶命させる。

「シ、シェリー！？」

「援護します！」

爪を引き抜きながら、シェリーが左腕を覆うベルセルクから生えているネメシスの物そっくりの硬質の触手を手元へと戻し、左手に力を込めると右手と同じような爪がベルセルクから突き出てくる。

「はあっ！」

シェリーがギガントの肩を借りて、宙へと踊り出す。  
ベルセルクの強化細胞が与える驚異的筋力で周囲を取り囲んでい

たレギオンの更に上を取ったシェリーが、触手を一斉に繰り出す。予想外の攻撃に対処出来なかったレギオン数体が頭部を貫かれ絶命する中、シェリーは宙に浮かんでいたレギオンの背中に自由落下の過重をかけて一気に圧し掛かる。

バランスを崩したレギオンともつれるようにシェリーも落下するが、地面に追突する寸前、素早く体を入れ替えたシェリーの膝と、足を覆うベルセルクから伸びた角がレギオンの頭部を貫いていた。

「光背流拳闘術、《雷光破》」

技の名を呟きながら、シェリーがレギオンの死骸から離れる。

その隙を狙って近づいて来ていたレギオン二体が、プラズマ弾の直撃を受けて消し飛ぶ。

「やるな」

「そちらこそ」

「二人とも伏せろ！」

そこへ、クリスの怒声と共に、何かが二人の頭上を通り過ぎる。

シェリーがその場に伏せ、スミスが慌ててギガントを高速バックさせた所で、ブリューナクから放たれたマイクロミサイル（内部の小型ミサイルを敵陣中央でばら撒く特殊な多弾頭ミサイル）が一斉に内部のミサイルをレギオン達の中央でばら撒いた。

「二人とも下がれ！巻き込まれるぞ！」

クリスの指示に従い、スミスとシェリーが手近のレギオンを屠りながらなだれ込んできたSTARSメンバー達の元へと戻る。

それを追ってきたレギオン達の目前で、STARS全員が銃口を向ける。

「撃て!!」

クリスの号令と同時に、全ての銃口が一斉に弾丸を吐き出した。高速グレネード弾とプラズマ弾の嵐がレギオンの強固な甲殻を貫き、それを潜り抜けた物にはブリューナクから放たれるマイクロミサイルとホーミングミサイルが襲い掛かる。

「はっ!」

「やあっ!」

「おらあっ!」

地中や上空から急接近してきた物には、大通連の刃とベルセルクの爪、ギガントのナックルが斬り捨て、貫き、叩き潰す。

「攻撃の手を緩めるな!反撃の機会を与えたらこちらの負けだ!」

人間が扱うには巨大過ぎるブリューナクを気力と体力で強引に撃ちまくりながら、クリスが叱咤する。

猛烈なSTARSの攻撃に、最初の三分の一以下にまで数を減らしたレギオンが、急に退き始める。

「逃げるぞ!」

「違います!隠れてゲリラ戦に持ち込む気だと思えます!」

カルロスの指摘を、シェリーが訂正する。

「マズイ!隠れたらまたさっきの二の舞いだ!」

「追撃を...」

「どけえっ!」

追撃を架けようとする皆を押し退けるように、スミスがギガントを前に出して停止させる。

「なめるな虫が。 GYGANTIC BRAST SET!」

ボイスコマンドに応じて、ギガントの姿勢維持用アンカーが脚部を固定し、胴体部が変形していく。

胸がせり上がり、中心部にプラズマ加速用の炉心が飛び出す。

周囲の装甲がそれを覆うように展開し、やがてそれは砲塔と化した。

「TARGET WIDE RANGE、SET!」

「PLASMA REACTOR、OVERLOAD・CRITICAL LIMIT COUNT（プラズマ・リアクター、最大出力。臨界カウント開始）」

ギガントの制御コンピューターが、動力のプラズマリアクターを最大出力まで上げていき、それに応じてギガントの砲身が閃光を帯びていく。

「おい、それは!」

「みんな目を瞑れ!」

カルロスとバリーが慌てる中、カウントが開始される。

「3, 2, 1, 0」

「GIGANTIC BRAST! FIRE!」

スミスが、トリガーコマンドを叫ぶ。

ギガントの最終兵器、艦砲射撃級の破壊力を持ったプラズマカノン、”ギガンティックブラスト”が、最大出力まで高められたプラズマの槍を眩い閃光として撃ち出した。

ターゲットをワイドレンジにセットされたギガンティックブラストが横なぎに発射され、隠れようとしたレギオン達を一瞬にして蒸発させていく。

閃光が晴れ、皆がゆっくりと目を開けると、そこには完全に荒野と化した室内と、強制冷却に入ったギガントの姿が有った。

「ス、スゴイ……………」

「こんな化け物何に使ったもりだったんだ……………」

先程まであったはずの市街地のセットや、林が完全に消滅しているのを見たSTARS全員が絶句する。

「思い知ったか、クソが」

「おい！そいつは二回しか使えないって言われてただろうが！」

「……………中の方は大丈夫か？」

カルロスが怒鳴り、バリーが心配そうにギガントに近寄る。

「中は一瞬でサウナになった以外は大丈夫。頭の中は電波受信しっ放しになったか？」

それを聞いたレベッカとレンの顔色が一瞬で変わった。

「電波つて、脳に影響が！？」

「スミス！すぐにそいつを降りるんだ！」

「やなこと」

「スミス！」

レンが詰め寄るが、スミスがそっぽを向く。

「私も降りた方がいいと思います！後でどんな障害が出るか分かりませんよ！」

「スミス！降りるんだ！」

「で、またお前一人やバイ目に会わせるってのか？冗談じゃねえ」

レンへとギガントを向かせながら、逆にスミスが詰め寄る。

「レン、何度も言うが一人でカッコつけるな。お前だけじゃねえ、オレも、シェリーも、そしてみんなもここには命賭けて来てるんだ。先が恐いんだったら、アメリカでおとなしく警官やってるさ」

「その通りだ」

バリーが感慨深げに頷き、皆もそれに同意していく。

「確かに、後の事は後で考えりゃいいさ」

カルロスがレンとスミスに苦笑を向けながら、先へと続く扉を見た。

その視線の先で、ゆっくりと扉が開いていく。

「最終ステージへの御招待か？」

スミスがギガントの残弾モニターをチェックしながら、重々しい音を立てて開いていく扉を睨みつける。

「余興にも飽きたしな。土産貰ってとっとと帰ろうぜ」



カルロスが残った弾丸を全てマガジンに込めていく。

「二次会は、こっちで勝手にやる事だしな」

レンが傷口に救急スプレーを吹き付け、刃の損傷の有無を確かめながら補充分の45ACP弾を受け取る。

「主催者に丁重なお礼を言わないとな」

バリーがM60に最後の弾帯をセットする。

「準備はいいな。突……」

クリスが突入命令を出そうとした時、いきなり皆の背後の地面が盛り上がり、そこから生き残りのレギオンが姿を現す。

「まだいたのか!？」

何人かが振り向いて銃口を向けようとした瞬間、一発の銃弾が正確にレギオンの頭部を貫いた。

「……………オレは置いてけぼりか?」

レギオンのさらに背後に、アークから肩を借りながら、デザートイーグルを構えているレオンの姿が有った。

「残った招待客を無視するのはマナー違反だろうが」

「レオン!その怪我……………」

クレアが傷だらけのレオンを危惧するが、レオンの瞳からは未だ

闘気が衰えていないのに気付くと、それ以上はあえて口を閉ざした。

「さて、メインイベントの始まりか？」

アークがアーウエン37のセーフティを外す。

無言で、先頭に立ったレンが一步を踏み出し、シェリーがその後ろに続く。

誰もが無言で、ゆっくりと歩いて先へと進んでいく。

そして、開いた扉をSTARSメンバー全員が潜つたのを確認すると、その直ぐ先に有ったもう一つの扉の開閉スイッチをレンが叩き押す。

扉がゆっくりと開いていき、そこから光が漏れ出す。

そして、その先にあつた光景に、全員が絶句した。

「な……………」

「なんだ……………アレは……………」

先程の部屋と違い、大きな吹き抜け状となつたホールの中央に、それは有つた。

レンが無言で歩み寄り、それが収まつた巨大なカプセルに触れる。

「こいつか……………オレ達を見ていたのは……………」

それは、巨大な樹木にも見える、奇怪な塊だつた。

培養液か何かが満たされているカプセルの中に、鉱物にも有機物にも見える奇怪な光沢を持った表皮に覆われたそれは、胴体のあちこちからツタとも触手とも取れる物が突き出し、よく見ると微かにあちこち明滅しているようにも見える。

「何なんだ？これは？BOWか？」

「こんなデカイだけのが？」

「いや、それ以前に生物なのか？」

カルロスが無造作にカプセルを叩いてみるが、それは反応もしない。

「なんか名前みたいなのが書いてます。ク、クト……」  
「クトウルー」

カプセルの手前に立てられたプレートを覗き込んだシェリーが見た文字を、レンが正しく読み上げる。

「クトウルー？新種のカレーの元か？」

「いや、稀代のオカルト作家、H・P・ラブクラフトが作り上げた独自の神話体系に出てくる海を司る邪神の名だ」

「その通り」

スミスに説明するレンの言葉を、何者かが肯定した。

一瞬で全員の銃口が声の方向を向く。

無数の銃口と視線に晒されながらも、ホールの上から伸びる螺旋階段をゆつくりと、その人物は降りてくる。

「ダーウィツシュ・E・スペンサー！」

「いかにも、私がダーウィツシュだ」

階段の途中のフロアに足を止め、その20代くらいにしか見えな  
い若い男、アンブレラ製薬代表取締役、ダーウィツシュ・E・スペ  
ンサーはSTARSメンバーを見下ろす。

「ダーウィツシュ！お前には人体実験示唆、殺人、誘拐示唆を含む42の罪状でICPOから国際指名手配が出ている！おとなしくする事だ！」

「そんなに慌てる事は無い。主催者のあいさつが終わってからでもいいのではないか？」

「今更何を……」

クリスの警告に侮蔑とも取れる微笑を浮かべながら、ダーウィツシュは指を一つ鳴らすと、ホールに軽快なクラシック音楽が流れ始めた。

「さて、ここまで来た君達に一つのクイズを出すでしょう」

「こいつの事か？」

レンが鋭い視線をダーウィツシュに向けたまま、親指でクトウルⅠの入ったカプセルを指差す。

「ヒントはすでに与えている。それが何か、答えられるかな？」

「ふざけるな！！」

スミスが激昂してギガントの全銃口を向けるが、狙いを定めようとした所をレンが、カメラアイを手で遮って止めさせる。

「バッハのブランデンブルグ協奏曲二番か……」

「それって、地球を代表する音楽としてボイジャーに積まれた曲？」

「それがなんだと言うんだ！」

クリスが声を荒げる中、レン一人がゆっくりとクトウルⅠを見た。

「そうか、そうだったのか……………こいつは、そしてＴ ウイルスの正体は……………」

「気付いたようだな、サムライ」

「ああ、クトウルの名とこの曲の共通点はただ一つ……………」  
「まさか……………」

レンの呟きを聞いたシェリーの顔色が、ゆっくりと変わっていく。

「なんだよ、なんだってんだよ？」

「仲間に教えてあげたらどうだね？クイズの答えを？」

薄い嘲笑と共に響くダーウィツシュの声を静かに聞きながら、レンはゆっくりと口を開いた。

「Ｔ ウイルスは感染したキャリアに急激的な変化、成長を促す。だが、逆にキャリアが急激的に変化しなくてはならない状態下にある、その媒体となる物を欲しなければならぬ空間が有ったとしたら？超高温と絶対零度が同時に存在する場所を潜り抜けなくてはならないとしたら？そして数多の進化と共生がそれを可能とする物を生み出した……………」

「何の事だ？」

「超高温と絶対零度なんて物、同時に存在する訳が……………」

「……………在ります。ただ一箇所だけ」

「でも……………まさか」

レンの言わんとする事に気付いたシェリーとレベッカが、驚愕の表情でクトウルを見つめる。

「古代に天空から飛来し、恐竜達を滅ぼしたとされる邪神クトウル  
ー、宇宙人へのメッセージとして送られたブランデンブルグ協奏曲、  
それらが指し示すそいつの正体……そしてＴ ウイルスの元となっ  
た始祖ウィルスの正体は……地球外生命体だ!!」  
『なにいいっ!?!』

レンの言葉に、STARS全員が驚愕する。

「馬鹿言っなよ、地球外生命体なんてSFの話だろうが」  
「そう考えるのが一番つじつまが合う」

スミスの意見を、レンは完全に否定する。  
そこに、乾いた拍手が響いてきた。

「見事、正解だよ。1932年、南米ユカタン半島の海底からこれ  
は発見された。そしてそれから採取され、我が祖父オズウェル・E・  
スペンサーによって改良された物こそが、Ｔ ウイルスなのだよ！」

「じゃあ、オレ達は……」

「エイリアンと戦っていたって言うのか!?!」

愕然とするSTARSメンバーを見下ろしながら、ダーウィッシ  
ュは不敵な笑みを浮かべる。

「……………だから、どうしたってんだ?」

スミスの低い声が、周囲のざわめきを打ち消していく。

「これがエイリアンだろうが、ETだろうが、オレの知った事じゃ

ねえ。分かっているのは、てめえが絶対に許せねえ奴だって事だ！ FIRE！」

ギガントの銃口が、一斉に火を噴く。

その轟音にかき消されるように、小さな指鳴りが重なったのに気付いた人間はいなかった。

そして、爆炎が晴れた時、何処から現れたのか、ダーウィッシュを守るようにして二体の大型レギオンが立ちはだかっていた。

「な！？」

「紹介しよう、私の両腕、”アザゼル”と”メタトロン”だ」

「最強の悪魔と最強の天使か、悪趣味な名前だな。じゃあお前はYHVHか？」

「いや、私は”セラフイム”だ！」

ダーウィッシュが、レンの擲楯に反論しながら、片手を振るう。

そこから飛んだらしい体液が、宙で突然発火し、業火と化してSARSメンバーを襲う。

「はっ！」

レンが刃を振るい業火を空中で二つに両断し、両断された炎は勢いを失って失火する。

「その能力！貴様T ベロニカを！？」

「でも、あれは長期の安定が必要のはず！？」

それを見た事のあるクリスとクレアが驚愕する。

「分かったぞ、T ベロニカ仕様の培養クローンに脳を移植したの

か！」

レオンが叫びながら、デザートイーグルを構える。

「正確には記憶データを転写したのだよ。君らが考えているよりも、我が社の技術は優秀でね」

両手に炎を灯しながら、ダーウィツシュは哄笑を上げる。

「さあ、ラストステージだ！我が社の技術が勝つか、君達の正義が勝つか、証明してみたまえ！」

「正義を名乗る気なぞ元から無い！」

レンが、サムライソウルのトリガーを引くのと、アザゼルとメタトロンが動くのは同時だった。

「撃て！」

クリスの号令と同時に、無数の弾丸が三体の怪物を襲う。

だが、前面へと躍り出した近接戦用重甲殻レギオン”アザゼル”が、ほとんどの弾丸を弾く。

「どうした！君達の力はそんな物か！」

「見せ場は盛り上げるもんだろっが！FIRE！」

スミスがギガントの120mm滑空砲をダーウィツシュに向けるが、その前に3対の羽を羽ばたかせて立ちはだかった”メタトロン”が、突然発した耳障りな騒音と共に、砲弾が空中で爆散した。

「なん、あ！？」



それと同時に、耳障りな音が周囲に響き、スミスの脳内を凶悪な騒音が満たす。

「が、うあああああ！！」

「スミス！」

「まさか、超音波兵器！？」

それが何か気付いたレベッカが驚愕する中、絶叫を上げるスミスを見たカルロスが、メタトロンへと向けてOICWの銃口を向けるが、そこに飛来した業火がカルロスを襲う。

「くそっ！」

反射的に横へと飛んだカルロスが、グレネードランチャーのトリガーを引き、発射された高速グレネード弾がメタトロンに炸裂。

一瞬音が途切れた隙にスミスが一度後ろに下がって聴覚の回復を待つ。

「近接用と遠距離用、両極端なレギオンとの完璧なフォーメーション攻撃か……… やっかいだな」  
「来るぞ！」

レンが敵を冷静に分析している所へ、レギオンがその背中に生えている巨大なムカデを思わせる触手を繰り出してくる。

「この野郎！」

スミスがとつさにギガントをダッシュさせ、その重装甲で触手を受け止めた。

「スミス！」

「こいつはオレが相手する！他のを頼む！」

ギガントのアクチュエーター（機械の関節機構の事）がそのパワーをマックスにまで高め、一気にアザゼルの体をぶん投げる。

宙を飛んだアザゼルの巨体が壁へと激突するのを待たず、スミスが全銃口を照準すると一斉に銃火を浴びせ掛けた。

「FULL FIRE！FULL FIRE！FULL FIRE  
！」

ホールを銃声と爆音、そして爆煙が吹きすさぶ。

「ほう、ギガントをそこまで扱えるか……………」

スミスの戦い振りを見ているダーウィッシュの元に無数の銃撃が浴びせられるが、それをメタトロンがことごとく弾き、爆散させていく。

「ダメだ！あのデカ物が邪魔だ！」

「邪魔なら、どかす！」

レンが白刃を手に、メタトロンへと突撃を掛ける。

「それで、どうすると？」

「こうする」

メタトロンが、セミなどに見られる体腔内の拡声器官を鳴動、超高音域による原子振動をもたらす高周波を突撃してくるレンへと向

けるが、レンは左右に小刻みに跳んで負傷を避けていく。

「物は音でも、指向性を持たせなくては攻撃兵器としては使えない。ならばかわすのは簡単だ」

「ほほう、ではこれは！？」

ダーウィツシュがレンへと異常高温と可燃性の分泌液を複合させた業火を放つが、レンは一刀の元に業火を斬り捨てる。

「今だ」

「はいっ！」

その一瞬の隙に、レンの背後に隠れていたシェリーが、ベルセルクの増強筋力をフルに活動させて、ダーウィツシュへと襲い掛かる。

「はあっ！」

「残念」

シェリーが突き出した爪が届くよりも速く、ダーウィツシュの手がシェリーの手首を驚異的な握力で掴み取る。

「罰ゲームだ」

ダーウィツシュの手の平が炎を上げ、シェリーの腕から一気に体へと燃え広がる。

「シェリーー！！」

クレアの絶叫が響く中、シェリーの体が投げ捨てられ……そして

宙でトンボを切ると床へと着地、それと同時に燃え尽きたベルセルクの表面が剥がれ落ちてそこから軽い火傷を負っただけのシェリーが現れる。

「なるほど、ベルセルクの細胞活性で防いだか……面白い、いい研究材料になりそうだ」

「お前がな！」

クリスがブリーナクの砲口をダーウィツシュにポイント、トリガーを引いた。

発射された小型ミサイルが目標の寸前で近接信管を発動させ、爆炎と直接殺傷用のニードルをばら撒く。

避けるに避けきれず、無数のニードルがダーウィツシュの体へと突き刺さった。

「やったか！」

「いや……」

レンが用心深く刀を構え直す。

その目前で、ダーウィツシュが平然と体に突き刺さったニードルを抜いていき、そしてニードルによってついた傷が瞬く間に塞がっていく。

「化け物が……」

「なかなか痛かったよ。じゃあ、第二ステージだ！」

叫ぶと同時に、ダーウィツシュの背中からトンボを思わせる羽根が飛び出し、その体が宙へと舞い上がる。

「さあ、受け取ってくれたまえ！」

STARSメンバーの上空を取ったダーウィツシュが、手の平に大量の可燃体液を分泌させ、それを雨のように降らせた。

落下する途中で発火した体液が、炎の絨毯爆撃となって激戦を繰り広げるSTARSメンバーへと降り注ぐ。

「ぐわああああ！」

「きゃああああ！」

絶叫が上がり、かわし損ねた者達が火達磨になるが、その数はダーウィツシュの予想より少ない。

「おや？」

下を見下ろすしたダーウィツシュの目が、降り注ぐ途中でいきなり二つに分かれ、燃え尽きる炎を捕らえた。

「無駄だ。五行相克思想に置いて火気を克すのは水気。我が流水の剣に火は効かん」

「君には、だろう！」

再度炎の雨をダーウィツシュは降らせるが、そこに下から飛来した小型ミサイルと無数のグレネード弾が衝突し、業火の高温で爆発したミサイルとグレネード弾の爆炎が炎の雨を吹き飛ばし、相殺する。

「同じ手が何度も使えと思うな！」

クリスがブリューナクをダーウィツシュへと向けながら叫ぶ。

「なるほど、少し君達を甘く見ていたよう…」

そう言いながら下へと降りようとしたダーウィツシュの胸を、一発の50AE弾が貫いた。

「油断し過ぎだ」

正確に上空のダーウィツシュの心臓を狙撃したレオンが、デザートイーグルのサイト越しにダーウィツシュを睨みつける。

「なるほど、CIAの不死身のレオンか。噂通りの腕前だな」

口から一筋の血を流しながら、ダーウィツシュがレオンに興味深げな視線を向ける。

そして、心臓を貫いたはずの傷までもが、脅威的なスピードで埋まっていった。

「残念だが、その程度の破壊力ではな」

レオンが、奥歯を強く噛み締めながら、再度トリガーに力を込めた。

## 最終章『輝ける星達（後編）』

同時刻

アメリカ サウスタコダ州 アンブレラ製薬サウスタコダ研究所

「ぜえっ……………はあっ……………」

爆発が連続して起こる研究所を前にしながら、荒い呼吸をしているSWAT隊長が地面に大の字になって転がっている。

「本気で自爆してやがるな……………」

「マッド系はこれだから……………」

炎上していく研究所を呆然と見ながら、脱出に成功したSWAT隊員達は逮捕者を護送車に押し込んだり、負傷者の搬送手続きを取ったりと後処理に奔走していた。

「隊長！州軍が現場処理のために出動したそうです！あと15分後に到着予定！」

「そうか……………」

なんとか呼吸を整えたSWAT隊長は、その場から立ち上がるとおもむろに装備の確認を始める。

「隊長、何を？」

「決まってるだろ、スミスの助っ人に行く」

「北極までですか！？」

「ちゃあんと知り合いに飛行機の手配は頼んでおいた。署長の許可はねえけどな」

啞然としている隊員に笑みを返ししながら、S W A T隊長は弾丸を装填し、予備弾をタクティカルベストに突っ込んでいく。

「野郎共！あとは州軍に任せとけ！スミスの助太刀に向かうぞ！」  
『おー！！』

疲弊しているにも関わらず、S W A T全員が拳と握り締められた銃を高く天へと突き上げた。

同時刻

日本 京都 アンブレラ製薬丹波研究所

「時間です」

「……………」

発動した自爆装置が研究所を跡形も無く吹き飛ばしていく光景を、全身に返り血を浴びた徳治はただ無言で見詰めていた。

「上からは研究所の自爆は極力回避しろとの命令だったのですが………」

「あんな物は無くなってしまった方がいい。すでに刑事事件としての証拠は充分そろってるだろうし、それ以外の物は必ず後の禍根になる」

「はあ……………」

S A T隊長が少し釈然としない顔で徳治を見ていたが、やがて火災処理の指示を出すためにその場を離れた。



一人残った徳治は、ふと何かに気付いたようにそはや丸を腰から抜くと、それを少しだけ鞘から抜く。

その刃は、何かに呼応するように自らが微かに鳴動していた。

「お前はまだ戦っているんだな、練……………」

北極 アンブレラ秘密研究所

アザゼルの背から伸びる触手が次々とギガントに襲い掛かり、その先端にある無数の牙が並んだ顎が、ギガントの装甲に食らいつく。

「このっ！」

スミスが必死にアームを動かして触手を振り払おうとするが、払い除けた触手はすぐさま別の角度から襲い掛かり、装甲を削り取っていく。

「SET！」

ギガントの武装を照準しようとするが、右腕の20mmガトリングガン以外は暴発危険距離を表示して機能しない。

「このジャンクが！FIRE！」

触手の一つに零距离で20mm弾が連射され、その触手は数秒銃撃に持ちこたえたが、やがて耐え切れず爆発するように千切れ飛ぶ。

だが、まったく怯まないアザゼルが、通常のレギオンよりも更に巨大なハサミでギガントの胴体を挟み込んだ。

「このおっ！」

ギガントのアームがハサミを掴み、こじ開けようとするが、予想以上に強い力で互いが拮抗し、そして徐々にギガントの胴にハサミが食い込んでいく。

『EMERGENCY……ザザザッ……RMOR OVER DAM  
AGE……（警告……体部装甲強度限界突破……）』  
「分かつてる！」

内部ディスプレイに胴体部装甲が損傷しつつある事を示す警告ウインドウが表示されるが、アザゼルの圧倒的なパワーの前に、ギガントは段々押されていく。

「目えつぶれっ！！」

そこに、カルロスの声と共に、ありったけの手榴弾がギガントとアザゼルの頭上に降り注ぐ。

「ちよっ……」

スミスの声は、連続した爆発音に打ち消され、ギガントとアザゼルの姿は炎に飲み込まれる。

爆発が止み、煙の中から全身の装甲を煤けさせたギガントがバツクで飛び出してくる。

「オレを殺す気か！」

「マニュアルにグレネードの直撃位はダメージにならないって書いてあったろっが！」

「単発でだろ！ダメージでセンサーが一つ死んだ！」

次々と表示される警告ウィンドウをチェックしていたスミスが悪態をつきながら、ふと前部ディスプレイを見た時、晴れていく煙の中に、悠然とこちらを見ているアザゼルと目が合った。

至近距離で同時爆発が起こったせいか、甲殻に埋もれるようにある頭部に三対並んだ複眼の一つが潰れ、そこから体液が流れだしているのが見て取れるが、それ以外はダメージらしいダメージは見受けられない。

「痛み分けか……第二ラウンド……」

スミスがギガントの両腕の兵装をアザゼルに向けようとした時、突然機内に警告音が鳴り響き、サーモグラフィセンサーが白く染まった。

「なんだ！？」

そこで、ダーウィツシュの降らせた火の雨が頭上から降り注ぐ。

「これくらい！SET、FIRE！」

20mm炸裂弾と120mm砲弾が同時に放たれるが、炎による高温と視界不良が照準を狂わせ、アザゼルの両脇を弾丸は通り過ぎ、背後の壁に当たって爆発した。

『ザザ……SURFACE ABNORMAL HIGH TEM  
…ザザザザ……RE・COOLING DEVICE OVER』

EFFECT（表面温度異常……値。冷却装置の性能限界値突破）』

「機械が熱がるな！」

「いや、精密機器に温度変化は大敵だよ」

いきなり聞こえたダーウィッシュの声にスミスが後部モニターをチェックしようとした時、背後から浴びせられた業火が機体を覆い尽くす。

「うああああああ！！！」

「スミス！」

レンがサムライソウルの連射でダーウィッシュを牽制しながら、業火に包まれているギガントへと走り寄る。

「動くな！今助ける」

レンはギガントの手前で停止すると、刃を収めて居合の構えを取る。

その場で一呼吸だけ息を吸い込むと、抜刀して連続でギガントを斬り付ける。

「なにしてんだ！？」

カルロスが驚く中、刃が再度鞘へと収まる。

「光背一刀流対妖術技、《傀儡放ち（くぐつはなち）》」

一瞬の間を置いて、ギガントを覆う炎に無数の切れ目が入り、そして次の瞬間には跡形も無く炎は消え去る。

「ふむ、斬撃で生じる真空を使って消したか……面白い技だな」  
「言ってる！」

その光景を興味深そうに見ていたダーウィツシュに向けてバリ―が中心となつて銃撃を浴びせるが、素早くその射線上に立ちふさがつたメタトロンとアザゼルが銃弾のことごとくを弾き、僅かに当たつた弾丸の銃創もすぐに塞がっていく。

「不死身か？化け物め……………」  
「いや、いくらT ウイルスの調整体でも不死身なんて事は在り得ない。何か弱点があるはずだ……………」

呆然と呟くアークの言葉に、レオンが齒軋りしながらダーウィツシュを凝視する。

「不死身なら、跡形もなく吹っ飛ばしてやる！GYGANTIC  
BRAST SET！」  
『OVER HEAT…ザザ……COOL DOWN MODE  
SWITCH OVER…ザザザザ……TEMP STOPPED（異常加……。強制冷却モード移行。……テム停止）』

スミスの期待を裏切るように、ギガントの制御コンピューターが機体の強制冷却のために全システムを一時停止させる。

「くそつ、動け！動かねえか！」

スミスが必死にギガントを動かそうとする中、完全に無防備となつたギガントに向けてアザゼルが迫ってくる。

「スミスを守れ！」

クリスの指示の元、無数の弾丸やグレネード弾、プラズマ弾までもがアザゼルに浴びせられるが、異常なまでに分厚い甲殻でそのことごとくを弾き、アザゼルがギガントへと襲い掛かる。

『COOL DOWN ENDアザザ……ALL SYSTEM  
RESTART（冷却終……全システム、再起動）』  
「SET、FIRE！」

アザゼルが襲い掛かる寸前でギガントが機能回復すると同時に、スミスがボイスコマンドを入力、両肩のツインリニアランチャーが至近距離でアザゼルに炸裂するが、高熱のプラズマ弾を食らったにも関わらず、甲殻の一部を赤熱化させたアザゼルのハサミが再度ギガントを捉える。

「これならどうだ！FIRE！」

スミスがギガントの左腕を真上へと向けると、120mm砲弾を撃ち上げる。

「何を？」

その行動をいぶかしんだダーウィッシュが砲弾の軌道を目で追い、そしてそれが天井に炸裂して破壊した大量の建材をばら撒くのを視界に捕らえた。

「ほう………」  
「スミス！！」

大量の建材がギガントとアザゼルに降り注ぎ、一瞬速くアザゼル

に建材が降り注いで力が弱まった瞬間にスミスがギガントをバックさせると、降り注ぐ建材を片っ端から破壊しながら距離を取る。

「何て無茶しやがるんだ！」

「あんな化け物と心中するつもりか！」

「ちよつと運試しただけだ」

カルロスとバリーが怒声を上げる中、スミスが悪びれず答える。  
撒き上がるホコリが一段落すると、そこにはガレキの山に完全に埋まったアザゼルの姿が在った。

「これでゲームセットだ！FULL ARM SET！」

ギガントの全兵装を照準したスミスが、僅かに除くアザゼルの頭部に狙いを定める。

「FULL FIRE！」

ギガントの全兵装が火を噴くのと、ガレキの中から奇怪な煙が噴出すのは同時だった。

最後の切り札、全身の分泌線からレギオンの使う溶解液と同種の物を霧状に噴出させる能力を使ったアザゼルが、溶解したガレキの隙間から素早く抜け出すと射線から己の体をずらした。

「なっ……」

『RIGHT ARM BULLET EMPTY（右腕兵装、弾丸切れ）』

驚愕するスミスに、20mmガトリング弾の弾切れを示す警告が響く。

「残念だったね」

上空からその様子を見ていたダーウィッシュが楽しげに呟く。しかし、その動きを冷静に見ていた二人が同時に叫んだ。

「スミス！そいつは逃げに転じた！」

「ダメージが限界に達したんです！今なら倒せます！」

レンとシェリーの声を聞いた全員が、一斉にアザゼルに銃口を向ける。

「許すと思ったかね？」

引き金を引こうとしようとするSTARSメンバーに、ダーウィッシュの火の雨とメタトロンの超音波が襲い掛かる。

「あああああああ！！！」

「はっ！」

降り注ぐ火の雨をレンが次々と斬り捨て、シェリーがメタトロンの強力な飛び蹴りを食らわせて攻撃を中断させる。

「くたばれ！」

からくも攻撃をかわしたクリスがブリューナクのトリガーを引き、発射されたホーミングミサイルがアザゼルの横っ腹に炸裂する。

「喰らいやがれ！！！」

「撃ちまくれ！」



カルロスとバリーが中心となっておりあらゆる銃撃を収束させるが、体中から甲殻の破片を撒き散らしながらも、アザゼルは動きまくり、STARSメンバーに襲い掛かるうとする。

「てめえの相手は、このオレだ！」

襲い掛かるうとする寸前のアザゼルに全力で疾走させたギガントで横から体当たりしながら、スミスが叫ぶ。

「FIRE！FIRE！」

アザゼルを弾き飛ばすと同時に機体を急停止させたスミスが、両肩のツインリニアランチャーを連射し、腰部の小型ミサイルポッドの残弾全てを発射する。

立て続けの直撃を喰らい、その巨体をよろめかせながら、アザゼルが余力を振り絞ってギガントに襲い掛かる。

「うおおおおお！！」

片側の先端部分が欠けたハサミでギガントを押さえ込もうとするのを、最大出力のギガントの両腕がそれを止める。

「HATCH OPEN！」

両者の力比べが続くかと思った時、突然ギガントの乗降用前部ハッチが開かれ、そこからゾンビバスターが突き出されるとアザゼルの潰れた複眼にその銃口が押し付けられる。

「ゲームセットだ」

右腕でゾンビバスターを構えたスミスが、完全零距离でトリガーを引いた。

潰れた複眼の隙間から潜り込んだ454カスール水銀炸裂弾頭が内部で炸裂する中、スミスがハッチに押し付ける形で強引に腕を固定しながら、ゾンビバスターを連射しまくる。

次々と潜り込んだ炸裂弾がアザセルの頭部内に破壊の限りを尽くし、最後の一発が撃ち込まれると、その体から力が抜けていき、やがてその場に力なく崩れ落ちた。

「一丁……上がりだ」

生身の腕で454カスールを連射した反動で右腕に激痛が走る中、肩で息をしながらスミスがゾンビバスターを下ろす。

だが、そこへサーモグラフィセンサーの警告が鳴り響いた。

「おわっ!？」

慌ててギガントをその場から発進させたすぐ後に、先程までギガントがあつた空間を炎が薙ぎ払う。

「油断はしてなかったようだな」

「まだ試合中だったからな」

炎を投げつけたダーウィッシュが皮肉気に呟く中、スミスは急いでハッチを閉じてギガントの状態をチェックしていく。

「右腕20mm弾及び腰部小型ミサイル残弾0、120mm弾残弾4、両肩ツインリアランチャー残エネルギー量43%。全身装甲破砕率28%……まだいける!」

己を叱咤するように叫びながら、スミスがギガントを発進させた。

「くっ！」

ベルセルクの増強筋力をフルに発動させて、シェリーは横へと跳ぶ。

その後を追うように床の表面がメタトロンの超音波を喰らって細かく破碎していく。

「このう！」

シェリーと反対側に床を転がったクレアが手にしたリニアランチャーを発射するが、三対の羽を羽ばたかせて驚異的な機動力でプラズマ弾を避けていく。

「速え！」

「何としても動きを止めるんだ！」

クリスの指示の元、全員が手にした銃火器を連射するが、誰もメタトロンのスピードを捕らえられず、壁や天井に無駄に弾痕を穿っていく。

『そこだっ！』

唯一その動きを捉えたレンとレオンが同時にトリガーを引くが、45ACP弾と50AE弾の破壊力ではその甲殻に致命傷には程遠

い傷をつけるだけに終わる。

そこで突然メタトロンは反転すると、甲虫独自の対になったクシ状の口を開いた。

「！来るぞ！」

その口から物質構成結合を剥離するまでに高められた超高音域の高周波が放たれ、それに触れた床の表面を破碎させながらSTAR Sに襲い掛かる。

「ぐう！」

「きゃああああ！」

一瞬逃げるのが遅れたカルロスとクレアがその場にうずくまって頭を抱える。

「クレア！」

「カルロス！」

とつさにシェリーが一瞬で近寄ってクレアを抱きかかえて跳び退り、スミスがギガントを高速で走らせながらアームでカルロスの足を引っつかんでそのまま走り去る。

「大丈夫クレア！？」

「何とか……………」

心配そうに呟くシェリーが見つめる中、耳から垂れ落ちる血を袖で拭いながらクレアが再度リニアランチャーを構える。

「生きてるかカルロス！」

「お前の方がオレを殺そうとしてんじゃないか！」

西部劇の拷問さながらに引きずられたカルロスが、ギガントが停止した隙に足を引っこ抜きながらスミスに怒鳴り返す。

そこへ、ダーウィツシュが投じた炎が襲い掛かり、慌てて二人は左右に飛ぶ。

「クソッ！あのスピードで飛び回れたら打つ手がねえ！」

「虫取り網でもあれば捕まえて標本にしてやるんだが………」  
「やあッ！」

その時、宙へと留まって再度超音波を放とうとしたメタトロンに向かつて、ベルセルクの最大筋力を持つて三角跳びをしたシェリーの跳び蹴りが炸裂する。

体勢が崩れたメタトロンの甲殻の隙間を狙って、シェリーが右腕の爪を突き刺し、メタトロンの背中になんとかぶら下がる。

「うまい！」

「いや！」

アークが喝采を上げるが、レオンがそれを否定し、無防備になったシェリーに業火を放とうとしたダーウィツシュに銃口を向ける。

「シェリーを守れ！狙い撃ちされるぞ！」

レオンの一言に、皆がダーウィツシュに銃火を集中させようとする。

「こっしたらどうかね？」

「きゃ……」

突如メタatronがシェリーをぶら下げたまま、ダーウィツシュを狙う射線の前に立ちふさがる。

「くっ……」

皆がトリガーに架けた指を慌てて離すのを見たダーウィツシュがほくそ笑みながら、手の平に炎を大きく灯す。

「さて、残念賞を……」

「飛ばせスミス！」

「おっしやあ！」

そこへ、ギガントのパワーで放り投げられたレンが宙へと踊り出し、ダーウィツシュに斬りかかる。

「あああああ……！」

「ほっ……」

予想外の攻撃にダーウィツシュが感嘆しながら、シェリーに向けてようとした炎をレンへと狙いを変えて放つ。

自分に向かって放たれた炎をレンは縦に両断し、そのまま返す刃でダーウィツシュを攻撃しようとした。

だが。

「ぐっ！」

突然、レンの動きが宙で停止する。

その腹に、ダーウィツシュの放った蹴りが突き刺さっていた。

「残念」

バランスを崩して落下しようとするレンに向かって、ダーウィツシュはだめ押しのかかと落しを喰らわせた。

「がはっ！」

加速しながら落下したレンが、とっさに体を捻り、床に着地すると同時に転がって衝撃を分散させると、即座に膝をついて起き上がり、サムライソウルをダーウィツシュに向けて連射する。

「いい手ごたえだと思ったのだがな」

「効いたさ。だがそれだけだ」

自分の体を貫いていく45ACP弾を気にもせず、ダーウィツシュがレンの方を見、手早くサムライソウルのマガジンを交換しているレンがその視線を見返したまま、口でスライドを操作して初弾を装填する。

「はっ！」

二人が睨みあっている時を隙と見たシェリーが、メタトロンの体に足をかけて強引に爪を引き抜き、そのままメタトロンの体を足場にしてジャンプしつつ体を捻り、体重とベルセルクの強化筋力を十分に乘せた後ろ回し蹴りにダーウィツシュに向けて放った。

だが、横目でそれを見ていたダーウィツシュが片手でシェリーの蹴り足を受け流し、がら空きとなったシェリーの腹部に高速の拳を三連続で喰らわせた。

「ぐふっ！」

「残念」

とつさに反応できず、モロに連撃を食らったシェリーの体が、そのまま床へと落下していく。

「シェリー!!」

「間に合え!」

クレアが悲鳴を上げる中、クリスがダッシュしてシェリーの落下地点に近寄り、寸手の所でその体を抱き止めた。

「ギリギリセーフか……」

「いや、アウトだよ」

クリスが額の冷や汗を拭おうとした時、ダーウィッシュが業火を無防備の二人へと解き放つ。

「クリス!」

「はあっ!」

バリーの声に、レンの気合が重なる。

二人の目前で斬り割かれた炎が、両脇を通り過ぎて床に当たると掻き消えていく。

「すまない」

「いや……」

二人を守るように立ちはだかりながら、レンが刀を構え直す。

「炎出して不死身でその上格闘技も使えるのか!？」

「ちよつと卑怯じゃねえのか……」



攻め入る隙を見出せない皆が、齒軋りする中ダーウィツシュを見る。

「己の知恵に溺れた小娘や力を過信して破れたどこぞの輩と一緒に  
されては困るな。力とは喰らい、鍛え上げる物だ」

「慢心せず、生涯修練に費やす、か。心意気だけは賞賛できるな」

「それが東洋武道の真髄だろう？」

「そうだ」

ダーウィツシュが小さく笑みを浮かべる中、レンは必死に勝機を  
見出そうとする。

「シェリー……生物学的にあんなのは在りえるのか？」

「……いいえ」

腹を押さえながら立ち上がったシェリーが、レンの囁きに小さく  
首を横に振る。

「あのメタトロンの能力はおそらくセミなんかの体腔内反響の指向  
性放射だと思えますけど、彼の不死身と炎は両立は不可能です」

「……別個なら可能なのか？」

「細胞の生体活動による養分の生体エネルギー転化能力を極限にま  
で高めて、リンや脂肪の分泌をすれば着火するのは説明できます。  
ですけどそうすれば細胞の個別寿命がとんでもなく短命になります  
し、その上あれだけの傷の癒す程の細胞分裂を繰り返せば数分と持  
たずに生体維持限界を突破して自己崩壊を起こす可能性も……」

「それを可能にするタネがどこかにあるはずだな」

「はい」

「相談は終わったかな？」

ダーウィツシュが嘲るように言いながら、ゆっくりと床へと降り立つ。

「さて、アザゼルを倒したのは見事だったが、まだ私とメタトロンが残っている。無駄と分かっているにもまだ戦うかね？」

「無駄かどうかはてめえを倒してから決める！」

スミスが残弾少ない120mm滑空砲をダーウィツシュに向けて撃つが、上空からのメタトロンの超音波がそれを寸前で破壊し、爆発させる。

「足掻くのが好きのようだな？じゃあ今から私は五分だけ炎を使わない。それならどうかね？」

「なんだと？」

「信用出来るか！」

カルロスが怒声を上げて銃口を向けた瞬間、ダーウィツシュの姿が彼の視界から消えた。

「な……」

「言っただけだ使わないと」

横から聞こえた声にカルロスがそちらを向こうとするが、その視界を一瞬ダーウィツシュの振り上げた足が覆い、そしてまともに上段回し蹴りを喰らったカルロスが横手に吹き飛んだ。

「カルロス！」

「てめえ！」

スミスがギガントの兵装照準をダーウィツシュに向けようとする

が、流れるような動きでギガントに近寄ったダーウィツシュの姿が、ディスプレイから消える。

「また!？」

スミスの驚愕に、ギガントのセンサーの警告が重なった。

「どこに!？」

センサーをチェックしたスミスが、ダーウィツシュの居場所を発見して再度驚愕する。

「……………いつ？」

「2秒前から」

いつの間にかギガントの真上、頭部センサーの上に立っているダーウィツシュが、スミスの問いに答える。

「撃て！」

クリスの号令と同時に、無数の銃火がダーウィツシュだけを狙って放たれる。

「おやおや、忙しい」

嘲りを浮かべながら、ダーウィツシュがギガントの上から飛び降りると、氷上のスケート選手を思わせる動きで射線から移動する。

「な、何だ？」

「妙な動きしやがって！」

予想外の動きに皆がそちらに一瞬虚を突かれるが、ダーウィツシユの動きに合わせるようにして即座に銃を構え直す。

「遅い」

「な……」

が、まるで瞬間移動のような異常な速さで近寄ったダーウィツシユが、一番手前にいたSTARSメンバーの顔面に神速の拳をお見舞いする。

「この…」

別のSTARSメンバーがトリガーを引こうとするが、そちらに近寄りながらダーウィツシユは銃身を掌底で横に跳ね飛ばし、発射された弾丸が運悪く銃口の先にいた他のSTARSメンバーのボディアーマーに食い込む時には強力な横蹴りが相手の胴を薙ぎ払う。

「遅過ぎる」

ダーウィツシユが笑みを浮かべながら、STARSメンバーの中心へと進む。

「それとも私が速過ぎるのかな？」

射線が仲間に向かないように移動しながらトリガーを引こうとした者が首筋に手刀を叩き込まれ、銃を捨ててナイフに手を伸ばそうとした者の胴に蹴りが突き刺さる。

「化け物が！」

バリーがM60を棍棒のように振り回すが、その顔面、首筋、脇腹、ボディアーマーの覆ってない場所にコンビネーションが決まり、その体が床へと倒れこんだ。

「二分、経ったかな？」

「いや」

予想外のダーウィツシュの格闘能力の前に、全員が静まり返る。レン一人がその場から動かず、ダーウィツシュの動きを冷静に観察していた。

「その動き、ジークンドーか。格闘技を使う化け物とはまともに戦おうと思うなと師匠が言ってた理由が分かったよ」

「なるほど、一つ賢くなれたわけだ」

レンの指摘を受けたダーウィツシュが薄い笑みを浮かべながら、両手を胸の前で水平に構えながら小刻みにジャンプするジークンドー独自の構えを取る。

「それでは授業料を貰おうか」

「がっ！」

「うああああ！」

ダーウィツシュの攻撃を喰らって倒れていたSTARSメンバー達に、メタトロンの超音波が容赦無く襲い掛かる。

「まずい！」

「助けないと！」

クリスが超音波を喰らっている者達を救い出そうとするが、その前にダーウィツシュが立ちはだかる。

「授業料だと言ったはずだが？」

ダーウィツシュの神速の上段回し蹴りがクリスを襲い……だが、寸前でその蹴りがクリスの頭部より上の軌道に変化する。

「……よく分かったな」

クリスの背後、ダーウィツシュの死角となっている位置から蹴り足に向けて刃を突き出したレンが、寸前で気付いてそれを避けたダーウィツシュに向けて刀を構え直す。

「さっきの虫も、こいつらもお前が完全制御している訳か。通りでやけに隙が無い訳だ」

「今頃気付いたのかね？分かった所でどうにか出来るとでも？」

「出来る」

対峙している二人を差し置き、他のSTARSメンバー達がメタトロンへの攻撃をしながら攻撃に晒されている者達を救出する。

「こうすればいい事だ！」

レンの刃が神速で繰り出され、それを掻い潜るように間合いを詰めたダーウィツシュの拳が、レンの顔面を狙うが、レンは左腕を持ち上げてそれを防ぎ、拳に込められた人外の破壊力でプロテクターがひしゃげて破砕する中、切り返された刃がダーウィツシュを狙うが、バックステップで下がったダーウィツシュの胸を浅くかすめるだけに留まる。

それで留まらず、レンは再度刃を切り返しながら、サムライソウルをダーウィツシュに向けて投げつけた。

「な！」

銃を投げつけてくるという予想外の暴挙に思わずダーウィツシュはサムライソウルを手で叩き落すが、装弾されハンマーが起こされていたサムライソウルはそのショックで暴発し、弾丸がダーウィツシュの耳元をかすめる。

弾丸が耳元をかすめた衝撃で一瞬動きが鈍ったダーウィツシュの胴を、大通連の刃が大きく斬り裂く。

普通ならばそれで十分に致命傷に達する傷を追いながら、ダーウィツシュがレンの喉元を狙って上段蹴りを繰り出し、首をよじりながら身を捻ったレンの首の皮を千切り飛ばしつつ通り過ぎる。

虚空に一筋の血を舞わせつつ、蹴り足目掛けて刃がはね上がった時には、すでに蹴り足は戻されている。

（速い、ウエスカー以上か？）

連続する神速の攻防の中、レンは冷静に状況を分析していた。

（あの時はまだこちらにも分が有ったが、こいつは攻撃速度も破壊力もほぼオレと互角……）

大きく横薙ぎに振るわれた刃がお互いの距離を離れた隙に、刃が鋭角を持って下へと下がり床の一点、サムライソウルのトリガーガードを切っ先で引っ掛けると刃は垂直にはね上がり、切っ先に引っ掛かったサムライソウルは刃の軌跡に続いて宙に舞い上がると手品のような手際でレンの左手に収まる。

（問題は……）

再度対峙した状態で硬直状態に入った二人の間に、何か粘着質な異音が微かに響く。

それは、先程レンに斬られたダーウィツシュの傷が、ビデオの逆スロー再生のような勢いで治っていく音だった。

（回復力が高過ぎる！）

完治させまいとレンはサムライソウルを懐に入れながら間合いを一気に詰めつつ刃を瞬時に鞘に収め、そして繰り出した。

「はあっ！」

「おいしい」

普通の人間ならば軌跡を見極める事すら難しいレンの神速の居合を、ダーウィツシュは僅かに下がってかわすが、続けて繰り出された攻撃 レンの左手に逆手で握られた鞘が胴を狙っているに気付くと更に下がり、二撃目をやり過ぎすが、レンの体が抜刀の勢いのまま旋回し、そして旋回の勢いを乗せた上段回し蹴りがダーウィツシュを襲う。

「なっ！？」

予想外のレンの攻撃にダーウィツシュはその場にしゃがみ込みながら蹴りをかわし、無防備になっているレンの軸足を狙って下段蹴りを繰り出そうとしたが、その眼前に一回転してきた刃が再度襲い掛かってきた。

転げるようにして距離を取ったダーウィツシュが、自分の顔に手を伸ばす。



ねっとりとした感触と共に、右頬から鼻を上下に分けて左頬まで達した傷から滴り落ちた血が、彼の口元から顎に至るまでを染め上げているのに気づくと、血塗れの顔のまま、低く笑い始めた。

「面白い技を使うな……………顔を傷付けられたのは生まれて初めてだよ」

「光背一刀流、《連水月・風乱》れんすいげつ・ふうらん。もう少し下がるのが遅かったらもう一撃やれたんだがな」

旋回を止めたレンが、逆手で握った鞘を腰のガンベルトに刺し直す、素早く懷に左手を入れた。

「無駄な事を！」

銃撃を警戒して横へと跳んだダーウィツシュが、レンの左手が何も掴まないままこちらへと振られるのに気付き、そしてその手の中からマガジンに装弾されていない45ACP弾が複数投じられたのを見るとそれを両手で次々と叩き落した。

「そんな物で私が倒せるとでも!？」

「……………まだ気付いていないのか？」

ダーウィツシュの嘲笑を、レンは微笑で返す。

「こうやってオレがお前の相手をしている限り、お前とメタトロンのコンビネーションは封じれる」

「なにっ!？」

レンの一言でダーウィツシュが周囲を見ると、そこには負傷した者が一人残らず室内に運び出され、メタトロンの戦いの戦いを行っ

ているSTARSメンバーの姿が見えた。

「お前の戦闘力も、指揮能力もたいした物だ。だが、実戦経験が乏しい者は戦闘と指揮を同時に行う事は難しい」

ダーウィツシュの中段蹴りを後ろに跳んでダメージを殺しつつ、レンは続ける。

「ましてや、互いの戦闘速度が違いすぎる。高速と超高速は似て異なる物だ。両者を両立は出来ない」

刺突から横薙ぎ、そこから反転といった変化をする斬撃が、ダーウィツシュの胸を浅く斬り裂く。

「なるほど、そういう事か。だが、時間切れだ！」

ダーウィツシュの手の平に、炎が再度宿る。

「君を倒せば、それももうお終いだ！」

業火に包まれた手が、炎の残像を伴った高速の掌底打となってレンを襲う。

「もう一つ気付いていなかったようだな」

レンがわずかに身を反らすと、その背後からシェリーが同じく掌底打の構えを取って突っ込んでくる。

炎の掌と強化筋力の掌が激突し、狭間に挟まれた炎が爆発のごとき勢いでその場を吹き荒れた。

「……………な・に？」

炎が晴れたその場で、ダーウィツシュは驚愕の表情で己の手 完全に粉碎されて砕けた骨が各所から飛び出している を見た。

「光背流拳闘術、《重光連断波》……………」  
じゅうつうれんだんは

左右の掌底を重ねて放つ日本武道独自の重ね当てと呼ばれる技に、頭突きを加えた驚異的な破壊技でダーウィツシュの片手を完全に粉碎したシェリーが、余波で焦げた前髪をかき上げながら距離をとりつつ構える。

「お前が戦っているのは水沢 練という男じゃない。STARSというチームの一員、水沢 練だ」

レンが宣言しながらサムライソウルを構え、その背後で無数の銃口が同時にダーウィツシュを狙う。

「メタトロン！！」

完全に粉碎されたために治るに治らない片腕を押さえながら、ダーウィツシュが叫ぶ。

それに呼応するように、メタトロンが高速で銃口の前に降り立ち、ダーウィツシュを庇う。

「シェリー、分かったか？」

「はい」

レンに小さく何かを耳打ちしたシェリーが、メタトロンへと向かって突撃を架ける。

「何を？」

ダーウィツシュが首を傾げる中、シェリーの拳が、蹴りが、肘鉄が、膝蹴りが連続してメタトロンの甲殻を打ち据えるが、どれもが致命傷を与えられていない。

そこで、三対の羽を羽ばたかせて宙へと飛び立とうとする。

「逃がさない！」

シェリーは両腕のベルセルクから無数の触手を伸ばして飛び立とうとする寸前のメタトロンの絡めつかせ、それを命綱にメタトロンの真下にぶら下がる。

「学習能力が無いのか！」

シェリー目掛けてダーウィツシュが業火を放とうとするが、そこに苛烈な銃撃が襲い掛かり、攻撃を断念してその銃撃から身をかわす。

「はあっ！」

体を振り子のように振らせ、その反動でシェリーはメタトロンの背に飛び乗る。

そこで呼吸を整え、全身の力を蓄え、そしてその力を拳に込めて一気にメタトロンへと振り下ろした。

鈍い音を立ててメタトロンの甲殻に大きなヒビが入る。

「分かりました！」

「使え！」

確信を持ったシェリーの声に、レンが手にした大通連をシェリー

へと投げ渡すが、それを受け取った所でシェリーを振りほどこうとメタトロンが高速で飛び回る。

必死になってシェリーはその背にしがみつき、先程ヒビが生じた一点に向けて、渾身の力を込めて刃を一気に根元まで突き刺した。

「これで！」

シェリーがメタトロンの背から飛び降り、トンボを切りながら床へと降り立つ。

「……………何がしたいのかな？」

「今に分かります」

シェリーの自信満々の声に、ダーウィッシュが疑問を持ちながら、メタトロンに攻撃命令を下した。

だが、超音波を放とうとしたメタトロンの体が、必要以上に震え始める。

「！？」

「生物が超音波を発するには、そのための振動発生器官が必要になります」

メタトロンの異常に気が付いたダーウィッシュに向けて、シェリーが説明を始める。

「あれだけの超音音域の超音波を発生させるには、体腔内に特殊な反響を持って共鳴、増幅させる器官が必要です。もしそこに、その反響を阻害する異物、更にはそれ事態が共鳴能力を持った金属等があった場合」

シェリーの説明の途中で、メタトロンの全身に微かなヒビが無数に生じていく。

「内部で異常な反響、増幅が生じ、やがて器官その物の反響限界を超え、器官その物を自壊へと誘導」

体中のヒビから体液を滴らせたメタatronが、力を失ってゆっくりと墜落していく。

「最終的には器官のみならず、体その物が崩壊、死へと至ります」

轟音を上げてメタatronが墜落し、その衝撃で粉碎した甲殻が無数の破片となって周囲へと飛び散った。

「質問は？」

「なるほど、先程の攻撃はその反響を調べていた訳か……だが、一つだけ間違いが有るぞ」

勝ち誇った顔のシェリーに、ダーウィツシュが警告する。

最後の余力を振り絞って、メタatronがシェリーへと突撃していた。

「シェリー！」

「大丈夫！」

クレアの声に応えながら、シェリーは呼吸を整え、体中の筋肉から余分な力を抜き、両足を肩幅よりやや余分に開いて、足の両脇に腕を垂らすようにして構える。

「それは！」

レンがその構えに気付くのと、シェリーが息を大きく吸い込むの、そしてメタトロンのアザゼル物よりは小さいが十二分なまでの殺傷力を秘めたハサミがシェリーに襲い掛かるのは同時だった。

吸った息を肺に止め、シェリーは右の手を第一関節を残して指を曲げた掌打の形にし、小さな呼気と共に全身の力にベルセルクの強化筋力を込めてメタトロンの側面に掌打を叩きつけた。

「青竜爪！」  
せいりゅうづめ

鈍い衝撃音が響く中、続けてシェリーは左手を抜き手の形にして、メタトロンの反対側の側面に突き刺す。

「白虎牙！」  
びゃうが

ひび割れた甲殻に肘まで突き刺さった左手を抜き取ったシェリーが両足を揃え、その場で飛び上がりながら回転し、勢いを乗せた両足のかかとを鉄槌としてメタトロンの頭部に振り下ろす。

「朱雀襲！」  
しゅくくわしやう

メタトロンの頭部を半ば粉碎しながら降り立ったシェリーが背を丸めるようにしてかがむと、強く床を踏みしめながら、至近距離から全身を使ったタックル型の発勁をメタトロンの叩き込む。

「玄武甲！」  
げんぶかい

必殺の破壊力が込められた攻撃を四連続で叩き込む真正正銘の必殺技、光背流拳闘術滅技、《四神撃》ししんげきがメタトロンの炸裂し、粉碎

というよりは爆砕に近い形にメタトロンの前面が破壊される。

全身にメタトロンの体液を返り血として浴びながら、シェリーはメタトロンの背の大通道を抜き取り、レンへと投げ渡す。

「うっ！……………」

限界に近い筋肉の酷使と、ベルセルクの強化筋力の連続使用で限界に近付いている体に走る激痛を堪えながら、シェリーは構える。

（全力使用で、もう五分も持たない……………）

自分の限界を計算しつつ、シェリーの目から闘志は一切失われていなかった。

「メタロンまで倒されるとはな……………」

「これで残るはお前だけだ。投降するか？」

ブリューナクの砲口をダーウィツシュに向けたまま、クリスが問う。

「どっちにしろ、どんだけ保釈金積もうが弁護士集めようが死刑は確実だからな。ここで死ぬか？」

スミスがツインリニアランチャーをいつでも撃てるようにセットしてダーウィツシュを狙う。

「油断するな。まだ何か出てくるかもしれないぞ」

レオンがダーウィツシュの頭部にデザートイーグルをポイントしたまま告げる。



「ふ、ふふふふ……」

その時、ダーウィツシュの口から低い笑いが漏れ始めた。

「……とうとうイかれたか？」

「ふふふ、ハハハハ……」

カルロスの意見に皆が賛同しつつある中、ダーウィツシュの笑いは段々高くなっていく。

そして、それに応じて僅かだがその体から薄い煙のような物が立ち始める。

「ハハハハ、ハーハッハッハッハ！」

「まずい！」

煙に気が付いたレンが一気に間合いを詰めると、一刀の元にダーウィツシュの首を斬り飛ばした。

宙を舞った生首が床へと転げ落ち、偶然STARSメンバー達の方へと顔を向ける。

「ヒッ！」

「なんだこいつ！」

その生首がまだ笑い続けている事に気付いた皆が怯える中、首を失った胴体を手から業火を放ってレンを牽制しながら、素早く移動して首を拾うとそれを切断面へと乗せる。

「……………ハハハ、ハーッハッハッハ！」

瞬く間に元通りにくつついた首が再度哄笑を上げる。

「撃て！」

呆然とそれを見ていたSTARSメンバーが、レンの声に我に返ってトリガーを引いた。

「ハーツハツハ！クハハハ！」

哄笑を上げていたダーウィツシュが背の羽を羽ばたかせて宙へと飛び出して無数の弾丸をかわし、それと同時にその全身が炎へと包まれる。

「なに！？」

「自殺か！？」

「違う！発火能力を全身で使用してるんだ！今までとは比べ物にならない炎が来るぞ！」

「その通り！」

レンの忠告に重なるようにダーウィツシュが炎を放つ。

それは、まるで火災現場のバックドラフト（閉鎖状態から開放された炎が爆発的に燃え上がる現象）を思わせるような勢いでその場を荒れ狂った。

「ぎ……」

「あ……」

まともに喰らった者が断末魔の悲鳴を上げる間も無く、瞬時に焼死する。

「そんな！？こんな高温の炎を出す生物なんて！」

「細胞が耐えられる訳が！？」

「能書きはあと！」

呆然とそれを見ていたシェリーとレベッカをクレアが引きずるようにして炎から逃れようとする。

「私を殺すんじゃないかったかな！？」

最早炎に全身を包まれ、体のシルエットすら見えなくなっているダーウィツシュがその三人に向かって猛火を投じる。

「危ねえ！」

ギガントを高速移動させてその炎を受けたスミスが、一遍に温度限界に達した事を示す警告を聞きながらその炎を受け続ける。

「何秒持つか？頑張りたまえ！」

「させるかあ！」

カルロスが声だけを頼りにダーウィツシュに向けて銃撃を浴びせるが、炎の揺らめきで狙いが定まらない銃弾の半数は外れ、半数は当たったが即座に傷は塞がっていく。

「これならどうだ！」

アークが最後の冷凍弾を炎へと向けて放ち、撒き散らされた液体窒素が炎を僅かに途切れさせ、その隙間からダーウィツシュの半身が見えた。

「そこだ!!」

全員がその隙を逃さず、一斉にトリガーを引いた。

無数の銃弾が、高速グレネード弾が、プラズマ弾が炎の切れ目から見えるダーウィツシュの半身に突き刺さり、そのまま通り抜けた。

「!?!」

「そこじゃない!下だ!」

レンが怒鳴りながら、その真下の炎を斬り払う。

炎の中から飛び散った血が炎に炙られ瞬時に蒸発していき、それと重なるように放たれた炎をまとった蹴りが、レンの体を弾き飛ばした。

「ぐっ!」

「レン!」

なんとか踏み止まったレンが、また炎の中へと消えていくダーウィツシュに向かってサムライソウルを連射するが、相手はそれを平然と受けながら完全に炎に包まれていった。

「さっきのは温度差を使った蜃気楼だ!狙いを必要以上に絞り込むな!」

「……よく分かったね」

「前に同じ手を使う忍者と戦った事が有ってな」

炎の中からの声に応えながら、レンは蹴りを防御した時に引火した片袖を素早く振るって消すと相手の気配を探るべく神経を集中させる。

「じゃあ、狙わなきゃいいんだろうが！WIDE FIRE！」

照準をセットしないまま、ギガントがツインリニアランチャーと120mm弾を連射しまくる。

「弾幕を張れ！当たるかどうかは度外視だ！」

クリスの指示の元、全員がむやみやたらに銃を撃ちまくる。

「そんな手を通じると思ったか！！！」

ダーウィツシュの声と共に、炎がまるでスクリーンのように大きく広がる。

「まとめて死ぬがいい！」

「ゴメンだな」

炎のスクリーンを、レンの音速超過の抜刀《閃光斬》の斬撃が二つに斬り裂く。

「そこ！」

その炎を切れ目に僅かに見えたダーウィツシュの足に、シェリーが間髪入れずにベルセルクの触手を伸ばして絡みつかせる。

「捕まえた！」

「よし！袋叩きだ！」

スミスが意気揚揚と触手の先に照準を定め……………そこに先端が切

り落とされた触手が炎のスクリーンから抜け出てくるのに気付く。

「ウソ！？今確かに！」

「来るぞ！」

炎のスクリーンの一部が、人の形となってシェリーに襲い掛かる。

人の形をした炎が繰り出してきた拳をシェリーが右腕のベルセルクでガードした……が、次の瞬間その腕を激痛が貫く。

「！？」

「いい反応だ。シェリー・バーキン」

炎を全身にまとったダーウィツシュが突き出した拳を引き抜く。ベルセルクの体液とシェリーの血で一時的に炎が消えたその拳シェリーに粉碎されたはずのそれは、いつの間にか刃のような鋭く尖った物へと変化していた。

「！任意形状変化！？」

「そう、君のベルセルクと同様のね」

炎をまとった刃の拳が、次々とシェリーを狙う。

シェリーは必死になってそれを避けるが、避けきれなかった物が彼女の体に裂傷を刻んでいく。

回避しきれなくなる前にダーウィツシュから距離を取ろうとシェリーが後ろに跳ばうとし、そこが壁である事に気付いて愕然とする。

「逃げて！」

「無理だな」

クレアの絶叫が響く中、ダーウィツシュの刃の拳がシェリーの心臓目掛けて突き出される。

（避けられない！）

回避不可能と判断したシェリーは、先程貫かれた右腕で心臓を庇い、逆にダーウィツシュに向かって突っ込んできた。

「！！」

予想外の行動にダーウィツシュが驚く中、刃は根元まで突き刺さり、シェリーの胸の手前で止まる。

そのまま、炎に包まれたダーウィツシュの腕をシェリーは平然と掴み、反転しながらダーウィツシュの懷に潜り込んで相手の足を跳ね上げる投げ技　柔道という山嵐と呼ばれる物　でダーウィツシュを投げ飛ばす。

「甘いな」

投げられる前に自分で跳んだダーウィシュが、キレイに両足から床に降り立つ。

反撃に転じようとしたダーウィツシュが、今度は自分の背中にシェリーの足が押し付けられているのに気付くと同時に、シェリーに握られていた腕が強く引かれる。

相手の背中から投げる逆さの巴投げ　光背流拳闘術二段投技《ひの日輪車わくるま》に、先程と逆軌道にダーウィツシュの体が投げ飛ばされる。

完全に意表を突かれたダーウィツシュがそれでもとつさにバランスを保とうとするが、シェリーの右腕に突き刺さったままの腕が邪魔してそれもままならず、腹から床へと叩き付けられた。

「がはっ！」

ショックで息が詰まり、それに続けてダーウィツシュの体を覆っていた炎が緩む。

「取った！」

巴投げの体勢から腕に突き刺さっていた刃を抜き取りつつ素早く起き上がったシェリーが、ベルセルクから爪を伸ばしてそれをダーウィツシュの頭部、正確に脳髓目掛けて突き刺そうとした。

そして、爪を振り下ろそうとした瞬間、シェリーの腕から異音が響く。

「う、アアアアアー！！」

音に続けて襲ってきた激痛に、シェリーが絶叫を上げながら片腕を押さえてその場に片膝をついた。

（しまった……限界が……）

ベルセルクの強化筋力に耐え切れず、腕の靱帯が伸びきり、下手したら千切れた事を自覚しながら、シェリーが齒軋りする。

「時間切れか」

再び炎をまとったダーウィツシュが、回避不能の距離で猛火を生み出す。

（逃げられない！）



悲壮な覚悟をシェリーが決めた瞬間、その体が横へと弾き飛ばされる。

宙を舞いながらシェリーの視線が横へと動き、自分を弾き飛ばした人物、クレアに猛火が襲い掛かるのを見た。

「クレア!!」

直撃だけは避けられたが、猛火に両足を焼かれたクレアが床へと倒れ込む。

「クレア!クレア!」

「……逃げなさい、シェリー」

立つ事すら適わなくなったクレアが、シェリーをかばうようにしてリニアランチャーを構える。

「麗しい姉妹愛か?じゃあ共に死……」

「……ぬのはお前だ!」

クリスがブリーナクからホーミングミサイルを撃ち出す。

炎の熱で狙いが上手く定まらないミサイルが、ダーウィツシュのはるか手前で誤作動して爆発する。

「残ね……」

「ああああ!!」

爆炎が吹き荒ぶ中、それを斬り裂きながらレンが襲い掛かり、その背後からギガントが炎を突き破りつつ続く。

「甘い甘い」

袈裟切りに振り下ろされた刃をダーウィッシュは避けもせず、迫ってきたレンの腹に横蹴りを叩き込んで弾き飛ばし、続けて放たれたプラズマ弾を余裕でかわすとギガントのセンサーに炎に包まれた手の平を押し付けてセンサーを破壊しようとした。

「そんな手を通じると…」

「思ってるぜ」

ギガントの頭部の脇から、OICWの銃口がほぼ零距离でダーウィッシュに押し付けられる。

「くたばれ！」

ギガントの背に張り付いて回避不可能な距離まで接近していたカルロスが、勝利を確信してグレネードランチャーのトリガーを引いた。

放たれた高速グレネード弾が狙い変わらずダーウィッシュの頭部にめり込み、吹き飛ばす。

「やった！」

「ざま見やがれ！」

爆炎を強引に突破したのとグレネードのバックファイアで全身から焦げ臭い匂いを漂わせているカルロスと、あやうく焼け付く所だった頭部カメラから詳細を見ていたスミスが同時に喝采を浴びる。

しかし、頭部を失って崩れ落ちるかと思われたダーウィッシュの体が、その場に立ったまま、人差し指を立てて左右へと振った。

「な……!？」

そして、吹き飛ばされた頭部がビデオ映像を巻き戻されかのような勢いで断面から盛り上がり、そして再生していく。

「ウソ……………」

「やっぱり不死身か!？」

愕然としたSTARSメンバー達が手にした銃を落としそうになる。

「いや、今ので分かった。そいつの弱点がな」

絶望が皆を包もうとする中、レン一人が立ち上がってその顔に微笑かに笑みを浮かべる。

「弱点?私の?」

「そうだ。お前の弱点は……………」

レンが告げながら、ダーウィツシュに向けて走り出す。それに向けてダーウィツシュは猛火を放つが、レンはそれらを斬り裂きつつ、ダーウィツシュに向けて迫る。

「はあああああっ!」

レンが大きく刃を横薙ぎに振るい、ダーウィツシュの体を斬り裂く。

「どこが弱点だと!？」

胴の半ばまで斬り裂かれつつダーウィツシュの蹴りがレンを襲う。

だが、それはレンの狙い通りだった。

レンは炎をまといっているダーウィツシュの蹴り足をまともに喰らいながら、強引にその足を右腕で押さえ込む。

「!?!」

「そこだ」

レンは炎で火傷を負うのも構わず、確かな笑みを浮かべてサムライソウルをダーウィツシュの太ももに押し付け、連射した。

至近距離で撃ち込まれた45ACP弾は炎を突き抜けて肉を貫き、そこで金属音を上げて止まった。

『!?!』

皆がそれに気付いた時、ダーウィツシュは初めて狼狽した表情でレンをもう片方の足で蹴り飛ばす。

「足だ!そこに何かがある!」

弾き飛ばされながらレンが叫ぶ。

「撃て!!!」

全員が一斉にダーウィツシュの足に向けてトリガーを引いた。

「分かったからどうしたと!」

ダーウィツシュは宙へと飛んで銃火をかわす。

「いつするの」

背後で聞こえた声にダーウィツシュが振り向こうとした。

彼が振り向くよりも速く、シェリーの背におぶさり、ベルセルクの強化筋力のジャンプ力を使って背後を取ったクレアがリニアランチャーのトリガーを引いた。

放たれたプラズマ弾がとつさに避けようとしたダーウィツシュの片足を太ももの半ばから吹き飛ばし、その断面から容積の半分を吹き飛ばされた小型タンクの中身の液体がぶちまけられた。

「これは？」

床へと着地したシェリーが、雨のように降ってくるその液体を手に取り、少し嗅いだ後舐めてみる。

「アミノ酸ベース………細胞活性酵素！」

「そっか！その手が有った！」

「？どういう事だ？」

「ドーピングしながら戦っていたって事だ」

首を傾げるアークに、ダーウィツシュの不死身の正体が細胞活性酵素の常時投与による細胞分裂等の異常活発化だという事に気付いたレオンが、デザートイーグルの銃口をダーウィツシュのもう片方の太ももに向けて連射した。

ほぼ同じポイントに集弾して撃ち込まれた50AE弾が、タンクの表面を傷付け、そして穿った。

「くっ！」

慌ててダーウィツシュが銃創を手で押さえるが、その隙間から細胞活性酵素はとめどなく滴り落ちる。

「やっぱりそうか。一発目と二発目の蹴りの威力が微妙に違ったかな。足に何かあると思えば……………」

レンが火傷を負った右腕に手早くスプレーを吹きつけながら、滴り落ちていく液体を見つめる。

「回復アイテム常時使用って訳かい。だが、ポーションが無くなっちゃまうなあ?」

「回復不可能って訳だ」

スミスとカルロスが壮絶な笑みを浮かべ、同時にダーウィツシュに向けて攻撃した。

「ふざけるな!この程度で!」

ダーウィツシュの全身から爆発に近い勢いで炎が吹き上がる。

「今更分かった所で遅い!皆焼け死ぬがいい!」

「分かったのはそれだけじゃない」

レンが、何を思ったのかサムライソウルを懷に仕舞い、無造作に炎の化身とも言える姿となったダーウィツシュに歩み寄っていく。その右手に大通連が無いのに皆が気付いた時、いつの間にか上へと投げられていた大通連が風車の如く回転しながら落下し、炎を斬り裂きながらダーウィツシュの片腕を斬り飛ばした。

「な!?!」

「どうした？オレ達を焼き殺すんじゃないかったのか？それともそんなに大事な物だったか？」

落下してきた大通連を器用に受け取ったレンが、床に落ちてきたダーウィツシュの片腕に視線を向ける。

「スミス、撃て」

「OK！」

「止めるお！！」

猛火がギガントに襲い掛かるが、ギガントを高速移動させてそれを避けながらスミスはツインリニアランチャーで床に落ちている片腕を跡形も無く吹き飛ばす。

「貴様あ！」

「頭より手足が大事か？まあ飾り物の頭じゃそうだろうがな」

激昂するダーウィツシュに、レンが淡々と語りかける。

「飾り？」

「ああ、首を切り落とした時、肉と骨以外の感触がした」

刃にダーウィツシュの顔を写しながら、レンが自分の仮説を完全に確信して言った。

「動物ベースのBOWは、いかに驚異的な生命力を誇っても脳を破壊されれば活動を停止する。もしそれから復活しても生存本能だけの原生生物並に退化するだけだ。だが、こいつは首を切り落とされても頭を吹き飛ばされても平然と復活してきた。何故か？」

レンが切っ先をダーウィツシュに向けて確信を放つ。

「電子化された神経とそれによってLAN構築された脳内記憶データの分散。そうする事によって脳が失われても全身に分散されたサブデータが体を制御し続ける。それがお前の不死身のもう一つの正体だ」

「……………」

ダーウィツシュが無言で歯を強く噛み締める。その顔には、今までに無い憤怒が浮き上がっていた。

「ダーウィツシュ・E・スペンサー。もう貴様は終わりだ」

「まだだ！」

炎の残像を残しながら、ダーウィツシュがレンに襲い掛かる。

「貴様だ！貴様さえ殺せば残るのはただの雑魚だ！」

「さっき言わなかったか？」

突き出された炎をまとった刃の拳を、レンは背後に跳びながら避け、そのまま無造作に後ろに倒れ込んだ。

「オレはSTARSの一員だと」

レンの背後で銃を構えていたSTARSメンバー達が一斉にトリガーを引いた。

「それがどうした！」

全身に銃弾を浴びながら、ダーウィツシュが残った手に猛火を灯



して放とうとする。

しかし、それが投じられるよりも、横手から放たれたプラズマ弾と高速グレネード弾がその腕を跡形も無く吹き飛ばす方が速かった。

「あいつだけが強いんじゃない」

「オレ達みんなが強いんだ」

スミスとカルロスがレンの言葉に続く。

「おのれ、おのれえー！」

「諦めろ」

「エンディングの時間だ」

レオンとアークが言葉と同時に放った50AE弾とグレネード弾が、残った足も千切り飛ばす。

「チェックメイトだ」

クリスがスカウターに映るターゲットを正確にダーウィツシュの胴に合わせ、トリガーを引いた。

大気を切り裂きながら飛来するホーミングミサイルがダーウィツシュの胴に炸裂し、その体を木っ端微塵に粉碎する。

膨大な炎を辺り一帯を吹き荒れ、それが消えた頃、何かが床へと落ちてきた。

「……………しぶといな」

レンが自分の足元に落ちてきたそれ、どうやったのか胸から上だけが残ったダーウィツシュに向けて刃を向ける。

「これで終わりだ」

レンがトドメをさそうとした時、その背を今までで最大の悪寒が通り抜ける。

「何だ!？」

「おい、見る!」

「なんだこりゃ!？」

カルロスが指差した先、クトウルーが収まっているカプセルを皆が見て同時に異変に気付いた。

先程までオブジェと変わらなかったクトウルーの全体に、光が無数に明滅していた。

「は、はははは………」

ダーウィツシュが、力無く笑い始める。

「あれは何だ!？」

レンが、切っ先をダーウィツシュに向けて怒鳴りつける。

ダーウィツシュは笑ったまま、その顔に勝ち誇った表情を浮かべた。

「目覚められたのだ………神が」

「神だと?どういう事だ!」

「くくくく………」

口から血を流し、最早幾ばくも無い命を惜しむ素振りすら見せず、

ダーウィツシュは笑い続ける。

「どうしてもよかったのだよ…… BOWも、STARSも…… 私すらも……」

「なん……だと……？」

「始祖ウイルスを……元にして作られた生物は……死ぬ瞬間……特殊な電磁波で信号を発する……それは……あの方へ……唯一……語りかける方法だ……」

「まさか……貴様は……それだけのためにこれだけの犠牲を出したのか……？」

「そう……どうしてもよかったのだ……あの方さえ目覚めれば……アンブレラが無くなるうと……どうしようと……」

そこで僅かに吐血すると、ダーウィツシュが最後の言葉を呟く。

「さあ……最後の戦いだ……一度この星をも滅ぼしたとされる神との……結果がみれない……のが……ざ……」

そこで、ダーウィツシュの体から生気が消える。

レンが強く柄を握り締めながら、ダーウィツシュの屍に背を向けてクトウルーに向き直る。

その視線の先では、すでに全身に光を帯びたクトウルーが、その植物の根にも見えるような触手を動かし、カプセルを叩き割ろうとしていた。

「何が起きようとしてるんだ……？」

「分かりません！あれが一体何を考えているのかも！」

「……簡単だ。同類が大量に死んだから、とうとう自分で防御活動を起こしたんだ」

レンが淡々と告げながら、サムライソウルの残弾を確認する。

「来るぞ…………こいつが最後の敵だ！」

「魔王が死んだら大魔王か！？RPGでも受けねえぞ！」

スミスがツインリニアランチャーを叩き割れる寸前のカプセルに向けて発射した。

それが戦闘開始の合図となった。

内側からの圧力に耐え切れず砕け散ったガラスの破片と溢れ出した培養液を蒸発させながら飛来したプラズマ弾が、クトウルの胴体に当たって爆散する。

「お呼びじゃねえんだよ！」

立て続けにギガントのツインリニアランチャーがプラズマ弾を吐き出し、それはことごとくクトウルに命中する。

「撃て！」

それに呼応するように全ての銃口が火を吹いた。

周囲には雷鳴を思わせるような轟音と爆音が響き渡り、爆炎と硝煙が一带を覆い尽くす。

「止めっ！」

クリスの号令の元、一分近く続いた猛烈な銃撃が終わり、クトウルの姿は完全に爆煙によって覆われていた。

「やったか？」

「いや……………」

レンが手早くサムライソウルのマガジンを交換しながら、表情を険しくする。

「気配は消えていない。どこるかむしろ…」

レンの言葉の途中で、晴れてきた煙の向こう側が不意に発光したかと思うと、そこから強力な光が発射された。

「な…」

その光の正面にいた者が驚愕を上げる暇も無くその光に一瞬にして飲み込まれ、光が晴れた時そこには建材すら残さず完全に蒸発し、大穴と化した床があるだけだった。

「なんだ!?!」

「レーザー光線!?!」

「そんな!?!あれだけの威力を出すのにどれだけのエネルギーが…」

皆の驚愕は、晴れてきた煙の向こう側が再度発光した事で途切れる。

「逃げろっ!?!」

誰かが叫ぶ。

発光面の正面にいた者が慌てて逃げ出し、そこから床を這うように移動しながら発射された強力なレーザー光線がホールを大きく穿っていく。

「なんて威力だ！本当にあれは生物なのか！？」  
「分かん！だが明らかにこっちを敵と見てるぞ！」

自分達のすぐ足元をかすめていったレーザーにアークとレオンが顔を青くしながら、攻撃を再開しようとする。

そこで、カプセルを叩き割った触手が獲物を狙う蛇のような動きで襲い掛かる。

「危ない！」  
「レオン！？」

とつさにアークを弾き飛ばしたレオンの胴体に、触手が絡みつくとそのまま彼を宙へと持ち上げ、動きを封じた所で再度クトウルの胴体が発光を始める。

「レオン！！」  
「いやああああ！」

アークとクレアの絶叫が響く中、レーザーが発射された。  
しかし、それより一瞬早くレンが触手を切断し、落下したレオンの至近距離をレーザーは通り過ぎた。

「大丈夫か！」  
「ああ……………」

高エネルギーのレーザーの余波で皮膚が露出している部分に軽い火傷を負ったレオンが、アークの肩を借りてなんとか立ち上がる。

「動き回れ！捕まったら即座に焼かれるぞ！」

無数の触手がSTARSメンバーを捕らえようと蠢き回る。

皆が逃げ惑い、必死になって攻撃を加えていく。

だが、グレネード弾やロケット弾の爆発で触手は千切れ飛ぶが、クトウルー本体は更に全身を明滅させて益々苛烈な攻撃を繰り返してくる。

「はあっ！」

レンが四本目の触手を斬り裂くと同時に、それを手に取って断面を見てみる。

「なんだこれは!？」

そこには、奇妙な色合いの肉とも鉱物とも取れない物が蠢き、断面からは透明な体液が滴っていた。

「植物なのか？それともまったく違う生命体？」

床を転げるようにして正面からのレーザーをかわすと、レンは触手を手早く二分して投げた。

「シェリー！レベッカ！なんでもいい、それからこいつの特性を調べるんだ！」

「了解！」

「やってみます！」

今だ動いている触手を受け取ったシェリーとレベッカが、その断面を見、体液を手に取ってみる。

（これは……シリコン？）

（この体液、粘性がほとんど無い……動物性でも植物性でもない。むしろこれは……）

STARSのブレイン二人の頭脳が、それぞれ違う方面からそれを解析し、脳内で幾つもの過程を立てていく。

（考えて、宇宙空間を長時間行動を可能とし……）

（これだけのエネルギーを蓄える事を可能とするには……）

「この野郎!!」

レーザーを掻い潜ってクトウルの至近距離まで近寄ったスミスが、ギガントのフルパワーで繰り出したナツクルをクトウルの胴体突き刺す。

ギガントの腕が埋没する位深くナツクルが突き刺さり、透明な体液が吹き出す。

「へ、思い知った……」

ナツクルを抜き取ったスミスの目が、今しがた開いたはずのナツクルが突き刺さったはずの穴が、瞬間に塞がっていくのを見て大きく見開かれた。

「ば、バカな!? 今確かに!?!」

「逃げるスミス!」

レンの声に慌ててスミスはギガントをスピンさせながら横へとスライドさせ、穴が塞がった場所から発射されたレーザーをからくもかわす。

「構成転化!!」



「組成変化！」

『ケイ素系生命体！！』

それを見たシェリーとレベッカが同時に結論に達した。

「何だそれは？」

「地球上を占めるたんぱく質やアミノ酸を主とした有機物じゃなく、金属に近い性質をもったケイ素を主として体が構成された生命体なんです！」

「説明はいい、どうすれば倒せる？」

クリスの問いに、シェリーとレベッカが思わず顔を見合わせる。

「倒せないの？」

シェリーにおぶわれたままのクレアが、シェリーの浮かべている表情を見て心配そうに聞いてくる。

「……………地球上にケイ素系生命体は存在しないの」

「それに、ケイ素で体が構成されているとなると、理論上マグマ並の高温でも生存が可能です。銃火器程度では……………破壊は不可能です」

『なんだって！？』

それを聞いた全員の顔色が一気に変わる。

「どうにかならないのか！？」

「せめてこれの詳細データが有れば……………」

バリーの問いにシェリーは首を横に振った。

「あるだろ！ここに破壊力ならバツグンのが！」

スミスがギガントを停止させ、その胸にセットされたギガンティックブラストを指差す。

「ダメ！下手したら恒星のプロミネンスにも耐えられるかもしれないわ！それ位じゃ表皮の突破も不可能よ！」

「何か……何か無いのかよ！弱点は！」

カルロスが最後のマガジンをOICWにセットしながら叫ぶ。

「一度退いて体勢を整えるつてのは！」

「ダメだ！ここでこいつを倒さない限り、次のアンブレラが出現するのも時間の問題だ！」

クリスが叫びながら、ブリューナクを連射する。

クトウルーはその全身を目まぐるしく発光させながら、攻撃の手を一切休めようとしない。

そこで、突然その体が各所で盛り上がり、やがて中央に穴の空いた奇怪な突起と化す。

「まだ何かあるのか！？」

それを間近で見っていたレンが、その突起から遠ざかろうとした時、その穴から何かが発射された。

「があっ！？」

「バリー！」

予想外の速度で発射されたその何か、ボーリングのピンくらいの三角錐に近い形状の塊がバリーの肩を貫いた。

「なんだこれ位……」

バリーが肩に刺さったその塊を抜こうとして、それが異常に熱いのとそれから嗅ぎ慣れた硝煙の匂いが漂っているのに気付く。

「こいつは、鉛！？まさか、こいつ弾丸を食って！」  
「伏せる！」

レンが叫びながら自らも伏せる中、無数の突起から続けて発射された灼熱の矢じりがその射線の先にある物を全て貫いていく。

「あ……………」

唯一、背中にクレアをおぶっていたシェリーが、伏せるとクレアに当たる事に気付いて自らを盾にして攻撃をともに喰らった。

「シェリー……！」

「だい……丈夫……………」

無理に笑いながら、右肩と左足の付け根に刺さった矢じりを、シェリーは一息に引き抜く。

（右腕は元々使えなくなっていたけど、この足じゃ……………）

傷の激痛に耐えながら、シェリーが自分の状況を確認していた時、突然奇怪な感触を傷口を覆う。

「シェリー、それ！」

クレアの声にシェリーが傷口を見ると、そこからベルセルクの細胞が中へと入り込み、みるみる傷口が塞がっていく所だった。

「こんな効果があるなんて……………」

使えなくなっていた右腕が動き、そこからの激痛が和らいでいるのに気付いたシェリーが、視線をゆつくりとクトゥールに移す。

「外部からの物質吸収、シリコンで構成された体、宇宙空間内の適応進化、長期間の休眠……………そっか！」

何かに気付いたシェリーが、自分に襲い掛かってきた触手をベルセルクの爪で切り払いながら叫んだ。

「外側から幾ら攻撃してもダメです！恐らくそれは普段仮死状態で宇宙空間を移動して、恒星のそばを通った時だけ起きて、恒星の光を体表でエネルギーに変換して内部に蓄積するはず！だから体内に直接攻撃を加えれば！」

「エネルギー袋が弱点って訳か！」  
「けど、どうやって？」

クトゥールの猛攻の前に、劣勢のSTARSが唯一の活路を見出す方法を模索する。

そして、彼らの視線はやがて一つへと集まっていた。

「……………それしかないだろうな」

その視線の先、左手にサムライソウル、右手に大通連を持った黒

装束のサムライ レンがその意図を理解して微笑する。

「スミス！あれの準備を！シェリーはサムライの援護を！サムライの攻撃の直後、その隙間を狙って全攻撃を収束させ、内部の露呈と同時に叩き込む！」

『了解！』

傷つき、疲れ果てているSTARS全員が、僅かな勝機に賭けてクリスの指示に従う。

「泣いても笑っても、これが最後か……………」

呟きながら、レンはふと自分の左手の薬指にはまっている指輪を見た。

（分かっているさ……………オレはサムライじゃない。だから）

「絶対に諦めない」

刀を一振りして刃に付いた体液を振るい落としたレンが、鋭い目でクトゥルーを見透かす。

「水沢 練、流派は光背一刀流。いざ、参る」

名乗り終わると、レンは走り出す。

レンに向かって無数の触手と矢じりが襲い掛かるが、レンの刃に斬り捨てられ、シェリーの拳と蹴りに弾かれ、仲間達の援護射撃で吹き飛ばされる。

「そこだ！」

走りながら、レンはサムライソウルを連射する。

45CP弾がクトウルの体に突き刺さり、さらに同じポイントに続けてレオンの放つ50AE弾が突き刺さる。

「行け！」

レンとレオンの放つ二種の弾丸が、全く同じポイントに連続して撃ち込まれ、やがてそれはクトウルの内部へと続くバイパスとなった。

「おおおおおおお！！！」

雄叫びを上げながら、全身全霊の力を込めてレンは連なった弾丸の最後端に切っ先を突き立て、弾丸を一気に押し込みながら根元まで刃を突き刺していく。

その時、突然レンの胸を灼熱感が襲った。

「……？」

消毒薬を手にしたミリイが、指に妙な振動を感じてふと手を止める。

何気なく自分の指を見たミリイは、薬指にはめられた指輪が一瞬震えているように見えた気がしたが、それはすぐに消えた。

「レン？」

何気なく仲間達が出て行った扉を見たミリイが、その直後鳴った電子音に驚く。

「何事!？」

「なんだ!？」

手当てを受けていた警備員が慌てて突然鳴った通信用モバイルで状況を確認し、その顔色を変えた。

「ばかな……………この研究所だけには自爆装置は付いていないはず……………」

「有ったのか!？」

「…………動力炉が暴走を始めた。それだけじゃない。この研究所の非常隔離システムが全部動き始めている……………」

「どうなるの!？」

ジルの問い詰めに、警備員は蒼白になっている口からゆっくりと言葉を紡ぐ。

「ここは、もう直北極海に沈む……………」

それを聞くと同時に、ジルはそれを知らせるべく医務室を飛び出す。

「動ける人は手を貸して!タンカと毛布をありったけ出して!」

ミリイは胸中を襲う不安と戦いながら、必死になって怪我人の搬送を進めていた。

視線を自らの胸へと移すレンの視界に、先だけが出てきつつあつ

たクトウルの突起と、胸板を貫いている灼熱の矢じりが飛び込んでくる。

「五行、相克！」

口から溢れ出してくる血を物ともせず、レンは呪文と共に跳ね上がりながら、突き刺した刃に力を込めて大きく斜めに斬り上げる。

「撃て！」

クトウルの体に走った斜線に向かってブリューナクのミサイルが突き刺さり、続けて無数のグレネード弾とプラズマ弾が立て続けに爆発して傷口を広げていき、そしてその先に蠢く奇怪な内臓のような物を露呈させた。

「G I G A N T I C    B R A S T ! F I R E ! ! !」

そこに向けて、大口径のプラズマの槍が突き刺さる。

クトウルの内部をプラズマの槍が荒れ狂い、そして内部のエネルギーと融合して爆発を起こす。

クトウルの表面に一瞬閃光が走り、やがて内部で起きた爆発が傷口から大きく吹き出した。

皆が爆風を避けるために顔を覆い、爆風が晴れた後に目をゆつくりと開けた。

そこにちよつと見には変わらないが、表面に有った明滅が完全に消えているクトウルの姿が有った。

「やった……………のか？」

誰かの呟きと共に、クトウルの体がゆっくりと傾いていく。



「倒し……た？」

「は、ははは、勝てたじゃねえか……」

カルロスが笑いながら銃口を下ろそうとした時、突然クトウルの体表が輝く。

「まだ！？」

「来る！」

今までとは比べ物にならない大きなレーザーが発射されようとしたのに気付いた皆が、逃げる事が出来ない事を悟った。

絶望がもたらした一瞬の静寂に、ただ一人動いた人物がいた。

レンは素早くサムライソウルを握ったままの左手の小指に自らの傷口から流れる血を取ると、大通連の刃の鏝元に卍を描き、それを鞘へと収める。

全身の力を抜き、今しもレーザーを発射しようとするクトウルーを見据えながら精神を静めていく。

「克」

一言の呪文と共に、踏みしめた足から派生した力を流れるように体を昇らせ、それは腕から握り締められた柄、そして刃へと伝わる。

一切の無駄なく伝えられた力が繰り出された刃へと込められ、それはその軌道にある全てを斬り裂きながら美しい弧を描いた。

「光背一刀流奥義、《因果断ち》」

レーザーが放たれようとした瞬間、クトウルーの体が斜めにずれ

る。

斜めに二分されたクトゥルーが、最後の攻撃を放つ事も適わず、その巨体を崩壊させながら崩れ落ちた。

「た、助かったの？」

「みたい……ね」

明滅が完全に収まり、屍と化していくクトゥルーを見たシェリーとクレアが、どちらともなく歓声を上げた。

「やるじゃねえかレン！さすがサムライ！」

「やった！勝ったんだオレ達！！」

「ヒヤッホー！さあ、帰ってパーティーだ！」

皆が抱き合い、勝利を喜び合う。

そこで、突然の警報が周囲に響いた。

「な！？」

「まさか自爆装置！？」

「大変よ！」

そこに、負傷者の警備に当たっていたはずのジルが駆け込んできた。

「さっきいきなり自爆装置が発動したわ！もう直この研究所は北極海に沈むらしいの！」

「なんだって！？」

「なんでいきなり！？」

「全員撤収！！」

クリスの号令に続いて、皆が慌てて逃げ始める。

「レン！なにやってんだ！」

そこで、レンが技を放った状態のまま動かないのに気付いたスミスが声をかけるが、レンは動こうとしない。

「レ……ン？」

スミスが、何気にギガントのセンサーに目を向けた。  
その中の生体センサーが、そこに生命体がない事を示している。

「おい、冗談……だよな？」

レンのそばに近寄ったスミスが、レンの胸を貫いている矢じりに  
気付く。

それは、ちょうど心臓の位置だった。

「ダメだ！こっちの通路は使えない！」

「他の通路は！？」

「14番通路を使おう！時間が無い！」

最早敵も味方も無く逃げ惑う負傷者達の中、タンカを押していた  
ミリイが突然横手から襲ってくる爆炎に気付いた。

「！……！」

思わず目を閉じたミリイの目前で、爆炎は突然左右に分かれて壁を伝うように吹き抜けていく。

「何だ、今のは!？」

信じられない光景を見た皆が、その場に先程までいなかったはずの人物がいるのに気付いた。

「レン!！」

ミリイが叫ぶ中、その人影は僅かに振り返って微笑むと、陽炎のように揺らいでその場から消えた。

背後に突然気配を感じた徳治は、思わず柄に手を架けながら振り返り、そしてそこにいるはずの無い人物を見て絶句した。

「練!？」

それが何か気付いた徳治が、ただ呆然と彼に向かって手を伸ばす。

だが、彼の姿は猛烈な勢いで薄らいでいく。

「待て、行くな！」

叫びながら差し出された手は、虚しく宙を掴む。  
すでにその時、彼の姿は虚空へと消えていた。

「練……………」

「レン？」

「ウソ……………」

皆が、呆然とレンを見た。

その顔には、微かに笑みが浮かんでいるように見える。

「何してんだよ……………お前、日本に帰ってミリィと結婚式挙げるんだろ？」

ギガントのハッチを開けたスミスが、レンにそつと手を伸ばす。

「何か言えよ。いつもの憎まれ口はどうしたんだよ？」

自分の頬を熱い物がつたうのも気付かず、スミスはレンの頬を手を添えた。

「帰ってパーティーやろうぜ……………敢闘賞のお前主演にしてさ……………なあ……………」

警報と共に、段々研究所が鳴動していく中、全員がただ無言でその光景を見ていた。

「レン……………私まだ、教えて欲しい事いっぱい……………いっぱい……………」

シェリーがレンの袖にしがみ付きながら、嗚咽する。  
どこかで、爆発音が響いた。

「崩壊が始まったわ！」

「総員急げ！」

「スミス！」

カルロスが、スミスの袖を掴む。

すでにあちこちらから爆発音が連続して響いてきていた。

だが、それでもスミスはレンのそばを離れようとしなない。

「スミス！お前も死ぬ気か！日本に彼女待たせてんだろ！」

「……………そうだな。そうだったな」

スミスはレンの手に握られたままの大通連とサムライソウルをそれぞれ鞘とホルスターに収めると、ギガントのハッチを閉めてレンの体を抱き上げる。

「馬鹿野郎……………馬鹿野郎……………！！！！！！！」

スミスの絶叫が、その場にいつまでも木霊していた……………

……………以上が、世界中を震撼させた”アンブレラ事件”の全容である。

これが世界中に与えた影響は大きく、STARSメンバーを中心としたICPO特殊機動捜査部隊の設立及び多国籍企業査察法の制定、

生物兵器禁止条約の全面改定、最新技術規定法案の討議などが知る所である。

だが、それらの影で、命燃え尽きる最後の瞬間まで戦った者達がい  
た事を、我々は決して忘れてはならない……………

ジル・バレンタイン、レベツカ・チェンバース共同著書『ST  
ARSの真実』巻末より抜粋

## 余章『邂逅、そして』

「……た、起き……」

「パパ…きて」

「起きて…てば」

『せーの！』

掛け声と共に自分の頭を襲った衝撃で、スミスは目を覚ました。

「やっと起きた〜」

「パパ、おそ〜い」

「おはよう、ムサシ、アニー」

この間10歳の誕生日を迎えた双子である息子と娘にあいさつしながら、スミスはベッドから起き上がる。

「おはよう、ユメ」

「はいはい、主賓が遅刻してたら面目立たないでしょう。早く準備してください」

寝ぼけ眼で妻にあいさつしつつ、スミスは顔を洗おうと洗面所に向かう途中で、何気に飾ってある写真に目を止めた。

それは、あの最後の戦いの前日にSTARS全員で取った物だった。

それを手に取って見ると、両脇をミリイとシェリーに挟まれ、少し無然とした顔のレンとそれを茶化している自分とカルロスの姿が映っている。

「早いもんだな……あれからもう15年も経ったんだよな……」



……」

かつて、ラクーンシティという町が有った場所に、大勢の人間が集まっていた。

ほとんどは世界中の警察や軍の関係者で、全員が引き締まった顔で整列している。

『第15回アンブレラ事件戦没者慰霊祭』と書かれた横断幕が風になびき、その下で壇上に立ったクリスが演説を行っていた。

「今、我々がこの場にいられるのも、全ては、ここに眠っている者達の命を賭してまでの協力が有ったからだ。彼らなくして、今までの、そしてこれからの我らは在り得ない。そして、我々は決してその事を忘れてはいけない。なぜなら、彼らこそが真の英雄といえる者達だからだ。法と、正義と、平和のために散りし英雄達に！」

クリスの敬礼に、その場にいる全員が一斉に続く。

その最前列、旧STARSメンバー達の一番端、警察の礼服に身を包んだスミスも神妙な顔で敬礼していた。

ラクーンシティ死者慰霊碑の隣に、幾つもの墓標が並んでいた。

最初が洋館事件で死んだSTARS隊員の物から始まり、STARSの一員となって戦って散った者達の名前が続いている。

その一番最後の墓標の前にスミスは立っていた。

「悪いな、たまにしか来れなくて………」

「兄さんなら気にしないわよ、そんな事」

スミスの隣にいたユメがその墓標に花を捧げる。  
その墓標にはこう刻まれていた。

“STARS最強にして最後の戦死者、ニホンから来たサムライここに眠る”

「世の中馬鹿とテロリストばかりだな。モビルポリスの休まる暇が無いんだよ。それなのに、カルロスの野郎は部隊増やすからこつち来て隊長やれなんて言いやがるし」

苦笑しつつ、スミスは買ってきたウィスキーの封を開けて、墓標に注いでいく。

「あとな、さつきクリスが言ってたの聞いてたか？法と正義と平和のために散った英雄だってよ」

スミスはボトルの中身を一口口に含み、ゆっくりと嚥下する。

「お前はそんなののために戦ったんじゃないのにな」

スミスは再度苦笑して、また墓標に注ぐ。

「サムライが戦う理由はただ一つ、己自身の心意気のためだけだ」

半分くらいまで減ったボトルに封をすると、スミスはそれを墓標に捧げる。

「残りはそつちでオヤジと分けてくれ。そぞろ差っ引かれた小遣い分位にはなったるうしな」

ふと、背後に気配を感じたスミスが振り返る。

そこに、すでにいないはずの友人の姿を見たスミスだったが、それはすぐに十代半ばくらいの鳶色の瞳と髪をした少年の姿に変わる。

「よお、…。遅かったな」

「お久振りです、スミスさん。飛行機がちょっと遅れましてね」

少年は墓標の前へと進むと、そこに持ってきた線香に火をつけて捧げる。

「ミリイは？」

「母さんなら抜けられない学会が有るっていうんで。それに日本にもお墓はありますから」

墓標に向けて手を合わせ、少年は黙祷を捧げる。

「ふうん、で、修行は順調か？…」

「まだまだ師匠からは未熟者扱いされてますよ。マスターはまだ先の話になりそうで」

苦笑しつつ、少年は立ち上がる。

その横顔に懐かしい顔が重なり、スミスはしばしそれを見つめていた。

「家に寄ってって。ムサシがまた剣術を教えてもらうんだって言い張って困ってるの」

「いいですよ、ただまた泣かないようにしてもらえれば」

「本格的にやらせるつもりは無いさ。ま、ムサシが本気でサムライ

になりたいって言うなら話は別だがな」

「本気というと？」

「命を賭けられるくらいに、さ。お前の父親のようにな。」

「ええ……………」

父と同じ名を持つ少年、レンは荒野に吹く風を感じながら、静かに墓標を見つめていた……………

終

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3200a/>

---

BIO HAZARD Irregular PURSUIT OF DEATH

2010年10月31日00時56分発行